

---

# 世紀末善い人伝説

風雅 梟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世紀末善い人伝説

### 【Nコード】

N1194K

### 【作者名】

風雅 梟

### 【あらすじ】

改正版はじめました

<http://ncode.syosetu.com/n4587u/>

この小説を題材にしたゲームを公開しています。

<http://gastorageta.web.fc2.com/top.html>です。

ガストラゲタ氏の意向により、新しい小説を書くことになりました。こちらのページは、とおきますが、これで終了とします。読んで下さった皆様方、ありがとうございました。

新しいほうは、可能な限り判り易く丁寧にという、指導を受けたので、

そのように心がけるつもりです。

私自身も、次の作品は向上心を持って取り組むつもりです。

新しい善人伝説もよろしく願います。

## 第一幕 伝説の幕開け

249X年 某惑星にて

行き過ぎた文明は、自らを傷つける刃となり、やがては自分の身をも切り裂いてしまう……。

世界は突然光に包まれ、多くの生命が死に絶えた。

ある人は、核だといい、ある人は、神の裁きだという。真相は分からない。

それはこの物語を追っていくうちに、もしかしたらわかることもあるのかもしれない。

人が居る限りは、善と悪は絶えず存在する。

自らの善を絶対視することが、狂人と言われるのなら、善人とは狂人なのか？

自らの狂を受け入れた時、人はどんな苦難をも乗り越え、神をも超えることが出来るのかもしれない。

英雄か受難者か。

・・・しかし、その狂人こそ、もしかしたらこの世を救う救世主となりうる可能性がある。

例え、傍から見てどんなに馬鹿らしく不恰好であるとしても、貫けばそれは真実となる。

## 善人伝説

「ここが魔王城か・・。」

少女がつぶやく。

年の頃15位だろう。白いコットンハットに、上下白い服を着ている。何かを表しているのだろうか？

髪はセミロングで、瞳孔は青い。存在感が無く今にも消え去りそう  
だ。

まるでお化けが死人だ。考えてみれば彼女の格好はまるで、お化け  
の変装のようにも見える。

少女が魔王城と呼んだビルは、ガタがきている八階建てのビルで、  
がたがきてる八階建てのビルだ。

長年整備されていないのだがそんなビルはこの時代これだけではな

く数多くある。

少女にはこのビルが魔王城に思えるようだ。

この日がちょうど雨が激しく降っており、ビルにバックには雷が浮かび確かに魔王城という感じではあった。

実は、このビルには、いわゆる悪人と呼ばれる人間が、籠っており、大変危険なビルなのだが、そんなこと少女は意にも返さず、まるで自分の家に入るが如く、しげしげと近づいていった。

「なんだてめえは。」

野太い声が少女を呼び止める。

如何にも悪人という面のおっさんが、少女を警戒気味に見ていたが、少女はそっちの方を見もせずに、中に入ろうとするので、おっさんは大慌てで、門の前に立ちふさが

「お、おい！待て！待つんだあ！ぐわあ！」

善い人の尋常ではない気配におびえたおっさんであったが、おっさんが待つんだあといった瞬間には、もう横に吹き飛び、声を発しなくなっていた。

「うるさい！この善人の邪魔をするか！」

善人？と称した少女は、伸びて動けなくなっている、

おっさんの方をようやく注視した。

「なんだなんだ!？」

表が騒がしいので、がやがやとビルの中から、外へ出てくる悪人達。

「うお!悪人Aがやられてやがる!どいつの仕業だ!」

悪人達は、当りを警戒気味に見渡している。

ビルが空いたので、少女はどこか出てきた悪人達を避けて、中に入っていく。

少女がビルの中に入ると、人はほとんどいなく、真ん中に上に上がる螺旋階段が設置されていた。

「どうやらこの上に悪人達のボスが居るみたいだね。

その思い上がりでこの善人たる善い人が罰を与えないといけない。」

別に、ひそひそ声でつぶやいたわけではない、

少女にとって、自分の成すことは、公明正大であるのだから、

何故こそこそとやらなければならないのだろう?

そんなことは断じてないので、

その声は表に出て、がやがや、やっていた悪人達にも丸聞こえになり、

ぎよっとした様子で、またどこかと入り込んできた。

「ん?なんだあいつは?おい!あいつは誰だ?」

悪人の中でリーダー格と思われる男が、周りの悪人達に問うが、悪人達の誰も知らないらしく、首を横に振っている。

そんなこといつてる間に、  
善い人は階段をドンドンと登っていつてしまっている。

「ちっ！まあいい。とにかくあいつを捕まえる。」

リーダー格の男は、  
そういつていらしたようにタバコを取り出し、火をつける。

周りの悪人達は肩をすくめ、  
階段を登っていた善い人においつき、声をかけた。

「おいおい、お譲ちゃん。ここは危ないんだぜ？お家に帰んな。」

そういつて、手を触れようとした刹那、  
悪人は少女の回し蹴りを食らい、階段の下に叩きつけられた。

一瞬あたりは何か起こったかわからず、静寂が支配した。

ようやく悪人達が事態を把握し、罵声を発しようとしたその前に、  
少女が悪人達に向かい、大喝した。

「この善人たる善い人に、そんな策謀が通用しないということが、  
まだ分からないのか！」

わけが分からない。  
しかし、尋常じゃない雰囲気を感じ取り、悪人の一人が、少女を指  
差し叫んだ。

「おい！こいつは、狂人だ！いつもへたくそな漫画を描いていて、



魔人に媚を売って暮らしている、悪党だ！」

「そういえば、俺も噂には聞いた。  
白服、白帽子、まさしくあいつだ。

確か、自分は善人だと言って、自分を正当化して、  
悪逆の限りを尽くしてるとかいう……。」

そう聞いても、リーダー格の悪人は慌てず、にやりとした。  
悪人なら、自分達と同じわけなのだから、うまく交渉すれば、こち  
らの仲間になるかもしれない。

ちなみに魔人というのは、この自治区の実質上の領主のことで、  
昔そういわれていた通り名が、そのまま使われているといった感じ  
だ。

しかしながら、この悪人達の罵詈雑言は、自分は善人だとか自称する  
少女を激怒させるに充分すぎる言葉だった。

「この善い人を馬鹿にするのか！おのれ！もう許さん！」

少女は、階段に立てかけてあった、  
槍を取って、頭の上でくるくると回した後、後ろに構えポーズをと  
った。

「唸れ！旋槍！」

そういつて、槍を回転させつつ、階段を下りてくる、  
それに巻き込まれた、悪人達は次々に吹き飛ばされていく。

リーダー格の悪人はぎょっとし、慌てふためき、地下へと逃げてい

った。

しかし、なぜか自称善人は、リーダー格の悪人めがけて、一直線に向かってくる。

「うわあ！やめてくれー！」

「食らえ！善の鉄槌！」

そういつて、槍を一閃し、槍の腹に当たった、リーダー格の悪人は、地下へと転がっていった。

残った悪人達は、おびえた表情で逃げていった。

「この善人から逃げられるとも思ったのか！悪は逃さん！」

自称善人はそういつて、悪人達を一人残らず駆逐した後、ゆっくりと階段を登っていった。

転がり落ちていったリーダー格の男は、しかし闘志はまだ失っていなかった。いやそれどころか、自称善人に逆襲を誓った。

「白服め！俺たちをなめやがって。今に見ている……。」

階段を登っていき、最上階に登った自称善人は、空を眺めた。どうやら雨はまだ降っている。近くに雷も落ちているようだ。

なにやら不穏な気配を感じる。

自称善人は、その正体が何か、見極めようとしていた。

自称善人の後をこっそりとつけていった、リーダー格の悪人とその他大勢の悪人は、

自称善人が、空を眺めている間にゆっくりと展開した。

リーダー格の男は気取ったポーズをとって、左手を額にあて、右手を、伸ばし、手のひらを上にして、自称善人のほうを指しかつ叫んだ。

「はっはー！きさまー・・・ぶあー！」

リーダー格の男は、セリフの途中で異様な力で、吹き飛ばされ、ビルの外へと落ちていった。

その後炸裂音と共に、謎のエネルギー体が、自称善人を悪人達を襲う。

悪人達はみな、奇声を発し、ビルの外へと落ちていったが、自称善人はその攻撃を全て避け、再び空を見上げた。

「けっ。」

漆黒の闇からうつすらとシルエットが浮かび上がる。

男は、禍々しいオーラを纏っている。善人は直感した。

この男が、先ほどの攻撃を放ったに違いないと。

善人は、背から大剣を取り出し、ゆっくりと、横に歩きつつ、男との間合いを取り、慎重に対峙する。

男は、寝そべっていたが、

善人が、先ほどの攻撃に当たらなかったのだと、ようやく分かり、むくりと起き上がって、善人に尋ねた。

「おいてめえ、ここは俺の寢床だぜ。」

雨に打たれてずぶ濡れになっている男が、ここを寢床だという。ならば男は、ここのボスなのだろうか。

善人にはそうは思えなかった。ただ思うのは、男は自分の「敵」だということ。

それだけは強く感じた。

男も同様だったのかもしれない。

善人は答えた。

「私は、善い人だよ。悪人をやつつけるのが私の使命だ。」

男は、頭を指でくるくるさして、呆れた表情で善い人を見る。

「何だその顔は？この善人たる善い人を馬鹿にしているのか？」

男は答えた。

「どうやら、てめえは俺にぶっ潰されてえみたいだな。」

「なんだと！もう我慢ならん！」

なんだかよく分からないタイミングでぶち切れた善い人は、姿を消し、穀潰しに向かって剣を振り落とす。

いや姿を消したのではなく、あまりの速さにそう見えただけだ。

当然男は哀れにも真つ二つになっているはずなのだが、そうはならなかった。

善い人の背後で声が聞こえる。

「なんだそりゃ？素振りの練習か？」

男はそういつて、ナイフを抜いて、善い人に向かってきらりと光らせた。

その後ナイフをしまっているところを、善い人に再襲撃されたが、またもや、善い人の背後に現れる。

「ひゃっは！潰れちまえ！」

そういつて、手を構えた先から、目に見えない何かが、発せられ、善い人に襲い掛かった。

それらの攻撃をことごとく善い人は避け、男を驚かせる。

「な、なに？」

一方善い人は、心なしか笑いながら、攻撃を加える。

善い人ほどの力を持つと、それを振るう対象が限られる。

全力を持つて、力を受け止める相手は、彼女にとっても、

快い存在だった。例えそれが直感的に「敵」だと認識したとしても。

男はそれどころではない。

攻撃が避けられたということが信じられず、

やたら滅多ら不可思議な攻撃を繰り返し、それら全てを善い人に避けられる。

ということを繰り返した。

「なんで当たらねえ！当たれ！」

心理的なあせりは隙を生み出す、男とて戦闘の素人ではないが、心情的な余裕が、力の差を生んだ。

「見えた！突き刺さる脚！」

針の穴ほどしかない、男の心の隙をつき、

善い人は必勝の攻撃を繰り返す。

男は、片手で蹴りを受け止めるが、吹き飛び、ビルの外に転落しそうになるが

かろうじて、それを阻止する。

ぶら下がっているところかもろく今にも崩れそうなので、

長くは持たない。

すぐに、這い上がろうと思ったが、そこへ善い人がやってきた。

「へへっ。なんだてめえか。おいっ！てめえ善人なら俺を助けやがれ！」

善い人は腕を組み考え、男に尋ねた。

「そういえば、君の名前は？」

「ああ……。穀潰しっていうんだ。なあ助けてくれよ。」

善い人は、哀れな穀潰しの命乞いに、助けようかと思ったが、なぜか穀潰しがにやにやしているのが、癪に障った。

「残念だよ。穀潰し君。私は善い事をする使命に忙しい。」

「おい、てめえ。俺を今ここで助けねえと後でどえらい目にあつても、

知らねえぞ！」

善い人は、その言葉を見殺し、去っていく、それをほぼ同時に、瓦礫が崩れ、穀潰しは下に落ちていった。

落ちた先には、先ほど穀潰しが落とした先客達がうずくまっていた。

「ちくしょう！えらい目にあつたぜ！ん？なんだこの偉そうな野郎は！」

穀潰しが落とした悪人達をせつせと運んでいる、ハエのような生き物。

ハエのような生き物だが、大きさは牛ほどにあるハエが、穀潰しに対する、あてつけのように、悪人達を介護していたので、穀潰しは腹が立った。

「ひゃっは！潰れる！」

「ピギー！」

そういつて、ハエを蹴っ飛ばすと、上に載っていた悪人がごろりと落ち、

穀潰しも少し悪いことをしたかなと思ったが、いや痛い思いをしたのは自分も同じだ。

こいつらだけじゃねえんだ。と思い直して、気を取り直し、

「善い人とかいったな。暇つぶしくらいにはなりそうだな。」

と呟き、穀潰しは、またビルの中へと入っていった。

善い人は、屋上にはボスがいなかったと判断し、そういえば地下があったことを思い出したので、下へと降りていった。

この際、ボスがいるかどうかは、問題ではない。

このような建物にボスがないなどということはないのだから、いないのなら無理やりでも見つけるべきだ。



あるいは、あのリーダー格の男がボスだったのかも分からず、善い人もその可能性もあると思ったが、風格が足りないから現場の指揮官レベルだと判断したのだ。

まあ善い人の場合、なんとなくで全て片付けられる。

直感のみで動いている人間だ。

ビルの中は誰も居らず静かだ。

地下への入り口は開いている。

「おそらくここに、ボスがいるはず・・・この善人の目は欺けないということをお願い知らせてやらないといけない。」

そういつて、善い人は地下へ下りていった。

洞窟のような地下をある程度進むと、鉄の扉があり、それ以上進めない。

「突き刺さる脚！」

ドカーン。

突き抜け、体を回転させ、部屋の真ん中に着地する。

着地した瞬間、何者かにぶつかり、よろける善い人。

「おう！善い人か！どうやらこの奥にボスがいるみたいだぜ！」

ぶつかった人物は穀潰しらしい。穀潰しは巨大なハエと交戦していた。

「ひゃっは！あいつもなかなか手ごわいみたいだぜ！善い人さんよお！

さあ行こうぜ！氣にいらねえやつをぶっ潰してやろうぜ！」

この男は何か勘違いをしているらしい。

この善人たる善い人と自分が同格だとしても？善い人は不満を感じた。

「この善人たる善い人が、君ごときと同格とでも？」

その言葉を聴き、にやりとした穀潰しだったが、

腕がハエの真空波によって切り裂かれ、顔色が青くなる。

すぐに、腕を回収した後、くっつけなおす。

「気合で腕もくつつくのか。」

善い人のトンチンカンのような台詞に、いちいち受け答えしている状況ではない。

たかがハエと馬鹿にしていたが、どうやらシビアな展開になってきた。

穀潰しは、腕から衝撃波を発し、ハエに応戦するが、殺傷能力、速度、

共に、ハエの真空波のが上に行く。

穀潰しは、焦り善い人の後ろに逃げる。

善い人は向かってきた真空波を、大剣でなぎ払う。

「やるじゃねえか。」

穀潰しは、善い人に話しかけた。

「まあね。こんなの簡単だよ。」

その言葉を聴き、穀潰しは、お気楽な頭だ。騙すのは簡単だと思った。

「おい。さっき俺はボスは奥にいたといったよな。

あいつはそれをこぼんでいる。つまりあいつは、悪人ということだ。俺に協力しろ。それとも善人というのは口だけか？」

善い人は無然として答えた。

「この私は、善い事をしなければならぬ。」

「分かった。時間を稼げ。けりはつけるぜ。」

善い人はしかし、腑に落ちなかった。目の前にいるハエは悪人ではない。

善い人の善人魂はそう告げていた。

しかし今は、先に進むしかない。

善い人は、穀潰しに降り注ぐ、真空波を全て切り裂き、接近する。

まるで小枝を振り回すように大剣を振るい、ハエに攻撃するが、その攻撃をことごとく避けられる。

「私より早い？」

ハエは善い人を振り払い、穀潰しに向かって突撃した。

「ちっ！」

穀潰しは、横っ飛びし、ハエは突撃が外れるが、目からビームを繰り出し、

穀潰しを攻撃する。

穀潰しが、展開していたバリアーをつきぬけ、床に穴を開ける。

「なに？バリアーごとく切り裂け！サイコカッター！」

カッター状の衝撃波をハエに放つ。ハエはそれを旋廻してかわす。

「おいおい善い人さんよお！これじゃ大技が使えねえぜ！

ひゃっは！」

そついつつ穀潰しは、内心肝が縮む思いで、冷や汗をたらしていた。

「当てる！ダブルボーガン！」

どこからかボーガンを取り出し、雨あられのように矢をハエに降り

注がせる。

時間差で、槍に持ち替え、ハエに向かって突進する。

「捻じ込む！トルネードチャージ！」

自分の放った矢の嵐をつきぬけはじき、ハエの羽を捕らえる。

「決める！突貫脚！」

空中で、方向転換し、速度の速いとび蹴りを放つがそれも外れる。

その時……。

「潰れる！ランダムスファイア！」

穀潰しは、球状の爆裂する衝撃波の玉をいくつも、善い人とハエに向かって放つ。

ちょうど体制を崩していたハエはその攻撃に巻き込まれ、

善い人も余波を受け吹き飛ばさせる。

幸いダメージは軽症だ。しかしハエはもろに当たってしまった。

「ひゃっはっはっは。ざまあみる！」

穀潰しは勝ち誇り、ハエに近づいていく。

コトコトコト。

「ん？」

洞窟全体が揺れている。

「おい。善い人さん。どうやら洞窟が崩れるらしい。」

善い人は、腕をかばいつつ穀潰しのほうに歩いてきた。

「そうみたいだね。」

穀潰しは善い人の怪我に気づき、声をかけた。

「てめえは間抜けだな。俺の攻撃に当たっちゃったか。」

「なんだと？どうしてもこの善い人を馬鹿にしたいなら、

私にも考えがある。」

「ああいいぜ。ひゃっは！」

穀潰しが、右手を善い人に向けて、左手でナイフを構える。

善い人も、大剣を片手で構える。

ゴゴゴゴゴ。

しかし、さらに洞窟が崩れ始め、それどころではなくなってきた。

穀潰しは、心配になった。穀潰しは狂人の善い人と違って、こんなところで

埋まって死ぬ気は毛頭ない。

「おいおい。こりゃやべえぜ。こんなことしてる場合じゃ・・・げほっ」

穀潰しは善い人の回し蹴りを食らい、吹き飛び壁に叩きつけられる。

「ん？間抜けな穀潰し君は私の攻撃に当たってしまったようだね。」

「て、てめえ……。だがそれどころじゃねえ。そこをどけ。」

穀潰しがハエに近づいていく。

「なにするの？」

善い人が尋ねた。

「ここをでる前に止めをささねえと、  
こんな化け物に命を狙われちゃたまらねえからな。」

それを善い人が制止する。

「いや、善人は動物には優しいものだよ。君も善人になりたいなら、  
知っておいたほうが善いね。」

善い人が得意げに穀潰しを諭す。

穀潰しとしては、どっちにしろ、  
洞窟が崩れている状況の方が気が気でなかった。



「はっ！勝手にしろ。」

ドカーン。彼らが話し合っている間に、出入り口が穴でふさがってしまった。

「やべえぞ。ドンドン崩れてやがる……。  
俺はまだ死にたくねえ……。」

早く脱出しておけばよかったと穀潰しは後悔した。

こんなハ工野郎や、善人だとか抜かす狂人と関わったばかりに、自分の人生はめちゃくちゃになったと穀潰しは思った。

しかしわめいても仕方ないので、何とかする策を考える。

「どうするか……。おい、善い人さん。てめえは……？」

見ると、善い人は悠長にハ工の手当てをしてる。

「とんだ物好きだな。」

とはいえ、直接攻撃をしたのは自分だし、少し気兼ねもしたので、手当てを手伝おうと善い人達によっていった。

「どうやら、乗せてくれるらしい。これでここから出れるよ。」

そう善い人がいい。それを聞いた穀潰しの表情は明るくなった。

「おう！じゃあさつさとこんなところからおさらばしようぜ！ひゃっは！いや善いことはしておくものだぜ！」

善い事をしたのは善い人で、穀潰しは何の役にも立たぬ、考え事をしていただけであった。

とはいえ善い人にとって、穀潰しなどどうでもよかった。

そのため、穀潰しの勘違い発言に対しても、寛大な心でスルーした。

「そうだね。さすがにそろそろここは限界だよ。さあ行こうか。頼むよ。」

ハエ。」

「ひゃっはー！あっ？」

穀潰しは、ハエに飛び乗ったが、ハエに避けれる。

「おいおい、そりゃどういうことだ？命の恩人だぜ？この俺は。」

善人たる善い人は、ハエに賛同した。確かに穀潰しは悪人であるのだから、

ここで反省して貰うのは悪い案ではなかった。

善い人は哀れみの表情で穀潰しを見た。

「残念だけどここでお別れだね。君のことは忘れないよ。3時間ほ

どね。」

穀潰しは慌てた。

さすがの穀潰しでもこんなところにおいていかれたらただではすまない。

穀潰しは必死になって弁解した。

「そりゃあねえんじゃないのか？俺は善人だぜ？  
善人が善人を見捨てていいのかよ！？」

善い人は、穀潰しの戯言を無視した。

というより、ハエにすでに、飛んでいたので、これ以上穀潰しに付き合う

時間は無かったのだ。

善い人にとっても、ここに長居するのは、善い状況とはいえない。

穀潰しは呆然とした。

自分は善人だと言ってるのに、なんであのバカ野郎は聞き耳を持たないのだろう。

穀潰しは、こんなところで生き埋めになりたくなかったので、必死になって、レポートしながら、

善い人達に追いついた。

「助けてくれー！俺は死にたくない！俺は役に立つ男だぜ！

ここで俺に恩を売っておけばお前は、一生俺に感謝することになるだろうよ！どうだ？」

善い人もハエも無言だ。善い人は何事か考え事をしているし、ハエは、穀潰しには恨みがある。

穀潰しは、なおも食いついた。

「くそっ！恨んでやる！この偽善者め！頼むよ！助けてくれ！」

穀潰しの声は徐々に遠ざかってくる。善い人達は洞窟を抜け、地下を抜け出し、ビルの外へと脱出する。

そして、ビルは、ガラガラと音を立てて崩壊していった。

善い人はつぶやいた。

「なるほど。世界は広い。ああいう人もいるならこの私も考え直さないといけないね。」

とにかく進もう。私の善行をみんなが待っている。」

善い人はまっすぐ前を見る。その澄んだ目は、とても狂人には見えなかった。

## 第二幕 悪人救出作戦！

「善い人さん。いい天気ですねえ。」

ものすごくどうでもいい。善い人は心底そう思った。

ものすごくどうでもいい話題を善い人に吹っかけてくる人物。彼女の名は害児。

害児は善い人の世話をしている人物で、義足と義手をつけ車椅子で生活している。

「そういえばこの前善い人さんに話した例のビルに民間の人が乗り込んで暴れまわったそうです。」

そのせいでビルが崩壊したとかで全く物騒な話です。

善い人さんはそういう人には近づいちゃダメですよ。」

「そうなんだ。物騒な人もいるもんだなあ。」

最近はずますます治安も悪くなってきたからいろいろな人がでてきてるんだろうな。

別に澄ましているわけではなく、これが善い人の地であつた。

「ところで何かよろずやさんが困ってることがあるようで善い人さんが相談に乗ってあげたらどうでしょう。」

善い人はそれを聞き喜んだ。なんだましなこともいえるじゃないか。と思った。

「おおー。今日も早速善いことができそうだ。教えてくれてありがとう。」

「いえいえ。私も一緒に行きたいんですが今日は車椅子の調子が悪くて残念です。」

「また今度一緒に散歩に行こう。」

そついい残すと善い人は意気揚々とよろずやに向かっていった。

その後姿を見ながら害児は独り言を言った。

「やれやれ……。善い人さんはあの調子だと命がいくつあっても足りませんね。」

害児には善い人や穀潰しと違って名前があるのだが善い人には害児さんと呼ばれている。

害児は何でそう呼ぶのか善い人に聞いてみたら腕と足がないからと答えた。

害児はそついう問題じゃないと思いつつも変わった子だなと思いつきの境にいろいろ善い人の世話を焼いている。

善い人がよろずやに来ると店主は留守だった。

だがちょうど向こうの道から店主が歩いてきた。

「やあ。善い人君か。」

「害児さんから聞いたのだけど困ってることがあるんだって？」

「ああ・・我輩の友達が行方不明になっちまってな。我輩も忙しいが仕方ないから探してやってるところなんだ。」

「わたしも手伝うよ。善い人だからね。」

「おお助かるよ。これがそいつの写真だ。」

善い人が写真を見ると、それはまさに穀潰しだった。

「どっかでみたような・・。そうだ。この人ならビルの下に埋まってると思うよ。」

これももちろんとぼけているわけではない。4時間たったので忘れてしまっているだけだ。

「なんだって？じゃあとにかく助けに行かないとやばいな。いくらあいつが丈夫だからといったって限界があるぞ・・。」

店主が愛車のプレオに乗り込む。善い人もそれに続く。

店主は重装備主義者で常に重装備。店も重装備の商品が多い。

やがてビルの前についた。

「こいつはひどいな。これじゃあいくらあいつでも・・。」

店主は、諦めて帰ったそうな顔をした。

「とにかく掘り起こしてみよう。」

「そうはいつでもどうやって？」

「こんなのは土台無理だ。吾輩のような奴がしゃしゃり出る場じゃない。」

店主はそう思った。

「よしこんなときは――」

善い人がそういうとどこからともなくハエが飛んできた。

そして、

「ぴぎゃー（穴掘りモードに変身）。」

そういうと羽をはずしていかにも穴がほれそうな無視に変身した！（といっても羽が外れたただだが）

「うわ。何だこの化け物は。」

店主が飛び上がるほど驚く。あわや逃げ出そうとする背中に

「大丈夫。ペットだから。」

と善い人が声をかける。

「本当に大丈夫なのかい？」



店主は恐る恐る振り返る。

「うん。それに埋まつてる人を助けないと。」

「ああそうだった。よし善い人君のペットのハエみたいな  
化け物。がんばれよー。」

そういうと店主はハエに力を送るような変なポーズというかダンスみたいなのを始めた。

はつきりいつて馬鹿だが善い人も真面目にそのまねをしていた。

「ハエー。頑張れー。」

「ぴぎゃー!」

すぐに大きな穴ができた。

「ん?どうやら地下に続いているようだね。この中に穀潰しがいるのか。よし善い

人君早く入るんだ!」

店主はこの場所が悪人の砦だったことを思い出し、

内心びびりまくってこともあろうに善い人を先に行かせようとしていた。

「じゃあいつてみようか。これなら探してる人も生きてそうだね。」

善い人はまたいいことができると思いうきつきした。

「ああ・・・でもここは元々悪人のアジトだったからな。もう警察とか救助隊に任せてやっぱり我輩たちは帰ったほうがいいかもしれない。」

ここにきて店主は変えることに決めた。自分が出る幕ではないのだ。

「ダメだよ。善いことしないと。ガスさんは帰ってもいいけどわたしはいくよ。」

「仕方ないなあ。さすがに善い人君だけを行かせるわけにはいかない。」

ようやく判明したが、この店主の名前はガスという。

よく間違われるが気体ではない。

渋い顔でガスが善い人がついてくる。

少し進むと二人は見慣れた顔を見つけた。

「てめえ・・・よくもこの俺様をこんな目にあわせてくれたな。」

いきなり怒鳴られてガスは慌てた。

「おい。なにいつてるんだ。我輩はお前を助けに来たんだぞ。」

「じゃあ何で白服と一緒にいやがるんだ。てめえもぐるになって俺をたこ殴りに来たんだろうが。」

「はあ？意味が分からないのだが。まあ落ち着けよ。」

なぞな話だがガスは穀潰しの衝撃波を受けて吹き飛んでしまった。  
重装備だから助かった。しかし力じゃあいつにはかなわないしど  
うしようか。

逃げるしかなさそうだ。

そこまで考え一目散。しかしガスは善い人のこともちゃんと忘れな  
かった。

「善い人君逃げるぞ！」

「なんで？」

「いいからくるんだ！」

善い人を無理やり引つ張って元来た道に戻って外にでた。

「ひゃっはっはは。俺から逃げれると思ったのか？」

だが穀潰しが先回りしていた。

こうなれば絶体絶命だ。

「む……。誰が逃げたって？」

善い人は全く納得がいかなかった。

「お前だよ。しょせんお前も俺が怖くて逃げ出したんだろうが。」

「わたしに一回負けた癖にまたボコボコにされたいか！」

「善い人君。なにしてるんだ。早く逃げるんだ。」

そういつてガスはまた逃げてプレオに乗り込もうとした。

善い人はガスのあまりのチキンに舌を巻き、そろそろ黙らせようかと考え始めた。

「そうはせん。」

ガスがプレオに乗ろうとした瞬間プレオが宙に浮いた。

「ああ・・・プレオは飛んでる。」

どんどん上に浮いていき空中で爆発した。

「なんてことするんだ。我輩のプレオが・・・」

「恐れ入ったか！」

穀潰しはしてやつたりという顔だ。

「もう我慢ならん！」

ガスはライターを取り出した。

ライターにガス（気体のほう）を当てて巨大な炎を作る。

ちなみに彼は様々なガスを使うのでガスと自称している。

非常に紛らわしいことなのだが。

「これで黒焦げになっちまえ！」

「そんなもんは攻撃のうちにはいらねえよ。」

穀潰しは動きもせず炎をかき消す。

「で？ 終わりか。 白服の前に裏切り者のお前からぶっ潰してやる。」

「望むところだ。 決着をつけてやる！」

ガスは常にはない勇気を発揮する。

「・・・いい度胸だ。」

穀潰しはガスの勇気に驚きつつ、手加減無用の衝撃派を放つ。

衝撃に当たってガスは吹き飛ぶ。

たった一発で意気消沈。 ああもう駄目だと思った。

次の衝撃波がくると思ったらガスの前に壁みたいのがでて攻撃を防いでいた。

「これは一体？」

「後はわたしに任せといて！」

それはどうやら善い人の仕業らしい。

善い人は穀潰しにすごいスピードで接近して格闘戦を展開させていた。

「あいつをまともに戦える人間がいるなんて……。人は見かけによらないものだ。」

なんて感心してる場合ではない。これは我輩とあいつの問題だ。

ガスは勇気を取り戻し、善い人を制する。

「善い人君下がってくれ。あいつは我輩が倒す。」

何を言っているのだろうか？ 善い人はいい加減にしてくれという半ば切れた声で反論した。

「そんなこといっても無理なんじゃ！？」

「そうでもない。」

しかしガスは動じない。作戦があるのだ。

穀潰しがひゃっはっはと笑っている。

「懲りないやつだぜ。そんなに早く潰されたいのか。」

「お前ちょっと卑怯なんじゃないか。」

「なに？どういうことだ？」

つまり穀潰しは馬鹿なので、挑発して隙を作ろうという作戦だった。

「一般人に対して念動力ばかり使って恥ずかしくないのかといってるんだ。」

お前は念動力に頼らなきゃ我輩一人倒せないのか。」

「いいやがるぜ……。そんなものなくてもお前に勝てるって事はお前が知らないはずはないが？」

「いつも手加減してやってるからな。ためしに殴ってみたらどうだ。」

「よく言った！じゃあ殴ってやるぜ！」

穀潰しはまんまと怒りすごいスピードでガスに近づき殴りかかった。

「単純なやつだな……。」

ガスは鎧で受け流しつつ毒ガスをまいてやった。

いくら穀潰しでも避けれない。

「ごほごほ……。お前何をした？」

「それは毒ガスだ……。今だ！善い人さんあいつをたこ殴りにしろー。」

ようやく悪人を退治することができるよ。

善い人はたまっていたフラストレーションを一気に吐き出した。

二人で穀潰しをたこ殴りにする。

「卑怯だぞ！やめねえか……。うわー。」

「我輩のげんこつもくらえ。」

そしてある程度殴り終わった後。

「世話になったな。善い人さん。」

「善いことするのがわたしの使命だからね。」

「そうか。今度は何かあったら手伝うよ。穀潰しにも手伝いをさせよう。」

「ありがとう。わたしは他に埋ってる人助けるから先に帰ってていいよ。」

「そうさせてもらうよ。おい穀潰し動けるか？」

肩を貸してやった。

「ち……。ガスめ。よくも俺をこんなにしてくれたな。覚えてろよ。」

「そついうな。家に帰ったらうまいもの食わせてやるぞ。」



「お？本当か。お前いいやつだな。早く帰ろうぜ。」

「穀潰しがプレオ壊したから早く帰るのは無理だな・・・。」

そんなことを言いあいながら二人は帰っていった。

善い人は、その後地下探索を続けたが、悪人が善い人にすっかりおびえてしまい、面倒なので全員のして地上に送り返してやった。

補足

・自動車

この地方では珍しいが、一部の地域で生産は行われている。  
現代に比べ希少になっているが入手不可能ではない。

### 第三幕 大震災

善い人は売れない漫画家・・・というより漫画を描くのが趣味の暇人だ。

この日も善い人は漫画を描いていた。善い人が熱中していると、突然大地が揺れだす。

地震かな？どうやら規模は大きい。

善い人は危険を察知して家の外に飛び出た。

振り返ると善い人の家はぺしゃんこになっていた。

「潰れてしまいましたね。」

いつの間に来たのだろうか。善い人の隣には害児がいた。

「すごい地震だったけど・・・。害児さんの家は？」

害児の家というのは、西洋風の城で害児はその最上階に住んでいる。

害児は高いところが大好きなので、その城はニョキニョキを上伸びており、ものすごくバランス悪い。

「潰れましたよ。でも震源地はもっとひどいことになってるようです。」

善い人はそれを聞いてふと回りと見渡すと、あちこち火が出ていたり瓦解していたりして散々な有様だった。

「おい。善い人。大変だー。」

遠くから何かがすごいスピードで走ってくる。穀潰しだった。

なぜかずいぶんと慌てている様子。

「なんだ穀潰しか。」

「大変だぞ。すごい地震が起こって町中大変なんだ。」

「見れば分かるよ。」

「何を言うか。善いことをするチャンスじゃないか。」

「言われてみれば確かに……。こうしちゃられないぞ。」

善い人は町の人を助けるべく火が出ている家に飛び込んだりして町の人を救った。

があちこち道が潰れていたり火が出てたりしてしかも時々また地震が起こつて負傷者が散々でた。

「おい。善い人こつちだ。」

穀潰しがこつちにこいと合図している。

善い人は町の人を10人くらいもってひいひい言ってるハエに早くこつ

ちに来いと命令した。

「ぴぎ・・ぴぎい・・。」

とにかく穀潰しのほうに行くとそこはなぜか全然壊れても火が出てもない

ガスの家についた。

しかしガスのお気に入りのプレオは完全に壊れていた。

プレオの前にガスさんがいて我輩のプレオがーと叫んでいた。

穀潰しは、その横を通りつつ善い人たちに説明する。

「ガスの家にはでかい地下があるんだ。ガスと同じでガスの家は重装備だから滅多なことじゃ壊れない。

けが人はここに運んでくれ。今は害児さんが治療してくれてるが医者者の

数も足りてないんだ・・。何とかしてくれ。」

今まで黙って聞いていた善い人であったが、あまりに不審なので穀潰し

に問う。

「もちろんだけど一つ聞きたい。」

「なんだよ。こんなときに。」

「穀潰しってこんな善い人だったわけ？」

それを聞くと穀潰しは驚いているようだった。

「ふっ・ふんっ。確かに俺の柄じゃなかったな。おい善い人俺はここ」

に座ってるからお前一人でせいぜい頑張るんだな。」

その台詞は善い人を激怒させるに十分すぎる一言であった。

「なんだって？穀潰しめ。本当に穀しか潰さないただの役立たず！」

「それがどうかしたのか？ほれほれ、ほつとくとどんどん町の人がつていくぞ。」

穀潰しはそういうと愉快そうにひゃひゃひゃとわらい始めた。

「外道め。許せん。」

善い人はどこからか大剣を持ち出した。善い人の機動性があればリーチと

攻撃力が高い武器のほうが有利であり善い人の得意武器の一つだといえた。

「ふんっ。馬鹿め。」

その言葉に善い人は寒気を感じた。

なにやら周囲に力を感じる。善い人の野生の勘は勝負が詰んでいるという

ことを悟っていた。

「全方位サイコカッター。いくら善い人でもかわせないだろうな。降参

するか？」

卑劣なる悪人、穀潰しの恫喝！

・・・がしかし、善い人は善人。ここで負けるわけにはいかない！

善い人ははんばやけくそのように吠える。

「く・・・正義は勝つ！」

「では潰れる。」

穀潰しは技が放つ。

普通なら回避不可能な攻撃だが、善い人は超人的な敏捷を発揮してそれら

の攻撃を何とかぎりぎりかわすが避けきれない。

一撃でも当たれば致命的。

ただ、このとき双方に誤算があったとしたら、このときは前に戦った時

とは違い、この場に二人しかいない状況ではなかったということだ。

善い人が気付くと、鉄の塊のようなものが穀潰しに向かって突進していた。

「我輩の家を壊すな！」

ガスは重装備なので、サイコカッターも防げたようだ。

しかし、鎧はボロボロになりガスは突撃を止められ、壁にたたきつけられる。

「じゅ、重装備で助かった！」

ガスは自分の生命がある事に安どし、ガスの活躍のおかげで善い人は技を回避できた。

「やるな……。だが！」

穀潰しはすでに攻撃の態勢に入っている。

「いや。ここまでにしてもらいましょうか。」

いつのまにか穀潰しの後ろに害兇がいた。

「俺に気配を察知させないとはお前人間なのか？」

「どうでしょうね。ただこれ以上負傷者を増やしてもらつと困りますのでおとなしくしてもらいます。」

その言葉を聞き穀潰しは、笑いだす。

「できるのか？たかが後ろを取ったくらいで車椅子に乗った障害者が俺を止めれるとでも？」

が・・甘い。害児はこの手の輩には慣れている。

「時間稼ぎですか？あなたの超能力は仕込みに時間がかかるようですか

らね。」

「ばれたか。だが・・。」

穀潰しはレポートで逃げようとしたが害児さんが穀潰しに孫悟空のわ

つかみたいな物を頭につけた。

「げっ！なんだこれは？」

穀潰しははずそうとするが外れない。

「それは滅多には外れません。私が持っているこのスイッチを押すと。

こうなります。」

穀潰しはその場につづくまる。その様子を見てにんまりと笑う害児。

「とこのように電気が走ります。あなたも救助活動に参加してもらえますね？」

「ちつ。3対1じゃ分が悪いぜ。今回はお前らに花を持たせてやる



よ。」

ガスが這いながら足元にやってきてつぶやいた。

「善い人君。早く町の人を助けないと。こんなことやってる場合じゃない。」

善い人は、呻いている町の人たちを見つめていた。

「そうだね。急がなくては。」

ガスは穀潰しを引っ張りつつ車に乗り込む。

「さあ。早く。善い人君も乗るんだ！」

善い人は意外そうな顔をした。

「その車壊れてるから動かないよ。」

至極<sup>ごく</sup>ごもつともな話だったが、何やらガスは沈黙する。

「わたしは歩いて行くからいいよ。それじゃあね。」

「ちょっと待て貴様。」

「ん？なにかな？」

ガスは尋常ではない様子だ。目が血走っている。

「貴様・・・貴様・・・。我輩のプレオが壊れてるだって？我輩のプレ

オの

どこが壊れてるのか言ってみろ！」

なぜか知らないがガスが切れててめんどくさい気配だ。穀潰しはひい  
といいながら私のほうに逃げてきてあわわわとかいって小さくなっ  
てる。

「え？どう見ても壊れてるよ。」

「プレオを侮辱したな！」

「受ける！我輩の命の炎！必殺特攻！ガス・フェニックス！」

ガスは自分の体に火をつけて火だるまになって善い人に突撃してい  
る。

正気の沙汰ではない。

善い人はその姿を見てこんなことを思っていた。

技の名前かつこいイな。スケッチして漫画の題材にしよう。

ただ漫画にするときはもったかつこいいい感じにしなければなら  
ないな。

襲い掛かるガスを善い人は右に避けた。

ガスは地面にめり込んだ。

「さてと。こんなことしてる場合じゃない。早く善いことをせねば。

「

後ろで一生懸命ゲタを掘り起こそうとしてる穀潰しを尻目にその場を後にした。

穀潰しが後ろのほうで手伝えとかいってたような気がしたがそんな時間はなかった。

とはいえ善い人は医者場所が分からないし、善い人は瞬発力はあるが持久力がない。

すぐにへたれた。ハエを使えばいいのだがハエは救助活動に忙しい。その横を車を通った。

「よう。だいぶへばってるみたいだな。ざまあねえぜ。」

「その車壊れてるんじゃないの？」

「プレオは永遠に不滅なのだ！壊れるわけじゃないじゃないか！」

善い人は、無言でプレオに乗り込む。

ガスはブオンブオンと口ずさむと車を動かした。

横で穀潰しが踏ん張って頑張ってるのがこれは、超能力で車を動かしている

ということだった。

「医者なら一人名医がいる。ここから離れた場所だが、死んでるかもしれないな。」

「ああ。いけすかない野郎だが。」

そこまでいって穀潰しは、沈黙し善い人に向かって話しかけた。

「おい。善い人。一つ聞きたいんだが。」

「ん？」

どうせくだらないことだろうなと善い人は思った。

「何でいつも善いことしてるんだ？」

やっぱりくだらなかった。それくらい自分で考えろと言いたかったが、

善い人なので答えることにした。

「善いことをすると気分が善いからだよ。」

「いや。それは見てれば分かるんだが。そういうことじゃなくなてな。」

穀潰しは、半端もので何か一心に打ち込む人間というのが羨ましかった。

善い人にやたらをからむのはそのためだといえる。

「じゃあ質問を変えるか。善いことを始めようとしたきっかけとかな  
いのか？」

「きっかけか……。きっかけは雷……」

「雷？」

「そう雷。え？」

善い人は急に頭痛が起こってそれ以上思考がまとまらない。

雷がなんだって？

善い人がぼーっとしてしまったので穀潰しは困惑したが、質問を続  
ける

ことにした。

「雷と善いこととどう関係するんだ？」

「え？雷がどうしたって？そんなこといったかな。ところでガスさ  
んが

眠ってるみたいだけど。」

「いったらう。ん？」

穀潰しはガスのほうを見る。

ガスは確かに眠っていた。

「おい。ガスふざけるんじゃないぞ。」

そいつって穀潰しはガスの頭を思いっきり殴った。

「いてて。なんていう石頭。」

「頭って言うかそれってヘルメットじゃないの？」

「ちつ。どっちでもかわらねえだろ。」

「でも起こさなくても別に善いのでは？」

「いや。どこに行くか正確にはわからねえから起こさないとまずいな。」

「じゃあこれで。」

善い人は棍棒を取り出してガスの頭をぶったたたいた。

「ごんごんごん。」

「おい。全然起きないぞ。もうちょっと強く殴ってみろよ。」

「変だな。ヘルメットへこんでるけど。」

「ちょっと待て。今ので気絶したらしい。」

「根性がなさすぎる。」

「まあ別にガスの頭だからかまわねえけど俺にそれやったらすり潰すからな。」

穀潰しは善い人のあまりの所業に恐怖を感じ、思わずそれを口にした。

とはいえ自分もそれにのっていた一人ではあったのだが。

「でかい口をたくさんじゃない。」

善い人はそういつとわっかの電流スイッチを取り出してオンにした。

「あべべべ。」

穀潰しがのびた。そして車も止まった。

「役に立たない人ばかり。こんなことなら車になんか乗るんじゃないかった。」

善い人は役に立たない二人は見捨てて独りで医者を探すことにした。

わたしは勘が善いので医者もすぐ見つかるだろう。とそう思うことにした。

善い人はしばらく走る。

そして休憩を繰り返す。

「あのとき何か思いだしそうだったような……。そう雷。」

が、少なくとも今の善い人には関係のないこと。

善い人はそのことを頭の隅に追いやり、今善いことをすることのみに集中した。

あそこだな。そして善い人は名医がいそうな場所を目ざとく見つけた。

そばに潰れた車がおいてあった。どうやら穀潰し達が先に到着したらしい。

部屋に入ると案の定穀潰しがいた。ガスはいないらしい。

穀潰しは善い人を見ると、困った顔で話しかけてきた。

「善い人。ガスの知人の医者が見てるんだがどうも雲行きが怪しい。」

「話してる？そんな悠長なことしてる場合じゃないよ。」

「それはそうだ。よし、ぶち破れ。」

穀潰しはひゃっはーとかいいつつ、ガスと医者が話しあいをしてる部屋を吹き飛ばした。

家は半壊し、部屋にはいやもう部屋とも呼べないが、医者らしき男とガスのみがいた。



医者らしき男がそこにいてめがねを光らせくいつと上に上げていた。

「君たちはおとなしく待つてゐることもできないのかね。」

善い人は激怒し何か言おうとしたらやたらテンションが高くなつて  
る穀潰

しに先を越された。

「いきがるなよ。こっちは3人なんだぜ？」

「なにをいつてゐるのだ……。私は別に君たちの手助けをしてあげよう  
と

いうのにそのような態度だとこっちも考えを改めないといけないよ。

「

「いや。名医さん彼に悪気はないんです。少し病気でして。」

ガスがやたら低い姿勢で名医の顔色を伺つてゐようだった。

「ガスさん忠告しておきますが、付き合う人間は選んだほうがいい  
ですよ。」

穀潰しが何かいいそうだったが今度はガスに先を越されていた。

「我輩の友人をけなすということは我輩をけなすということだ。そ  
うい

うことをいう人間こそ我輩と付き合うに値しない人間である。」

「ふっ……。好きにしてください。それで治療費は払っていただけ  
るん

でしょうな。」

「高すぎるが・・・。」

「別にあなたに払えといっているわけではない。ただ住民で払えない者が出た場合の保証人になってほしいということです。」

善い人は穀潰しの頭のわっかを害児から預かった鍵ではずして名医の頭にかぶせた。

そしてスイッチオン。

「あべべべ。」

名医はダウンした。

「今のうちだ！こい。ハエ。」

ハエを呼んでガスの家まで特急名医を運ばせた。後は害児がうまくやるだろう。

もちろん善い人はハエにわっかのスイッチと鍵は持たせた。

「善い人め。せつかく潰そうとしたのにおいしいことを。」

「穀潰し。こんなところで大技使われたら我輩まで死ぬ。」

あちこちの空間が歪んで見える。察するにすさまじい威力の技のようだ。

「善い人。二手に分かれよう。俺はガスと一緒に他の医者を探すからお前もそっちで探してくれ。」

この町はそこまで被害ないようだが、怪我人がいたらガスの家に運んでくれ。」

「分かった。ちゃんと働くんだよ。」

「いやむしろ俺が一番働いてるだろ。主に車動かすことに。」

そして救助活動を再開した。

## 第四幕 大震災の真相

一通りの救助活動を終えた後、善い人たちはよろずやに集合した。

地下にいったみると、ほとんどの町の人ですでにいなくなっている。

どうやら名医も帰ったようだ。

「ここはまだましなほうです。震源地はひどいありさまらしいですよ。」

害児が説明を始めた。

「もう人が住める状態ではないようです。後これはうわさなんです  
が、

この地震は人為的なものでまたこの地震を起こそうとしてる人たちがいる  
らしいのです。」

「それは大変だ。早くやつつけないと大変だ。すごいこつ。」

善い人は善いことができる絶好のチャンス到来と喜び勇んだ。

すぐさま悪人とぶつ飛ばすため、善い人が駆け出そうとすると、穀  
潰しは

両手を広げ善い人の前に回り込む。

仕方ないので、一度足を止める善い人。

「おい。ちょっとまて。」

「急いでるんだけどなにかな？」

「俺達はごめんだぜ。お前の道楽に付き合つのもここまでだ。今後は勝

手にやらせてもらおう。」

善い人は、それを聞き心底どうでもいい気持ちになった。

「そうか。じゃあまた後で。」

善い人は通せんぼしている穀潰しの横を通り抜け、地上へと向かう。

「おい……。もうちょっと止めてくれよ。」

穀潰しがまだなにかいってたが、無視してさっさといくことにした。

善い人が外にでみると害児が待っていた。

「私も一緒に行きます。私も善い人さんの手伝いをしたいので。」

「いいよ。」

善い人はあっさりと承諾する。

その承諾の裏には足手まといになったら置いていこうという目論見があった。

こうして善い人たちは震源地へと目指した。

ただ害児は車椅子なので善い人は害児に合わせてゆっくりと移動しなければならぬ。

これは困ったことだ、早くても害児さんが足手まといと善い人が考え込んでいると、

「善い人さん。こんなペースだと手遅れになりますよ。もっとスピードを上げないと。」

害児は、善い人が自分に遠慮しているということに気づき、助言する。

「でも害児さんが付いてこれないと思うよ。」

害児はそれを聞き内心想うところがあつたが、顔には出さず対応した。

「いやこの車椅子はスピードが出るので大丈夫ですよ。」

「なら遠慮なく。」

善い人は、ハエを呼びその背に乗る。

「ハエ。震源地まで最速でお願い。」

「びえびえ。」

ハエはすごいスピードで進んでいく。

善い人が後ろを見ると害児もちゃんとついてきてるようだった。

害児は善い人が見ていることに気づきふつと笑う。

善い人はそれを見て、顔を緩める。

そうこうしているうちに震源地についてみると確かに怪しげな集団がい  
るようだ。

善い人たちが中に入ろうとすると、怪しげな集団の一人が善い人たちのほうに走り寄り話しかけてきた。

「何者だ。すでにこの地帯はアキラ様の支配土地である。早々に立ち去るがよい。」

「そのアキラって人が地震起こしたの？」

「その通りだ。アキラ様こそはこの世界の神である。この腐った世界を変えてくれる御方だ。」

そうついつつ男はどこか焦点の合わない目をしている。

「この土地に住んでる人はみんな無事？」

「奴隷どものことか……。生き残ったやつらは奴隷として使ってやっているよ。なんならお前達もその仲間に入れてやろうか？」

「うるさい。」

偉そうな態度が善い人の勘に障った

それに悪人と判明した以上、これ以上話す必要はない。

悪人が身構えた刹那善い人の右アッパーが炸裂。悪人は天に飛んでいた。

その後。念のため善い人は害児に確認をとった。

「奴隷とかいつてるけど。こいつら悪いやつだね。」

「その通りです。町の人たちを解放しなければなりません。」

害児は朗らかに答えた。その時、ふと二人は後ろに気配を感じ、善い人と害児は後ろを振り向く。

「できるかな？」

宙に浮いている怪しげな男。風格がありおそらくこの人物がアキラとい

う人物に違いないと一同は思った。

害児は銃をアキラに向けつつ問いかける。

「サイキッカーですか。もしかしてあなたがアキラさん？」

アキラは目を細め、口元をゆがめた。



「よく分かったな。お前は何者だ？」

「見ての通りのしがない障害者です。」

「答えるつもりはないということか。しかしどこかで見た顔だな。はて・・・。」

アキラは二人を見つつ、サイキッカーではないと把握できた。

この障害者と白服が何者であれサイキッカーでなければどうということもない。

そう考え、アキラは少し安心した。

「地震を起こしたというのは本当ですか？」

「起こしたのは俺じゃないが。本当だよ。」

善い人が口を挟んだ。

「奴隷とかいうのになってる人たちを解放してよ。」

「それがここにきた理由か。お前達に何の関係がある？」

アキラは今どきこんな馬鹿もいたかと呆れた。

「悪い事はいけないことだ。あなたも善いことをしないといけない。」

「どうやらそっちの白い服のやつは頭が死んでるらしいな・・・」

善い人の意味不明な言葉を聞き、ああなんだ狂人かとアキラは思った。

善い人はひそひそと害児に聞いた。

「頭が死んでるとかいつてるけどどうということだろ？」

「つまりあなたを馬鹿にしたいということですよ。」

害児はそれをむしろアキラに聞かせるように言い放つ。

アキラは挑発されるが、一般人風情が何を言うという顔をしていた。

「なにー。この私を馬鹿にするなんて。思い知らせてやるー！」

思い知らせてやるー！という姿はすでに残像。善い人はアキラが認識する間もなく攻撃のモーションに入っていた。

高速移動の後剣を放つ。

「斬る！三連斬ー！」

常人ではまず回避不可能な、超速攻撃、それはサイキッカーでも例外ではない。

さらにアキラは、害児に多少気を取られており、善い人の動きを超能力で思考を読み取るということすらしてなかった。

「ぐはっ。」

アキラは一瞬でぼろぼろになった。

サイキッカーは肉体強化もしているので斬撃をくらって即死はない。  
だが

エネルギーはかなり消耗する。

「な・・化け物めが。サイキッカーなのか・・？」

超人を見ればサイキッカーと思うのはサイキッカーの悲しい性なの  
だろう。

アキラは距離をとるが善い人はどこからか槍を取り出しさらにとど  
めの

おいうちをかける。

「貫け！トルネードチャージ！！」

回転、一点集中。善い人は体をぐるぐる回す。

「うぐあ。」

アキラは念で防御するがあまりの威力に全く相殺できず瀕死になる。

「待ってくれ・・。頼む。町の人を解放するから。」

アキラはお手上げ、命あつてのものだねだ。アキラとしてもここには  
仕事で来てるだけ。

命をかけるつもりなど毛頭なかった。

「待つ必要なんてないよ。悪人を倒すのが善い人だからね。それにしても穀潰しと同じ技を使うようだけど穀潰しよりてんで弱いね。」

「穀潰し？ナンバー6のことか？あいつより俺が劣るだって笑わせてくれる。ナンバー6ならもうすでに俺の奴隷だ。

そうか……。お前ナンバー6の知り合いだな。いいのか。俺を攻撃するとナンバー6が死ぬことになる。」

アキラは善い人が善人で馬鹿なことを計算し、口で勝負を挑むことに決めた。

「うるさい。」

しかし善い人には理屈は通じない。

善い人はぺちやくちゃしゃべるアキラのあごを蹴り上げる。

「いっておくけど数字の知り合いなんていないよ。わけの分からないことをいう。」

「あの……。善い人さん。ちょっといいですか。」

害児は善い人の肩をチョンチョンとたたく。

「ん？」

「どうやら穀潰しさんは私達より前にここに来ててもう中でつかま

つてる

ようですよ。」

「そうか。捕まるのが趣味なのかな。」

害児はそうではないだろうと思ったが、あえて何も言わず、善い人はとにかく町の人を解放しなければと思った。

善い人はハエを呼び、ハエの背中にアキラを乗せて町の中に入ってみる。

「ああ……。アキラ様が……。」

中に入ると悪人達がアキラの無残な姿を見ておびえている。

この悪人達、アキラがやられる様を最初から見ていたはずだったが、誰も助けに入らなかった。

とはいえ助ける時間などなきに等しかったが。

「皆さんの信望してたアキラさんはこの通りです。奴隷になってる人たちを解放

して皆さんはまた元通りの生活に戻ってください。」

害児さんがそういうと悪人達は夢から覚めたような表情になり口々に言い始めた。

「最初から胡散臭かったんだよ。俺達もアキラにはうんざりしてたところだった。」

「そうだ。そうだ。俺達は無理やりアキラに命令をさせられていたんだ。俺達が悪いことなんて一つもない。」

「あなた達は英雄です！これから町の人全てで祝いましょうぞ！」

何かがやがや言ってたのでとりあえず善い人はおとなしくなってもらおうと判断した。

「S・アップー。」

元悪人達を気合をともに殴り上げる。元悪人達は天へと吹き飛んだ。害児はその間、めざとく怪しい場所に目星をつけ善い人に報告をした。

「善い人さん。ここから地下にいけるようです。きっとここに奴隷になってる人たちが閉じ込められてるんですよ。」

「それは大変だ。早く善いことをしないと。」

二人が地下に降りて行ってみるととへいこら働いている穀潰しを発見した。

「ああ穀潰し。楽しそうだね。」

意気消沈してた穀潰しは善い人の顔を見るととたん威張った。

「よお。遅かったじゃねえか。あまりのろまなんで待ちくたびれたぜ。」

穀潰しの強がりやを二人は聞き流し、害児は疑問に感じてたことを穀潰し

に尋ねた。

「ところでどうしたのです？あなたほどの実力者がまんまと敵に捕まる

なんて。」

「何言ってるんだ。これはわざと捕まって敵の内部に侵入する華麗な作戦だったんじゃないのか？」

害児は見苦しい言い訳に呆れ、無言でその場を去りほかに捕まってる人達を助けに行った。

その場に残った善い人は、穀潰しに告げる。

「さあ……。どうなんだろうね。ただもう悪人のボスはやつつけたよ。」

「え？アキラをか。本当に？」

穀潰しは自分が苦戦したアキラをそうも簡単に倒せるものかと怪しんだ。

「ほら。」

善い人はハエに乗っけていたアキラを穀潰しの目の前に放り投げる。

「こいつの得意技は集団催眠なんだが……。根性馬鹿の善い人にはきかなかったか。」

「穀潰しの知り合いなの？」

「ああ……。そんなところだ。しかし、こいつには不意打ちで散々な目に

合わされた。このままじゃきがすまねえぞ。」

「改めて決着をつけてやる。サイコヒール。」

アキラのきずが見る見る治る。

善い人はそれを見て驚いた。

「そんな便利なことできるんなら穀潰しが医者になってくれればいいのに。」

「悪いが乱発はできない。念力をこっそり使っただけでな。」

「そろそろ起きるぞ。」

「む……。貴様はナンバー6。」

アキラは善い人のほうを見るとたんおびえだした。

「ひえええ……。勘弁してください。白服様。」

「おいおい。情けねえなあ。アキラ。こんなやつこつだぜ。」



穀潰しは調子に乗って善い人の頭を殴る。

「痛い。」

本当に痛そうに善い人は頭を抱えた。

「いいじゃねえか。ちよつとくらいいい思いをさせろ。それも善いことだろ。」

「おい。アキラ。さつきは不意打ちで催眠かけたくらいで勝った気になってんじゃねえぞ。  
もう一度勝負だ。」

「ふん……。ナンバーからでもいないおまえが俺に勝つことなんて不可能だよ。」

アキラは善い人のほうをちらちらと見ながら答えた。

「思い上がりもそこまでにするんだな。催眠さえ気をつけてれば  
お前なんか俺が負けるわけねえんだ。」

穀潰しは激昂しどうやら茶番な展開になってきたようだ。

善い人はいいい加減やり取りが面倒になってきたので、害見の手伝いを  
しくことにした。

「じゃあ私達は捕まってる人たちを解放してくるから、穀潰しは外で  
遊んでてね。」

「おう。さつさといけ。」

アキラは善い人が射程距離から離れほつとし、穀潰しとにらみ合う。

「テレポート。」

二人は外に出た。辺りは、壊れた建物などの残骸だらけ、二人は足場悪いためオーラを身にまとい、宙に浮いた。

「ただ力ばかり強力なだけでろくに鍛錬せず技も磨かないお前がエリー」

トの俺に勝てるのか？」

まずはアキラが穀潰しに挑発を仕掛ける。

「催眠みたいな卑怯な技しかろくに使えないやろうがよくいうぜ。」

アキラからしてみれば、催眠は卑怯ではない。この最強無比の攻撃があるからこそアキラはネーム入りを果たせたのだ。

その技を馬鹿にされアキラは心中穏やかではなかった。勿論顔には出さないが。

「どうやら口で言っても無駄らしいな。」

アキラは瞬時に穀潰しの後ろにテレポートする。

穀潰しは攻撃を避けるためテレポートするがアキラに読まれてしまっている。

穀潰しはアキラに手首をとられ投げられてしまった。

穀潰しは、地面に激突する寸前、地面を念力でえぐりダメージを軽減させる。

「あーあ。穀潰しは接近されるとてんでダメだな。」

善い人たちは町の人たちを解放した後。町の人たちと一緒に戦いの様子を  
見ていた。

本当は建物などの建て直さないといけないのだが、町の人はいあまりの町のひどさに現実逃避していた。

そろいもそろって雁首を並べ、サイキッカー同士の戦いを見物した。

害児は、高台の上に立ち二人の戦いを解説する。

「サイキッカーとしての技量はアキラのほう全然上のようなですね。体術も上ですし穀潰しさんが勝つてるところはサイキックのパワーだけですが、ためる隙がないとそれも無駄ですね。穀潰しさんがためたらアキラさんのほうも催眠してしまうでしょうし、これは分が悪いですよ。」

町の人になるほどなと感心した。

そんなことをしていると穀潰しがまた投げられていた。

善い人も高台の上に登り害児と雑談をする。

「これはもう勝てないんじゃないかな。でも不思議だ。私の攻撃

は避けれたのになんでだろ。」

善い人の質問に大きくうなづき、害児は町の人からマイクを受け取ると

また説明を始めた。

「善い人さんの攻撃を先読みできたからでしょう。

アキラさんとの場合は思考の読み合いで勝てないんでしょう。

しかもアキラさんのテレポートの範囲は広大なのに穀潰しさんは見たところ1・2mくらいしか動けないようです。」

実際は穀潰しはテレポートをつかえていないが、さすがに洞察力鋭い害

児でもそこまであほなことは見抜けなかった。

町の人は害児の的確な説明に感心し、二人の勝負にみとれた。

勝負は泥沼（穀潰しが小技の打撃をうけるだけ）の持久戦になった。

町の人は飽きてしまつて家に帰つてしまっている。家行つてもほとんど

瓦礫だったが。

そして日も傾きかけていた。

「長いねえ。」

善い人は砂場で子供達と山を作つて遊んでいた。こんなときでも子供は

無邪気だ。

害児はそばで読書をしている。

「日が暮れそうですよ。」

「帰ろうか。」

「ええ。とりあえずもう町は大丈夫みたいです。これで地震がおさまるといいんですけどね。」

穀潰しさんの戦いは、連日になりそうですからもうここにいても無駄でしょう。」

「帰ろう。」

善い人と害児は茶番を見せつけられてうんざりし、まだ戦っている穀潰し達を後にして家に帰った。

その頃ハイテンションな穀潰したちの戦いはまだ続いていた。

「この俺は不死身だ！」

穀潰しは一方的に攻撃を受けるが見る見るうちに傷を再生させてしまふ。

「さすが我が好敵手。やるな。」

「お前もな。」

こうして夜がふけ戦いはさらに続く……。この戦いは三日三晩続いた伝説の戦いになった……。と穀潰しは後に語った。

## 情報ファイル

- ・サイキッカーについて。

超能力者の組織。

この世界の悪役勢力の一つ。

ネーム入りとナンバーズ。

普通のサイキッカーはナンバーで呼ばれている。穀潰しは元6で、これは

6番目に組織にはいったわけではなく、昔の6番目がいなくなったので

6という理由。

ネーム入りは、サイキッカーの中で強い人が与えられる名前。与えられた以降はナンバーではなく名前で呼ばれる。

名前の由来は、昔組織に貢献した元祖サイキッカーの名前で、そのため

定数のみのネーム持ちとなる。

- ・サイキッカーの能力

元々の素質とそれを扱う技術、さらにそれを補う道具などで決まる。

さらに大きく分けて二つに分類される。

念力の練りこみと脳波の安定

念力の練りこみは素質に大きく依存するが技術の精度でも差はかなり  
でる。

脳波の安定は長い訓練による技術の習得が不可欠となる。

穀潰しは練りこみのスピード遅いが、許容量が無限に近いので、  
パワーは大きい。

念力の練りこみ

・エネルギー系、エネルギーに念力を練りこみ放出させる。  
穀潰しの得意技。

・肉体強化系、肉体に念力を練りこみ強化する。  
穀潰しのみ死んでも復活するほどの効果を発揮する。

・操作系、物体に念力を練りこみ操作する。つまりサイコキネシス。  
動かすだけではなく、爆発させたりすることもできる。  
テレポートもこれに当たるが、テレポートは扱いが難しく、脳波の  
安定  
も必要となる。

脳波の安定

・読み込み系、サイコメトリーによる瞬間読み込みと、予知による  
読み込みがある。  
大抵のサイキッカーはメトリーによる読み込みを得意とする。

予知は大抵時間がかかるので実戦には向いていないが、ネーム持ちで予知を得意とするものがあるとも聞く。

・感覚超越系、透視、遠視など。視覚などの感覚を脳波に転換する能力。

例えば、遠視などは、視覚で見ている物の認識と地球の裏側を見ている認識を同時に行うというもの。

例をあげれば自分が複数人いて感覚を共有しているような感じ。

アキラの催眠もこれに当たる。アキラは練りこみよりも緻密な技術による技を好む。

アキラの使う集団催眠は、アキラの得意技で、瞬時に広範囲に当たって相手の思考をコントロールできる。サイキッカー以外の相手に対してはほぼ無敵。

普通催眠は、道具を使って行うものでさらに複数人を操るのは至難の業

だが、アキラは長い訓練でそれを可能にした。

ただし、脳波の安定系は、同じサイキッカーでは技術のせめぎあいでも効力を発揮するので、自分より上手の相手には瞬間催眠できず時間がかかる。





## 第五幕 歌う善人

薄暗い部屋の中、害児は一人ティーを楽しむ。

その表情はどこか嬉しそうで、ぼそりと独り言のようなことを言っている。

「今回の件、不幸な出来事ではありましたが、これで随分とやりやすくなります。」

その声に答えて闇から声が流れてくる。

「全く首領のお手並み、感服いたしました。」

その声を聞き害児はますます上機嫌になっていく。

「ふふつ。私は何もしていません。しかし・・無能な輩というものは黙っていても期待通りに動いてくれるというものです。」

「それも首領の人徳がなせる技でござましょう。」

害児はそれには答えない。カップをテーブルに置き義足を点検し終わると、

車椅子に戻る。

「それにしても善い人さんは、今日も手伝いに行っているのか。」

噂をされた善い人は、手伝いと称し今日も公園で砂山を作り子供た

ちと遊んでいた。

「いやあ、善いことをするのって楽しいなあ。」

「お姉ちゃんの作った山大きいね!」

「わたしは善い人だからね。」

善い人の作った砂山は大きいというものではなく、公園からあふれて小山のようになっていた。

子供たちはその小山で遊んでいたが、周りの大人たちはいい迷惑、善い人には町を助けられた恩義があつたが、悪人と言われて善い人にぶつ飛ばされた

人達も中に混じっていたので複雑な感情だった。

「善い人さん。手伝ってくれるのは結構なのですが、できれば力仕事を担当していただきたいのです。」

町の人の一人が勇気を振り絞り善い人に抗議をする。

「わたしは力仕事に向いてないんだよ。」

「し、しかし・・・。」

「お、おい。その辺にしておけ。また殴られるぞ。」

「あ、ああ・・・。」

町の人たちは、はた迷惑な善い人を尻目に町の復旧作業に戻っていた。

やがて日も暮れたので、善い人はそろそろ帰ることにした。

「善い人はそろそろ家に帰って寝る時間だよ。さてタンクさんはどこにいったかな？」

タンクさんというのは、善い人の家に居候している背の高いすらりとした

女性で、実はロボットだったりする。

以前、ゴミ山に埋まっていたところを善い人に拾われ、その後、彼女を狙う

悪のロボット連中を追い返し、今に至る。

「やあいたいた。」

タンクは小型の戦車になって、のこぎりなどで木を切っていた。

「帰ろうか。タンクさん。もう日が暮れるよ。」

「もうそんな時間なの？ああ本当だ。」

タンクは変身して人間に戻り、善い人と一緒に帰路についた。

善い人は、震災で崩れた家を頑張つて建て直している町の人たちを見て、

うれしい気持ちになった。

自分がいいことをしたおかげだ。とそう思った。

「みんな善い人になってよかった。よかった。」

「善い人ちゃんが誰か悪人さんをやっつけたんでしょう？すごいなあ！」

「まあね。私は善い人だからそのくらい当然だよ。」

善い人はくるくる回る。

「タンクさん。今日もゴミあさりにいくの？」

タンクは、ゴミ山や遺跡などで何かを発掘するのが趣味だった。

ロボットなので疲れることなく夜通し、発掘しても大丈夫なのであった。

「もちろん！今日は何が出るかなあ？」

「善いものが出るよ。間違いない。」

「善い人ちゃんがそういうならそうなんだろうねえ。」

タンクは、手首をパカパカと動かす。おそらく喜んでいるのだろう。

「そうだ。いいものがあつた。」

タンクは手首から何を出す。妙な材質でできた何かの像だつた。

「善い人ちゃんにこれあげるよ。かわいいでしょ？」

善い人はせっかくいい気分だったのに変な像を見せつけられて機嫌が悪くなつた。

「いらないな。そんな変な像。」

無愛想に返答する。

「またまた照れちゃつて。はい。持つててね。なくしちゃだめだよ。」

タンクは善い人に無理やり像を持たせる。

善い人の都合などお構いなし。非常にマイペースな人であつた。

「まあいいか。よろずやに売ろう。」

「売っちゃだめだからね！」

「こんなゴミいらないよ。」

「ダメダメ。持つてないとダメ！」

善い人は困り果てた。こんな変な像は明らかに要らなかつた。

「これも善いことなのかな？」

善い人は仕方なく変な像を服にしまいこむ。

「じゃあ私はゴミあさりしてくるね。」

「うん。」

善い人は家に帰ると、漫画を書きながら八工を実験台に技を放つ。

「こんな感じかな？いやなんか違うな。」

「ぴ、ぴぎー！！」

善い人は八工と一通り遊んだ後、食事することにした。

その時、扉がノックされる。

「タンクさん？入って善いよ。」

「善い人ちゃん。手がいつぱいだから開けられない。」

「もう仕方ないな！」

善い人はしぶしぶドアを開くと、大量のごみを抱えた戦車が部屋に入ってきた。

善い人の家はゴミだらけになり、そのうえで二人は食事すること

にした。

「今用意するから待っててね。」

タンクは自分の頭のハッチを開け、コップを二つ出す。

そして善い人には水を自分にはガソリンをつぎゴミ山の上に並べる。

「じゃあいただきます。」

「いただきます。」

善い人とタンクは、食事をしつつ話に花を咲かせた。

善い人は自分がいかに善いことしたかを語り、タンクを驚かせ、タンクは自分

がどんなにすごいものを発掘したかと語り善い人を驚かせた。

「すごい！すごいよ。タンクさん！」

「善い人ちゃんもだよ！」

さて、タンクはまた裏山に戻り、善い人は寝ることにした。

「おやすみ。善い人ちゃん。またね。」

「ふわあ……。今日も善いことしたなあ。」

善い人は2時間ほど寝入り、うーんと背伸びをした後、外に出かけた。



家の外では害児が待っていた。

「善い人さん。今日もいい天気ですね。」

「そうだね。」

今日はどちらかという曇っていたが、このいい天気というのは害児の口癖

であり、善い人も別に空が曇つてようが雨が降つてようが困るということは

なかった。この問答の内容は常に変わる事がなかった。

「それにしても今日もごみだらですね。」

「タンクさんが持つてくるんだよ。」

「善い人さんも大変ですね。」

「わたしは善いことができればそれでいいんだよ。」

善い人にとって部屋がゴミだらけになろうがたいしたことではなかったが、

邪魔なことは確かなので、いつも処理はしている。

「さて……。昨日も手伝いに行つてたそうで？」

「それはもちろん。善い人だからね。」

「そうですか。そうですよねえ。お陰様で私のほつもずいぶん……

げふん

「げふん、いやなんでもないです。」

「害児さん。町の手伝いするのも飽きたから何か善いことないかな？」

「それは困ります。善い人さんにはせいぜい町の復旧の妨害をしてもらわ

ないと・・・。」

「ん？」

「いえいえ、ほら。小鳥のさえずりでしょう。そんなことよりも善い人さん。

見てください。いい天気です。」

善い人は害児と一緒に空を見上げる。

「それで害児さん。何か善いことはないのかな？」

善い人にとって関心はそこだけで、害児が行う不審行動のあらゆること

に興味などわくわけはなかった。

それは害児にとっては大助かりなことではあったが。

「また何かあったらお知らせしますよ。そうそう、私は用事があったのだった。

そろそろ城に戻ります。」

害児は冷や汗をかきつつ、逃げ出した。

向こうからプレオが近づいてくる。どうやらガスが来たようだ。

「ぶおんぶおん、キュイーン！」

プレオは善い人の家の前にとまる。

「善い人君。おはよう。いや毎度助かるよ。」

「ガスさん。頼んでおいたものは？」

「ああこれか。」

ガスは車からガサガサとボウガンを取り出し善い人に渡す。

そのボウガンは、善い人の体ほどの大きさであり、まさに善い人専用の特注品と言える代物だった。

「常人の筋力じゃまず引くことはできない。吾輩自慢の一品なのだ。」

善い人はもうそんなことは聞いておらずボウガンで遊んでいる。

「気に入ってくれたようだな……。さて荷物を運ぶとするか。」

ガスはせっせと善い人の家から荷物を運んでいると、そこに害兎が近づいてきた。

「やあガスさん。相変わらずハイエナのような方だ。」

どうやら害児は暇なのでガスに嫌味を言いにくたらしい。

あるいは先ほどの失態の腹いせかもしれない。

「へへっ。害児さん。これからもご贔屓にしてください。」

ガスは揉み手をしつつ笑顔で対応する。

「全く、善い人さんからただで物品をむしろうなんて自分で虫がいいとは思わないのですか？」

「しかし・・・これが吾輩の性分ゆえ。」

申し訳なさそうに、しかしにやつきながらガスは答える。

害児はその言葉にそっぽを向く。

「反吐が出る！ゴミ虫以下ですよ。あなたの所業は！もういい。帰ってくれ！」

帰れと言われて帰ったら商売にならない。

害児のあまりの理不尽な態度にもガスは笑みを絶やさな。

それはなぜかという、害児がガスにとってお得意様だからだった。

「まあまあ害児さん。例の町の復旧で随分荒稼ぎしてるらしいですな。」

吾輩もあやかりたいものだ。」

「な、なにっ！」

害児はガスをにらみつけた。しかしガスはニヤニヤ笑うばかりで何の手ごたえもない。

「これは口が滑りましたかな。」

「まあいい。二度目はありませんからね。」

「いやはや害児さん。今後も吾輩のよろずやのごひいき・・・。」

害児は皆まで聞かず、足早に去って行った。

「やれやれ。あの人は傲慢なのがいかんな。さて、今日は善い人君に手伝ってもらうとするか。」

ガスは善い人を手招きし、呼びつける。

「なにかな？ガスさん。私は善いことをするので忙しい。」

「善い人君。今日は吾輩の手伝いをしてもらえないだろうか。ちよつと今日の商談の相手は面倒なのだ。」

「めんどつくさいなあ。」

「これも善いことというものだぞ。善い人君。」

「そうかな？なら善は急げだ！」

善い人はプレオを蹴っ飛ばして、自分もプレオに乗り込む。

プレオはすごいスピードで吹き飛んでいく。

「やあ。快適だよ。善い人君。方向もばっちりだ……。待てよ。これは落ちた衝突でプレオが壊れるのでは？いやまず吾輩が死んでしま

うじゃないか。

・・吾輩は死にたくない！」

ガスは車の上で青くなった。

「善い人君！なんとかしてくれ！」

「なにを？」

「なにをつてそりゃ……。」

ドスン！バコーン！

車は森の中に墜落した。

「わ、吾輩のプレオがー！」

ガスは慌てて車から降り損傷を確かめる。

「ほつ。助かった。それに吾輩も何ともない。これは重装備のおかげだな！」

「ガスさん。どこに悪人がいるの？早くいいことしに行かないと。」

「な、何を言ってるんだ。善い人君。吾輩は危うく死ぬところだったんだぞ」

「？」

「ふーん。なんかものすごくどうでもいい。」

「ど、どうでもいいだってー！」

ガスは顔を赤くしたり青くしたりしながら激昂する。

「そんなことより善いことはまだなの？本当に使えないなあ。」

「はっそうだ。こんなことしてる場合じゃない。善い人君よく聞くんだぞ。」

今回の仕事は素材の採掘だ。ドラゴンが住み着いている洞窟に行つて素材を掘ってくるんだ。」

「ドラゴン？」

善い人は怪訝そうな顔で聞いた。

「古代生物の一匹で高い知能と戦闘能力を持っている種族だよ。」

「へえ。面白そうだね。」

「面白くはない。あそこに住んでいるドラゴンは好戦的だから触発して」

はダメなのだ。」

「戦ってみたら漫画の題材になりそうだ。」

「はあ。少なくとも我輩を巻き込まないでくれよ。」

それに善い人君の馬鹿力がないと採掘できないんだから手伝わても  
らわないと困る。」

「わたしは力仕事は得意じゃないんだけどな。」

「どの口がそれを言うか。善い人君なんて馬鹿力をとったら何の取  
り柄

もないじゃないか。」

その一言は善い人が激怒するのに十分すぎる一言だった。

「なんだとー！わたしを馬鹿にするものはゆるさあーん！」

善い人はさっきガスにもらったボウガンを向ける。

「み、見くびってもらっちゃ困るな。善い人君。それには矢が入っ  
てない

のだよ。」

ガスの横を何かが通り過ぎ、後ろで爆音が聞こえる。

「え？」

ガスが後ろを振りむくと、辺りの木々が粉々に吹き飛んでいた。

「次は右目をもらうよ。」



「み、右目？善い人君冗談は……。ぐわっ！」

ガスの体に巨石が命中し爆発する。

ガスはごろごろ転がり木にぶつかる。

「じゅ、重装備のおかげで何とか助かったが……。が？」

ガスの前の前に無表情の善い人が立っていた。

「善い人君。吾輩ほどの善い人はいないと思うのだがどう思う？」

ガスの命は風前の灯。しかしガスは善い人の思考パターンを見抜いている。

「いやガスさんは悪人だよ。」

「まあ待て。善い人君。君はドラゴンを見たくはないか？」

「ドラゴン？」

「さっきいった古代生物だよ。もうすぐ先にある。どうだ。ここは一つ

仲直りして一緒にドラゴンの住処に行こうじゃないか。」

善い人はそれを聞きぱつと表情を明るくした。

「ドラゴンか。どんなのだろうな。ガスさん早く行こう。」

ガスはそれを聞いてほっと一安心。

「ふうー。助かった。」

## 第六幕 ドラゴン観察日記

二人がしばらく歩くと、洞窟の前にドラゴンが陣取っているのが見えた。

ドラゴンはこちらに気づき話しかけてくる。

「人間共。私の住処に一体何のようだ？」

ドラゴンはガスと顔見知りなのだが、これは一種のあいさつというものだった。

「はー。ドラゴン様の洞窟にある鉱物を採掘させてくださいまし。」

「なにい？私の住処のものを盗っていこうとはどういう見なのだい？」

「ここはお一つこれで。」

ガスは大きな袋を取り出してドラゴンにあげた。ドラゴンはにんまりと笑いその袋をガサガサと揺らす。

ここら辺はすでに定式となっている。

「ほう。なかなかつまつとるな。ふん。その心がけを忘れるでないぞ。」

今回は特別に2時間貸してやろう。よいか。2時間以上いるようなら食べて

しまうからな。」

「ははっ。ありがたき幸せでございまする。」

「善い人君。許可が下りたよ……。あれっ?」

善い人はドラゴンに興味しんしんだった。ドラゴンのしっぽに捕まり後に  
ついてきている。

「これ。人間。どうして我の後についてくるのか?それに我の尻尾は乗り物ではない。」

善い人はその言葉をスルーして質問する。勿論しっぽには捕まった  
ままだ。

「ドラゴンさん。なにしてるの?」

「散歩だ。見て分からののか。」

「あの大きな袋は何?」

「金がつまっとるのだ。なぜそのような当たり前のことを聞く?」

「ドラゴンさんもお金使うの?」

「使わないでどうやって生活するのだ?あほうなのか。お主は。」

「草とか食べるんじゃないの？」

「草も食べるが良質な草がそこらに生えてるといっこともあるまい。その

ほかにもいろいろと入用なのだ。」

「どうして2時間だけしかいちゃだめなの？」

「どうしてもこうしてもなかるうが。制限をつけなければどんどん採掘されてしまつて裸の洞窟になつてしまつたろつ。」

ドラゴンが住む洞窟は、ドラゴンがいる影響で貴重な鉱石がとれる。このドラゴンはそれを売ること生活していたのであつた。

古代生物といえど、生活するためには仕方ないこともある。

善い人は重ねて質問した。

「炎とか吐ける？」

「炎も吐けるし他にも人間にとって害のあるガスとか吐ける。天候を操

つて雷撃を発生させることもできるぞ。空を飛ぶこともできる。」

ドラゴンはここぞとばかり自慢をする。純粹にうれしそうだ。

「すごいね。」

「お主のようにいろいろ質問するものは初めてだ。大抵は我を見る

とおび

えてしまいつまらん。」

「体大きいからかな。」

「分からんな。」

「そういえばどうして炎吐けるの？」

「知らん。逆に聞くがどうして人間は炎が吐けないのだ？」

「そういえばなんでだろう。」

善い人は真剣になって考え込んだ。あるいは人間にも炎が吐けるかもしれない  
とそう考えていた。

ドラゴンはいつの間にか歩くのをやめて、善い人に対峙していた。

「あの鎧男はよくここにくる。尋ねてくる人間自体あの鎧男くらいなも  
のだ。」

「さびしいみたいだね。」

「さびしいな。暇だしつまらん。」

「ドラゴンの仲間はいないの？」

「知らんな。探す気にもならん。」

「どうして？」

「どうしてって面倒だろうが。」

「わがままだなあ。」

「・・・それは確かに。しかしどこにいるか全く見当も付かん。」

「じゃあ探してあげるよ。」

「なに？なぜ我の仲間をお主が探さねばなんのだ？」

「善いことするのが私の使命だからだよ。」

「変わったことをいう。このような時代にお主のようなものがあるとはな。」

「じゃあ私はそろそろガスさんの手伝いをしないと。」

「そうか。これ少し待て。」

「ん？」

「採掘時間を4時間に増やそう。そうあの鎧男に伝えてくれ。」

「分かったよ。ありがとう。」

ドラゴンは善い人の背中に手を振り見送った。

戻ってみるとプレオに乗ったガスが洞窟の前にやってきた。

どうやら仕事がひと段落ついたところらしい。

「善い人君、遅いよ。これでは連れてきた意味がないではないか。」

「今から手伝うよ。」

「だがそろそろ2時間たってしまう。」

「4時間やっていいってさ。」

「おおさすが。交渉しにいつてくれたのか。そうだと思ったよ我輩は。さす

が我輩の見込みどうりだ。」

「それじゃいこうか。」

二人は再び洞窟の中に入る。

「どうだい。見事なものだろう。これで吾輩はまた馬鹿儲けできるというものなのだ。」

洞窟の中にはびっしりと鉱石が詰まっていた。

「きれいだね。スケッチしておこつ。」

ガスはそんな善い人に苦言を言う。



「善い人君。早く仕事にかかるんだ。あまり時間がないのだからね。」

善い人は仕方なくスケッチをあきらめ仕事に取り掛かる事にした。

こうなったら、生半可では済まない。善い人はすさまじい勢いで大剣を振り

洞窟を削っていく。

善い人の大剣は大剣というよりは、巨大な鉄の塊。そんなものを何本も持っている。

ガスは初めは感心して仕事ぶりをみていたが、そのうち心配になってきた。

「善い人君。これはちょっとまずいな。もうほとんど鉱石がない。いくらなんでもあのドラゴン怒ってしまうだろう。」

「じゃあ一つおいていこうか？」

「いや一つくらいじゃだめだよ。」

「じゃあ二つ？」

「だめだ。だめだ。」

「うるさいなあ。手伝ってあげないよ。」

「それは困る。まあいいか。なんとかなるだろう。」

その後ドラゴンさんがやってきて、洞窟の中を見たとき少ししかめ面を

したが、得になにもいわず善い人たちを見送った。

善い人は大量の荷物を上に載せ、蛙のように潰れていたが、その待遇について特にガスに文句など言わない。

「やあ、大量大量。今日ほど痛快な日があったろうか。これもすべて善い人君

の労に他ならない。」

「どうやら善いことができてよかったよ。」

「善いこと？ そうだな。善いことだ。全く、吾輩にとってはこの上なく

善いことなのだ。わっはっは。」

ガスは笑いが止まらなかった。

善い人は別のことを考えていた。あのドラゴンの仲間のことだ。

そして、ドラゴンを見て怖がる人がいるということ。

きっと誰か悪人がいて、ドラゴンさんのことを悪くいつているに違いない。

わたしがいる限りそううまくいかないよ。

善い人は、そのように考え、ドラゴンの悪い噂を晴らす決意を固め

た。

善い人は次の日、害児の城を訪ねる。

城の応接間で害児と、ドラゴンの話をしかつ相談した。

「お話はわかりました。しかし善い人さんは古代生物が怖くないんですか？」

そこへ黒い服を着た人がやってきてカップを善い人と害児の前に置く。

「ティーでございます。」

「うむ。御苦労。」

しかし、善い人のカップには何も入っていない。これはいじめなわけではなく

、善い人は基本的に水を少量飲めば満足するため好んで何かを食べたり飲んだり  
はしないためだ。

黒服の人が奥に引つ込んだ頃、善い人は口を開く。

「別に怖くないよ。」

「みんな怖がってますよ。」

害児は肩をすくめる。

「そうなんだ。」

「しかし、怠惰なドラゴンですね。案外ドラゴンの生息地は多いのに自

分で探しにいかないなんて。」

「ドラゴンさんの話によると、あの場所は町から近いから気に入ってるらしい

よ。」

害児はその言葉を聞くと派手な身振りでお手上げた。

「なんてことだ！そのドラゴン真面目に探す気ないんじゃないですか？」

「そうかな。」

「ええ。残念なことですけど。」

「害児さん。わたし思っただけど。」

「なんですか？」

「これは何か悪人がいてドラゴンさんの悪い噂をしているんじゃないかな？

何の罪もないドラゴンさんを罠に落とそうとしてる悪人がいるに違いないよ。」

「ふむ・・・。」

害児はそこで少し考え込む。普通ならキチガイの戯言なのだが、  
実際古代生物たちは別に人間たちに対して危害を加えているわけ  
もない。

彼らは適応力が高く、人間社会にもなじもうとしている。

そういうことを考えると善い人のいうこともありうるし、そもそも  
害児は

こういうときの善い人の直感は大体当たると信じていた。

「そうですね。私のほうで少し調べてみます。善い人さん。明日ま  
たこ

こへ来てくれませんか？」

善い人は家に帰り、害児の情報を待った。

そして明日の朝いの一番に害児の城に出向いた。

害児は城の前で善い人を待っていたようだ。

「善い人さん。犯人が分かりました。おとなしい顔してとんでもな  
い連中

でしたよ。

トラックに乗ってください。私が運転します。」

善い人は害児とともにトラックに乗り込み、現場へ急行する。

「悪いやつもいたものだね。こらしめなければならぬ。」

「全くです。悪は滅して、見せしめにしなければいけません。」

のりのりで物騒なことを言う害児。しかし善い人もその言葉には全く同感であった。

正直この二人がそろそろくなく事が起こらないのだが、今回はどうなのだろうか。

写真に写っている人物は、どうみても穏やかな村人にすぎない。

果たして彼が本当に悪人なのだろうか。

善い人たちが町に着いたころ、写真の人物は仲間と一緒に談笑していた。

「善い人さん。見てください。笑ってやがります。」

怒りの表情で写真の人物を指差す害児。善い人も勿論激昂する。

「許さん！善い人の怒り思い知れ！突き刺さる蹴り！」

善い人は飛び上がり、穏やかな村人Aに向かって急降下する。地面にめり込む穏やかな村人A。

「ああっ！村人Aさんが！」

「何をする！暴漢め。」

激昂する町の人たちを止めたのは意外なことに、善い人に蹴られた穏やかな

村人Aだった。

「待ってください。みんな。この方の話を聞いてみましょう。」

当の被害者にそう言われては是非もない。町の人たちは、無粋な暴漢をにらみ

つつ、その言葉を待った。

「あなたが悪人だということは、善い人にはお見通しだ！」

善い人は村人Aを指差す。

「え？私が悪人ですって？何を言っているのです。あなたは・・・」

そこへ乗り込んでくる害児。

「とぼけようとしても無駄ですよ。あなたがドラゴンの悪い噂をばらまいてい

るということは、すでに調べがついています。

さあ！大人しく罪を認めなさい！」

その言葉に我慢ならず町の人たちは口ぐちに口を開く。

「何だお前たちは、いきなりやってきて！ドラゴンなんぞ凶暴な奴をどうしてかばうのだ！」

「それに、村人Aさんを問答無用でけり上げるとはどういう料簡なんだ！」

そして善い人たちに糾弾された当の本人は、うつむいている。

町の人たちは心配して村人Aに話しかけた。

「もう行こう。村人Aさん。こんなキチガイに構う必要はない。」

その言葉を聞き、震える村人A。

「くつくつく……。はっはっは！」

「え？」

村人Aの突然の変化に驚き慌てる町の人たち。

「よくぞ見抜いたなあ！ああそうさ。俺はドラゴンに嫌味をするために  
この町にやってきた嫌味博士の手下だ！」

「嫌味博士？本当にそんなものが実在したとは。」

害児は嫌味博士の名前を聞き驚く。

「害児さん。嫌味博士ってなに？」

「ほら。穀潰しさんの妄想でよく出てくるあの人ですよ。私の情報網にも

引つかからないから架空上の人物だと思ってましたが……。」

「くつくつく。俺たちは嫌味さ！嫌味をするために生きている。  
なんのためにドラゴンの悪い噂をばらまいたって？それは嫌味のた  
めさー！」



聞かれてもないのにハイテンションでべらべらとしゃべる元村人A。

村人Aの突然の変貌に顔が引きつる他の町の人たち。

「どうした？ 恐れ入って声も出ないか。はっはっは媚びろ媚びろ！」

村人Aはまるで気が狂っている。

「どうやら手遅れみたいですね。善い人さん、楽にしてあげてください。」

善い人はこくりとうなづき、巨大な鉄の塊（大剣）を取り出す。

「エレファントクラッシュ！」

破壊音とともに、本気の一撃を繰り出す善い人。

すさまじい効果音とともに村人Aは粉々になるが、それはいつの間にか藁でできた人形とすり変わっていた。

「これは一体……。ん？」

害児は藁のなかに入っていたカセットテープのようなものを取り出す。

カセットテープはカチャという音を立て、音をだした。

「がーがー。これは爆弾です。繰り返します。これは爆弾です。」

「善い人さん大変だ。これは爆弾みたいですよ！」

爆弾と聞きパニックになる町の人たち。

カセットテープはさらに言葉を紡ぐ。

「爽快爽快！見ろ！人間どもが慌てふためいて逃げていくぞ！」

「なんていうことだ！善い人さんどうしましょうか？」

「害見さん。一つ聞きたいのだけど。」

「なんですか？こんなときに。」

「爆弾って何？」

「爆弾というのは、爆発するんです。すごいんです。危険なんですよ。」

「だからどうにかしてください。」

「どうにかしたら善い人かな？」

「もちろんですとも！」

「今からでは遅いわ！たわけめ！嫌味の力思い知れ！」

カセットテープはカウントダウンを始める。

「あわわわ。」

害児は青くなつて慌てふためいた。冷静に考えてみると害児がここで慌てる  
要因は何一つないのだが、予想外の展開に我を忘れてしまっているのだ。

善い人が、害児から爆弾をひったくろうとすると、不意に風が吹く。

「させねえよ！」

辺りに青い風が巻き起こり、その風は害児からテープをかつさらう。

「ん？穀潰しじゃないか。」

「穀潰しさんですか。それを奪つてどうするつもりなのです？」

「うるせえな。お前たちには関係ねえよ。」

穀潰しはまた風となつて去つて行つた。

「大丈夫でしょうかね？」

「どうか。でもこれで悪は去つた。」

その後、二人はドラゴンの住处に行き、町への転居を提案。

町の人には害児が事情を話し、ドラゴンは受けいられることに。

ドラゴンもちろんそれには異存がなく、転居は速やかに行われた。

・情報ファイル

・善い人の生態

・極度の寒がりで、白い帽子に白い服を着ている。汗などは基本一滴も出ない。

・というより基本老廃物がなく、人というよりはロボットに近いかもしれない。

・水を少量飲むだけで、数週間生きていられるが、趣味で何かを食べることもある。

・常に病魔に侵されており、通常寝たきりになるはずだが、気合と根性で動いている。

・しかし本人に自覚はなく、昔は寝たきりだったらしいがある事件がきっかけで今のような生態になったらしい。  
ただし、善い人は過去の記憶が欠格してる。

・漫画を描くのと善いことをするのが趣味。

・武器はすべてどこかに隠し持っているのだが、果たして自分より大きな武具をどこに隠しているのか全く不明。ただ、善い人は来ている服は、セリルという女性が経営してる仕立て屋以外では購入しないためそのあたりに秘密があるのかもしれない。

・善い人の武器

・鉄の塊のような、荒い大剣を好む。この大剣はすぐに折れたり削れたりするので、数本持っている。

基本どの武器も安物ですぐに壊れるようなものばかり。

・大剣を好むが長剣、刀、槍などもあれば使う。敵から奪うこともあるし地面に落ちてるものを拾っておくこともある。  
またよろずやで購入することもある。

・巨大な弓、バリスタを持っている。これはちゃんとした筋で作った優れ物。近接武器以外にも弓も使える。火器は扱わない。

・普段は手加減してるので、素手で戦う。サイキッカーや明らかに人間でない相手の場合は武器を使う。

## 第七幕 パレード騒乱

パツパカパーン。今日のヒノキ村は大賑わい、隣の村の領主が来ており

そのためにパレードが行われているからだ。

そんな様子を害児は城から見下ろしていた。

「大仰なことです。全くよほど私に当てつけたらしい。」

この領主、害児の商売敵であった。領主の目的は村と友好を深めること

であつたがその実、害児に対して財力を見せつけて威圧することが目的であるう。

そつに違いないと害児は思った。

「おのれ・・・忌々しい輩だ・・・この怒りをどこにぶつけてやればいいのだ。」

害児は指をパチンと鳴らす。それを合図に彼女の部下が駆けつけるのだ。

「お呼びでしょうか？」

「お呼びかどころではありません。見てください。このとんちき騒ぎを！」

部下はパレードの様子を横眼でちらりと見て若干目を細める。

「お陰さまでわたくしどもも楽しませてもらっております。」

「なにに？よくもそんな口がきけたものですねえ！これは私に対する挑

戦ですよ！」

「そういわれましても・・・ではこの騒ぎを止めますか？」

「ふっ・・・それではまるでわたしの器が小さく小者のようではありませんか。王者には王者のやり方というものがあります。」

「なるほど。さすが首領です。」

害児は部屋の中をくるくる回っている。部下は少しうつむきかしこま  
って害児が何か思いつくのを待っている。

「ほほう。これはいい考えだ。」

部下はその声に顔をあげた。

「何か思いつきましたか？」

「ええ。あいつに大恥かせてやります。二度とこんなでかい顔  
ができないようにねえ！」

「はい。」

「ふっ・・・もういつてよし。後は私一人でなんとでもなります。」

「ははっ。」

部下が消え害児が残る。害児の名案とは一体……。

「ふふふ……。本来は善い人さんに頼むところだが、ここは彼にも華をもたせてあげるか。」

穀潰しは、パレードで出店しているガスの店で穀を潰していた。

「おい。親父。いい防具じゃねえか。」

「へへっ。旦那。恐れ入ります。」

ガスはもみてをして客に媚を売っていた。穀潰しはそんなガスのざまに

へどが出る思いだった。

穀潰しはへこへこしているガスを尻目に店を出ていった。

「へっ……。どこもかしこもお祭り騒ぎかよ。気に入らねえな。」

「ええ確かに。」

突然穀潰しの横に害児が出現する。穀潰しに気配を感じさせないあたり本当

に何者なんだろうと思えてくる。

「うわっ！なんだお前。どこからでてきた。」



「貴方にもチャンスを与えようと思ひましてね。」

「チャンスだと？何を言つてやがる。」

「私の計画はこの馬鹿騒ぎを終わらせることです。それは貴方も同感でしょう？」

「はあ？いいからあつちいけよ。知り合いだと思われちまうぜ。」

穀潰しはしつしと手を振るが、害児は引き下がらない。

穀潰しは足を速めるが、害児は車椅子をことごとく巧みに動かし難く

ついてくる。

「本来なら善い人さんの役割ですが、貴方もたまにはうだつをあげたいでしょう？この名誉の役割をあなたにやってもらおうというのです。」

「なんだと、てめえ。まるで俺がいつもうだつが上がらないみたいなこと

いいやがって。」

「これは失言。」

「おせえよ。いちいち面当てしやがって。今度は何のようだ？」

「つまりここに来ている隣町の領主をフルぼっこにして追い払おうと、

こういうわけなのですよ。」

「足だけじゃなくて頭まで腐りやがったか？」

「そういう貴方も、頭が腐り気味のようで・・・。」

「なに？」

「いやいや、失敬失敬。それでどうします？こんな僥倖貴方には二度と訪れないと思うのですが・・・。」

「失せろ。」

「残念です。いやはや・・・私としては貴方に個人的期待を・・・。」

「失せろといっている。」

「ふう。つれませんね。分かりました。これ以上貴方に嫌われないためにもここは退きましようか。」

「・・・。」

「ふん。まあいい。駒はまだあるのだからな・・・。」

害児は小声で一人ごとをいいその場から去っていった。

「あの野郎。またとんでもないことを思いつきやがって・・・。これは大変だぜ。善い人に知らせないと。」

その頃善い人は、幼稚園で世話をしている子どもたちと一緒にパレードを

楽しんでいた。

「私はこんな騒ぎ初めてだよ。みんな今日は大いにはしゃいで。」

そして一番はしゃいでるのは勿論善い人で、子供の世話など全くして  
いなかった。

「そうだ。タンクさんにも教えてあげよう。きっとあの人、今日も  
ごみ  
あさりしてるだろうし。」

そのとき遠くから、害児の声が聞こえてきた。

「大変です！善い人さん！」

「あ。害児さん。こんにちは。」

「善い人さん。実は今日来てる領主のことなんですけどねえ……。あ  
いつは悪党でして。」

突然害児はとんでもないことを言い出した。

「でもこんな楽しいことをするんだから善い人だよ。」

「いやところがそうでもないんですよ。やつは領主とは言うものの  
悪名  
高い商人でしてね。罪もない町の人から金をむしろとってやがるの  
です。」

はつきり言つて害児も人のことは言えないが善い人はそれを聞くと、怒り狂つた。

「なんて悪人だ！許しておけない！」

「そうですね。そうですね。そういう悪人は断固制裁を加えるべきなのです。」

「じゃあ早く！案内！」

「こっちですよ。善い人さん！」

領主はこの村の村長と話し合っているところであつたが、害児達の乱入によりそれどころではなくなっていた。

「なんですかね？この子供は。」

「は、はあ……。この子供は自分のことを善い人といつてまして……。」

害児さんのところにいる子供なのです。で、ですよ？害児さん。」

善い人は突然領主に殴りかかろうとしたところを護衛にさえぎられ、憐れな護衛達はみんな吹き飛んでしまい、その下敷きになっていた領主は

やっこの思いで這い出てきて村長に苦情を言っていた。

そしてその矛先は当然害児にも向いた。

「害児さん。貴方のところで面倒見ている子どもならちゃんと管理したら

「どうなのですか？」

「まさかわざと私にけしかけたのではありますまいな？」

「善い人に大分加減されたのか、はたまた元から体が丈夫なのか、おそらく両方だろうが領主はすぐに立ち上がり、善い人から距離をとり害児をにらみつけた。」

「ただし、領主は何ともなさそうだが護衛はすべて伸びている。」

「いやはやお見苦しいことをお見せしました。この子は少し病気でしてね・・・。」

「それを管理するのが貴方の役割でしょう？」

「ま、まあもうその辺で・・・。」

「村長が慌てて仲裁に入る。しかし領主は今回ばかりではなく害児とはたびたび」

「衝突しているので我慢がならなかった。」

「貴方は黙っていただきたい。これは私と害児さんの問題です。」

「

「ほほう。この私を挑発する・・・。そううけとっていいんですな？」

「何を言うか！無礼ではないか！」

「善い人にぶちのめされ転がっていた護衛は、その主人の声に目を覚まし警戒態勢をとる。」

「無礼・・・？下民がなにをほざく。貴様こそサッサと引き上げたら」

「どうなのです？」

「なんたる雑言！」

害児はここで善い人にでかい声で耳打ちした。

「善い人さん。奴の見苦しい顔を見てください。あの顔はどう見ても悪人面です。そうは思いませんか？」

それを聞き善い人は賛同する。

「害児さん。実は私もそう考えていたところなんだよ。」

「悪人はやつつけるべきです。それでこそ善い人・・・そうではないですか？」

「その通りだよ。害児さん。よし。」

「な、なにがよしだ。やい！害児！ひそひそ話してるつもりだろうがこちらには丸きこえだぞ！  
私に何か恨みでもあるのか！」

「うるさい！死ねい！」

害児のその声を合図に善い人は領主をぶちのそうとするが、突然現れた穀

潰しにさえぎられる。

「お人よしもそれまでにするんだな。善い人。」

「穀潰しか。」

「おや？穀潰しさん。今頃来られても貴方に用はないですよ。隣にいる方はどなたです？」

「どうやら穀潰しの隣にもう一人害児には見覚えのない人物がいる。いや実際には一度会っているはずなのだが・・・。」

「ああどなたか存じませんが助かった！貴方は救世主です！」

村長は大感激し涙を流した。領主は突然の援軍に意気を取り戻し声を励ました。

「やあ。よくやりました。それ！早くその不埒な者どもをこの場からたたきだすのです！」

「ああん？何言ってるんだ。おっさん。てめえの指図はつけねえよ。」

「な、なんだって。」

領主はあまりの穀潰しの無礼な態度に顔が青くなった。

穀潰しはその声を無視して善い人に話しかけた。

「おい。善い人。こいつは今やってるパレードの主催者だぜ。悪徳商人かもしれないがそこは評価してやってもいいんじゃないかねえか？」

「な、なんですって？穀潰しさん。裏切るつもりですか？」

裏切るも何も最初から味方ではない。

「害児さん。もう穀潰しはダメだよ。」

善い人は悲しそうに頭を振る。もうダメだよ……つまりは穀潰しもぶっ飛

ばそうという意味だ。

「善い人さん。穀潰しさんは仲間です。彼は操られてるだけなんです。」

害児は、穀潰しの実力を買っていたため必要以上に刺激しなくなかった。

「相変わらず茶番な好きな連中だな。」

今まで沈黙を守っていた男、アキラがそこで割って入った。

害児は、その時になってようやく思い出した。

そういえば、あの時善い人さんにのされた情けないサイキッカーがいた……と。

「確か……アキラさんとかいう三流サイキッカーでしたか？」

「俺を挑発しようとしているのだろうか。残念だな。無意味だ。」

アキラは眉一つ動かさず間髪いれず対応する。

「アキラさんか！よくきた。さあアキラさん！さっさとあいつらを追



い払ってください！」

領主がアキラの援軍に完全に蘇生したようだ。

「申し訳ありませんが、それは無理です。真に申し訳ないのですが・・それよりも貴方は一度退いてください。この場は俺が何とかしますから。」

「な、なに？しかし・・・。」

「おい。おっさん。早くいけよ。それともまだ殴りたいのか？」

「わ、分かりました。者ども！引き上げるぞ！」

それを見て害児は満足だった。

「所詮は小物でしたね。王者たるこの私にかかればこんなものです。」

「く・・。覚えてろよ・・。害児め。」

領主はほうほうのていで逃げだした。

「で・・害児さんとやら。何だってこんな愚拳にでたのかお聞かせいた  
だこうか。」

「愚拳？」

「彼は村同士の友好目的でやってきたのだ。それを追い払った理由は

なんだ？」

「魂胆が見え透いているのだよ。奴はただのいやみだ。」

「それは貴方の妄想にすぎない。」

「だったらどうするのでしょうか？貴方が私をどうにかするつもり？」

そこに穀潰しが割り込んできた。

「おい。話の途中なんだが……。善い人のやつがいないぞ。」

害児はその言葉を聞くとだからどうしたという顔をした。

「それがなにか？」

「おいおい……。いやいいならいいんだけど……。何か冷めちまつたな。俺はもう行くぜ。」

後は勝手に二人でやっててくれ。サイコテレポート！」

穀潰しはいずこへと去っていった。

「冷たい奴だな。」

アキラはそれを見て不服そうだった。果たして俺一人で大丈夫なのか？

と心配になったが、ここで弱みを見せるわけにはいかない。

「それで、私をどうするのです？」

「どうするといつより・・真意を聞きたいといっているのだ。」

「それはさっき言った通りですよ。」

「ふん。容易に心底を見せないか・・。よかるう。俺は義務を果たした。」

アキラは害児に背を向ける。かつこいいことを言っているがようはここから逃げ出したいだけだ。

「逃げるのですか？かかってくればいいでしょう？」

害児はしきりと挑発する。アキラはうんざりだったが彼の性格上無視もでき

ない。仕方なく振り返って害児に対応する。

「挑発は無意味といったはずだが？」

「そちらにやる気がなくても私にはあるといったら？」

「・・・。」

アキラはレポートをし害児の背後をとる。

「お分かりいただけたか？」

「全く分かりませんね。」

害児の背後をとったはずのアキラの背後になぜか害児はいた。

どうやら残像だったらしい。害児の強さは底がしれない。

（おかしい……。今さっきまで俺の前にいたのに？）

サイキッカーでもないのに・・・とアキラは考え込んだ。

サイキッカーの弱点はやはり自らの超能力に過信して、肉体の元々持っている

技を軽視するところだろう。

「この程度か……。穀潰しさんにすら劣る。」

「なに？」

アキラは振り向こうとするが、背中に何かが強く当たる。察するにナ  
イフか何かだろう。

「こちらを見ないでもらえますか。見てもいいがその瞬間貴方は死ぬことになる。」

「ぐ……。」「

「しかし・・・くくつ。サイキッカーもピンキリということですか。」

「俺が奴に劣るだど？」

「それは貴方自身が最もよく分かっていることではないですか？」

アキラは胸に手を当てて考えてみたが自分が穀潰しに劣っているとは

全く考えられなかった。

それはそうだ。害児はただ嫌味が言いたいだけだ。害児こそ嫌味博士なんじゃないかとすら思えてくるが、別にそういうわけではない。

「馬鹿を言え。」

「貴方は力というものを履き違えているようですね。」

「お前と問答したいとは思わないが、力は手段だ。それ自体に目的があるわけじゃない。」

その言葉に害児は激昂し持つてるナイフで背中をぐいと押す。

「言葉遣いに気をつけることだな。それとも今の自分の立場すら分らないほど愚かなのか？」

「付き合いきれん。何がしたい？」

「別に・・・ただ貴方が役に立つかどうか知りただけですよ。そして知りました。貴方は無能で役立たずです。」

「そうかい。お前の評価など俺にとってはどうでもいいがな。」

「威勢だけはいいようだが、それは時に死ぬことに繋がる・・・。」

害児はアキラを解放する。

アキラは慌てて害兇から距離をとり対面する。

「私が相手でよかったですね。」

「こんなことくらいで殺されてたまるか。」

「こんなことだろうがどんなことだろうが、死ぬ時は死にます。」

「チツ。狂人めが。」

捨て台詞を残し去っていくアキラ。

「さて……。目的は果たせました。全くあの領主はいい様でしたね。これで二度と私に楯突こうなどと思わないでしょう。」

## 第八幕 狂人どもの宴

その頃善い人は、領主が心配なので付き添いをしていた。

自分でぶちのめしておきながら、意味不明な行動だが、善い人なりに何か

思うところがあつたらしい。

そして領主は、善い人の全く敵意のない態度に安心し、この際善い人を

こちらの陣営に引き込もうと考えた。

「善い人さん。貴方はあの人に騙されています。世の中にあいつほど嫌な奴はいないのです。」

ある意味そうだが、この領主もあくどさはどっこいどっこいだ。

「害児さんは善い人だよ。」

「そう思いたい気持ちも分かりますが・・・。」

領主は善い人にボコボコにされたのにもうすでに善い人と和みムードになっていた。

善い人を利用しようという目的も忘れかけ、ほとんど本音で話していた。

領主も根は善い人間なのかもしれない。

「悪いことは言わない。私と一緒に来なさい。あんな人のところにいたら貴方も悪事の片棒を担がされるに違いない。」

「でも害児さんは貴方が悪い人だといってたよ。」

「私が悪い人というのなら商売をする人間はすべて悪い人ということになります。」

それは明らかに言いがかりというものです。」

「じゃあ貴方は善い人？」

「善い人とまではいかないでしょうが……。普通の人だと思いますよ。」

シュン！変な音がしたので、二人は立ち止る。その二人の前にアキラが

現れた。

おそらくテレポートしたのだろう。

「領主様。ただ今戻りました。げっ！白服！」

アキラは、ようやく帰ってこれたのにまた善い人なんか遭遇して散々な一日だ。

「待ちなさい。アキラ。この方は騙されていただけなのです。」

「お言葉ですが、この白服は騙されるなどというかわいらしいものではありません。」

領主さまこそこいつに騙されると後でどえらい目に会います。」

「確かそこにいる人は前悪いことをしてた人だ。」



「俺は仕事をしてただけだ。それなのに前が一方的に俺を悪人を決めつけて襲ってきたんだろうが。」

「うるさいな。悪いことをしていたことに変わりないじゃないか。」

「この偽善者め。」

「やめなさい。アキラ。」

「しかし・・・。」

「善い人さん。ここまでで結構です。後はこのアキラが護衛をしてくれますから。」

「分かったよ。」

「ところで・・・考えなおしてもらえませんか？私は奴に面子を潰された。もちろんこのままでは済まされなくなる。

そうなると必然的に害児の側にいる貴方にも被害を受けることになります。

私は貴方と敵対したくはないのです。どうです？私と一緒に来ませんか？」

「領主様。もういません。」

「ありゃ？どこに消えた？」

「すごい勢いで走っていきました。」

「ふーむ・・・。」

「やつには人間の言葉など理解できませんよ。言うだけ無駄です。」

「とはいえ、あの方が害児についている以上は・・・。」

「確かに・・・頭が痛いところではありますが。どうしましょうか？」

「アキラの組織であの方を倒せる人はいないのですか？」

「いや・・・いることはいるのですが・・・。」

「お金ならいくらでも出しますよ。」

「実はやつにはほとんど超能力がきかんです。どういう原理かは分かりませんが。となると

テンマ様以外に奴に対抗できるサイキッカーはいないかと・・・。」

「ああ・・・そういえばテンマが変わったそうですね。確か先代と同じトキトでしたか？」

「ええ。先代の娘です。」

「なるほど。確かに組織の長を借り出すとなるとそれなりの代償が必要ということか・・・。」

「というより少し変わったお方でして。」

「くどいぞ。アキラ。私はどうあっても害児のやつの泣きっ面を見なければおさまらないのだ。」

それにこうも馬鹿にされたままでは商売にも差し支えが出る。」

「といわれましても……。とにかく私から言えることはただやめておいたほうがいいと以外いえないので。」

「どうもいつものアキラらしくない。どうしたのか？」

「い、いえ……。」

領主がアキラの顔を見てみると、アキラの顔から冷や汗がにじみ出ていた。

「な、なんだ。どうしたというのだ？」

領主はアキラの尋常ではない様子に肝を冷やした。

シュウン……。空間が裂け一人の少女がとびだしてきた。

「わははは。どうやら私の話をしているようだな！人気者はつらいものだー！」

やたらとテンションが高かった。領主は人形みたいな少女を見て今までの

陰気な気分が吹き飛んだ。

「アキラ。まさかこのかわいらしいお嬢さんが？」

「は、はい。テンマ・トキト様です。」

「たわけ！」

「ひい！」

いきなりテンマに怒られるアキラ。

「フラワーちゃんと呼ばんか！」

「は、ははっ！ふ、フラワー様・・・。」

「フラワーちゃんだ！フラワーちゃん！」

アキラが困っている様子を見て領主が助け船を出した。

「ほっほっほ。いやはや元気でよろしい。明るくていいリーダーではないか。今度のリーダーは。」

領主はフラワーの頭をポンポンと叩く。その様子を見てアキラは慌てふためいた。

「あわわわ・・・。」

「しかし、アキラよ。その様子ではまるでトキトがお前が主のようではないか。」

確かサイキック組織のネーム達の間には上下関係はなくそれはテンマといえど例外ではないのではないか？

「いやそれは・・・その。」

「なんだあ？貴様は。」

「これは失礼。私は隣の村の領主です。」

「ほほう。そうか。そんなことを知っておるわ！たわけが！」

「は？そ、そうですか。それは光栄ではありますが・・・。」

「あくどい商売で領民を苦しめておるな。元は山賊上がりであろう？」

「な、なぜそれを知っている？誰も知るものはないはずなのに・・・。」

「よし。分かった。」

「な、なにがだ？」

「貴様！山賊に戻れい！そっちのほうが似合っているぞ！わっはっは。」

「は、はあ？いきなり何を言われるか。」

「そうだな。お前の望みかなえてやろう。つまり私はお前の面子を立てて

やる。その代り金が私が全ていただく。」

テンマそう言い残すと円盤のような機械に乗り、ヒノキ村のほうに向かっていった。

「いい加減にせんか！アキラ！なんなのだ！あの小娘は！」

「後で・・・説明いたします。俺も軽率でした・・・ともあれ今は宮殿に・・・」

アキラは精根尽きた顔でがっくりと肩を落とし歩き始めた。

「お、おい。待たんか。」

そして宮殿に赴き領主はアキラから一通りの話を聞いた。

「な、なにー！つまりあの小娘は、世界にいる全ての人間を透視できてしかも何を考えているかまで分かるだろ？」

「ひらたくいえばそうなのです・・・。またあらゆるアンチサイキック装

備がきかないくらいけた外れのパワーを持っております。」

「神・・・そのものではないか。」

「俺もそう思います。」

「一体どうしてそんなものが・・・。」

「それは俺も詳しく知りませんし知っていたとしても言えないのです・・・。」

「なぜだ・・・そうか。監視されているからか。」

「たまたま俺達の会話に意識が向いていたのでしょうか。あの方は面白いことが好きなので。」

「面白いとはなんだ？」

「人々に闘争を促す……。あの方は戦いこそが娯楽なのです。己に対しても他人に対しても戦いを強要するのです。」

「なんてことだ……。ヒノキ村は……害児はどうなる？」

「そのほうはあまり心配ないでしょう。彼らの潜在能力はすさまじいものがある。」

「今殺すようなもったいないことはしませんし、ヒノキ村に住む一般人達はそもそも眼中にないでしょう。それより今心配なのは、貴方様です。」

「私か？なぜ私が？」

「いいですか。テンマ様は必ず貴方様から金を取ります。一問残らず。つまり貴方は元の山賊……ということになるのです。」

「な、なんだと？俺は山賊じゃねえ！」

「といわれましても、どうあってもそうなるのです。」

「テンマ様がそうしたいと思われるのならそうなってしまうのです。」

「無理やりにでも……。その点貴方にも見所があると思われたのかもしれないません。」

「じよ、冗談じゃねえや！元はと言えばてめえがいけねえんだ。なんとかしやがれ！」

領主はすでに言葉遣いが山賊であつたが、そんなことを気にしている余裕がないくらいにシヨックを受けていた。

「なんとか・・・できると思いますか？この俺が。テンマ様相手に？」

「ぐ・・・。」

「もう諦めてください。」

「俺は山賊じゃねえ！絶対山賊なんかやらねえぞ！俺の金も地位もだれにも渡すものか！あれは俺のもんだ！」

その時、アキラは空中に漂っている紙を発見した。

「なんだこれは・・・。ああっ！」

「どうした？」

「これを見てください！」

「なんだ？」

それはテンマからのメッセージであつた。

前払いだ！頂いていくぞ！わっはっは。よかったなあ！これでお前は今以上に生を満喫できるぞお！

「なんだこれは？性質が悪いいたずらだ！」

ガチャ。扉が開き警備兵が領主を取り押さえる。



「なんだ？お前達！血迷ったか！」

「貴様が山賊だということは調べがついている。命だけは取らんどこ」

にでも好きなところに行けい！」

ドカツ！警備兵に蹴られ村の外に追い出される領主。領主はあっけに取られポカーンを空中を見ている。

アキラはその様子にいたたまれなくなっただが、仕方がないと諦めてその場を去っていった。

「く……。テンマ・テキト……。忘れんぞ。俺をこんな目にあわせた奴にいつか必ず復讐してやる……。」

アキラはその様子を遠めに見て思った。

（またテンマ様の目論見が的中したか……。はたして領主にとっていやもう元領主か。元領主にとって何が一番ベストな人生と言えるのだろうか……。）

それは誰にも分からないが、少なくともテンマに関わる人間は一つの在り方を強要される。

。善い人はどうなのだろう？仮に善い人とテンマが正面衝突したら……。

しかしアキラは考えるのをやめた。考えたところでアキラは自分に課せられた仕事をこなすしかアキラには道はなかったからだ。



## 第九幕外伝 世界の敵（前書き）

投稿されなかったようなので念のためもう一度。

## 第九幕外伝 世界の敵

「ちっ……。またかよ。」

ここはあるサイキック施設。才能ある子供を集め訓練させている施設である。

この施設では定期的に、念力の出力検査をすることになっている。

「次。ナンバー6」

「だりい……。」

出力を検査されたが、機械はゼロを表示している。

「なに？ゼロだと？何かの間違いではないか？」

試験官は、ナンバー6の顔と機械を交互に見る。

「何度測ってもゼロだな……。」

「おい。もういいだろ？くだらねえな。ゼロだからなんだっていうんだ。」

「ゼロだとしたら、お前をここに置いておく理由がないんでな。」

「冗談よせよ。いたくてここにいるわけじゃないぜ？」

「ふんっ。貴様にサイキックネームを与えてやろっ。貴様はサイキ

ツカ

「ゼロだ。」

今後ネーム入りを果たすまでそう名乗るんだな。

まあ・・・貴様のような無能者がネーム入りできるとは思わないがな。」

「馬鹿もここまで来るとあきれるぜ。で、カスみてえなくだらない話はそれだけか？」

「なんだと？」

「へっすごむなよ。それともお前に俺に手を出す勇氣があるのか？」

「貴様！言わせておけば！」

「やめとけよ。勝負にならねえぜ。」

ナンバー6の目がギラリと光る。

「く・・・。」

妙な威圧感に当たり、何も言えなくなる試験官。

「・・・懸命だな。まっせいぜい長生きするといひぜ。負け犬人生だろうがな。」

この話は一瞬で広まり、この日から彼はゼロと呼ばれるようになった。

通常ネーム入りを果たしていないナンバーズは数字で呼ばれるが、

それ  
だけでは判別つきにくいのであだ名をつけることもよくある。

特に彼の場合は、インパクトが強かった。

みんなが馬鹿にする仲、一人だけそれは違うといていた人物がいた。

それがナンバー101であった。この施設の中では若いほうであった。

そして、能力は平均より多少下程度だが、間違いなくこの施設で最も努力をしている人物であった。

身長が小さく、小動物のような容姿と、頭に大きなリボンが付いており

本人もかわいいもの好きだが、その本質は狂気の人間であった。

世界が終わった日はどうして起こったのか。

それはこの一人の少女が大きく関係していた。

ナンバー79、彼女は101の友人でセリルという名前であるが彼女は、ネ

ーム入りできるだけの実力が十分あったが、ネーム入りを断つてい

るとい

う珍しい人物であった。  
彼女は例外的に、あだ名ではなくセリルというネームを認められてもいる。

だが、セリルというのはサイキック名ではないことはいつまでもな

い。

通常ネームは、過去の英雄的サイキッカーの名前から取っている。

ゼロは、何度も試験をさせられそのたびにゼロの数字を叩き出しており、

ゼロというあだ名は定着しつつあった。

「ゼロはどうして何度やっても機械が反応しないんだろうね？  
未知の要素でもあるかな？」

「はっはっは。決まっておろう。」

「え？フラワーちゃんは分かるの？」

「何を言うか。たわけめ。」

フラワーというのは、101が本人が勝手に名乗ってるだけの名前で認知もされていない、セリルだけが呼んでくれるだけのあだ名である。

あだ名といっても勝手に名乗れるものではなく、フラワーもまた施設の中

では例外的人物で、唯我独尊の人物である。

「さすが、フラワーちゃんね。頭がいいわ。」

皮肉ではない。

他の人間はフラワーを狂人とか馬鹿者扱いだが、セリルだけはフラ

ワールの  
ことを天才だと思っている。

そしてその洞察はきつとおおむね正しい。

だが本当の天才はセリルのほうであつた。何しろほとんど努力もせず  
ネーム入りできるほどのサイキックの才能があつた。

そしてフラワーは、おそらく全サイキッカーの中でいちばん努力し  
血の  
にじむような特訓を繰り返しているが、能力は並であつた。

「やつの力が大きすぎて機械が反応しないということだけの話よ。」

フラワーはあっさりと答える。

「え？でもそれは変だよ。だってあの機械は、初代トキトの念力のデ  
ィターを元に作られてるんだから、それで反応しないってのはどう考  
えてもおかしいよ。」

彼にそれほどの念力があると思えないし。」

「はは・・はっはっは。面白いことを言うなあー。ならゼロがトキト  
の念力を超えているほうが考えるのが道理に合っているではないか。」

「それはそうだねえ・・。でもなあ。」

「時間だ。」

「あっそうだね。じゃあ再開しようか。」



彼女たちは合同訓練している途中であった。

二人で訓練していると、話しかけてくる人物がいた。

「セリルよ。そんな落ちこぼれなんかと組んでどうする。能力の無駄だ。」

セリルはその言葉を聞いて怒った。

「なによ。私がだれと組もうが・・・。」

だがフラワーがその会話に割って入る。

「無粋な輩め。わきましろ。セリルは今私と楽しく訓練をしているのだ。」

たわけ。分かったら失せろ。」

「な、なに？貴様下手にでていればつけあがりやがって！雑魚の分際で俺様に楯突こうというのか！」

だが無視である。

「き、貴様！無視するな！こっちを向け！」

無視して訓練を再開している。セリルは何か言いたそうだったが、フラワ

ーはその男にもう何の興味関心もないようだ。

雑音にすら思わないだろう。

「ちっ。屑が・・・。」

そのうち男は去って行った。

「はああ・・・。なんでだろうね。サイキッカーってさ・・・。時々いる

よね。ああいう人。」

「なんだ？」

「ほら。さっき私たちに難癖付けたきた人だよ。」

「ほう。」

「忘れちゃったの？のんきだなあ・・・。」

フラワーは興味のないことはとことん忘れてしまつのである。

「ねえ。フラワーちゃんは今、楽しい？こんな施設にいて・・・。」

その言葉にフラワーは驚いた。

「当たり前であろう。だからここにいるのだ。」

一体何を馬鹿なことを言うのだといわんばかりであった。

そしてそれは楽しくなければすぐに出ていくという意思の表示でもあったが、

セリルは実力は十分でも、精神的にはフラワーと比べてまるで大人と子供だった。

とはいえ、フラワーのそれは狂気といっていいので、大人としての良識など無きに等しいが。

「そうだよね……。でも私はなんだかな。合わないのかもしれない。もしフラワーちゃんがいなかったら私はもうここをでていったかもしれない。」

勝手にしたらいいとフラワーは思ったが、黙っていた。

「ねえ。二人で一緒にここを出ない？」

とんでもない話だった。フラワーが自分の能力を開発するのにこれ以上の場所は思いつかない。

ただセリルはフラワーの友人だった。それだけはおそらく確かなことだったのだろう。

「でてどうしようというのだ。」

「うーん……。それはまだ考えてないけど、もっと自由に好きなことを見つけてさ。」

「それが望みか。」

「そうだね……。フラワーちゃんはなんかそういうのなの？」

「私か。私はただ・・駆け抜けるだけのことだ。」

「駆け抜ける？なにを？」

フラワーは澄んだ目でセリルを見つめる。

「生をだ。」

「生……。」「

そんなことがあった数日後、フラワーは養父のトキトに呼び出されていた。

トキトは同時にテンマでもある。なにがしたいのかというと、トキトとは

彼のネームであり、テンマとはサイキッカーを束ねるものという意味味だ。

「何か用でもあるのか？親父殿。」

「きたか101。考えてみたが、お前は型にはまったことを習うよりも新しく創造できる能力のほうがあっている。」

「ほう。」

「わしの短剣をお前をやる。これはサイコウェポンというサイキツク増

幅装置だ。

これを扱うには一種特殊な才能が必要で、万人に一人の資質と粘り強い

根気が必要とされる。

お前にはそれがある。」

ガチャ。トキトは机の上に短剣を置く。フラワーはそれを手に取り眺めて  
いる。

「なかなか面白そうな代物だな。」

「資質の薄いお前が、他のサイキッカーと渡り合える唯一の手段と  
いつて

いいだろう。

・・・これ以上わしを失望させるなよ。」

何かついでのような言葉にフラワーは違和感を感じ、意地悪っぽく  
笑った。

「親父殿は私にこの短剣でさしてほしいと見えるな。」

「な、なに？」

「はははは。では失礼する。」

そういつて、部屋から出ていくフラワー。部屋の外ではフラワーの

不気味な

笑い声が聞こえた。

「恐ろしい子供じゃ・・・。」

あれは人間というよりは、悪魔に近い。

他の者は評価していないがあれをもし野放しにしていたら、この組織は滅んでいただろう。

だから無理を言ってわしが引き取ったのだ。他のものは道楽としかみてくれなかったが・・・。

「あの子がわしを殺す日か・・・。」

その日から、フラワーは自室に閉じこもり短剣の研究ばかりしていた。

サイキック増幅装置にも種類があることが分かり、さらに上位のもの  
が  
ほしくなってきた。

そしてそのチャンスはすぐにやってきた。

「これは偉大なサイキッカーグレンが使っていたアームだ。グレンはサ

イキックの資質に恵まれていなかったが様々なサイキックツールを  
開発し、

後世に貢献した。

今の様々な機械や施設はすべてグレンの賜物といってもいい。」

アームは、腕につけるもので小型の大砲のような形状で、その先に何か者をつかむようなロボットの手みたいなものが付いている。

「ここに飾ってあるアームはなぜ使われていない？」

「それは、扱える者がいないからだ。元々サイキック増幅装置は扱うの

に特殊な創造的才能が必要とされるからな。」

「はっはっは。たわけ。武器を飾ってどうなる。なら私がもらおう。」

フラワーの突然の暴挙に沸き立つ、生徒たちと講師。

「な、なにをする！誰か１０１を取り押さえろ！」

「カス以下の分際でグレン様の武器に触れると思うな！」

サイキッカーは念動波を放つ。勿論本気。日頃あまりよく思わないフラワーを

この際殺す勢いだ。それを短剣で軽々切り裂くフラワー。

「な、なに？サイキック増幅装置？」

講師は驚き、フラワーに攻撃を仕掛けたサイキッカーは両腕を斬られる。

「ぐわあ……。」「

「ひい！」

フラワーは辺りにいる連中をめちゃくちゃに斬りまくった後アームを強奪して、その後行方不明となった。

普通なら処分ものだがいつものようにおとがめなし。それはなぜか。別に彼女の養父、トキトが圧力をかけているからではない、彼女には底知れぬ

なにか存在自体を食われるようなそういう威圧感、それをひしひしと感じ

させるからだ。

今はサイキッカーのなかでも中の上といったところだが、彼女が力を手に

したら果たしてどうなるのだろうか。

そして、その後ある日のある夜、フラワーはトキトの部屋を訪ねる。

トントントン。

「私だ。」

「101か？行方不明と聞いたが。」

とはいえトキトはそろそろ現れるだろうなとは感じていた。

ガチャ。扉が開きフラワーが姿を現す。

「親父殿。私はこれを使いたい。」ゴテッ。



塊が机の上に置かれる。

「派手にやったそうだな。少しは増幅装置を扱えるようにでもなったか？」

「親父殿。これを使う方法を教えよ。」

トキトは不可能だと思った。そしてそのまま率直にフラワーにそれを伝えた。

「・・・無理だ。いくらなんでも。だが・・・腕と直接つなげればあるい

はお前の粘り強さならばなんとか制御できるかもしれないが、それでも万が一だな。」

スパン・・・トキトは一瞬何が起こったのかわからなかった、左腕をなくしたフラワーがそこにいた。

「この後は？」

平然と答えるフラワー。フラワーを知り尽くしてるトキトはこの程度日常

茶飯事だった。

「・・・止血しつつアームを制御するのだ。止血のほうは手伝ってやろう。」

そうしてフラワーはなんとかアームを腕にくっつけれるようになった。

グレンが未来を切り開いた有名なサイキックウェポン「アーム」。

フラワーはその武器で何を切り開くのか。

「どうだ？魂が引かれるような感覚がするだろうが。そんなものつけたままだと身が持たんぞ。」

「心地よいな。」

「心地よい？」

「親父殿。私はもっと増幅器の研究をしたい。専門の施設に送るがよい。」

トキトは不思議となにも思わず、フラワーを他の施設に送った。

薄々感ずいていたのかもしれない。彼女こそ自分を解放するものだと。

そして2ヶ月後。

「親父殿はレンズを持っているそうだな。それを頂戴したい。」

「どこから聞いた？いやそんなことより手に入れてどうする？」

「どうするとはなんぞ。」

「・・・最近はいサイキクアーマーにも手を出しているそうだな。お前にももう立派なウェポンがあるだろうが。過去二つ以上の増幅装置を身につけたものはいない。」

「親父殿は身につけていたではないか。」

「・・・レンズは他の装置とは勝手が違うのだ。聞くが、お前はすでに十分は強さを得ている。訓練を重ねれば時期にネーム入りも果たせるだろう。それ以上何を望むのだ？」

「はっはっは。面白いことをいうものだなー。高みへ行くのに何か理由が必要であるか？」

「・・・わしもサイキッカーだ。力への信望はある。だがな。お前のやり方は急すぎる。」

第一このレンズは適正者以外であると身につけるだけでショック死する代物だぞ。

残念だがお前は適正者ではない。

お前は、テンマを受け継げる人間ではない。受け継げるとしたらそうだな・・・。」

「ゼロか？」

「気づいていたか。」

「それがどうした？私の行く道は私が決める。老害さるべし。」

カチッ。アームのスイッチを入れる。グワワワワ・・・。

「グラビディ・フラワー！」

アームから重力の場を発生させる。

「ぐ・・・。」

すさまじい念力の圧縮にさすがのトキトも表情をゆがめる。

「どうしたあー？？やってみよ！」

闘争を呼び起こせと伝えるフラワー。しかしトキトに戦う意思はない。

「む、娘とは戦えん！」

「脆弱だなあー！戦えぬ兵士に用はない。」

グサッ・・・。トキトの体にアームをさす。トキトはフラワーに笑いかける。

「ブハッ・・・。こ、これで解放される。ありがとう。」

「ヒート・フラワー！」ジュワッ！

アームから念力で圧縮された熱が放出し、トキトの体は蒸発する。

「親父殿の力はもらいうける。が、親父殿の精神はいらんよ。」

後にはレンズのみが残り、フラワーはそれを拾った。父親を殺したこと

に対する感傷などはもちろんない。

「これがレンズか。親父殿は右目につけていたようだな。」カチツ。

「ふふっ……。心地よいな。」

右目が溶けていく……。さらに体中の神経がずたずたにされる。

レンズの許容量にフラワーの許容力が耐えきれない。

魂ごと蒸発するような感覚だがフラワーはそれを心地よいと感じているようだ。

「馴染むな。まるで昔から自分の体の一部のようなようだ。」

父親を殺したときでさえ何も思わなかったフラワーだがこのときは珍しく感傷的なことをいう。それだけこの瞬間はうれしかったのだろう。

「ほう……。レンズは勝手は違うというが、親父殿はレンズの力を解放してなかったようだな。

無駄なことよ。

使わぬ武器に何の意味があるのか。サイキッカーとて同じこと。この私が世界を乱世に導いてくれようぞ。

・・はっはっは。はっはっはっは。」

笑い声がこだます。その彼女はトキトを受け継ぎ、サイキック機関のリーダーテンマとなる。

親殺しという恩知らずな所業だが、ネーム持ちの誰もフラワーのデ  
ンマ

就任に異論を唱えなかった。

彼らはわかっていたのだ。彼女こそが自分たちを導くものだ。

フラワーは、サイキッカーの歴史が始まって以来初めて三つの増幅装  
置を扱うこととなった。

ウェポン、アーマー、ブースト。そしてそれら全てが最高ランクの  
代物  
であつた。

ブーストであるレンズは適正者でないため形状を維持できず後に改  
造、

そのときに初代トキトが完成させた終焉に導く一筋の光を体現させ  
るこ

とに成功する。

その光で彼女は世界を終焉に導き、現在に至る。

知る人ぞ知る、本当の世界崩壊の原因を作った人物である。

## 第十幕 善い人誘拐事件

ある日の夜。月も雲に隠れ絶好の誘拐日和といえそうな日であった。今日も悪人どもが善人たる善い人に対し攻撃を加えようとしている。彼らは30人余りで善い人の家を取り囲み、何やら物騒な相談をしていた。

「よし……。間違いなくこの家だな。」

「しかし、ここまで警備が薄いとはな。かつては魔人とまで言われた人間にしてはうかつなことだ。」

「なんだ？どうせ魔人など大げさに名が広まってにすぎん。やつは所詮その程度の人間だったということだ。」

「だが……。」

「どっちにしる俺達は作戦を実行するまで。そうだろう？。」

「確かに。」

「よし。合図で催眠ガスの手榴弾をこの家にぶちこめ。」

「分かった。」

「作戦開始！」

家を囲んでいた悪人はまず、家をぶち壊しその中に手榴弾を投げつけた。

その後ドアをぶち破り、中にいた人物のみぞおちをなぐる。

そして崩れ落ちる。

「よし！身柄確保！」

それを見て悪人の指揮官は歓喜の声をあげた。

「騒がしいなあ。善い人は寝る時間だよ。また朝遊んであげるから朝来てよ。」

そついつて善い人は再び眠りについた。

「・・・。」

崩れ落ちたのは確保対象ではなく、善い人を確保しようとした戦闘要員だったらしい。

指揮官が無言で部下のほうを見ると、部下は銃を取り出し、善い人に向って撃つ。

普段なら難なくかわせる善い人も、寝ていてはそうはいかない。

「てこずったがようやく終わったな。」



「ああ。この麻醉銃は象をも眠らせる代物だ。さすがの怪物もこれにはどうしようもないだろうさ。」

指揮官の言葉に答える補佐官。

悪人どもが善い人を抑えつけようとした瞬間、何かがはじけ吹き飛んでいく悪人達。

「え？」

「うるさいなあ。善い人は寝る時間なんだよ。」

その尋常でない様子に初めて指揮官はひるんだ。

「おい、どうする？」

補佐官に問われ、悩む指揮官。補佐官は、少しづつ後ずさりをして自分だけは逃げれる準備を始めていた。

「退くか……。いやしかし。」

「しょうがないなあ。」

善い人は、むっくりと立ち上がる。

「私に遊んでほしいみたいだね。」

善い人は指揮官たちになやりと笑いかけた。

「く・・。」

「お、おい？」

どうにかしろという表情で指揮官の顔を見る。

「す、すみませんでした！」

突然土下座し始める指揮官。かくなる上は誠意を尽くすしかないと判断したのだ。

「非礼とは承知の上でしたがやむを得ないことだったのです！」

しかしそれを見た補佐官は指揮官が狂ったのかと思った。

「おい、なにいつてるんだ？」

「うるさい。お前も頭を下げろ。」

「何か考えがあるようだな。」

指揮官に怒鳴られ補佐官も同じように頭を下げる。ちなみに他の部下

ちはみんなのびていた。

「それで・・・何して遊ぶの？」

「ははっ。じつはわたくしどもは世界を平和に導くこの会の組員として、

善い人様の力が是非必要だったのです。そこでやむを得なくこういう形

をとらせていただくことになってしまい誠に申し訳思います。」

「よく分からないけどどうやら貴方達は悪人みたいだね。」

「え？」

「まずいぞ。このままだと俺たちもぶっ飛ばされる。」

補佐官はもう土下座をやめて立ち上がり、かなりたてる。

指揮官は補佐官のあまりに軽率な行動に腹を立て、叱咤した。

「うるさい！少しはお前も考えろ！」

「悪人は退治しないといけない。」

善い人は、そんな様子など目に入らない様子で少しづつ近づいてくる。

補佐官は恐怖で動けなくなり、もう終わったたつたと感じたが、指揮官は

諦めなかった。

「い、いえ！私どもは悪人ではございません。善い人！そう善い人です！」

「へえ、善い人なんだね。それはよかった。」

「そうです。」

「でも何か悪そうな人たちだなあ。」

「いやそんなことはありません。私たちは善いことをする団体なのです。」

「一緒に来ていただければよく分かってもらえると思います。」

「よく分からないけど善いことをするから手伝ってほしいってこと？」

「その通りです！つきましてはお願いがあるのですが・・・。」

「そんなことより善いことしに行くなら早くいこう。どこの悪人をやっ

つけばいいのかな？」

「はい。その前に私たちの組織にはルールがありまして、移動するときは縄でぐる

ぐる撒きにならないといけないというもののなのです。

それで善い人様にグルグル巻きになってほしいのですが・・・。

悪人達の居場所には私たちの車で移動しますから。」

「面倒だなあ。歩いていったほうが早いよ。」

「そういわずにお願いします！」

そういつてまた深々と土下座をする指揮官。なんだか奇跡的に話が  
まつまり

そつで補佐官はほつと胸をなでおろした。

「分かったよ。善い人同士協力し合わないかね。」

「よし。じゃあ早く善い人様を縄で縛るのだ。」

指揮官は補佐官に命令をするが、補佐官はその扱いに不満ありありだ。

「なんで俺が・・・。」

「仕方ないだろう。部下たちはみんなのびてしまったのだからな。」

「俺の仕事じゃないぞ。お前がやれ。」

「俺は指揮官だ。」

「俺だって補佐官だぞ。」

「指揮官の補佐をするのが補佐官だろう?。」

「なにいつてる。お前がちゃんと任務するかどうか見張る役目だよ。」

「いいからやれ!こんなときくらい役に立て。」

「横暴なやつだ。このことは報告させてもらうからな。」

「勝手にしろ。」

補佐官は恐る恐る善い人に近づき善い人をグルグル巻きの芋虫にし

た。

「おい。持つの手伝えよ。」

そういつて補佐官は善い人を持ち上げようと思った以上に善い人が軽くてびっくした。

「どうした？そのくらいはするぞ？」

「いや・・・紙みたいに軽くてな。」

「おいおい。ちゃんと本人入ってるんだろうな。」

「ああ多分。」

「ちゃんというよ。」

「あつ。おられましたか。」

「なつ。じゃあさっさといくぞ。」

「待て。部下たちはどうする？」

「こんな役立たず共のことなんか知らん。」

「そんなこと言ってお前運ぶのが嫌なだけだろ！」

「どっちにしろそろそろ魔人に気づかれるだろう。今回はターゲットの

身柄を確保できただけでよしとしたらどうだ？」

「くっ……。やむを得ないか。」

その後指揮官たちはどっちが運転するか30分くらいもめてから結局補佐

官が運転することになり彼らのアジトに向かってトラックを発進させた。

アジトにて

「馬鹿もの！」

ベシッ！いきなり司令官に殴られる指揮官。

「な、なにをするんだ！」

「賓客に対して縄グルグル巻きにするとは非礼ではないか！すぐお解きしろ！」

「くっ了解。（ちっ。てめえがやれっていったんだろ……。）」

補佐官はその様子を見てニヤニヤ笑っていた。

「なにがおかしい。」

「はっ？どうかしたのか？」

「ちっ……。なにをしている。早くその方の縄を解かんか！」

指揮官に命令されて善い人の縄を解く部下たち。

「とききました！」

「見たらわかる。馬鹿め。」

「は、はい……。俺たちに当たるなよ……」

「ここが悪人がいるところかな？」

善い人がむっくり立ち上がる。善い人は周りを見渡してみると、こ  
こは西洋風  
の城の中のようなと感じた。

とはいっても害児の城よりはるかに小さい。あまり悪の雰囲気は  
しなかつ

たが、善い人の直感的に何か怪しいと感じていた。

「いやいやここは……」

「ここから先は私が話をします。お前達は下がってよし。」

「おい。大丈夫か。こう見えてこの方は……」

「いいのだ。こちらにも誠意を持って話をせねばなるまい。」

「そうか……。何かあったらすぐ呼べよ。」

指揮官と補佐官そして部下たちはそろそろと下がっていった。



「申し遅れた。私がここの組織の司令官だ。またの名を世界を平和に導く会の会長という。」

「善い人だよ。貴方は善い人？」

「無論。今、世界は崩壊し人々は迷っている。今人々に必要なのは、信用

できる強い力なのだ。」

「なんだか善いことをしてるのかな？」

「貴方も同じ心はずだ。協力してくれるな？」

「悪人がいるのならやつつけるのが善い人だよ。」

「貴方の村のヒノキ村の近くに廃墟街がある。ここが悪人のごみ溜めのよ

うになっている。ゴミは掃除しなければならない。

やってくれるか？」

「掃除したらいいの？」

「いや違う。そこにいる悪人どもを追い払うのだ。それが捕獲してここ

に連れてきてくれ。貴方はともかく悪人をやつつけてくれればいい。後はこ

っちでやるつ。」

司令官はぬかりない。善い人は馬鹿だという情報は知っているので、本当に

ゴミ掃除しかねない善い人には正確に情報を伝える。

「じゃあ行ってくるよ。」

「一人では危険だ。部下を連れて行け。」

「邪魔なだけだけど善人の頼みを断るのはよくないね。」

「私は他に用事があるのでこれで失礼する。」

善い人は例の指揮官と補佐官と部下どもを連れて廃墟街へと向かった。

善い人が廃墟街に入る手前にガスと出会った。

「善い人君。後ろにいる連中はなんだい？」

ガスは不審げな顔で指揮官たちを見ていた。

「この人たちは善い人だよ。私はこれから廃墟街にいる悪人達を退治し

に行くんだ。」

「善い人君。廃墟街には穀潰しの友人もいるが。」

「そうか！穀潰しは悪人だったのか！そうだと思った。」

（ダメだこりゃ・・・）

ガスが頭を抱えていると、指揮官が話しかけてきた。

「なんだ？お前は善い人様の知り合いか？」

「吾輩はガスだ。」

「気体なのか？お前は？まあいい。ともかく我々の邪魔をしないでいただけどうか。」

「そうだよ。ガスさん。ここは危ないからあっち行ってね。」

「いや善い人君。それはまずい。」

「邪魔をするなというのが分からないのか。善い人様。こいつも悪人です。」

「なんだって？ガスさんは悪人だったのか！」

「善い人君。それは違うのだ。吾輩はガスだ。」

「貴様我々を愚弄してるのか。お前はどう見ても人間だろうが。」

「そういう意味ではない。名前がガスなのだ。」

「馬鹿に付き合っておれん。善い人様。こんな奴放つといてもう行きましょう。」

「バイバイ。ガスさん。」

「善い人君・・・」

ガスは、穀潰しにこの事態を知らせるため穀潰しの住处に向かった。

「なに？善い人のやつがついに本性を表したのか？」

ついにというか、前々からこんな感じで今までこうならなかったほうがおかしいのだが。

「吾輩の手に負えんのだ。吾輩は精いっぱい頑張った。」

「害兎のやつの話は本当だったのか・・・俺としたことが。」

「どうする？善い人君は本気だぞ。」

「はっ？ちょうどいい機会じゃねえか。あいつとはいい加減白黒つけたかったからな。」

しかし穀潰しは逆にうきうきした。これで善い人と戦える大義名分を手に入れたのだ。

「しかし相手は多勢だが。」

「善い人以外は雑魚だぜ。」

「そつだろうか・・・」

「びびってるなら帰れ。」

そう言われてガスはほっとした。どう考えても自分が出る幕ではなかったからだ。

「そ、そうか。それは助かった。吾輩は帰らせてもらう。」

穀潰しは驚いた。ここまま帰られては困った。

別に穀潰しは善い人ごときがやってきたところで、後れを取るとは思わなかったが、それにしても薄情ではないかと思った。

「おい。本当に帰るのか？」

「善い人君は化け物だ。おまけにあの人数。もうどうしようもない。」

「情けない奴だぜ。」

「吾輩は命が惜しいのだ。」

「大した命じゃねえだろう。ガスの命なんか。」

「くわばらくわばら。そうだ。害児さんに応援を頼んだらどうだろう？」

「いや・・やつは傍観するみたいだぜ。奴としてもこの街が消えてくれたほうがいいんじゃないか？」

「そんなことはないはずだが・・・（おかしい。害児さんもこの町の人たちとは取引してるはずだが。何か考えがあるのか。）」

「まあ見てろ。言っておくが逃げるんじゃないぞ。」

「いやだ。吾輩は帰る！」

「いいから車出せ。行くぜ。」

「吾輩は見てるだけだからな！」

「分かった。分かった。」

そうして二人は町の前で再び対峙した。

「善い人様。あれは？」

指揮官が善い人に尋ねる。

穀潰しはガスに一言言って車から降り一向に近づいてくる。

明確な敵意に指揮官以下会員たちも警戒態勢をとった。

「・・・。」

善い人は無言で大剣を取り出す。

「あの？善い人様？」

「なになな？」

善い人は目線を穀潰しに見据えたまま答える。

「い、いやその……。なんといいいますかどうなさるおつもりで？」

「善い人は悪人を許さない。」

そういつて駆ける、指揮官たちがあつと驚く間に穀潰しとの間合いを詰める。

そして交差する。

どちらも無傷、穀潰しが衝撃波を放つがそれらは全て善い人の大剣の風圧で  
かき消される。

そして超人的な跳躍。穀潰しに降りかかる山をもくたく一撃。

しかし穀潰しは難なくそれをかわす。

地面に突き刺さる大剣の振動で大地が揺れる。

指揮官たちはその様子を啞然として見ていた。

「お、おい。補佐官。これは一体。」

「わ、わからねえ。だが尋常じゃないってことだけは確かだ。」

勿論指揮官たちには、善い人たちが何をしているのかなんて全く見

えてないし

分かっていないのだが、とんでもないことだというそれだけは分かった。

「お、俺たちはもしかやとんでもない勘違いをしていたんじゃないのか？」

「ふざけるな！」

ボコッ！補佐官は指揮官を殴りつけた。

「なにすんだ！」

当然怒る指揮官。

「情けねえ！俺たちの使命を忘れたのか！」

「はっ。」

そうだ。そうだった。俺たちの使命は世界を平和に導くこと。

「すまねえ。補佐官。行くぜ。」

「おう。」

「全軍突撃だ！善い人様を援護をしろ！」

「わ、わー！」

半乱狂の有様で何やら起こっている中心に突っ込む会員たち。



彼らは生物的に直感していた。自分たちのこの行為は死につながる。

しかし彼らは逃げなかった。なるほど確かに彼らの組織はそれほど大きくない。

だが意地がある。彼らにも意地があるのだ。指揮官が先陣切って突撃している以上突撃するしかない。

指揮官は、初めこそ勇ましく突撃しかけたが、攻撃の中心の一步手前で泣き崩れてしまった。

「ダメだ……。もう無理だ。」

その様子を見て、わめき声をあげつつ崩れていく会員たち。地面に手をつきうつむいている。

善い人はその様子を見て邪魔だなと思ったが、穀潰しとの接戦の最中

どかすこともできない。

やむを得ないので無視をする事に決めた。

穀潰しも何やら目障りな奴らがいると思ったが、善い人の相手をしつつ彼らを

どうにかすることは不可能だった。

「貫け！バリスタ！」

善い人は設置型の弩弓を引き1000本もあるつかという集中矢を穀潰しに浴びせる。

その矢はまるで大砲。地面はぼこぼこになっていく。

その攻撃に穀潰しは焦っていた。

（ちい！戦法を変えやがった！）

これでは穀潰しは、練りこみに集中できない。穀潰しの攻撃の手段としては

練りこんで放つこれ以外ない。

接近戦ならまだ練り込む時間があるが、この矢嵐の中では、とてもじゃないが

攻撃などできないばかりか、いずれ捕まるのは時間の問題。

善い人は馬鹿だが戦いのセンスに関しては、天才的だった。

（仕方ねえ。この前開発した技で！）

穀潰しは訓練など大嫌いだが、善い人を潰すために最近頑張った訓練してたのだ。

「ぐへ！」

巨矢に貫かれる穀潰し。

「ひゃっはっは・・・」

しかしその穀潰しは消えていく。

穀潰しはその間善い人の背後に移動しそして練り込みは完了していた。

「潰れる！サイコグラビドン！」

黒いオーラをまとい、善い人に殴りかかる穀潰し。しかし善い人に接近戦など無意味。

穀潰しの拳を体験で受け流し、流れた体に裏拳をたたき込む善い人。

ドグシャー！穀潰しは、地面に深くめり込む。

終わった！勝負あり！善い人様が勝った！善い人様が勝ったと口ぐち

にわめく会員たち。

しかし善い人は冷めていた。

「勿論復活するんですよ？」

「当たり前だ！この俺は不死身だ！」

ドカーン。爆発と共に再生しつつ立ち上がる穀潰し。

「いいか。善い人。勝った気になってんじゃねえぞ。」

その言葉を聞き善い人はやりと笑う。

「そんなにボコボコにされたいのか！」

「ひゃっはー！潰してやるぜ！善い人！」

「ちよつと待て！」

白熱する二人の間に突如現れる人影。

（ちっ！サイキッカーか。もう嗅ぎつけてきやがった！）

穀潰しの想像通り現れたそいつはサイキッカーだった。

「おい。穀潰しよ。苦戦してるようじゃないか。ここは俺が協力してやる。感謝するんだな！」

出てきたそいつはアキラだった。

アキラは遠目から二人の戦いを見て、穀潰しの力が善い人に通用しているのが

分かり、今こそ復讐の機会と躍り出たのだ。

善い人は唐突なアキラの出現に呆れた。

「誰かと思えば、また君か。」

「うるさい！ 白服！ 俺は確かに一度お前に負けた。だがな、あの時俺は

力のほんの一欠片もだしていなかったんだ。」

「悪いが、アキラ。負け犬は引っ込んでろよ。」

「黙れ。お前にはわかるまい。俺の苦しみが。この白服の卑怯な不意打ちで

ネーム持ちのこの俺が無残な惨敗をしたんだぞ！  
まるで雑魚のように扱われたんだ！ この俺が！」

「はあああ……。」

穀潰しは思いつきため息をついた。アキラのこういう性格は昔からだった。

「勝手にしやがれ。」

「ああ。俺とお前が組めば白服なんか敵じゃないからな。」

「分かったよ。それで、どうする善い人？ こういうことで二対一となった

わけだが。」

「善い人は悪に屈しない！」

「そうかよ！ さすがだな！ 善い人さんよお！ だが残念だったな。これでタイムオーバーだ。」

「潰れる！サイココメント！」

隕石ほどの大きさの圧縮した念力の塊が善い人を捉える。

しかし突如善い人の目の前に巨大な壁が現れ、その攻撃を防ぐ、その間に

善い人は攻撃を回避した。

「やるじゃねえか。」

今の壁がなんなのか穀潰しには判別つかないが、ともあれこれで穀潰しの

最強攻撃も善い人には効かないということが分かった。

穀潰しは、力に限界がないため、不意打ちをしようと思えばいくらでも

善い人を倒せる手段がある。

がそれをするのはフェアじゃないと思ってるため、しなかったのだ。

ある程度時間で練れる念力の限界が先ほどの攻撃だった。あれが防がれた

以上正攻法では、一日以上念力を練らなければ善い人は倒せない。

お互い手づまりだった。善い人が動く様子はまだない。どうしようかと

穀潰しが考えていると、アキラが話しかけてきた。

「穀潰し！」

「なんだ？」

「俺の催眠がきかん！」

「はあ？だからなんだっていうんだ？」

「あいつ人間なのか！俺の催眠が効かないなんて！」

「うるせえな。ちょっと黙ってる。役立たずが。」

穀潰し達の漫才をわって善い人が再び大剣で斬り込む。

（接近戦か。どういうことだ？何か考えがあるのか。）

考えというより善い人は直感で戦うタイプ。穀潰しのようになんて動いてる

わけではない。

「穀潰し！俺の超能力が効かない！」

一生懸命喚くアキラ。最早目障りなので、善い人は突如進路を変更しアキラをけり上げる。

「ぐはあ！」

上空に吹き飛んで地面にたたきつけられるアキラ。

「あいつ。なにしにきたんだ？」

穀潰しがよそ見をしている一瞬の隙に、善い人は構える。

「斬る！無連斬！」

ズザザ。穀潰しの体を滅多切りする善い人。

（再生が間に合わねえ……。俺はここで死ぬのか。ちきしょうアキラめ

……）

だが攻撃はここでストップする。

「わたしの勝ちだね。穀潰し。」

「はっ！馬鹿が。喰らえ！キリコロ！」

念力で作った刃で今度は逆に善い人を滅多切りにする穀潰し。

だが学習能力が足りない。善い人に接近戦など無意味。

簡単に善い人に攻撃をあしらわれ、転ぶ穀潰し。

「今日のところは勘弁してやる！」

ついに穀潰しは降参した。もういろいろと疲れたのだ。

「善い運動になったよ。善いことをするのは気持ちいい。」

「じゃあわたしは帰るね。」



「え？おい待てよ。」

「まだ何か用事でも？」

「いやお前ここの悪人を退治しに来たんだろ。」

善い人はそれを聞くと背を向け歩き出す。

「お、おい！待ちやがれ！」

「悪は去った！善い人は帰る時間だよ。」

「ちつ。ずいぶんいい加減なんだな！」

その言葉を見捨てて善い人は去っていく。

「さてと・・・。」

穀潰しは放心している指揮官の肩をとんと叩く。

「ん？」

「おい。てめえ。詳しく話を聞かせてもらおうじゃねえか。」

「げ、げえー！」

最早夕暮れであった。夕暮れの闇に指揮官のげえーという声がこだました。

## 第十一幕 善人組織の崩壊

穀潰しに勝ったことで目標を達成したと思った善い人はその日は帰って行っただが、よくよく考えてみると、穀潰し以外にも悪人はいた。

それらすべてを改心させなければ善い人とはいえない。

善い人としたことがこんな初歩的なことすら忘れていたのだった！

「なんていうことだ！このわたしとしたことが！」

善い人一生の不覚。善い人がこのような凡ミスをしてしまったのは何か悪いやつがいるに違いなかった。

そのことは善い人を激怒させれるのに十分すぎる事実であった。

「おのれ、ゆるさーん！」

善い人は咆哮し駆けていった。

それを影からニヤニヤと見つめている人物がいた。

言わずもがな害見である。

「ふふふ……。善い人さんも詰めが甘い。それでは私の領域にたどり着くことなどまだまだ不可能ですよ。」

その声にこたえて闇よりうつすらと現れた人影は答えた。

「しかし、首領。よろしいので？」

「ええ。ぬかりはありません。善い人さんも真の王者が誰であるか思い知るでしょう。」

「ふふふ・・なんと私の頭のいいことよ！」

「さすが首領。並々ならぬお手並み。我ら一同関心いたしました。」

「あまり調子の乗らぬことです。わたくしの策があなたたち如きに理解できるとでも？」

「これは手厳しい。首領の英知に我ら如きが及ぶわけもありますまいに。」

「ふふ・・。当然です。」

「ところで例の組織はどうしましょう？」

「例の組織？それが私と何か関係があるとしても？まああれは穀潰しに任せれば何の問題もありません。つまり駒は使いようということです。」

「さすが首領です。」

「さて私は紅茶を楽しむとします。もう下がってよい。」

「ははっ！」

善い人はハエを使い一っ飛びで廃墟街に向かった。

悪人を倒すべく意気揚々と乗り込んだ善い人であったが、そこには意外な光景が繰り広げられていた。

なんと悪人達が、スマイルで町の掃除をしているのではないか。

善い人にとってこれは誤算であつた。

善い人は行き場のない怒りをあらわにし憤怒の表情で、悪人たちに近寄り、ガン見していった。

悪人達は、冷や汗をかきながらほうきを地面にふるい、ごくさりげなく

善い人から遠ざかつて行つた。

善い人は地団駄を踏んだ。善い人ははめられたのだった。

よくよく考えてみれば、これは善人組織とやらが悪いのでなかったか。

善い人は善いことができるということ、彼らの言うことを聞いたのだ。

それがこの結果はどうだ。

確かに穀潰しを退治することはできた。

それに善い人がその場ですぐ悪人を退治できなかった落ち度も認める。

しかしこれはどうだ。あまりにもひどい有様。

「このこの！このわたしが・・・！」

善い人は顔を真っ赤にして頭から湯気が出る勢いであった。

ここまで善い人がこけにされたのは初めてではなかったか。

冷徹に見える善い人の意外な一面であった。

とにかく善人組織を責めるのは後回しにして、今は状況確認だ。

善い人は気力を振り絞って悪人に話しかけた。

「ねえ。悪人さん。悪人さんは悪人だよね？」

「・・・。」

悪人は善い人の問いかけを無視したが、やがて善い人のガン見のプレッシャーに負け口を開いた。

「私は善人です！その証拠に街を掃除しているではありませんか！」

言われてみればごもつとも。しかし善い人はそれでも納得がいかなかった。

「でも悪人顔だよ！あなた悪いやつだね！」

それも確かにごもつとな主張であった。

その男はどう見たとしても俺は悪人だと自己主張している格好に見える。

悪人の命は風前のともしびになった。

ここで反論しなければやれると彼の直感がそれを告げていた。

「俺は悪人じゃねえ！俺は悪人じゃねえ！」

男はほうきを放り出し見苦しく喚きだした。

はつきり言って最悪の選択である。

「うーん・・・。」

善い人は男をじろじろ見ていた。いつの間にかどうなることかと善い人たちを悪人達に取り巻いていた。

善い人は悪人の肩にポンと手を置いた。

「え？」

「分かった。君は善い人だね。これから善いことに励むんだよ。このわたしのように。」

「あ、ああ。分かったぜ！ひゃっはー。俺は善い人だ！」

善い人万歳！と誰かが叫んだ。

それにつられて悪人達は口々に万歳を唱えた。

「善い人ばんざーい！善い人ばんざーい！」

今までの恐怖から解放されたような、魂の咆哮であった。

悲痛な顔がゆがみ、声をからして叫び続けた。

「善い人ばんざーい！善い人ばんざーい！」

善い人は満足げにうなづき、そして考えた。

このような善い人を倒させようとした連中は許しておけん。

このわたしをだましてあまつさえ、同胞たる善人を襲わせようとは  
善い人をも恐れる行為！

決して許しまじ！

善い人は固く決意しふつつと静かなる闘志を燃やした。

昨日の敵は今日の友という言葉があるが、善い人はまさか自分が善人  
組織を潰すはめになるとは思わなかった。

善い人は、ゆつくりとアジトに近づいていく。

「あつ！善い人様！おかえりなさいませ！」

見張りをしていた会員が善い人に話しかけた。

「うるさいー！」

善い人のアップパーカットで会員は伸びた。自業自得だろう。

しかし善い人としても心苦しい。一度は仲間と思った間柄だ。

可能な限り手加減した。

いち早く様子が外の様子がおかしいと感じた目ざとい指揮官は、部下の

報告で善い人の豹変にすぐに気付いた。

「あのやろっ！裏切りやがった！」

「なんだ？どうかしたのか？」

「どうもこうもないぜ！善い人が裏切りやがった！奴は俺らを潰すつもりだ！」

「おいおい。落ち着け。まあ水でも飲め、なんだって彼女が俺たちを潰さないといけない？」

補佐官は、部下に水を持ってこさせ指揮官に持たせようとしたが、指揮官はそのコップを床に投げつけた。

「こんなことしてる状況じゃないってなんでお前にはわからない！」

「落ち着けつて。お前らしくないぜ。」

補佐官はあまりの剣幕にびっくりしたが、指揮官の言うとおりの事態が起こつてるとしたらこんなところで取りみだしては全軍の士気



に関わるものだった。

現に部下たちが何があつたのかとこちらの様子を窺いに来てる。

補佐官は目線でそれらを暗示し、指揮官はそれを見てようやく落ちついた。

「すまん。」

「いや、それよりどうするんだ？」

「司令官に報告しなくては。最早俺の一存で決めれる段階じゃない。」

「司令官には客が来てるな。」

「分かっているが非常事態だ。」

指揮官と補佐官は足早で、指令室へ向かい、ちょうど入れ替わるように  
穀潰しが出てきた。

「うわっ。あぶねえな。」

指揮官たちは穀潰しを無視して、指令室に入ってしまった。

どうして穀潰しがこんなところにいるかというと、善い人たちとの戦い終わった後、指揮官たちにアジトに案内させどうして町を襲うのか抗議しにいったのだ。

最も穀潰しは最初はけんか腰であつたが、例によつて竜頭蛇尾の勢いなので、司令官の冷静な分析にどんどん元気がなくなり、一方的にまるめこまれ、力なくもういいと泣き寝入りし、指令室から去つていく

ところであつた。

「なんだ。あいつら。無視しやがつて。ちつ胸糞悪いぜ！  
しかしなんだつてんだろうな。尋常じゃない気配だつたが。」

穀潰しが呟いていると、指令室に入つていった二人が血相変えて穀潰しに詰め寄つた。

「おい！司令官をどこに隠した！」

「はあ？」

どうやら何か勘違いしてるらしい。

「知らねえよ。俺は別にお前のボスの世話係じゃねえだぜ？」

「とぼけるな！お前が隠してるのは分かっているんだ！」

穀潰しはやれやれと両手を広げた。

「なにをしている？」

「馬鹿なのかお前たちは。俺のどこに人間一人隠すスペースがある  
つて

いうんだ？」

「馬鹿はお前だ！そんなものいくらでも方法がある。」

「水かけ論だな。埒が明かねえぜ。なんならここでやっても俺は構わないんだが？」

穀潰しからしたら司令官にへこまされた恨みを晴らすいいチャンスだった。

しかし、指揮官たちはそんなやつあたりされたらたまらない。

「い、いや俺たちが悪かった。確かにお前が隠したわけじゃなさそうだ。それじゃなぜ……。あつ！」

「どうした？何かわかったのか？」

指揮官と補佐官は二人で話を始めたが興味を覚えた穀潰しはこのまま立ち聞きさせてもらうことにした。

「ちくしょう！ちくしょう！」

指揮官は床をどんどん叩いた。

「な、なんだ？」

補佐官は指揮官が狂ったのかと思った。

「あの野郎！最初から俺たちを捨て駒にするつもりだったんだ！」

「なに？司令官がか？まさかそんな……。」

「じゃあこの状況をどう説明する？あいつが俺たちを見捨てて逃げた  
とは思えないだろうが！」

穀潰しは、黙ってもいられず指揮官の胸倉をグイッとつかみ立ち上  
がら  
せた。

「おい。どういふことか説明しやがれ。」

「あ、ああ・・・。」

穀潰しは指揮官を突き飛ばす。

「ここに善い人が攻め込んできてるんだ！俺たちはもう終わりだ！」

「なんだと？どういふことだ？」

指揮官は自分の大まかな推理を穀潰しに話した。

つまり善い人は、何らかの理由で気まぐれにここを潰そうとしており  
それを何らかの方法でいち早く知った司令官は、ここから逃げ出した  
のだと。

それを聞いて穀潰しはひゃひゃひゃと笑いだした。

「ざまあねえな！おい！すかつとしたぜ！こんな組織潰れちまえ！」

「そ、そんな！」

穀潰しからしたら散々煮え湯を飲まされたのだ。

こんなところ早くつぶれてしまえと思った。

しかし、指揮官の頭脳は冴えわたる。ここで乾坤一擲の大ばくちに出た。

「穀潰しさん！いや穀潰し様！私たちを救ってください！」

指揮官は土下座した。

なんてことはない。前と同じ手である泣き落としたった。

「お、おい何やってるんだ？指揮官。」

「うるさい！お前も早く土下座しろ！」

「あ、ああ。」

補佐官もそれに倣う。

「お、おいやめておれ！そんなことされたって俺にだってどうにもならねえよ！」

「いや貴方様なら私どもの窮地を救えるはずです！あの善い人と対等以上に渡り合える穀潰し様なら！」

「おい。いい加減にしろ。てめえのけつは手前で拭け。なんだって俺になすりつけようとしやがる。」

「お話はごもつともでありますが、私たちには後がないのです。どうかここは一つ。どうか！どうか！」

補佐官はその指揮官の必死な様子を見てぽかーんをしてる。

穀潰しはすさまじく迷惑そうだ。

かといって元々気があまり強くなく虚勢ばかり張ってる穀潰しは、ここで彼らを見捨てて帰るという気にはとてもならず、しょうがねえ助けてやるつかという気にすらこの時点になっていた。

「分かったよ。仕方ねえ・・・。」

「え？本当ですか！ありがとうございます！」

「けっ。うるせえよ。」

割に合わない話だった。内心指揮官が穀潰しをただ利用しようとしてる

だけということなど、馬鹿でもわかる。

何が何やら分からぬうちに話がまとまってしまい補佐官はあっけにとられた。

「ちっ。俺のお人よしにも参ったぜ！」

穀潰しはぶつくさ言いながら、その場を後にし善い人の元へ向かった。

「あああの人は神様だ。」

その場に残された指揮官はつぶやいた。

「なにがどうなったんだ？」

補佐官は尋ねる。

「つまり奇跡が起きたってことだ。」

「そうか……。俺たちは何をすればいい？」

「速やかに部下たちをここから脱出させる。」

「分かった。司令官はどうする？」

「あいつのことは全てが終わってから考えよう……。」

## 第十二幕 二人の戦い

穀潰しは気ののらぬまま善い人の前に立ちふさがった。

とはいえ、とはいえだ。善い人と戦うとなった場合の穀潰しは通常のそれとは異なる。

「穀潰し。また君か。」

「言っておくがあれで勝った気になってんじゃねえぞ。アキラが邪魔しなければ俺が勝ってたんだからな！」

「君も懲りないね。穀潰しがわたしに勝てるわけないじゃないか。」

「本当にそう思うか？おめでてえな。」

穀潰しは善い人に勝とうとすればいくらでも方法はある。

いくらでもというか、念力を練り込みまくって町ごと潰すなどの方法なのだが。

そういうことができる分、穀潰しは心情的に余裕があった。

一方善い人は、なぜ今頃また穀潰しが出てきたのが疑問であったが、穀潰しをぼこぼこにするのに理由は要らなかった。

これは常人には理解できないかもしれない。

彼女と彼にとってこれは信頼なのだ。



つまり全力を出して戦っても一方の存在が消えることがないという確信。

自分が手を貸さなくてもその存在が維持できるであろうという確信。

なぜ二人は戦うのか。それは理屈ではないが理屈で言うとしたら

「信頼」そのために戦う。

「君はもうわたしには勝てないよ。」

善い人はバリスタを設置する。

「ちっ。」

穀潰しはそれを見て明らかに焦った。この前の二の舞だ。

つまり、矢による波状攻撃。それをされたら穀潰しは念力が練り込めず

防戦一方の持久戦になってしまう。

それは避けないといけない。

穀潰しのパターンとして、戦闘前の会話は十分すぎる意味がある。

その時間は穀潰しにとって先頭の一部であり溜めの時間であった。

「残念だったな。善い人。俺はすでに読んでいる。」

「潰れる。サイコグラウンド！」

地面の一点を中心に柱上の念力が展開する。

善い人とバリスタはそれにもろに巻き込まれ、上空へ吹き飛ばされる。

（いまだ！）

善い人の武器は大抵粗悪品だが、弓系の武器だけは違う。

おそらくバリスタは一つしかないだろう。

つまり壊せば今回の戦いではもう使えないということだ。

善い人が直前でサイコグランドの衝撃を抑えたため、バリスタの損傷はさほど激しくない。

穀潰しは善い人の間合いに入る危険性は重々承知のことながら、あえて懷に飛び込む。

「喰らえ！キリコロ！」

「斬る！抜き返し！」

右手で念力の刃を作り、バリスタを破壊、左手で、善い人の斬撃を受ける。

念力で強化した腕だが、数秒も持たずとれてしまう。

善い人の詰めは甘くない。そこに勝機を見出し、たたみかける。

「無駄だ！ひゃっはー！」

しかし穀潰しは腕を捨てるのは想定内。慌てず騒がず冷静に対処する。

善い人の攻撃をテレポートで回避して、衝撃波を放ち防御させる。

善い人が間合いを詰めれば穀潰しは引く。

接近戦だとその繰り返しになる。

どちらが有利かといえば善い人に圧倒的に有利だ。

穀潰しは、正直こんな正面切って戦うのに不向きサイキッカーなのだが、闇打ちは彼のプライドが許さない。

善い人と穀潰しが不毛な争いをしている最中に、うまつまと会員たちは  
アジトから逃げ出していた。

「よし・・・全員脱出できた。後はこの自爆スイッチを押すだけだ。」

「おい。指揮官。本当にやるのか？」

「俺だってこんなことはしたくない。だがこれは同志穀潰しの尊い犠牲なんだ！」

「え？あいつ同志だったか？」

「馬鹿野郎！」

ボコッ！指揮官は大きく振りかぶり、補佐官の頬を殴った。

「なにしゃがる！」

補佐官は当然抗議した。しかし指揮官はさらに血相変えて補佐官を叱責する。

「穀潰しは同志だ！貴様にはなぜそれが分からん！」

「だけどよ．．。」

「俺も心苦しい！だが！これでみんなが救われるんだ！一人はみんなのため！みんなは一人のためだ！分かったな？」

「あ、ああ．．。」

「部下たちも聞いたな！穀潰しの英雄的行為を忘れるな！」

「お、おおー！」

部下たちはお互い顔を見合わせた後とってつけたようにわいた。

指揮官は大きくうなずきスイッチを押す。どっかーんがらとアジトは音を立てて崩れる。

指揮官はその様子感慨深く見ていた。

補佐官は指揮官の肩にポンと手を置く。

「0からやり直しだな。」

「ああだが、まだ一つやることもある。けじめはつけないとな・・・」

「司令官か。しかし場所が分からない。」

「なに。奴の行きそうなところは見当がつく。俺たちを裏切った報いを

受けさせないとな。」

指揮官たちは、格好いいことをしたという感じで去って行ったが、こんな

ことをされては中にいる善い人たちはたまらない。

ガラガラと崩れゆく、建物。善い人はその破片を踏み台にしたり、野生の勘

でよけたりする。

穀潰しは拙いメトリーで、破片の落ちる先を読み、善い人の攻撃の盾にしたりして利用する。

この状況をいかに利用するかが勝負の行く末を決めるだろう。

無論建物が壊れようと戦いをやめる二人ではない。

それどころかこんな状況なのに何の気にも留めない。

（こいつ！前より動きがスムーズになってやがる！）

穀潰しは慌てた。善い人は悪状況でこそ本領を発揮する。

穀潰しをしては一瞬でも善い人の足を止めたい。

そしてその勝機はきた。つまり善い人と穀潰しの間に割って入る破片が落ちてきたのだ。

こんなチャンスは滅多にない。

善い人からしたら邪魔な障害物だが距離をとりたい穀潰しにとって  
は、  
幸運だった。

善い人の敗因があったとしたら、それはこのときまでに強引に穀潰しに  
しに  
攻撃を当てる努力をしなかったことだ。

穀潰しは破片に衝撃波を当て、粉々に砕き、善い人の動きに制限を  
かける。

そのうちに大きく距離をとり、取れた左手を元に戻し、念力を練り  
込む。

善い人は、穀潰しのように怪物じみた耐久力があるわけではない。

だから破片を無視して突っ込むなどということは難しい。

どうしても動作が遅れる。

穀潰しはそこをついたのだ。

そして、決着をつける。

「潰れる！ランダムスフィア！」

球状の多量の念力の塊が善い人を包む。

穀潰しはその様を見届けていたが、やがて大きな破片に押しつぶされ意識がなくなった。

穀潰しが気付いた時には、夜だった。

どうやら眠っていたらしい。

それとなく善い人の気配を探ったが、どうやらないようだった。

死んだのか。いや、それはないだろう。

あの状況で助かる術はいくら善い人といえどなさそうではあるが、穀潰しはその可能性を無視した。

穀潰しはどうやら勝負はまた次回に持ち越しらしいと考えた。

穀潰しは早く決着をつけたいとは思わなかった。長くゆっくりと楽しみたい。

穀潰しは去った。しかし善い人はまだそこに埋まっていたのだ。

死んだのかといえば死んでいる。心臓は動いてない。

生きているといえは生きている。善い人は埋まりながらどうやって善いことを

しようか考えていた。

穀潰しとの勝負のことは忘れている。

ただ善いことをすることだけを考えていた。

ずっとずっと考えていた。



### 第十三幕 善人協会の刺客

この日、善い人は久しぶりにドラゴンを訪ねていった。

ドラゴンは木製の家に住んでおり、それはなかなか大きく、しかし彼の家の

近くに他の民家は見当たらなかった。

善い人はドラゴンがまだいじめられていると思いこみ、悲しい思いだった。

とにかく善い人がドラゴンの家に入ってみると、ドラゴンは寝そべってラジオ

を聞いている最中だったが、善い人に気づくと、体を起こし、自然な威厳を作って対応した。

「何をしに来た。人間よ。」

「遊びに来たよ。」

「そうか。ゆっくりしていけ。」

善い人はドラゴンの尻尾に腰かけ、悲しそうな顔をしている。

「どうした？」

「ドラゴンさんせっかく街中に引越してきたのに、お友達ができな

ただね。」

「うむ。なかなか芳しくない。」

ドラゴンは分かっているのだから面倒だという顔をした。

「しかし、以前と比べ町のものも我によくしてくれている。」

ドラゴンは、氣遣う善い人を逆に元気づけた。

「きつと誰か悪人が・・・。」

善い人が義憤を発しようとするのとドラゴンはそれを遮った。

「いや待て。そうではないのだ。我は今の生活に満足している。最近はお供たちもよく遊びに来るのだ。

我もイメージアップのために、町に貢献している。少しずつだが理解されているのだ。」

ドラゴンは、身振り手振りを交えて彼なりに精いっぱいやっている  
と善い人にアピールをした。

前はうまくいったが、今回またうまくいくとは限らない。

善い人がドラゴンのためと称して、町の人をぶちのめしては、ドラ  
ゴンの  
今までの苦勞がばーになる。

ドラゴンは善い人に重々感謝してるが、これ以上余計なことをされ

ないために

善い人を体よく追い払った。

追い払われた善い人は、公園で遊んでいた顔なじみの子供たちを連れてドラ

ゴンの家を再度訪問。

これにはドラゴンも苦笑いするしかなかったが、まんざらでもなかった。

善い人はドラゴンに別れを告げ、外に出てみると、不審な二人組が善い人のほうを見ながら世間話をしていた。

「なあ、知ってるか。また義賊のアッチラ様がやってくれたんだぜ！」

「ああ！あの人こそ最高の善い人だよな！」

「そうだ！あの人おかげで俺たちも希望が持てるっていうもんよ。つまりアッチラ様は善い人で英雄ってことだな！」

（ふーん。義賊か。）

善い人が、早々に去ろうとすると、なおも通せんぼして二人は世間話を

善い人に聞かせるので、善い人はうんざりした。

「どいてくれるかな？」

「あ、ああ……。なんだあんだ。いたのか。すまねえな。」

案外素直に、二人組はどき善い人のほうを見ながらニヤニヤ笑った。

善い人は不愉快であつたが、我慢することにした。

善い人が、家に帰ってみると見知らぬ男が座っていた。

「よう、今帰つたのか。まあ座れ。」

善い人は言われた通り座る。

「俺か？俺は義賊のアッチラってんだ。この辺りじゃちつとは名の知れた

英雄なんだぜ！」

「ふーん。ものすごくどうでもいい。」

「ふん！内心羨ましいと思つてるんだろ？分かつてるんだぜ。」

「だつて泥棒でしょ？害児さんがそういつてたよ。」

「害児だつて？馬鹿な奴だ。何も知らないんだな。」

「知つてるよ。」

「いいや知らないな。お前は何も知らないんだ。自分自身についてでさえな。」

まあ待て。そうあわてるな。順を追つて教えてやるよ。」

「なんだか茶番だなあ・・・。」

「まず俺は、世界を平和に導く会、通称善人協会の四天王の一人、義賊の

アッチラっていうんだ。

どうやらお前は司令官ともめたようだが、これは全国各地にいる善人協会

を敵に回したってことになるんだぜ。」

「敵か。」

「ああだが、ちょっと待て。まず座れ。」

善い人が立ち上がって、剣を構えようとするのをアッチラは素早くけん制する。

「敵っていうのはそういうことじゃない。いいか。このままじゃお前は

ただの偽善者だ。

そこで俺たちがお前をまっとうな善い人にしてやろうと努力してやろう

ってわけだ。」

「このわたしが善い人ではないと?」

「ああ少なくとも俺よりはそうだな。この義賊アッチラ様こそが真の善人だ。」

「ならどちらが真の善人が勝負してもいいよ。」

「勝負だと？おふざけになるんじゃないよ。お前はただ暴力振るうだけ

だろうが。

いやそれ自体は悪くないんだがな。

どうせならこの世界をこんな滅茶苦茶にした奴に対して力を振ってくれ。

俺をぶっ飛ばしたところでただの弱い者いじめだぜ。」

「・・・。」

「納得してくれたようだな。まずお前に今の世界の状況を教えてやる。

1年前に、突如世界は崩壊した。

様々な憶測が広まったが、一般的には核によるものだろうといわれている。

だがこれは変じゃねえか？」

「うーん・・・。」

「変だろ。核は全部放棄されたはずで、それは衛生からも確認されたはずだ。

人類は全てこれから変わるんだと決意したばかりだっただろ。

そう決意した瞬間このさまだ。それに核が爆発にしたにしては、妙なことが

ありすぎる。」

「さっきから何を言ってるのか分からないから、漫画読んでいい？」

「ダメだ。いいか。俺たちは調べた。徹底的にな。それで分かったことは、

世界崩壊には、サイキック組織のリーダーテンマがかなり関わっているって

ことだ。

おそらく奴が何かしたに違いない。つまり善い人。お前の敵はテンマ・トキト

だってことだ。」

「ふーん。」

「そしてお前は神託によって選ばれた人間。世界崩壊の日を境にしてお前は死に、今のお前がいる。」

つまり分かっているだろう。善い人。お前はすでに死んでいるんだ。

「

「そーか。」

「そう肉体的には死んでいる。それでもなおお前が生きているのは、神

の意志があるからこそだ。」

お前の使命は善いことをする事。そうだろう?」

「そうだよ。」

「今のお前がなんて言われてるのか知っているのか? 魔人の番犬、通称

白服。つまりお前は悪人といわれているんだ。

害兇の手下になりさがってるおかげでな!」

「へえすごいね。」

善い人はもう真面目に聞いてない。寝っ転がって漫画を読みながら聞いている。

それでも構わずアツチラは話しかける。

「そこでだ。いいか。害児の奴はどぎたねえ真似しやがる。あくどく稼いで

やがるんだ。つまり俺の出番ってわけだ。

お前が奴の気を引いているうちに俺は奴のお金をくすねてやる。どうだ？いい考えだろう？

俺は自分の天才ぶりに惚れ惚れするぜ。」

「泥棒は悪いことだよ。」

善い人は自分の書いた漫画で、泥棒が殴られているシーンを見せる。

その泥棒はなぜかアツチラと酷似していた。

「これは正義の泥棒だ。なぜなら奴から奪った金は貧しいやつに配るんだからな！」

この時代別にそう貧しいものはない。世界は崩壊したが、みんなそれなり

の秩序を持って暮らしていた。

むしろ貧富の差は崩壊前と比べても、全然ない。



確かに環境は破壊されたが、人間の心はすでにこの時代、上の次元にあった。

一部の地域を除いてだが・・・。

はつきり言ってアツチラの行いは有難迷惑だが、善人というものは大体がこうなのだからやりきれない。

「いいか。これは俺とお前の勝負だ。どっちが善いことをするかつてな。」

しくじったほうが負けだ。」

「そうだね・・・。」

善い人はそこで初めて真剣な表情をした。

「君の言う善いことというのが、どういふものなのか見てみたいな。私も興味がある。」

「協力してくれるようだな。」

善い人たちは、害児の家を目指した。

善い人が害児の家に行くと、害児は客室で待っていた。

「やあ、善い人さん。いい天気ですね。」

害児が善い人に手を振っている。

「害児さん。勝負しようか。」

害児はそれを聞くと、車椅子から転げ落ち、持っていたカップを落として

しまった。

醜態狼狽。自分が転倒したということに気付いた害児は大声で早く助けるおとわめいた。

善い人が、害児を車椅子に戻してあげるとようやく害児は平静を取り戻した。

「勝負・・・ふふふ、善い人さん。この王者たる私と勝負ですって？」

今頃恰好つけているが、もう台無しだ。

「うん。」

「まあ・・・いいでしょう。稽古つけてあげますよ。善い人さん。ついてきてください。」

二人はエレベーターにのり、地下に向かう。

「こんなこともあるつかと地下を用意しておきました。」

「ガスさんと同じだね。」

「はっはっは。あんなゴミ虫と一緒にしないでいただきたい。」

ガタンと音を立てエレベーターのドアが開く。

「え？」

さすがの善い人も驚いた。ここはまるで外の世界。桃源郷のような楽園。

善い人は害児を振り返る。

害児は眼鏡をくいつと上にあげ解説した。

「不思議でしょう？ふふふ・・・。」

「すごいね。」

「これは私が作ったものじゃありません。地下を掘っていたらこの場所にぶつかったのです。」

私にもはつきり言ってこの場所のことはよく分かりません。でもまあさしあたって不要でしょう。」

「害児さん。」

「いや実をいえば、貴方とは確かに戦ってみたかった。私も昔は戦いを

商売にしてみましたからね。

足を失って以来、随分臆病になったように思えます。」

善い人は大剣を取り出した。戦いとなるといつも疾風のような善い人だが、  
今はまるで水のような静けさを漂わせている。

善い人は自分が害児と戦いたいのがよく分からなかった。

「善い人さん。私には善だとか悪なんて分かりませんよ。ただね。私は自分がしたいように生きている。だから私はここにいます。」

善い人は体剣を構えた。

「勝負しましょうか。善い人さん。」

害児は、車椅子とは思えないスピードで、善い人の上をとり銃を放つ。

遅い……。善い人には止まって見えた。早々に決着をつけるべく害児の  
車椅子を狙う。

確かに斬ったはずであったが、害児は善い人の後方に回り込み、車椅子から  
ミサイルを放っていた。

完全に直撃コースだが身をひねって大剣で、ミサイルを受け流す。  
受け流そうとした瞬間ミサイルが爆発する。

善い人が受け流そうとしているミサイルめがけて、高速射撃を行い、  
爆発

させた。

善い人の技も害児の技もまさに神技。

爆発をもろに受けダメージを受けた善い人であったが、体を回転させる

ことで衝撃の大部分を逃がしたらしい。

害児は、そのすきに上空に浮かぶ。

（エアレイド。）

害児は、地上にいる善い人目掛けて、ダイナマイトなどの爆弾を落とす。  
く。

勿論善い人が逃げられないように、計算して落としている。

やがて、地上から善い人の姿が消えた。

（善い人さん。地下に潜ったな。）

上にはいない以上地下に潜ってるとしか思えない。

しかし、害児は気を読むのだが、善い人の気は分かりにくい。

害児は、地上を燃やし始めた。

「善い人さん。早く出てこないと蒸し焼きになってしまいますよ！」

善い人は寒がりなので、このくらいの温度はちょうどいい。

豪炎の中、ゆつくりと地下から這い出る善い人。

「あんな燃えてるのに、どうして？」

善い人は服すら燃えないのだ。これは異常だ。

害児は、しかしかつては軍人だった。異常事態にはある程度慣れている。

ただ勝負という経験はあまりなかった。

勝負というよりは彼女にとって戦いは「狩り」だった。

善い人の周りに集まる炎。

（炎が善い人さんの気に呼応しているのか。）

害児目掛けて、収束した炎の束が炸裂し、それとともに善い人が飛ぶ。

善い人と違い、害児はこんな炎まともに受けたらたまらない。

しかも空中では、技が若干落ちる。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

善い人の剛剣が害児目掛けて振り落とされる。手加減はない。

害児は万事休す。結局車椅子を身代わりにして、自分は地上へ脱出した。

車椅子は爆発したが、善い人にダメージはないだろう。

「善い人さん。こうなったらもう長くはありません。」

それはそうだ。害児の武器の車椅子はもうないのだから。

しかし、善い人の表情は厳しさを増す。

「2分持ちます。この義足は。それで終わりです。」

害児は杖から刀を取り出す。

白く光るその刃が、それが名刀だと告げていた。

「また「朝日」を使うことがあるとは・・・。」

おそらく軍人時代の愛刀だろう。2分しかないといっておきながら、  
感

慨深く刀を見つめている。

そんなことをしてる間に1分がたった。

その間善い人は何をしていたか。動かなかった。

もう勝負はついたのだ。

善い人は、害児の準備が完了したと確認し、一撃を放つ。

害児も善い人との間合いを詰め、一撃を放つ。

交差する武器。善い人の強力無比な一撃を害児は受け流す。

勿論善い人は、それを許さない。

受け流させぬように微妙な力のコントロールを加える。

善い人が力の流れを把握し、瞬時の攻防を繰り広げているとき、それと

は違う力の波を感じた。

目の前の害児が揺れる。

善い人にはそれが三人いるように見えた。

そして次の瞬間善い人は武器を失い、なぎ倒されていた。

何が起こったのかよくわからない。

「2分です。」

立ち尽くす害児を善い人がおぶり、二人は何も言わず、階段を上がつて

いった。

エレベーターは壊れて使えなかったらしい。

そして、うまうまと善い人と害児を欺いたアッチラは、大金を奪う



べく

金庫へと向かっていた。

速さだけとれば善い人並で、しかも持久性があるアッチラは隠密に優れてる。

さすがは義賊といったところ。

だが金庫の前にはすでにガスがいた。

「邪魔だ。」

アッチラはナイフを投げるが、ガスの鎧に跳ね返される。

「義賊のアッチラだな？」

「お前に構ってる暇はない。」

アッチラは刃物が仕込んである足でガスを蹴飛ばすが、重装備なので意味がない。

アッチラは慌てて距離をとる。

「吾輩は重装備だから意味がない。吾輩はここで害児さんに恩を売ることだ。」

商売を有利にしたいのだ。」

「それが俺と何の関係がある？」

「無駄だよ。吾輩に毒はきかん。」

「ちつ。」

アツチラは風上をとり毒をまいていたが、あっさりガスに看破される。

「義賊君。足元を見たらいい。」

「はつたりにのるか。」

「吾輩は親切で忠告したのだが仕方ないな。」

ガスは、手から炎を取り出す。

「サイキッカーか。それも発火能力とは珍しい。」

「発火能力？何を言っているんだ。そんなものは迷信である。

吾輩のこれはただの火炎放射機。」

「・・・それをどうする？」

アツチラは会話しつつ考えている。自分の攻撃はガスに通らない。

どうしたらいいのか。

アツチラは、素早さこそ善い人なみだが、攻撃能力がほとんどない。

毒が効かないとなると致命的なのだ。勿論刃物による攻撃も重装備の前

では意味がない。

だがそんなこと考えるのは最早無意味だった。

「さよならだ。義賊君。」

ガスが地面に炎を落とすと、その炎は、地面を伝わり、アッチラの足元で爆発する。

（火薬か！）

アッチラはうかつであった。目の前の商人風の男が、まさか自分のような手を使うなんて。

アッチラが炎を伝わりを確認した後、危険を察知しその場をすぐさま離脱したが、そこですぐに倒れてしまった。

（しまった！風下か！）

「死にはしない。しびれるだけだよ。」

アッチラは自分の無様を呪った。これでは善い人との善いこと勝負に負けたも同然。

敗者は去るのみ、アッチラは、煙球を放ち、その場から脱出した。

アッチラもガス同様毒に対する耐性はつけている。

ガスは、それも計算済み、暗視ゴーグルを素早く装備しており、アツチラには発信機をつけた。

アツチラはこんな時代に、一商人が発信機のような精巧なものを持っているとは思わなかったからここでも不覚をとった。

「ぼろい仕事である。」

ガスは、にやけていた。

「貴様！ここでなにをしている！」

騒ぎを聞きつけた黒服たちがやってくる。

「よく聞いてくれたのだ！吾輩は害児さんを救った英雄！」

「うるさい！貴様、こっちにきてもらう！」

黒服は複数人でガスを抱え込み、ひきずる。

「離せー！離せー！吾輩は英雄！吾輩は客であるぞ！」

「黙れ！」

黒服はこん棒でガスの頭をたたき、ガスのヘルメットはへこんだ。

「吾輩は客だ！客なのだ！」

ドカッ。黒服たちに蹴飛ばされ客室に放り込まれると、ガスの目の前に害児がいた。

「それであなただけで何をしています?。」

「よくぞ聞いてくれた。害児さん!これは全て吾輩の善意からでたことで、

吾輩は害児さんの命の恩人なのだ。」

その言葉を聞き、害児はこめかみをぴくぴくさせた。

「おい!何してる!早くこのゴミ虫をたたきだせ!不愉快だ!」

ガスは散々袋叩きにされ、追い出された。

さすがの温厚なガスも、おのれ・・・と感じないわけにはいかなかったが、そこはぐつと我慢した。

一方害児も善い人から詳しい事情を聴き、ガスの出すぎた真似と恩着せがましい行動に殺意を持った。

「ゴミ虫の分際で王者たる私の助けになろうなどと身の程知らずが・・。」

どう考えても筋違いの恨みであるが、害児とガスの衝突はどうやら避け

れそうもなくなりそうな気配となった。

そしてアッチラも義賊のプライドにかけてこのままでは済まさないだろう。

害児とガスの確執。 善い人誕生の真実と世界崩壊の真相。

そしてサイキック組織の謎と善人協会の策動。

善い人にとってもものすごくどうでもいいことが、動きだそうとしていた。

## 第十四幕 ゴミ虫物語（前書き）

こんにちは。

ゲームのほうを更新できたということなので、もしよかったら遊びに行っておいてください。

## 第十四幕 ゴミ虫物語

さしもガスの、前回の事件での害児の所業には腹が立っていた。

がそこはガス。一流の商人であるので、ひたすら感情を押し殺し、あくる日、早速害児との商談に出かけた。

ガス来る。の報に害児はあきれる思いであつた。

なるほど確かに今日は、ガスから商品を受け取る日だ。

だからと言って昨日散々な目にあわせたその足で、次の日すぐにまた顔を出すのは一体どういう料簡なのだろう。

害児の理屈は滅茶苦茶に思えるかもしれないが、害児からしたらガスの何でもあり、の媚びた商法が気に入らなかった。

例えば何も知らない善い人から、ただ同然で貴重な発掘品を掠めとることなのだ。

プライドの高い害児にはとても真似できぬことであつた。

害児は自分が誇り高いので、他者にもそれを強要し、そういう人物を彼女は好んでいた。

しかしそれはお互い様だ。はっきり言ってガスも害児の暴力まがいの無法の商法は嫌いであつた。

ガスが害児に媚を売ってるのは嫌々だ。



ガスは元々、ある島国の剣士である程度上流階級の人間だ。

誇りが無いわけではない。

害児に頭を下げるのは、商人として当然のことなのだ。

だがガスが害児に気にいられようとすればするほど、害児はガスに対し面白くない感情が湧きあがる。

害児からしたら、昨日ガスの面目を潰したのだから、今日の取引は中止

というのが常識であった。

ガスからしたら、例え何が起ころうとも一度契約したならばその通り実行するのが常識であった。

ともあれ、こうなった以上仕方ない。

害児はしぶしぶガスに対応することにした。

客室ではすでにガスが揉み手をして待っていた。

「へへっ。害児さん。今日もいい天気ですな。」

相変わらずの媚びように害児は反吐が出る思いであった。

「ふんっ！昨日の今日でよくもおめおめこれたものですね！さあ、なにをしてるんです。みなさん！早くこのゴミ虫を追い返すのです！」

その声に負けないくらい大声でガスが抵抗した。

「しかし害児さん！今日は取引の約束のはずですよ！」

「取引？何を世迷い事を……。そんなに金もうけが大切ですか？ええ？」

「なにをおっしゃるか！お金はすでにいただいている。吾輩は商品を置いていきますぞ！」

ガスは、積荷を害児の家に運び込もうとする。

「なに？貴様言っていることと悪いことあるぞ！」

その声を無視して、玄関先に荷物を下ろし始めるガス。

「目障りだ！それ！そのゴミ虫をたたき出せ！」

二回目の号令で、害児の部下はガスとその荷物を外に放り投げた。

またもや追い出されたガスは、苦渋の表情だ。

（うぬ！害児め……。）

ガスはしばらく、考え込んでいたが、考えてみれば今回の自分の対応は実にまずかったと思いなおした。

今後の害児との交渉に支障が出るのではないかとガスは思った。

確かにもう契約金はもらっている。

しかし、この町で暮らす以上害児の機嫌を損ねるのはまずかった。

ではここからでていくか。ガスとしてはそれも避けたかった。

ここは一種の自治区であり、商売をする者にとっては何の規制もなく天国であった。

ここ以外で商売しようとするれば、それは今なお戦争しているある地域にいくのがベストかもしれないが、ガスは死の商人などごめんだった。

ガスは荷物をまとめ、車に積み込み、今日のところは店に帰ることにした。

「この町に来るまで色々あったことではあるが・・・。」

ガスは昔、剣士として修行していたこと、さらにその地を抜けだし、追手を振り払いここまでできたこと。

などを思い出していた。

この土地は、流れ者にとって便利だった。この地は害児が立て起こした

新しい国みたいなものだ。

追手もそうやすやすとここで騒動を起こすわけにはいかない。

ガスは店について考えた。考えたが結局陳腐な手しか思いつかな

かった。

ガスが考えたことは、善い人に仲裁してもらおうということだった。勿論ただでなどという虫のいい話はない。

ガスは自分が今まで上げた利益の9割を害児に献上することで、関係を回復してもらおうと思った。

とはいえガスは、得た金は全部使ってしまった。

それは地下の建設や研究費などで消えてしまうのだ。

なのでガスは、家の権利書と車で手を打ってもらおうと考えた。

別にガスにとって家など飾りだ。そんなものまた作ればいいだけ。

ここで害児との交渉が途絶えるほうがはるかに怖かった。

「穀潰し。」

「なんだ？」

ここはすでに車の上ではない。荷物を下ろし終え、ガスは自分の家に帰ってきたのだ。

帰ってくると、そこにはすでに穀潰しがいたので、話し相手になることにしたのだ。

「吾輩この家を手放すことにした。」

「ああ？引つ越すのか？」

「いや・・・この家は譲るのだ。プレオもだ。」

「車も手放すのかよ。頭でも打ったのか？」

穀潰しは何気なく聞いてたが、プレオを譲ると聞いて本気になって乗り出した。

「それともなんかあったのか？」

「害児さんのことだ。」

ガスは今までの事件のあらましを穀潰しに語った。

「なんてやつだ！害児のやろう！」

「吾輩の対応もまずかったのだ。」

「とはいえはつきり言って俺に出来ることはなさそうだぜ。商売のことなんかよくわからねえからな。」

「なに？吾輩を見捨てるのか？いつも穀潰しを助けている吾輩を？」

「い、いや。ガスがそこまで決意している以上俺が出る幕なんかあるのか？」

そりゃ確かに害児のやつはむかつくぜ。

でも仮にだ。俺が害児の奴をぶっ飛ばすとしてどうする？意味がないだろ？違うか？」

確かに、そんなことでは解決するわけもない。いや実際にはそれが実現すれば、おそらく害児とガスの関係は修復するだろうが、庶民根性が染みついている二人にはそんなことは考えも及ばないことだった。

「それはそうなのだが・・・」

「俺だって助けてやりたいのはやまやまだぜ。

でもな。人には得意不得意つてもんがあるんだぜ。

悪いが今回は俺は役に立ちそうにねえや。」

今回はどうかお前が役に立ったことがあるのかと突っ込みの一つもいれたくなるが、なるほど確かに穀潰しのいうことはいつになく道理であった。

ガスはさっきまでは格好よく決心したのではあったが、こうまで穀潰しにつき放されると、その決心もなぜか萎えてきた。

結局ガスは穀潰しに止められることを当てにしていたのだろう。

「そうでもないぞ。」

「あ？」

「考えても見る。お前はサイキッカーじゃないか。」

「そついやそうだったがそれが何か関係あるのか？」

「つまり催眠術である!」

「おいおい。アキラじゃねえんだから、俺にそんなことできねえよ。」

「サイキッカーなのに催眠術ができないのか？」

「悪いいな。まっ諦めるこつた。」

「いや吾輩は諦めん！」

ガスは地下から何やらごそそと持ってきた。

見れば催眠術師がよく使う、ほーらこれを見てください。貴方はだんだん眠くなるうーとかやるあれであつた。

「これはかなり高いサイキック兵器で、これがあれば吾輩でも催眠術が使えるのだ。」

つまり吾輩もサイキッカーである！」

「はあ？」

「これが使えれば吾輩もサイキック組織に入ってナンバーズになれるということなのだ。」

「お前が思うようないいものじゃないと思うぞ。」

「ほーら穀潰し。貴方はだんだん眠くなあゝる。」

「よせ！よせ！そんなものは迷信！」

バシッ！

穀潰しはガスから道具を奪った。

「こらなにをするか！」

「いやちよつと待て。お前さっき金払って謝罪するとか言っ  
たか？」

「それは最後の手段なのだ。その前にやれることは全てやっ  
ておく  
ではないか。」

「ああそうかよ。じゃあ頑張ってくれ。俺はもう帰るからな。」

穀潰しはガスに道具を投げつけ、穀を袋に詰め込んだ後帰って行  
った。

「あの穀潰しめ！やつといなくなりおった！普段穀を潰させてやっ  
てる  
のに何の役にも立たんわい！」

何か妙な口調になったがこっちが素なのかもしれない。

ガスはその後、一生懸命催眠術の練習をし、最寄りのサイキック研  
究所

にも赴き、催眠術のやり方をレクチャーしてもらった。

そして善い人に仲裁役を頼んだ。



善い人など飴玉でも与えておけばすぐガスの言うことを聞く。

案の定は、善い人はガスから飴玉をもらつとへこへこ害児を連れてきた。

害児は非常に渋い顔であつた。

「貴方にもいい加減呆れますよ。今度は何の用ですか？」

害児は善い人の手前猫を被っているようだ。

勿論ガスはこれも計算済み。逆を言えばこの場を逃したらガスができる

手段は相当限られてくる。

「へへっ！害児さん。貴方はだんだんねむくなあゝる・・・。」

「は、はあ？」

「何してるのガスさん？」

「これは吾輩の催眠術なのだ。吾輩は先ほどナンバーズいりをしたサイキッカー！。

ナンバー7352である。それ！吾輩の超能力を受けろ！」

善い人と害児は顔を見合わせた。

「害児さん。これはなに？」

「どうやらガスさんは私に催眠術をかけようとしてるようです。」

「へえ。面白いね。スケッチするよ。」

「あまり私としては面白くもないのですが・・・。」

「それそれ。害児さん。貴方は吾輩の言うことを聞きたくなってくるぞ！」

「ふーむ。」

害児は腕を組んで考えた。

冷静になってみると、害児もガスから商品が来なくなるのは困る。

部下の装備のほとんどがガス製であるし、はっきりいってこの辺一体の商売にかけては、害児よりガスのが上手なのだ。

プライドではなく実利という点から考えれば、ガスと縁切りするのは害児にとっても実にデメリットが大きいことであつた。

ここまで害児が冷静になれたのも、ガスがともうもない阿呆であつたからなので、毒気が抜かれたのだ。

ガスの作戦もあながち失敗ではなかつた。

害児は、結局ガスの商法が気に入らないだけだつた。

いやその人物性も気に入らないのだが、とにかくガスの商人としての実力、度量がどれほどのものであるか測ってみたいと思つた。

格式にこだわる害児だが、商売は実力主義、害児もこの辺を自治区として認めてもらうために、裏ではだいぶ動いている。

優秀な手駒がほしいのは確実であるし、だからこそ善い人や穀潰しの機嫌取りのような真似もしてる。

例え馬の合わぬ相手であつても優秀ならまあよし。

害児はそう思い直したのであつた。

「うーむ。聞いてきました。聞いてきましたよ。私は催眠術にかかったようです。」

「ほら見る！善い人君！だから吾輩の言つた通りだったじゃないか！」

「おめでとう。ガスさん。」

「へへっ。害児さん。いや害児。よくも吾輩をいじめてくれたな。今日から、貴方の財団は吾輩のものだ。

お前みたいな下民はどっかに去るがいい。」

「な、な、な……。」

「こら何をしているか！部下ども！」

ガスはパンパンと手をたたいた。その音は辺りをこだましたが、誰も現れない。

それでもガスは自信満々に害児を指差し命令する。

「早く、このゴミ虫を外にたたき出せ！」

「き、きさまー！殺してやる！殺してやるぞー！」

害児は激昂し、車椅子が吹き飛ぶ。

「う、うわ・・・！だ、だがこんなこともあるつかと吾輩は保険をかけて  
おいたのだ。」

ガスは善い人の首に、剣を当てると、こういった。

「いいか。害児さん。そこから一步でも動いて見ろ。  
人質の首が吹き飛ぶぞ。これは脅しではない！」

「ガスさん・・・。貴方そんなに死にたいのですか？」

「何を言っているのだ。吾輩は王者であるぞ。媚びろ媚びろ。  
はっはっは。」

さしも害児も呆れ顔。ガスは一体何を言っているんだと怒りを通り  
越し

て考え込んでしまった。

そういえばきいたことがある。ガスは極東の島国出身らしい。

あそこの奥義として死中に活ありというものがあると聞く。

また捨て身技なるものがあり、特攻なるものがあるらしい。

ガスはその奥義を今使っているに違いない。

害児はそう判断した。

一方善い人はおとなしく人質になっている。

実はこのことは事前に善い人と打ち合わせ済みだ。

害児は善い人がおとなしくしてることから、そのガスの打ち合わせも見抜いていた。

ガス一人だけならどうということもないが、善い人を巻き込まれては害児としてはたまらない。

何しろ害児は善い人におんぶにだっこの状態なのだ。

いつも善い人を使役する側だった害児だが、今はガスが善い人を使役している。

ガスは正確に害児の弱点。急所が分かっており、なるほど日頃ガスが善い人に接触してたのはこの時の備えのためだったのか。

と今更ながら害児は思い立った。

（見くびりすぎてましたね……。そういえば彼は穀潰しさんとも仲がよい。

さすが商才にかけては、私より知恵が回る人間だけある。）

相変わらず何でもありの外道な知略であつた。

害児も以前、隣町の領主に対し同じような手法を使った。

しかし同じような術を使つても、やはり害児の策略は王者の策略でガスの策略は弱者の兵法であつた。

手段が同じでも根本となる思想が違った。

そして、ガスは害児がここまで見抜くであろうとすべて分かつた上での行動だろう。

勿論ここで害児がガスをぶつ飛ばしたとしても何の解決にもならない。

なにしろどこまで善い人と事前に打ち合わせをしているか不明なのだ。

ダークホースとして穀潰しの存在もある。

とはいつても、所詮蟻が象にかみついた程度の策だろう。

状況は結局害児に圧倒的に有利であつた。

だが攻められたままではやはり害児としても面白くない。

ここはこの知略の勝負を受けるべきと害児は判断した。

「ふふ。いいでしょう。ガスさん。私の財団は全て貴方のものだ！」

「ひゃっはー！」

「だが、あまり調子に乗るなよ。貴様など私が本気を出せばすぐに潰せる。」

所詮私の掌の上で踊っているにすぎないのだ。」

「へっ！そうですかい！それ何をしている部下ども！さっさとこのゴミ虫をたたき出せ！」

「うぬ！ガスめ！もう我慢ならん！」

害児は、義足の電源を入れ作動させた。

（来るか・・・）

ガスは構えた。

害児はゆっくりとガスによっていくが、いきなりふっと姿が消える。

（これは、特殊な歩法で吾輩の目を幻惑させ、大地と同調することで距離を錯覚させる、幻の秘技！）

しかし・・・。ガスは害児など見てない。レーダーを見ていた。

つまりこの歩法に対する備えは万全。あるいは最初から戦うつもりだったのか？

この男どこまで計算しているのか底が知れない。

「あっ！害児さんが三人になった！」

と善い人がうれしそうに喚いた。

害児は、ガスの前方上方後方の同時攻撃を仕掛ける。

（しかし実体一人。）

リーダーを素早く確認し、後方からの攻撃に備えるガス。

がしかし・・・。

「へぶう・・・。」

上からも前から、気による攻撃を受けるガス。その攻撃は鎧を貫通する。

「じゅ、重装備のおかげで助か・・・。」

ボタン。ガスは沈んだ。

「思い知ったか！ゴミ虫め！王者たるこの私に勝てるとでも思ったのか！」

返事はない。



## 第十五幕外伝 穀潰しの冒険1

穀潰しとアキラは、地震の騒動に相まみえ、決着をつけることになった。

穀潰し達の戦いは三日三晩続き、互いに精魂尽き果てようとしていた。

アキラが催眠を使えば勝負はつくのだが、アキラはあえてそれを使わず、勝負につきあった。

だがそれも限界だった。穀潰しと違ってアキラは暇ではない。

「おい。穀潰し。」

穀潰しの衝撃波を相殺し、話しかけるアキラ。

「なんだ？」

これほど戦っているのに、穀潰しにほとんど疲労の色が見られない。

「悪いが、俺は忙しい。お前と違って仕事があるんでな。そういうことで勝負は持ち越しにさせてもらおうか。」

「どうして催眠を使わない？」

「どうして？笑わせてくれる。いいかよく聞け。俺はネーム持ち。お前はナンバーズ。格が違うんだよ。」

穀潰しはいつものことなので受け流し、疑問に思っていたことを聞いた。

「ちつ。おい。なんで村を占領していた。地震を起こしたのはお前の仕業か？」

「いくら俺でも人為的に地震は起こせんよ。村を占領していたのは、そついう仕事の依頼があつたからだ。」

「依頼主は誰だ？」

「そこまでは知らないな。」

「知らない？そんなわけねえだろ。お前はネーム持ち様なんだからな。」

「何人たりともテンマ様に逆らうことは不可能だ。お前だって知ってる」

「だろ？」

「お前の負け犬宣言には興味はねえが、要するに今回の件はテンマの野郎の仕業ってことか。」

穀潰しの憎まれ口にもアキラはさほど反応を示さない。

アキラだって自分の言ってることくらいは分かっているが、分かっているても無理なものは無理なのだ。

「俺にも分からない。ただ、俺たちの組織以外に、争いを起こさせよう」

としているでかい組織があるみたいだな。」

「そうか。」

「俺はもう行くが、他に用はあるか？」

「言っておくが次は勝つぜ。」

「無駄なことだな。まあせいぜいがんばれ。」

そういつてアキラは消えていった。

「俺はお前みたいな負け犬とは違うぜ。」

第三者からすると同じようなものだが、とにかく穀潰しは、穀を潰すためガスの家に向かった。

三日三晩何も食べてないわけだが、そこまで穀をたくさん潰せるわけではない。

それが穀潰しの悩みの種であった。

穀潰しはガスの家にたどりつくと、だらーとねっ転がり飯持ってこーいとわめいた。

「なんだ穀潰しか。今日も物乞いか？」

「うるせえな。いっぱいあるんだからちよつとくらいいいじゃねえか。けちやろう。」

「おいおい・・・。」

ガスはあまりの罵詈雑言に呆れ顔だった。

「まあいい。とにかくあがれよ。」

「何言つてやがるんだ？もうあがつてるだろうが。早く飯持ってこい。」

「勝手に食え。」

ガスは刀を研ぐ作業に戻った。

穀潰しは、穀を潰しごろごろし、また穀を潰しごろごろしていた。

やがて穀潰しは深い瞑想状態に入り、何らかの波動を捉えた。

穀潰しはその波動をたどって行くと、大きな施設が見えた。

穀潰しは立ち上がりガスに話しかけた。

「誰かが助けを呼んでるようだな。」

「例のやつか？行っておくが我輩は行かないぞ。」

ガスは、熱心に刀を研ぎつつ対応する。

「これは俺の問題だからな。じゃあいつてくる。」

「生きて帰れよ。」

穀潰しは外にでて受信地を目指す。

通りがかりに善い人の家があった。

考えてみれば善い人がいればかなりの戦力になる。こないだ協力してやったんだからこっちの事情にも協力を要請しても何の問題もないはずだ。

穀潰しはそう思い、家に入ってみたが誰もいない。

「ちつ。留守じゃねえか。とことん使えねえやつだぜ。無駄なハエが一匹いるだけだ。」

ハエに向かってぺつと唾を吐くと穀潰しは善い人の家を後にした。後ろから猛烈な勢いでハエに逆襲される。

「あいたたた。なんだこいつは。ハエの分際で生意気なんだよ。」  
適当に衝撃波を放つがなぜか当たらない。

「おかしいな？」

ハエはある程度穀潰しをばこって満足したのか帰っていった。

「ちつ。今は急いであるから見逃してやるよ。」

負け惜しみを言いつつ、発信地に行くことにした。

穀潰しは本来善い人を連れていく予定であつたが予定が変わつた。

あまり役に立ちそうもないがガスを連れていく決心をした。

「おい。ガス。救出に行くぞ。」

「我輩は行かないといっただろう。」

ガスはコタツにこもつてでてこようとしないので、穀潰しはコタツを爆発させて、その衝撃でガスが吹き飛びプレオに移動させた。

「早く運転しろ。」

「お前が運転すればいいだろう。」

さすがの温厚なガスも多少ムツとしている。

「つべこべいうな。こんなことでもめてる時間ないんだよ。手遅れになつてたらガスのせいだからな。」

「分かりましたよ。全く。」

ぶおおお。ガスとプレオはうなりながら動き始めた。

「よし。とばせよ。」

穀潰しは力を回復させるため、軽い瞑想状態に入る。

半覚半眠というやつだ。穀潰しの技は荒いが基本的なサイキック能力は昔強制的に身につけさせられたので分かっている。

「今回はずいぶんと僻地だな。並みの車ならここまでこれないだろう。」

ブレオの性能のおかげだな。」

本当は穀潰しがフォローしているだけであってそれに気づかないガスは

どうしようもなかった。

ブレオは飛ぶように走る。瞑想してる状態でここまで念力を使うという

時点で、穀潰しの実力はネーム持ちに匹敵しつつあるかもしれない。

善い人と出会ってからというもの、穀潰しは能力開発に余念がなかった。

「お。あそこだな。今回の目的地は。」

ブレオは山に入り、駆けのぼり森を抜けると、眼下に軍事施設があった。規模はなかなか大きく、警備もきつい。

それだけここの施設が重要ということだろう。

「やたらごついな。我輩といい勝負だ。」

やたらのにきそうな友人の顔を穀潰しは不思議そうな顔で見た。

いつもチキンな癖に、どうしてこいつはこんなごついのを見て平気そう

なのか穀潰しには理解できなかったが、さしあたってどうでもよか

った。

「正面からはきつそうだな。」

「あらかじめいっておくが我輩は行かないぞ。」

ここにきてガスは、怖気だす。穀潰しはこいつにもまともな神経があつたかと思いつつ、返答した。

「付き合い悪いぜ。」

「あほか。あんなところに乗り込んだら死ぬぞ。」

「死んでも復活するから大丈夫だ。」

「それはお前だけだろ。」

穀潰しは、少し考え、まず施設に大きな打撃を与え敵の注意をそらすと考えた。

穀潰しは殺しはしたくはない。だから極力被害がでないようにしようと思った。

「今から念力を大規模に練りこむ。気をつけないと脳をやられるぞ。」

「ひい。」

ガスはあわてて対サイキックタイプのヘルメットに付け替える。



穀潰しは念力を時間をかけ大量に練りこんだ。

周りの空間が質量の圧縮のため歪みまくっている。

「よし。さすがに人にぶつけたら死ぬからな。あの外壁だけを狙って壊すぞ。」

「その後は？」

ガスは恐る恐る尋ねる。

「プレオで特攻だ。」

穀潰しはさも当然のように答える。

「勘弁してくれ。」

ガスは泣きそうな顔になった。

「サイココメント。」

穀潰しが生み出した隕石のような念力の塊を施設の外壁にぶつけた。施設は半壊した。

「やりすぎだな。死人でたかもしれん。」

「救出する人間まで巻き込んでたらしやれにならないんじゃないのか？」

「それは確認済みだから大丈夫だ。よし発進するぞ。」

突然ヘリから撃たれる。

「ちっ。見つかったか。」

「ひえー。お助けー。」

ガスはプレオに乗って一目散に逃げ出した。ヘリはプレオを追っかけていく。

「あいつ。馬鹿だろ。まあいいか。とにかくヘリ部隊はあいつを追跡するだろうからその隙に。」

穀潰しが施設に進入した途端。マシンガンと衝撃波の嵐をうけ倒れる穀潰し。

「やったか？」

「ぴくりとも動かないな。」

「しかし一人だけで乗り込んでくるとはただのあほだな。」

「後続の部隊に備えて気を引き締めろよ。」

「あほはあんたらだ。」

穀潰しは底なしの念力を持つ。この程度なら復活できるのだ。

「うお。なんだこいつ。立ち上がったぞ。」

「サイキツカーだ！もう一度集中砲火だ！」

そういう彼らもサイキツカーだがその実力は穀潰し以下。だから  
火器に頼ったほうが超能力を使うよりことが足りる。

ダダダダ。

「この俺は不死身だ！サイコグランド。」

全く意味がなく、穀潰しは集中し念力を開放する。

地面の一点を中心に広範囲の衝撃を広げる。当たるものは跳ね上がる。

「この先だな。」

## 第十六幕外伝 穀潰しの冒険2

穀潰しがどどん奥に行ってみるとサイキッカーが二人待ち構えていた。

「好き放題やってくれたな。」

「まあな。お前達が俺を止めれるのか？」

二人か。手間取るとまずいな。穀潰しが見たところそれなりの実力者。

二人相手では分が悪かった。

「知ってるぞ。お前はナンバー6だな。超能力検査で数値0を出したと  
いう。最弱ナンバーズだ。」

「詳しいな。関係者か？」

穀潰しが聞くまでもなく、彼らはナンバーズなのだろう。

がそれでも穀潰しが確認する理由があった。

「お前の姉妹施設のものだ。お前は有名だよ。一番無能なサイキッカー

で必死に練習してようやくそれらしい半端なものを身につけたってな。

ついたあだながサイキッカー0だ。」

「よくしゃべるな。俺の狙いが実験体だと知っていて地下に移す時間稼ぎでもしてるつもりなのか？」

「なに？いつのまにメトリーした？」

穀潰しはメトリーなどしていない。したところでそこまで正確なメトリーは穀潰しにはできない。

そんなことも分からない彼らの頭は馬以下だと穀潰しは思った。

「しなくてもお前の馬鹿面に書いてあるんだよ。」

「なんだと？」

「おい。ナンバー65。挑発にのるな。これはやつの手だ。」

「すまねえ。」

「聞いている通り俺達もナンバーズだ。だが貴様と違って俺達はもうすぐナンバーを抜け出しネーム入りを許される筆頭候補なんだよ。」

「くつくつく。」

「ん？」

「ひゃっはっはっは。」

「なぜ笑う？」

「お前らナンバーだとかネーム入りだとかそんなあほなことを言つてて恥ずかしくないのか？」

「なんだと？どういう意味だ。」

「要するにタイムオーバーだってことだ。」

「潰れる。ランダムスフィア。」

ボール状の爆裂性能がある衝撃波を何個も飛ばす。

「馬鹿な。こんな短時間でこの規模の念力だと？」

「うがああ。」

戦闘不能になった二人の上から穀潰しは言葉を浴びせる。

「お前らが馬鹿で助かったぜ。小技の応酬してたら時間が無駄だったからな。」

時間稼ぎが必要だったのは彼らだけではなく、穀潰しもそうだった。

だから穀潰しもくだらないおしゃべりにつきあっていたのだった。

とはいえ、飼い犬がいきがる様を見て憐れに感じたこともまた間違いないことではあったが。

パチパチパチ・・・。

後ろのほうで拍手の音が聞こえた。

穀潰しが振り返ると、不敵な笑みを浮かべた優男風の男が立っていた。

「ようこそ。我が館へ。雑魚の割には見事なお手並みでしたよ。ナンバー6。」

「お前がこのリーダーだな。ネーム持ちか？」

「いえいえ。」

「。。。。」

「不思議そうですね。ですが勘違いしないでいただきたい。先ほどの二人と違って私は、ネーム持ち以上の実力を持っている。」

「おい。お前。こんなおしゃべりしていいのか？さっきのお前の部下の無様な姿を見ていなかったのか？」

「くく。。。奇遇ですね。ナンバー6。実は私の得意分野も練り込みなんですよ。しかも衝撃波系の念力の練り込みです。意味が分かりますかね？」

「ああ分かったぜ。お前がとんでもなく阿呆だということがな。」

「組織から追い出された負け犬めが。吠えるなよ。」

「そろそろか？先手は譲るぜ。」

「馬鹿が……。死ね！はっー！」

「ぶっ潰れる！サイコスフィア！」

力場が発生し、力が放たれる。しかしあまりにも違いすぎた。

優男は複数の衝撃波、穀潰しでいうランダムスフィアで、穀潰しの衝撃波は一つだけ、これはランダムスフィアの下位の技だ。

優男の衝撃波はさすがによく練り込まれていたが、穀潰しの全てを蹂躪する力の波動にはなすすべなく、自信満々の優男は、驚きの表情で声さえあげれず念力の波に飲み込まれていった。

穀潰しは、その様子確かめることすらせず、走り出した。

奥に進んでみると人影が見えた。

まるで鏡を見ているような自分とそっくりのそいつは、

「GTR4か。またいやみにきたのか。」

「まあな。ぶっ潰してやるぜ。」

「ちっ。居候の癖に邪魔ばかりしやがる。」

このロボットは、穀潰しの家に住んでいる嫌味博士が、穀潰しに嫌味をするために作ったロボットだ。

能力面で全て穀潰しを上回っており姿かたち性格すら穀潰しそっくりだった。



普段穀潰しが探している物を隠すのがこのロボットの大半の仕事だが、こうやって重要なところでも邪魔をしてくる。

善い人に家にいるタンクも同じロボットだが、彼女に比べあまりにもこのロボットは可愛げがなかった。

「おい。お得意の念力練りこみでもやってみろ。」

これはもちろんいやみ。お互い同じことをしたらGTR4のほうが上に決まってる。

こちらの力を8にも9にも見せて10の力を見せ付ける風車の理論だ。

だが・・・。

「よし。やってやるぜ。」

穀潰しは練りこみを始める。秘策があるのだ。

「馬鹿な野郎だぜ。」

GTR4も練りこみを始めた。両者とも不敵に笑う。こういう場合どっち

も負けるとは思っていない。

しかしこのすぐ後にはどちらかが負けているのである。

「サイコカッター！」

同時に放つ。穀潰しのカッターはやつのカッターにかき消されその体は真っ二つに。

その後穀潰しの体は笑いながら消える。

「ひゃっはっはっは。」

「これは一体・・・？」

「サイコグリブドン。」

GTR4の至近距離で何度も衝撃波を打ち込み。その後持ち上げて地面にたたきつける。

「本当はVS善い人の切り札にとっておいた技だったがお前に使っちゃった。名誉に思うんだな。」

GTR4は

「ひゃっはっはっは。」

と笑って消えていく。穀潰しはまさかそんなことは、と思った。

後ろを振り返るとGTR4は攻撃の態勢に入っている。

「サイコグリブドン。」

「ぐおおおお。」

穀潰しはとつさにバリアを張ったが効果はなく、難なく攻撃が貫通してきた。

俺はもう体が動かなかった。

「なぜ使える・・・？」

「俺はお前が分身を開発する前からすでに分身を開発していた。お前が新技だと思っていたものは所詮お前のコピーである俺の物まねにすぎなかったということだ。」

「く。。。」

穀潰しはぐうの音も出なかった。学習能力すら己の上とは想像以上だったのだ。

「ざまあねえな。オリジナルさんよ。」

余裕の笑いでタバコを取り出す。穀潰しはしめたと思った。こうなれば勝ちと同然だ。

GTR4はタバコをふかしてふーと吐き出す。

GTR4はなぜか様子が変わり、プシュープシューと音を立て始めた。

「っぎゃー！」

ボタン。ボギヤーン！

G T R 4は倒れて、自爆した。

やっぱり壊れた。G T R 4はなぜかタバコが好きなのだが、そのた  
びに  
壊れるのだった。

「ボコボコになってしまったが何とかなったな。」

どうやら実験隊は地下にいるようだ。

地下に進むとカプセルの中に実験体があった。

周り中実験体だらけだった。

「ひでえ。なんてことをしやる。」

穀潰しは啞然とした。とはいえ自分も似たような状況になったことは  
あった。

穀潰しがそちらのほうに近寄ろうとすると電話が鳴りだした。

## 第十七幕外伝 穀潰しの冒険3（前書き）

ゲームのほう、更新滞っておりますが、そろそろ穀潰しをだしてくれるそうです。

### 第十七幕外伝 穀潰しの冒険3

はつきり言って放っておいてもいいのだが、嫌な予感がした穀潰しは電話をとることにした。

「ふおおおお、どうかね？わしの嫌味は。」

「てめえは嫌味博士！このありさまはお前の仕業か！」

「なあに、わしの嫌味はこれからじゃよ。」

「なに？」

ゴオオオという音を立てて、機械のアームにカプセルが回収されていく。

「あっなんだ！」

「ふおおふおおふおお……。」

やがてカプセルは全て消え、奥にあったシャッターが開き、巨大なロボットがやってきた。

その大きさは、50m、とてつもなくでかい。

穀潰しもあわあわしてる間になんとかすればいいのだが、善い人ではないので彼にそんな対応はできない。

阿呆のようにあわあわしている間に、ロボットは穀潰しに近づいて

くる。

その間律儀にも穀潰しは電話を握ったままだ。

「こいつはGTR4なんかの欠陥品とは違つぞ。ここでお主も終わりじゃ

のう。ふおっふおっふお。」

「黙れ！嫌味！てめえは俺がぶっ飛ばす！」

穀潰しはそう言い放ち、受話器をたたきつける。

穀潰しは、念力を一点に集中しすさまじく鋭利なカッターを作った。

（ようは足を切り落としまえばいいんだ。）

「サイコカッター！」

具現化したカッターは空気を切り裂き、奇妙な音を立てながらロボットの足にあたるが、なんの効果もなかった。

「馬鹿な……。俺のカッターが。」

ロボットは、背中から誘導ミサイルを100発ほど穀潰しに打ち出す。

「うおおおお！」

穀潰しは、一瞬で空中に10mほどとび、追ってくるミサイルを衝撃波で撃ち落とす。

ミサイルの動きは、複雑だったがメトリーと勘で、次々撃ち落としていく。

そのことに集中しすぎてロボットの接近に気付かなかったのは穀潰しのうかつというよりは、ロボットの性能の高さによる。

ロボットの振り回し攻撃に穀潰しはもろに当たるが、とっさに痛覚を遮断し、それをむしろ攻撃の起点にした。

懐に入ると、ロボットは目から破壊光線を出してきて穀潰しに直撃したが、穀潰しはオーラに包まれ、その攻撃を遮る。

「潰れる！サイコギガス！」

これは非常に密度の高い、圧縮した念力の塊をぶつける技で、直径1 m程度の玉である。

放つと1 mくらい継続し、爆発力はない。

破壊性を追求し機動性が全くないため、対人戦においては、全く使えないが、洞窟を作ったりと用途は案外多い。

穀潰しのサイコギガスは、ロボットの装甲を初めてへこませた。

ロボットにはアンチサイキック装甲がもちいられており、穀潰しといえ

ど容易ではない。

さらにカプセルを傷つけないように戦うしかないのだが、アンチ



サイキックが作動してるせいで、穀潰しは正確にカプセルの位置が分からない。

サイコギガスはロボットの胸部を直撃した。

これには、ロボットの機能を低下させる狙いがあつたが、思ったほどの戦果は得なかった。

いわばこの奇襲は失敗に終わったといえる。

「ちい！」

ロボットの攻撃は苛烈さを増した。

穀潰しに対しては一撃より手数、ロボットは学習によりそれを習得し多段攻撃をしかける。

徐々に削れていく穀潰し。

（くそっ！俺もここで終わりか・・・。）

いくら穀潰しでも無限ではない。

しかしここで弱気なことを考えても状況は進展しない。

だがこの時、奇跡が起こった。

車のエンジン音とともにガスがさっそうと現れ、ロボットのほうに飛んでいく。

「穀潰し！きたぞ！ひゃっはー！」

「遅いぜ！ガス！」

「ひゃっは！プレオフェニックス！」

燃えた車がロボットを狙い撃つ、ガスは車から飛び降り自分の体に火をつける。

「続けてガス・フェニックス！Wフェニックス・エックス！」

車とガスは燃えながらロボットに体当たりし、その反動でロボットの攻撃は一瞬弱まる。

（ガスのおかげで何とか練り込む時間は稼げたが、コメットのほどの大技には時間が足りないし、カプセルの位置もまだ分からない。どうする？それにしてもあいつは車あんなにしてしまっているのか？）

そう考えている間にも、ミサイルやレーザーが飛んでくるので、結局防戦一方になってしまう。

やがてガスが起き出し叫んだ。

「安心しろ、穀潰し！助っ人を頼んだ！」

（助っ人だと？）

そう思った刹那、穀潰しの目の前の攻撃が全て遮断される。

何だが残像のように見えるそれは、車椅子に乗っている害児であった。

害児は、レーザーやミサイルを全て、捌き、逆に車椅子からミサイルを出し応戦している。

「害児のやつ！余計なことを！」

が穀潰しはそういつつ、思いがけない援軍にうれしくなり意気を取り戻した。

「穀潰しさん！あなたの狙いは正しい！あのロボットの胸部に透視を妨害している装置がある！」

「そうか！よし！そのまま対応してくれ！俺は練り込みに入る！」

「私では、装置を誤作動起こすまでの威力が出せません！しかし安心してください。まだ私たちには心強い仲間がいます！」

「善い人か！」

ドカンという爆発音とともに、地下の天井が破れ、白い雷が降ってきた

。それはよく見なくても善い人であった。

「貫け！ストライク・ツイスター！」

善い人の上空からの強襲はまるで巨人の一撃、ガスなんかのお遊びとは格が違った。

初めてロボットはその体全体がぐらつく。

その時穀潰しは不思議な感覚に包まれていた。

自分は一人ではない。穀潰しの孤独な心は氷解し、澄んだ気持ちで練り込みをする。

害児は前方で穀潰しを守りつつその氣勢を感じていた。

（穀潰しさんの力の質が変わった？これは一体・・・）

穀潰しの手には、巨大な黒い刃が生じている。

「これが・・・完全版キリコロ。」

「穀潰しさん！装置はまだ！」

「いや見える。」

「え？」

穀潰しは、害児を追い抜き、ロボットの攻撃は全て黒いオーラに吸い込まれていく。

「すごい……。これほどの力とは。」

害児はその有様に感心する。

「これでタイムオーバーだ！」

穀潰しは掛け声とともに、刃を振り、まるでロボットが紙つぺらのように切れていく。

そして正確に、カプセルの位置を透視し、カプセルには傷一つつけることなく、ロボットを沈黙させた。

ギャラリーがわいた。

「やりましたね！穀潰しさん！」

「やったぜ！穀潰し！ひゃっはー！」

「俺ならこのくらい当然だぜ。取り立てて騒ぐまでのことではないな！」

途端に威張り散らす穀潰し、はっきり言って台無しだ。

穀潰しは、カプセルから人を救出してる善い人を発見したがなにやらもめているようだった。

皆を救った英雄として、自分が一言言おうと、穀潰しはその一群に近づいた。

「おう。みんな。これで自由だ！今まで辛かったがこれから自由で生きれるんだぞ！」

穀潰しがそういうと、10歳くらいの男の子が穀潰しに対しこういった。

「いやお強いですね。貴方は確かサイキッカーゼロでは？」

悪い噂しか聞いてなかったの、今回の件で見直しましたよ。」

「はっ？何言ってるんだお前。」

穀潰しは啞然とした。

・・どうやらあのロボットで、自分と戦うトレーニングだったらしいな。

穀潰しはようやく気付き、ああそうか今回はこういう嫌味か。

とここまで体よくあしらわれたら怒る気持ちすらわかなかった。

そんな気持ちで、穀潰しは一軍を眺めていると、これを機会に組織を抜けようというものと、自分をもっと高めたいというものが争っていた。

穀潰しはそんなのは勝手にしたらいい。どうして他人に同意を求めたがるのか理解できなかったが、どうしたらいいか穀潰しにすら聞てきた。

そんなこと穀潰しがなんていうかなんて分かりきったことなのに、

「おいおい、そりゃあお前。よく考えても見る。俺はお前たちを救うためにここまで来たんぜ。

これからは自由にしてもらいたいにきまっているじゃないか。」

すさまじく茶番に展開で話にならない。

穀潰しの頑張りは一切何だったのか、さっきまでの感動はどこにいった

のか。

穀潰しはやるせない思いだった。

サイキッカーたちは善い人にも、しつこくどうしたらいいかを聞いていた。

初めは関心なさそうに、知らないとか、分からないとか、善いことをしたらいいとか言ってた善い人であったが。

具体的にいえとか無責任なことを言うなという言葉に、ついに怒気を発し、

「善い人を馬鹿にするものはゆるさーん！」

という言葉と共にS・アッパーをかまされ、サイキッカーたちはふき飛ばされ、善い人が天井にあけた穴に吸い込まれ、二度と戻ってくることはなかった。

穀潰しはその様子を見ても心底どうでもいい気分だった。

穀潰し達はその後、施設をくまなく破壊し、ガスは金目になりそうなものをあさっていた。

その有様を害児はすごい形相でにらみつけ、ガスがあさっている横で、

「おのれ、火事場泥棒めが！卑怯！卑怯！」

などと大声でののしってた。

それに対しガスは、

「へへっ。害児さん。あつしら商人でっせ。」

とやり返していた。害児は顔を真っ赤にして、卑怯卑怯と連呼していた。

手を出さないのはおそらく善い人や穀潰しがいるからだろう。

害児は彼らの心証を悪いものにしたくはない。

この二人は役に立たず、破壊活動は穀潰しと善い人で行い、

地下施設を潰した後、地上の施設は穀潰しがサイコエンドという最強技を放ち、壊滅させた。

「じゃあ俺は帰るぜ。今日はありがとうな。」

穀潰しは援軍に感謝した。

しかし、ガスと害児はそんなことを聞いておらず、まだ口論をしていた。

害児のしつこさにさすがのガスも閉口し、多少迷惑顔だった。

自然と善い人が口を開く。

「穀潰しもまたどんどん頑張って私みたいに善い人になるんだよ。」



「はあ？別にお前みたいになりたくてやったわけじゃねえよ。早とちりするな！」

「何だって私を馬鹿にしているのか！」

なぜか激怒する善い人。頭が悪くなければいいやつなんだがと穀潰しは思ったが、これが善い人なんだからしょうがない。

「別に馬鹿にはしてねえぜ。ただ・・・。」

「うるさい！そこまでだよ！この悪人め！善人たるこの善い人が天誅を降す！」

「やれやれ。最後の一戦は一番手ごわそうだぜ！」

どこか嬉しそうに穀潰しは言い放つ。

結局二人の戦いは驚いたガスと害児に止められ、ようやくこの穀潰しの

長い戦いは終わりを告げた。

## 第十八幕 困った人

戦いは終わった。いや戦いといえるものであったのかわからないが、ともかく

これで一連のガスと害児の騒動は、とりあえず一つの峠を越えたのだろう。

害児は、携帯していた予備の木の義足をつけ、さてどうしようかと思案顔になった。

というのも、目の前に転がっている芋虫のようなやつに財団を譲ってしまったので、一文無しになってしまったからだ。

とはいえ昔の職業柄野宿にはなれていた。

考えてみればおかしい話であった。

一文無しになる決心をしたのはガスであったのに、気がつけばガスは億万長者、害児は乞食となってしまったのだ。

こんな馬鹿な理屈は本来ないが、害児にはちょうどいい休養なようにも思えた。

「やはり、柄に合わないことはするものではない。人間たるもの大地で  
ねっころがるのが、一番の幸せというものです。」

「害児さん。私の家においでよ。」

「ええ!?!」

害児は驚きのあまり、3mもジャンプした。この人は本当に義足な  
んだろう  
かと思いたくなる。

「善い人さん。私の真心がとうとうあなたにも通じましたか!私は  
感動  
しました!」

「害児さんを助けるのはいいことに違いない。」

「いや今日はいい日だ。やはり真心というのは継続して行えば、ど  
んな鈍感  
な人間にも通じる。こんなうれしいことはないではないか。」

善い人は上機嫌で、語る害児をつるさそうな顔でそつぽを向きつつ、  
足早  
に家に急いだ。

害児は遅れずそれについていき、善い人に自分がいかに善い人に今  
まで恩  
をかけてきたかを恩着せがましくくどくどと説明していた。

善い人はやっぱりつれてこないほうがよかっただろうか、ここらで  
ほっぱり  
出そうかと考えていた。

やがて善い人はうんざりしつつ、ただいまを言い放ちすぐに布団の上に

ダイブした。

もう知らん。何を言っても私には関係ござらんという態度だ。

害児は善い人の態度に気をよくした。

「おや？あなたは確か、ロボットの。」

ふと気がつくと、害児に向かってコップを差し出している女性が出た。

善い人の家の居候のタンクだ。

一応顔見知りであったが、こうやって面と向かい合って話すのは初めてだ。

「えーと、害児さんでしたっけ？大体な名前ですよね。はいどうぞ。」

害児は善い人の教育はなかなか行き届いていると感じ、コップを受け取った。

次の瞬間、害児はタンクに向かってコップの中のをぶっかけていた。

「こ、この王者たるこの私に水をよこすとは何事か！」

「ありやりや、びちゃびちゃだあ・・・。」

そういつが害児も善い人が家に来たときなんぞ、水すら出さない。

まあそれはそれで事情があるから仕方ない話でもあるのだが。

外からぶおんぶおんという声を上げ、部屋に突っ込んできた車があった。

もちろんそれはプレオで当然のことながらガスが乗っていた。

ガスは善い人の家をだめにしておきながら、そんなことはまったく気にもかけない様子でこう言い放った。

「王者の名をかたるごみ虫がおったぞ！それものども、そこにいるごみ虫を叩き潰せ！」

じゃーん、じゃーん・・・。

どこからともかく太鼓の音が響く。

ワーツと言う歓声が響いた。

「ふん！雑魚が何人来ようとどうということもないというのがまだお分かりにならないのか？」

「減らず口もそこまでにしてもらおう。害児さん。いや害児。王者たる

この我輩に不可能はないのだ。」

タンクはいきなり水をぶっ掛けられ、車に家を潰され、太鼓の音にびびってしまっている。

善い人をしきりにゆすり起こしているが、善い人は寝た振りをしていた。

「わわ・・善い人ちゃん。善いことをするチャンスだよ！」

その言葉を待っていたとばかり、善い人は飛び上がり、ガスの前で仁王立ちして、指をピシッと指差した。

「そこまでだよ！」

「ほほう。これはこれは誰かと思えば善い人君。今となれば我輩と善い人

君は身分が違うのだ。

対等に口が聞けると思っては困るのである。」

「善い人さん、下がってなさい。これは私と彼の問題です。」

「なに！善い人を馬鹿にしてるのか！」

なぜか善い人は害児にむかってどなった。

害児はその剣幕に面食らったが、それを見てガスは愉快そうに手をたたいた。

「それ見たことか。害児の人徳などそんなものだ。」

「うぬ！ガス！」

「何か文句でも？文句なら善い人君に言ってくれたまえ。ひゃっはー！」

ちなみに呼び出されたガスの部下どもは、突撃合図がなかなかこないで  
だれてきた様子だった。

「ところでガスさん。今日はなんのようかな。引き取ってもらった  
みは  
ないよ。」

「いや善い人君。これは我輩にとつてまったく不本意なことなのだ。  
何しろ王者の名をかたる不屈き者がいるということで、まったく我  
輩として

も迷惑千万なことなのだ。

もちろん我輩としても、善い人君とわざわざ事を構えようという気は  
毛頭ないのだ。」

「家を壊しちゃったくせに……。」

タンクはぼそつとつぶやき、その言葉はガスの耳に入った。

「ああ……。わかったわかった。おいっ！」

ガスは部下のほうに顔をくいつと向けると、部下は害児の前に金を

ほんと  
放り出した。

害児はそれをみてぷるぷるしだした。

「これは何の真似だ？」

ガスはニヤニヤ笑うだけで答えない。

「そうかわかった。よくわかった。つまり死にたいということか。」

害児が一步踏み出すと、タンクが害児を後ろから抱えて止めた。

「何をする！ 離せ！ はなさんかあー！」

害児は見苦しくとりみだし、手をばたばたさせた。

ガスはそんな害児の様子を一瞥した後、善い人に挨拶をした。

「では善い人君。またいつかお会いしよう。」

「ガスさんも元気だね。」

ガスたちは結局何をしにきたのかなぞであったが、ガスたちの姿が小さく

なったころ、タンクはようやく害児を解放した。

「おのれ！ おのれ！ この私がこんな惨めなことを！」

「害児さん。 あんな人にかまっちゃだめよ。 もう忘れよう。」



「……」

「タンクさん。食事にしよう。害児さんは疲れたんだよ。」

「そうだね。じゃあ用意するよ。」

タンクはオイルを、害児と善い人には水を用意した。

害児は用意された水を一気にぐつと飲みこいいた。

「おいしい水です。」

今度は、タンクに水をぶつ掛けたりしなかったためにガスがでくることもなかった。

それから数日がたち、害児はすっかり穏やかな様子になった。

「これが人間の暮らしというものだ。私は久しく忘れていた。」

家は壊れたままなのでそこから日光が差し込んでいた。

それにあたりながら善い人やタンクとたわいないおしゃべりや変な遊びを

する毎日だった。

「思えば私はこういう生活を求めて軍隊を抜けたのであったな。」

害児は、今まで軍の追っ手を遠ざける工夫をするのに精一杯で、自

分の生活  
にまで手が回らなかった。

その点、ガスには感謝してもいいくらいかもしれなかった。

しかし世界が崩壊したいまですら、おそらく世界で唯一戦争をして  
いる地域、  
そこが害児の故郷であった。

善い人やタンクと違って、害児は生身の人間なので生活するのに何  
かと入用  
だった。

そっというのはタンクが持つてくるごみを売れば、有り余るほどの金  
が手に入った  
ので問題はなかった。

不意に害児は、いいことを思いついた。

それは善い人とタンクにとって迷惑な申し出だった。

「そうだ。これからは私のことをお姉ちゃんを呼んでください。」

「めんどくさいなあ。害児さんは害児さんだよ。」

タンクにいたってはもっと率直だった。

「嫌です。」

これには害児も多少ひるんだがそっは問屋がおろさない。

「なぜです？私はあなた方より年上ですし、姉を呼んでも差し支えないと思います。．．。」

こういつときというかどうかどういつときでも、害児はしつこい。

このときもすぐくしつこく食い下がった。

「でも害児さんは私のお姉さんじゃないし．．。」

タンクの正論も無視して、最終的には床に転げまわって駄々をこねた。

善い人とタンクはその有様に顔を見合わせて呆れたが、仕方ないのでじゃあ

一日だけと気乗りしない返事をあげた。

「では、お姉ちゃんがあなたたちに服を買ってあげましょう。さあ！いきましよう！」

タンクも善い人しぶしぶついていくことにした。

害児はハ工を見かけると声をかけた。

「やあ、ミルキーちゃん。今日もご機嫌ですね。」

ハ工は迷惑そうにどこかに飛んでいった。

「変な名前つけないでほしいのだけど．．。」

善い人は内心、害兇の横暴ぶりに対してかなり切れていたが、善いことをする

わけでもないのに切れるわけにはいかなかった。

善い人は変なスイッチに触れない限りは、善良な人間といえば善良な人間なのかもしれない。

おお張り切りの害兇は、先陣を突っ切り善い人たちは迷惑顔で仕立て屋へむかった。

店についた後も害兇は独りで大騒ぎをし、仕立て屋の店主セリルは大変ね

と善い人に話しかけ、善い人はこれも善いことだからねと肩をすくめた。

善い人の例の意味不明な収納能力がある服はここで作ってもらっている。

セリルは、実力があるサイキッカーであると聞いたことがあるが、善い人

にとってはどうでもいいことだった。

セリルにはサイココーティングという技術がある。

服に念力を練りこむことで、攻撃防御どちらにも効果があるという優れものだ。

単に念力の練りこみといっても、穀潰しのように馬鹿の一つ覚えで衝撃波の連射だけでなく、才あるものが工夫して使うところいうこともできる。

それでこしらえた服なのであの収納能力があるのか、善い人が変なだけなのか分からないが、セリルが作った服だからというのは多少は関係してるに違いない。

阿呆のように服をたくさん買った後、家に帰ってみると、義賊のアツチラがいた。

善い人とタンクはもうくたくただった。害児だけが元気ではしゃいでいる。

アツチラは、ふてぶてしい顔で善い人を待っていたが、害児の姿を見かけると、背を丸くして、顔を隠した。

ぶるぶると震えている。

善い人たちは、しばらく気づかなかった。善い人にとってはどうでもいいし、害児にしても眼中にない。

タンクは天然で気づかないので誰も気づかないのであった。

しかしやがてタンクが気づいた。

「あれれー？なんだろうこれ。善い人ちゃん、お姉ちゃんちょっときてみて

よ。変なのがある。」

善い人と害児はしげしげと丸くなったアツチラを眺めた。

「妙なものです。はてはてこれはいったい・・・。」

害児はこれは事件だぞといわんばかりの口調でもったいぶった。

そこを善い人はこともなげにいった。

「これは人間だよ。害児さん。」

「おお・・・それはまさに。」

善い人にしては珍しい正論だが、害児は大仰な演技をやめなかった。

「お姉ちゃん。もうそれはいいから、この人。きっと善い人ちゃんに用事

があるんだよ。」

害児は善い人からは結局姉扱いしてもらってないが、タンクからしてもらって

るので満足だ。

「どうしたんですかー？おなか痛いんですかー？」

アツチラはぶるぶる震えるだけでまったく返事がなかった。

「どこかで見たことある人だな。」

善い人は思い出すのに必死だ。

「それにしてもこの人は、なんだか震えてるようですね。これについて

二人はどう思います？」

「寒いのかなあ？」

「寒いのかもね。」

「確かに寒いのかもかもしれません。外はいい天気ですが。」

「でもこの家に毛布とかはないし、布団は外に干してるから。」

「タンクさん。ここは私たちで何とかしよう。それが善いことだよ。」

「分かったよ。善い人ちゃん。」

「タンクさん。火だせる？湯を沸かそうよ。」

「おおさすが善い人さん。天才です。」

「頭いいね。私じゃ思いつきもしなかったよ。そんなこと。」

タンクは腕をぱかとあげ、コップを火であぶしてぶくぶくにした。

「これだけぐつぐつなら大丈夫だね。そりゃ！」

「あっ！」

善い人は、熱湯をアツチラにかぶせた。

「あっちいー！」

アツチラは飛び上がった。

「何をするか！」

当然怒った。

「寒がっていたから。」

「寒いわけじゃない。そこにいる害児が怖かったから震えていただけだ。」

「なぜ私を怖がるんです？」

「はんっ！よく聞け。俺は義賊のアツチラさ。善人組織四天王の一人の  
なあ！」

「なに？善人組織の？」

「知ってるの？害児さん？」



「善い人さん、あなたこの間その組織の支部潰したばかりじゃないですか。」

もう忘れたのですか。」

「まあそういうことだな。これで分かっただろう。俺がびびっていたわけが。」

「アッチラさんとやら、安心してください。別に今の私はあなたがたをどう

こうというつもりはありません。」

「そうらしいな。何しろ俺は5時間もこのままほうつて置かれたのだからな！」

アッチラにしては凄い不覚だが、それだけ害児が恐ろしかったということ

なのだろう。

アッチラは、安全と知るや否や饒舌になった。

あぐらを組んで腕を捲し上げたり、膝を手でぼんぼんしながらかたっていた。

「俺は確かにあんたに一度敗れた。だがなこの話はまた別問題だぜ。」

「ふーん。」

善い人たちは、アッチラを無視してみんなで絵を描き始めたが、アッチラも

それに参加しつつ、さらに話しかけてきた。

「なににせよ、あのガスって野郎はがめついぜ。なにしろあいつに独占されて

商売上がったりだ。みんなが文句言ってるぜ。

ただ儲ければそれでいいってもんじゃねえんだ。みんなのことを考えて

もらわないとな。」

やたらみんなみんなと強調する。義賊感をアピールしているのだろう。

「別に俺はお前たちにどうこうしてもらいたいと思ってここにきたわけじゃ

ねえんだ。

ただ俺が負け犬のままのように思われるのは我慢ならなかったからな。」

こんな風に事前予告するから、前回ガスにも襲撃がばれていて計画が失敗

したというのに何の反省もしない男であった。

「とめるなよ。とにかく俺はやってやるぜ。やつの暴拳には義憤を発せざる

を得ないからな。そうだろう？ええっ？」

誰も返事をしない。絵を書くのに熱中しているのだ。

「とにかく俺はやる。誰がなんと言おうともな。男にはやらなきゃいけない

時つてもんがあるんだ。お前も善人を自称するなら分かるだろう？」

アツチラはこの後も散々、身振り手振りを加えて語り、時々、動物の絵を

描いたりした後、善い人の家を出て行った。

その様子はガスの部下にしっかりと監視されていた。

## 第十九幕 愚鈍な王様

ガスの万全の体制も、所詮アッチラの前では無意味だ。

この前は不覚を取ったが、そもそもアッチラは相当すばしっこいから、

ガスなんかに構わず金目のものを盗み出すのは容易だ。

そもそもガスには害児のような威圧感がない。

だからアッチラはうまうまとガスから大金をせしめた。

ガスは、その様子を見て憤慨して部下たちを集めどなった。

「なんとぶがないのだ！我輩の部下どもは！」

叱責された部下どもは不満げな顔であった。お前の指揮が悪いのだろと

いわんばかりだ。

ガスはますます怒って、不満げな顔をしている部下の一人を呼んだ。

「その者、ちょっとこい。」

部下というかガスが新しく大幅に雇ったごろつきだが、は無言でガスに近づく

と、いきなりガスに頬を殴られた。

「我輩の力思い知ったか！」

いきなり殴られたごろつきは激昂した。

「俺たちは精一杯やった！何で俺を殴る！」

「結果が出なければやってないのと同じなのだ！ひゃっは！このぐみ虫どもめ。」

部下の一人が憤然と前に進み出て抗議した。

「殴ることはない！何で俺たちを殴るんだ！」

ガスは悠然と答えた。

「我輩の力を思い知らせるためだ！」

「横暴だ！」

「だまらっしゃい！」

ガスと部下どもは見苦しく口論し、やがてガスは複数のごろつきに囲まれていた。

ガスは、そんなことはまったく意にかえさず、部下たちを挑発し罵った。

我慢ならなくなった部下の一人が、ガスを殴ったのを基点にごろつきたちは

ガスをふるぼっこにした。

「何をする！我輩は王であるぞ！ひい！やめてくれ〜！」

黒服たちは、その有様に驚いたが見て見ぬ振りをした。

やがて気が済んだごろつきは、こんなところにいられるかと言いつて  
し去って  
いった。

意識を取り戻したガスは、害児の元部下要するに黒服たちに向かって罵った。

「お前たち！何でとめなかった！」

「私どもは再三申し上げたはずです。あのようなものたちを雇うことは  
ないと。」

「下民が口を挟むな！我輩の王者の知略にけちをつける気であるか  
！」

ガスは黒服たちにとって害児よりはるかに使えにくいお人であった。  
いきなり、ガスが害児の地位にとって変わったことはもちろん黒服  
たちも  
驚いた。

「首領はどういうおつもりなのだろう。」

「お前にはわかるまい、しかしこれは首領の深いお考えなのだ。」

「なるほど。俺は頭が足りなかったようだ。しかし首領の知略は神の領域」

に達している。」

「ああまさしく、首領の神算鬼謀は恐ろしい限りだ。

きつと今回の件も何か空恐ろしい知略があるに違いない。」

黒服たちは口々に言い合い、害児を慕うこと数倍した。

そして、そういうことならガスに対しても、全力で使えようと決心したのであつた。

ガスの手腕はすさまじく、数日で財団は大きくなった。

前の規模の二倍だが、しかしそのせいでアッチラの言うようにみんなが迷惑してる節もあつた。

今の時代ただ儲ければそれが正義として通るわけでもない。

またごろつきなども好んで雇い、館も以前よりはるかに豪勢にした。

ただ、ガスの弱点としてにらみがききにくいという点があり、それを補うためのごろつきたちだったが、あまり足しにはならなかった。

おかげで、対外交渉において、害児の自治領に対する自治権に他国が干渉し始める事態が起こっていた。

他国とはもちろん害児の故郷だ。害児の故郷の地域以外、紛争を起こしている地域はない。

この地域だけが、前時代的であった。

害児としては、ある程度お金があればよかった。

要するに故郷に対する備えがあればよかったのだ。

ほかの地域にいたっては、貨幣が流通しないない地域がほとんどで、貨幣

による商業が成り立つのは、害児の故郷かここくらいだ。

ガスと黒服たちがもめたころ、アッチラはお金を町でばら撒いていた。

多くの桜をしこみ、アッチラは英雄であり救世主であるということ  
を町に  
触れ回った。

町の人は感心なさげで、もらったお金は害児のところまでわざわざ  
来て  
返しにきた。

アッチラは無駄骨だが、大得意だった。

アッチラは善い人に対し、いかに自分が善人か語った後、機嫌よく  
酒を



飲みどこかへいつてしまった。

害兇のところにお金が集まってるということを聞いたガスはさては  
と思い

、大急ぎで善い人の家に向かった。

「この大盗人めが！我輩の金を返せ！」

善い人の家の前には金がうず高く積みあがっていた。

「これは我輩の金だ。誰にも渡さんぞ！」

ガスは見苦しく金を拾い集めていた。

善い人がそれを見て一緒に手伝った。

害兇はもはや何も言うことはなかったが、しかし言うておかねばならないことがあつた。

「ガスさん。一ついいたいのですが、わが国の自治権が危うくなっています。

お金を溜め込んでばかりいないで、武器でも買っていただきたいのですが。」

「うるさい！何を抜かすか、この盗人め。なぜ下民の分際で王たるこの  
我輩を対等の口を聞こうというのだ。」

「……。」

「おじけづいたか！」

「ともかくこれ以上危なくなると結果的にあなたの大好きな商売もできなくなりそうですよ。」

「ふ、ふん！我輩はガ流である。その程度なんともなるのだ。」

ガスは金を集めてそそくさと去っていった。

「やれやれ、困った人ですね。」

とはいうものの、害児のわがままも日に日に強くなってきて、害児はすぐ

駄々をこねて床に転がるので、それを見た善い人が、

「ああまた落ちちゃった。」

とかいいつつ車椅子に戻す日々であった。

害児は害児で、ずっと放置されていると、

「早く車椅子に乗せろお。」

と大声でわめき始めるので仕方なく、善い人がタンクが車椅子に戻してやるのだった。

どうあってもこのままではすまないだろう。この生活はいつかきつ

と破綻  
するに違いなかった。

## 第二十幕 戦いの鼓動（前書き）

ゲームのほう更新したようです。

今穀潰しの絵を描いてもらっているようで、近々出てくるみたいです。

それとニコニコ動画で、ゲームの様子が取り上げられていましたので、よければそちらへも足を運んでみてください。

おそらく世紀末善い人伝説で検索すれば出てきます。

## 第二十幕 戦いの鼓動

「私はもう戦いたくはないのです。」

過去害児は、歴戦の戦士だった。

この国は広大だ。世界が終わる前から戦争をしており、それは世界が終わった後にさえ続いた。

なぜ世界が終わったのか。それは核爆発だといわれているが、真相には

テンマ・トキトが関わっているというのが専らの噂だ。

今の世界に核はない、人口も減り、人々が争うことがほとんどなくなった。

世界崩壊の前は、国際会議が多く開かれ軍縮などをしていたが、崩壊後

はほとんど意味がなくなってしまった。

テンマは、闘争をもたらすために、世界を崩壊させたが、実際起こったことは協調であった。

ともかく害児の地域は変わらなかった。

害児は世界崩壊後、独立し、戦争地帯の国々を敵に回した。

これらの国は害児の裏切りを許さなかったが、害児の力の前に沈黙することになった。

その害児であるが、父親が総大将であり、軍を抜けるかわりに足を失うことになったのだ。

「軍を抜きたいといったのか？」

「そうです。これ以上私は戦いたくはないのです。」

「例の核の汚染の影響か……。しかしお前は我が軍の柱、脱退を許すわけにはいかな。」

「……。」

「分かった。私とて將軍である前にお前の親だ。願いをかなえるチャンスをやってもいい。」

「え？」

害児は信じられないという顔をした。この人から親などという台詞がでてくるとは……。

「私に勝てたら、願いを聞いてやろう。どうだ？」

將軍は、その体軀2mもある体の背中から背負った二刀の大剣を引き抜く。

「何を言っておられるのですか？」

害児はわけが分からなかった。なぜってまともに戦えば、害児が勝つことは

目に見えてるからだ。

害児がこの当時どれほど強いかというと、テンマと戦って拮抗するくらいとい

えば分かりやすいだろうか。

「何故呆けている？構えよ。」

「本気でやっていいんですね？」

それを聞き將軍は大声で大笑した。

「わっはっは。お前が本気を出したらわしなど3秒も持たんよ。」

「え？」

害児は父の真意がつかめずとまどった。一体どうということなのか。

「もちろん手加減してもらおう。当然だろう？お前は勝手に抜けるわけで

その上わしに怪我を負わせるつもりなのか？

つまりお前はわし程度に負けるほど、弱くとても軍人は務まるまい。どうだ？分かったか？」

「は、はい。」

「では構えよ。」

手を抜けといわれても、どうしたらいいのか、おそらく父は適当に自分に

怪我を負わせて、それでうまくやってくれるのだろう。

この人も人の親なのだと言児は感動した。

「言っておくがわしは本気でいくぞ。でなければお前に傷を負わせること

などできないであろうからな。

・・・逃げるなよ。」

そついうなり、殺意のこもった本気の一撃が害児に降り注ぎ、害児はその

あまりの殺気につい、体が反応してしまった。

害児に降り注ぐ左の刀の縦振りを、幻術でそらし、右の刀の攻撃を、手のひら

で受け流した後、將軍の懐に入り、攻撃の態勢に入る。

簡単に懐を取られた將軍は、ふっと笑い両手を上に上げた。

その表情を見て害児はすんでのところで攻撃を止める。

次の瞬間すっころんでいた。



何が起こったのか、害児も人である以上いつでも冷徹な判断が下せる  
とは  
限らない。

このような混乱した状況の中、肉親の情もあり、体の自然な反応と  
いうもの  
ある。

ともかく害児は技を使うまでもなく、足を切られた。

前に崩れ落ちる害児を、將軍を抱きとめると見えたが、害児の体  
向かって  
発勁を放った。

害児は、ゴムまりのように後ろに吹き飛び転がっていった。

將軍は鈴を鳴らして兵士を呼んだ。

「はっ。 お呼びでしょうか。」

將軍は害児のほうを指差しこういった。

「そこのごみ虫を外に捨てておけい。」

そういうとマントを翻す。

「待て。」

害児がそう呼び止めるが、声にならない。 のどもやられてるようだ。

内臓にもかなりのダメージがある。技が使えなければいくら強くても害児は人なのだ。

善い人や穀潰しとは違う。

しかし害児は叫んだ、魂のそこより叫んだ。

「ここで私を逃すと後悔するぞ！ここで殺しておけ！でないと次あったとき

死ぬのは貴様だ！」

なにやら口をパクパクしてる害児を兵士たちが担ぎ外に捨てていく。

その様を皆の上から見下ろしながら將軍を笑っていた。

「そうでなくては、悪魔の末裔ルシファスは名乗れんな。魔人ルファよ。

いずれわしを食うか、食われるか。」

害児は、したからギリリと將軍をにらむ。

將軍はまた兵士に言いつけた。

「おい。あそこにいるごみ虫を、とつとと追い出さんか。早く大砲の準備をせよ。」

「ははっ。」

害児に向かって砲撃が加えられる。そこで害児は意識を失った。

後どうなったかは分からないが、なぜか害児は生きていた。

「ふっ、つまらない昔話ですよ。ただそのことがあったからこそ今の私

があるわけです。」

「ふーん。確かにものすごくどうでもよくてつまらない話だね。」

「私には凄く悲惨な話に聞こえるのだけど。」

害児は善い人とタンクと食事を取りつつ、気取ったポーズで昔話をしていた。

どうだい、壮絶だろうといわんばかりだ。

「しかし、そろそろ軍も動きかねない現状ではあります、ヒノキの村の統治

状況が芳しくありません。

ガスさんは儲けるばかりで、あまり村の維持のことを考えてないようですね。」

害児の心配していたとおり、軍の連中は、害児の引退を知り、ならばまた軍に戻ったらどうだという話をしていた。

害児の後継者のガスのやり方も彼らには不評であった。

おかげで彼らは損ばかりしているのだ。

「將軍、どうですか。娘さんを軍に戻しては、彼女がいれば戦力になります。」

「それができればベストであろうな。どうやら人形遊びにも飽きたよう。」

あるし、また軍に復帰してくれば我が軍にとってこの上ない喜びだ。」

「ははっ。將軍。ルーファさんが復帰したらやつの後継者のなんといいましたか。ガス何チャラなど一瞬で蹴散らせますぞ。」

「いやいや、それよりも將軍も人の親だ。娘さんが戻られるというのはうれしいことに違いないうて。」

將軍はそういわれてにやにやしている。

「まったく諸君の言うとおり、わしも人の親として娘には手元に戻つても  
らいたいところだ。」

とはいえ、ただの愚痴のいいあいだ。害児に戻ってほしいころはそれは確か  
だろうが、どちらかというとガスの横暴に腹を立ているだけだ。

害児の国、朝日の国というのだが朝日の国は、はじめは小国であったが、  
今は大国となっている。

現状にそこまで不満があるわけでもなかった。

ただ害児の軍の復帰を本気で実行しようとした男がいる。

かつて害児を崇拜していた男、名を騎士竜という。

今回の騒動は、彼がヒノキ村に来たことから始まった。

騎士竜来襲のほうを、昔の部下から受けた害児は、憐れなほど取り乱した。

きっと自分を連れ戻しに来たに違いないと思った。

はつきりいつて、騎士竜は今の害児より強い。

「まずいですねえ……。これはまずい。とんでもない事態となつてしましました。」

しきりに善い人のほうを気にしつつ、やや大きめ声で独り言を言う害児。

もちろん善い人が気にかけるわけなので、仕方なくタンクが対応することになる。

「どうしたの？」

「どうしたですって！よくもそんなことがいえたものですねえ！ええ？」

この非常時に！」

「そんな非常時だったんだねえ。」

「そうですね！まったくのんきなことです。このままでは私は終わりです。

破滅なんですよ！この私が！なんということだ！」

害児は善い人のほうに近寄り、善い人が漫画を描いていたペンを奪いつつ

吼えた。

「善い人さん、私が困っているのに少し態度が冷たいんじゃないですか？」

善い人は迷惑そうな顔だ。仕方なく違うペンで漫画を描いているとそのペンも奪われた。

「もう我慢ならん！」

善い人はそんなにペンがほしいならくれてやるといわんばかりに、残っていたペンをすべて害児に投げつけた。

「ひい！」

害児は車椅子をこきこきさせつつ逃げ出した。

その後害児はそわそわと落ち着きのない様子で、数日がたった。

「やつは歩きですからね。決して乗り物など使いませんし、走る事だってないのです。ポリシーがどうか言っていましたけど・・・、それにしても本格的にまずいことになってきました。」

騎士竜はいわば勝手に動いたのだが、それに乗じて軍の連中も、ガスへの攻勢を強めた。

ガスとの会談を設け、ガスを集中攻撃した。

ガスは皮肉なジョークでやり返したが、いつの間にか兵士に囲まれており、幽閉されてしまったのだ。

「まったくなんというつかさ！ガスさんほどのチキンがどうしてむざむざ

あんな見え透いたわなに・・・。

と、ともかく今はそんなことより、騎士竜への対処です。

いいですか、善い人さん。これは我が村始まって以来の危機であり、善いことをする絶好の機会なんですよ！」

「善いこと？でもなんかくでもないことのような気がするなあ。」

「とんでもない！私の言うとおりにすればいいのです。これを見てください。お手玉です。」

これで善い人さんに修行をつけてあげます。

今のままの善い人さんでは、騎士竜には勝てません。」

害児はお手玉をたくさん使って、善い人と特訓をした。

時々善い人が切れて、お手玉を害児にぶつけ、害児も激昂し、お手玉を投

げ返す、という意味も無残な見苦しい振る舞いをする事になり、せつかく

の修行のあまり意味がないような感じであった。

そもそもお手玉でどう修行しようかというのか疑問であり、これは害児の

単なる現実逃避に過ぎなかった。

そんなことに付き合わされる善い人はいいい面の皮である。

そしてとうとう騎士竜がやってきた・・・。



## 第二十一幕 前哨戦

話は少しさかのぼる。

穀潰しは、ガスがいなくなってから、ガスの店にあがりこみ、そこを我が物としていた。

突然ガスが消えたことに関して何の疑問も抱かなかったようだ。

これ幸いといわんばかり転居した。

そこで、穀潰しは、穀を潰しつつごろごろしていたが、なぜか大量にあった

穀が全部消えてしまった。

もちろん穀潰しはこれはいやみ博士の仕業だと考えた。

でなければどうして一夜にしてあれほど大量にあった穀がつぶれるのか。

穀潰しは怒り心頭に達したが、だからといってどうすることもできない。

「ひゃっはー！汚物は消毒だぜ！」

穀潰しは景気づけにガスの家を吹き飛ばした後、地下の入り口を防ぎ、家を後にした。

廃墟街をぶらぶらしてたが、最近はどうも居心地が悪い。

何かあったのかパプのマスターに聞いてみることにした。

「ええ？おまえ知らないのかい。最近首領が変わったのさ。」

「そうなのか？首領は害児のやつだろう？」

「ところがそうじゃない。ガスとかいう間抜けに変わったのさ。おかげでこっちは商売上がったんだ。」

マスターはケツつと言い放ち押し黙った。

「そいつはそんなに評判が悪いのか？」

「悪いなんてものじゃないのさ。やつが首領になってからというもの、町のごろつきどもはいなくなるし、税金は跳ね上がるし、いいことがねえさ。」

「そうか。そいつは問題だな。」

「ああだが・・・胸糞悪い話だが、中心街にいる連中はかなり発展してるっていう話だぜ。」

でも考えてみるよ。そんなに発展してなんになるってんだ？そりゃ俺たちはある程度の商売を求めてここにやってきたところはあるぜ。

ここには闘争も自由もあるからな。

だがだからってなんで、今になってそんなに必死に働かなきゃならない？

ガスってのはとんだ大泥棒なのさ。」

「泥棒ってのはどういう意味なんだ？」

「だってそうだろう。俺たちの時間を奪いやがる。しかも最近聞いた話だと

軍事国の連中を抑えてないらしい。

もうここも終わりがちな。穀潰し。悪いことはいわねえ。お前も少し考えたほうがいい。」

「なるほどな……。確かにお互い今後のことを考えないといけねえみたいだな。」

穀潰しは席をたった。

このマスターの言ったことは事実であった。町にごろつきがいないため穀潰しはその日の食料に困った。

ある日穀潰しがとぼとぼ歩いていると、車が煙を上げて近づき、穀潰しに

思いっきり煙をかけてきた。

「じほつじほつ……。なにしゃがる！」

「ん？何だごみ虫がいたか。これはすまなかった。それ駄賃をやる。

「

車に乗っていたのはもちろんガスで何かを投げようとしたが、その動作を

途中でやめ、穀潰しの顔をじっと見た。

「どこかで見た顔であるな……。はて誰だったか。」

「お前ガスじゃねえか！ちょうどよかった。穀潰させろよ。」

穀潰しは、汚い身なりで車に乗り込もうとした。

ガスはその様子を見て顔をしかめる。

どこからか妙な男たちが沸いてきて、穀潰しの前に立ちふさがった。

「こらこら、貴様、ガス様の車に何故乗り込もうとしてるのだ。」

「何だてめえは、ぶつとばされたいのか？」

そこでガスがぱっと思いついた。

「ああ！」

ガスはパンツと手をたたいた。

「誰かを思えば穀潰しではないか。我輩は忙しい、お前みたいな暇人と付き

合ってる暇はないのだ。」

「なにいつてるんだガス。いいから穀くれよ。」

「ああ分かった分かった。ほらっ。くれてやる。」

ガスは穀潰しに向かってパンを投げてやった。

その後、もう用はないといわんばかりに車をふかし、また穀潰しに向かつて

煙をかけた後去っていった。

「もぐもぐ・・・うまい。」

穀潰しはパンを食べながら思った。

ガスのやつうだつがあがってよかったな。今まで散々だったものな。

こんな目に合わされたが、穀潰しは友情に厚いようだ。今まで散々助けられた経緯もある。

穀潰しは、しかしここで食料を得るのは難しい以上移転を考えないといけなくなつた。

穀潰しの性格上まじめに生きていくのは難しい。

それでいて悪に徹してるわけでもない。

はっきり言って穀潰しがこの地域以外で生きるのはかなり難しかった。

かといってここにも仕方がない。

ガスはガスで穀潰しのことをおぼろけながら思い出していた。

「そういえばそういう男もいた気がするな。おい、部下。」

「なんだ？」

いかにも柄が悪い男がのそのそをちかづいてきた。

「パンの袋でも定期的にとどけてやれ。廃墟街のなんと言ったか。サイキッカー崩れの……。」

「穀潰しだろう。ガス様とは昔仲がよかったみてえだがな。結構有名なやつだぜ。」

「ああそれだ。そいつに届けてやれ。」

「へへっ……。」「

「何がおかしいか？」

「いや珍しいこともある。ガス様が一銭にもならねえことをするなんてな。」

雪でも降るんじゃないか。」

「愚民が口答えするな。さっさといくのである。」

「へいへい。」

ガスは次の瞬間そのことは忘れて、忙しげに何か別のことをしている。

その様子を見て部下は独り言を言った。

「本当に珍しいこともあるもんだな。あのガス野郎にもちよつとは人間らしいところが残っていたって事か。」

なにはともあれ、穀潰しはそのパン袋のおかげで、だらだらとした生活を続けることができた。

それから数ヶ月がたち、穀潰しは公園でパンを食べ水を飲んでいたところ、落ちていた新聞が目に入った。

そこには、ガスが捕まったと書いてあった。

「軍人が相手か。」

さすがの穀潰しでも、正規の軍人相手はつらいものがある。

サイキッカーといっても、殺し合いに関しては素人だ。

穀潰しは穀を潰し終わるとゆっくりと目的地に向かい歩を進めた。

「なにをするかー！我輩は王であるぞ！こんなことしてただで済むと思うなよ！」

ガスはいきり立ち怒りをあらわにし、周りにいる見張りを怒鳴りつけるが、見張りは無視してる。

ガスは鉄格子の中に閉じ込めれていた。

一週間目。

「おい、そのゴミ虫。我輩と取引をしないか？いい話だと思うぞ。」

ガスは、必死になって見張りに話しかけるが、見張りがそれに応じる気配はない。

十日目。

「ぶつぶつ・・・ぶつぶつ・・・。」

ガスは鉄格子の中を徘徊し、独り言をつぶやくようになった。

二週間目。

ガスはぼーっとしており、その表情には何の感情も浮かんでいなかった。



しかしそこでガスはふっと意識が戻った。

「な、なんだ。我輩の重装備はどうした？何で我輩がこんなところにいるのだ？」

気づくと、ガスの自慢の重装備がどこにも見当たらなかった。

しかも、なぜか牢屋の中にいる。

ふと頭が重いのでさわってみると、なぜかガスは王冠をかぶっていた。

「な、なんだこりゃ？どうして我輩がこんなものを？」

ガスはとりあえず王冠を床に置き、赤いマントぬいでたたみ、床に置いた。

そこでまた一つ気づいた。どうやら自分は幽閉されているようだ。

その証拠に、兵士が自分を見張っているではないか。

ガスはだんだんと思い出してきた。害児に成り代わっているいろいろなこと、まるで夢を見ていたような感覚であった。

「権力というものは怖いものである。我輩は今回の件でよく分かった。」

さて、とガスは考えた。状況は芳しくない。

何かあったかと持ち物を確認したが、危ないものはすべて没収されたようだ。

といつてもガスには奥の手がまだいろいろと残されている。

胃の中にカプセルがまだ残っていたはずである。それさえ出せればこんなところ・・・。

ガスは、自分の手で腹をしたたか殴り、逆流させカプセルを出した。そのカプセルを解放させれば、つまり自分以外の兵士はしびれて動けなくなるはずだ。

ガスしかわからない調合で作っている、例え軍人といえども効く自身ガスにはあった。

さてそれで兵士はダウンしたわけだが、この鉄格子が問題だ。

何かないかとガスは探したがなかなか見つからなかった。

ガスはかつての自分を恨んだがどうにもならない。

そういえば・・・とガスは自分の頭髪を抜いた。

その頭髪はぐんぐん伸びていく。

「このワイヤーが残っていてよかった。やはり用心はしておくものであるな。」

鉄格子をワイヤーで切る作業をしつつ、ガスは装備の点検をしたが、ろくなものが残っていなかった。

とりあえず兵士が持っていた装備を装着したが、こんなものではないとも

この要塞を突破することはできまいと思った。

「ガストラゲタともあろうものがなんとというざまであるか。」

ふとガスは穀潰しのことを思い出した。

しかし穀潰しといえども無理だろうとも思った。

自分がここに閉じ込められていることを例え知っていたとしても、軍人はそんなに甘い連中ではない。

ガスは元々武士だったのでその辺はよく知っていた。

「とにかくある装備でなんとかやりくりするかしないな。」

薬品などがある部屋にたどり着ければ後は何とかなる。

それまでが勝負の鍵であった・・・。

害児は騎士竜の襲来を恐れ、ひたすらわめく日々であった。

そんな害児を変える出来事があった。にわかには害児の元部下たちが害児を  
たずねたのであった。

害児はいぶかった。

「どうしたのですか。あなたたち。今の主人はガスさんでしょう？  
何故ガスさんを助けに行かないのですか？」

黒服たちはみなうつむいていたが、ぽつぽつと事情を語り始めた。

ガスは新しく雇ったごろつきばかりを重宝し、自分たちをないがし  
るにすること。  
こと。

功は認めず罪ばかりを責め、自分たちを見かけるたびに罵声を浴び  
せること。

今回でいえば、黒服たちはガスのお供をしようと申し出たが、ガス  
はおまえ  
たちはがなんの役に立つといわんばかりにふんと鼻を鳴らし、手で  
あしらった  
。

それでいて、自分が捕まってしまえば、どうして自分を助けなかつ  
たと  
なじるのだ。

たまったものではない。

害児はその言葉を一言も発せずじっと聞いていた。

「私たちの首領は首領だけです！首領！また首領に戻ってください！」

害児は嘆息しやがてこういった。

「みながそこまで言うのなら、これは天命というものです。どうして

私一人が天意に逆らえましようや。」

「それでは・・・！」

「はい。私は首領に復帰しましょう。」

「おお・・・。首領万歳！」

首領万歳とみなが狂喜した。その中にはなぜか善い人とタンクも混じっていた。

つまり徳のある人物は結局のところ、いかに地に伏していても、時代がそれを認めないという実例といえよう。

「しかし喜んでばかりもいられません。」

害児は善い人らをつれて、居城に戻った。

ガスの居城は取り壊され、元の歪な形の害児の城を工事していると

ころで  
あった。

こついう日が来るであろうと、工事する準備はいつでもできていた  
ので、

まさに電光石火の技であった。

害児はそれを当然のごとく受け入れ今に至る。

「情報によると穀潰しさんが連合軍の砦に向かったようですが、い  
くら

穀潰しさんでも、連合軍相手に突破できるとは思えません。

これについて何かよい策はありませんか？」

黒服たちは喧々諤々、さまざまな案を出したが、その中でこれとは  
思う案が  
あった。

「今、騎士竜様と将軍が共に日の国には不在です。はっきりいつて  
日の国は

騎士竜様で持っているといってもよく、装備や兵器は貧弱です。

つまり今は日の国は丸腰同然、そこをほかの国々に説くのです。

そうすれば、連合軍は日の国を攻め、騎士竜様は国に帰らざるを得  
ず、

また連合軍は、自然に消滅し砦を落とすことは容易となります。」

その言葉に別の黒服は大いになじった。

「つまり汝は、首領の故郷が攻め滅んでもいいといわれるか！」

「そうはいつておらん、しかし現状ではこれが最上の策だ。古の何とかはどうたらこうたら・・・」

害児は一通り黒服たちの話を聞き流した後こういった。

「先ほどの黒服の話、まったく私の考えと同じです。」

「では？」

「あなたたちは各国を説く使者になってもらいます。皆は善い人さんが直々に攻めましょう。」

善い人は、ピクリと動いた。

「善いことをするってことだね。」

「そういうことです。もちろん私もお供します。」

善い人様と首領なら間違いあるまいとみなは頷きあった。

頷きあいはしたが、騎士竜のことだけが心配だった。昔の害児なら遅れを

とらないだろうが、足がないことを考えると、不安はぬぐえない。

「騎士竜様の動向だけはくれぐれも注意してください。」

「大丈夫です。やつは馬鹿ですから乗り物を使わないのです。ですからその歩みも遅いでしょう。」

「さすが。首領の智謀は神の領域です。」

黒服たちは害児を慕うこと数倍した。

さて、穀潰しだが、すさまじい銃撃の嵐に見舞われ、さすがに攻めあぐねていた。

「ぐおおお・・・この俺は不死身だー！」

銃弾を編みながらランダムスフィアを使い、一角を崩すがあまり意味がない。

敵は遠巻きに銃撃をするだけであった。穀潰しがデーターにない高位の

ネームもちと警戒したのだ。

サイキッカーの最大の強みは機動性にある。テレポートこそサイキッカーが強いとされるゆえんだ。

連合軍にもサイキッカーはいたはずで穀潰しがテレポートが使えないということを知っている者もいるはずだが、軍の方針に従っているようだ。

彼らの大半はサイキック組織の傭兵で、仕事以上のことをする気はないらしい。



やがて、陣がざわめいた。連合軍を指揮する将軍はうるたえた。

なぜならほかの国の指揮官たちが国に急変が起きたから帰るといいだしたからだ。

「どうしたことだ。これは害見めが何らかの策を施したに違いない。」

このような大規模な策をうてるのは、大陸の軍人以外なら害見しかない。

さすがに将軍は慧眼であつたが、その策の全容はまだつかめていない。

穀潰しは、いきなり連合軍が次々とあらぬ方向へ進むのを見て啞然とした。

「どうなつてやがる?」

穀潰しの後ろからその声にこたえるものがいた。

「これが王者の徳というものです。私の徳に恐れ入って軍を引いたのでしょうか。」

穀潰しは背後のいきなりの声に驚いて振り返った。

とたんに苦虫を潰したような顔になった。

「お前ほど、王者の徳から遠い人間はめつたいねえよ。」

「これは痛烈な。私たちは援軍に来たといっていますのに。」

「援軍か。だがな。お前がやったのは、本軍まで崩すことじゃねえだろう。」

現にほかの国軍はひいていくのに、日の国の軍だけとどまっていたぜ。」

穀潰しにそういうことを見る目があるのかと害児は敬服した。

「そのとおりです。よく見ました。」

「ああほら見てみる。日の国の軍のやつらまるで死人みたいになってやがる。」

穀潰しのいうとおり、なぜか砦から人が押し寄せるようにしてでてきており、

その大半がよろよろとおぼつかない足つきだ。

「確かに……。これは不思議ですね。」

「どういうことが分かるか？」

「私の徳に参ったのでしょうか。」

後ろにいる黒服たちは、その声に大きく頷いた。

しかし善い人だけはひそかに、自分があまりに善い人だから、悪人

「私たちは」

「つそり善い人になつたに違いないと考えていた。」

「あほか。あれはガスの仕業だぜ。つまり今が好機ってことだ。」

「なるほど。ガスさんもなかなかやる。」

「ああどうやら俺ががんばる必要もなかったみたいだな。俺はもう帰るぜ。」

「いや、穀潰しさんに頼みがあります。」

いつにない害児の真剣な様子に穀潰しは、怪訝な顔をした。

「もう問題はないだろう?」

「いえ、本当の敵はあんな雑魚たちではありません。騎士竜です。騎士竜は私を連れ戻そうとしているのです。何とかしてください。」

「俺に何の関係がある?」

「あなたにはずいぶん恩を与えたつもりですが・・・。」

「そんな覚えはねえな。」

「この私がこれほど頼んでいるのに?」

「ならなんだ?また暴力か?暴力でいうことかせよってのか?」

「害児はためいきをついた。」

「あなたは私を誤解しているのです。私は人を殺すのがいやでここまで逃げてきたのです。私はもう軍に戻りたくないのです。」

「おい、ふざけるな。虫が良すぎるぜ。日ごろ人を散々馬鹿にしておいてよ。」

お前がどうなるうが俺は知ったこっちゃねえぜ。ざまあみろ。」

穀潰しはその言葉を最後に去っていった。

善い人はその穀潰しの背中に目配せしつつ害児にこういった。

「穀潰しは油断している。ここは善人の力を思い知らせないといけない。」

「いやいいのです。あの人もかわいそうな人です。それに今は、もっと大きな

悪を倒すチャンスです。そうでしょう?」

「それもそうだね。あんなのに構ってられない。」

害児は後ろを振り向き鼓舞した。

「さあ、決戦です。大将を倒したものには褒美がたんまりですよ!」

集められた連中は、サイキッカー、善人組織の組員、悪人、ごろつき、

ロボットなどさまざまであった。

大半の連中は無理やり連れてこられた連中で、迷惑そうに顔を見合  
わせる

だけだったが、目をぎらつかせているものもなかにはいる。

害児の軍は、いきなり日の国の軍に突撃した。

日の国軍に応戦する力はなく、たちまち逃げ出した。

その際に、空砲を放ち、害児の軍の半分以上はそれに驚き逃げ出し  
た。

それに逃げ出さなかった主だったものは、ビルで善い人と戦ったり  
ーダー各

の男と、その主人の悪人のボス。

さらにドラゴンは頭を抱えて逃げ出し、山賊になった隣町の元領主  
は意気揚々と

部下を従え突撃した。

タンクは、戦車形態になって突撃したが、穴にはまって動けなくな  
った。

アキラは、逃げ出しはしなかったものの、後ろのほうで戦っている  
振りをして  
いた。

アツチラも半乱狂になり、突撃した。

ハエはいうまでもなく無双の働きだった。

善人協会の組員、指揮官、補佐官は途中までは大声を上げて突撃したが、

やがて足が止まり、その場に座り込んでしまった。

無理もない、彼らは善人協会とはいえ民間人なのだ。

廃墟街の悪人たちも、ひゃっはーとか言いながらバイクを乗り回していた。

があまり意味はなかった。

害児は声を励ましみなを鼓舞した。

「それ！赤いマントをつけているのが將軍です！」

將軍はそれを聞き、あわててマントを脱いだ。

誰かがをそれを見て、マントを脱いだのが將軍だと叫んだ。

將軍は目立たぬように顔を布で隠すと、顔を布で隠したのが將軍だとまたどこからともかく声がした。

將軍は、生きた心地もしなかった。

「將軍の背は高い。一番でかいのが將軍だぞ！」

致命的なことがばれてしまった。確かに將軍は規格外のかさだ。

やがて將軍は追い詰められた。

「善い人さん。ここは私にやらせてください。私は彼に借りがあるのです。」

「害児さん、いいことを独り占めにするのはよくないな。」

他の害児の兵隊たちも不満げな顔だ。これではがんばった意味がない。

「お願いします。」

害児は頭を下げた。どこかで土下座しろーという声が聞こえた。

害児は一瞬で顔を上げ声のしたほうを見た。

アッチラはみんなの背後からその言葉を発したのであるが、害児と目が合い、  
うずくまって震えてしまった。

害児はあやつ・・・！と思い小さな声で、

「顔は覚えたぞ。」

とつぶやいた。

善い人は仕方なく害児に功を譲ることにした。

「害児さんにも善い人になるチャンスをあげよう。でも特別だよ。」

善い人は清水寺の舞台から飛び降りるような思いで、そういった。

「ご温情感謝します。」

害児は將軍と相對した。

「父上。何年振りでしたか。」

將軍は、害児が一人で戦うと見て、にわかに生氣を取り戻した。

「やあ、我が娘。ますます女ぶりをあげたではないか。」

將軍は努めて明るくそういった。最早この一時をしのぐには、害児をどうにかするしかない。

「両足がなくてですか？」

害児は皮肉った。

「その程度でお前の魅力は色あせるどころか、さらに引き立てているのではない

か。それになんといつてもわしがはかったおかげで、お前は軍から抜けた

ということ忘れてはなるまい。そうであろう？」

「それにしても少しやりすぎなのではないですか？」

「それくらいでなければ、みなが納得しなかったのだ。仕方ない措置だ。

わしは心の中で泣いたがあえて鬼となったのだ。」



「その結果が、足のなくなった私に、発勁をうちあまつさえ砲弾を浴びせる

ことであつたと？」

「わしはお前を信頼してたのだ。」

「私は危うく死ぬところでした。今ですらどうやって生き延びたかわかりません。」

「過去のことでいがみあうのはよそうではないか。わしはお前が生きていてと知ったとき心底ほつとしたのだ。」

「ぞつとしたの間違いでは？」

「いや聞くがいい。わしはあれから毎日祈った。娘を無事を。天に誓つてもよい。」

害児はあきれ果ててものが言えなかった。この父が祈るなどということをするわけがない。まして自分のことで祈るなどどう考えてもありえなかった。

「呆れてものが言えませんか。」

「しかし事実だ。国のものに聞いてもらえば分かる。」

「では今から諜報しましょうか？すぐ分かることです。」

害児は將軍の顔色が変わるだろうと思ったが、予想に反して顔色は変わらず、  
將軍は真剣そのものだ。

害児はそれを見て多少心が揺らいたが、これも父の手だろうと思いとどめた。

「どっちにしろあなたはもう終わりです。」

「そうか。やむをえないことだ。しかしお前に孝子としての心が少しでも残っているのならわしの最後の頼みを聞いてくぬか？」

「いつてごらんさい。」

「つまりお前との勝負にわしが万が一勝てたら黙ってわしを解放してほしいのだ。」

「万が一でも私に勝てるとでも？」

「思っではないが、それでも戦争は何が起こるかわかるまい。」

害児はその言葉を聴き内心笑った。例えここから生き延びた国に帰ったところ

でその国はもうないかもしれないというのに。

「いいでしょう。ならもう話すことはありませんね。行きますよ。」

害児は銃を構えた。

それを見て將軍はにんまりと笑った。あんなものに頼った戦いでは自分でも害児に勝てるかもしれないと思ったからだ。

それに足が使えなければ、彼らが使う技はその威力が半減どころか、無効化してしまう。

足が大地とつながっていることが、彼らの術の第一条件なのだ。

逆を言えば、そのことを考えて將軍は過去害児の足を真つ先に奪つたともいえる。

それに彼の嫉妬が絡んでいたのかどうか今となっては知る由もないが。

しかしその見識はすぐ覆された。

害児の放った銃弾が、軌道をまげて將軍に向かってきたからだ。

いつの間にか幻術をかけられていたということで、これは紛れもなく彼らの使う技だった。

將軍は冷や汗をかいたが、この程度ならどうということもないと思っ

彼は足をふるに使い、害児に幻術をかけ、間合いをごまかした。

すなわち、10mも離れていると思った間合いが、いきなり害児の背後をとり

大刀を振り落としたのだ。

害児はその攻撃を銃で受け止め、そのまま発砲した。

攻撃が読まれていたことに焦った將軍はそれでも、もう片方の大刀で銃弾

を防御した。

害児の車椅子が火を噴き、空中に浮かぶ。

そして、空中から多数の爆弾をばら撒いた。

一気に勝負をつける気だな。

將軍はそう思った。このような範囲攻撃に彼らの技は弱い。

とはいえ將軍も達人だ。手にした銃で爆弾を次々を空中で爆破させた。

よしまずまず防いだと將軍が思った後ろに気配を感じた。

「まさか・・・。」

害児は空中から幻術をかけた。ありえないことだった。

「天才とはお前のことだな。さあやるがいい。」

將軍は大刀を捨てて手を上げた。

「同じ手に引つかかるとでも？」

「なにを言っているのだ。私はもう降参だ。好きにしたらいい。」

とはいえ害児はどうしても、父を撃つことはできなかった。それに害児はもう

殺しはしないと決めたのだ。

害児の殺意が消えたのを感じた將軍は、懷からナイフを取り出し、害児の体突き刺した。

と見たが、それは残像だった。

「あなたは一生そうしていきればいい。」

害児はすでに、遠いさなかにいた。

そのまま去ろうとする害児に、みなは不満げな顔を向けた。

リーダー格の男は我慢ならず害児に文句を言った。

「おい。害児さん。俺たちは儲け話があるって言うのであなたについて

きたのだ。それなのにあなたは俺たちの手柄を取ったばかりではなく、

敵の大将を何もせず返すというのはいったいどういう見なのだ？

俺たちはあなたを笑わすためにいる道化師ではないのだぞ？」

「さえずるな。ゴミ虫が。」

「ぐ・。。」

リーダー格の男は口をつむんでしまった。

害兇軍は勝ったというのに落ち込み気味に、帰っていった。

それを見て將軍はほくそ笑んだ。

「馬鹿な娘よ。だからお前は弱いだよ。わしに恥をかかせおって、今に見て

おれ。」

將軍は意気揚々と国に帰っていった。

## 第二十二幕 一人軍隊

穀潰しは、とりあえずヒノキ村に帰ることにした。

ガスは探さなくてもたぶん無事だろうと思ったからだ。

穀潰しが、道を歩いていると話しかけてくる男がいた。

「その君、ちょっと待ってくれ。」

「あ？なんだてめえは。ぶつ潰されたいのか。」

穀潰しに睨みつけられた男は、意に返さず写真を見せてきた。

「僕はこの人を探しているのだが、君に見覚えはないかい？」

害児の顔だった、しかし今より多少若いようだ。

「ああ知ってるぜ。害児のやつだな。知らないやつのほうがおかしいだろ。」

で、それがどうかしたのか？」

「どうやらこの辺りの人間は、彼女がいる場所が分からないようなんだよ。」

もし君が彼女を居場所を知っていたら教えてほしいのだが。」

そこまで聞いて穀潰しはぴんときた。

「騎士竜だな？」

そういわれて男は少し驚いた。

「異国のことまで知ってるのか。君はこの辺りの住人だろう？」

「いや、てめえのことなんかしらねえぜ。ただ害児の野郎から聞いただけだ。」

「ということは彼女の居場所を知ってるのか！ぜひ教えてくれ。」

「確かに俺は害児の居場所を知っているが、てめえに教えるいわれはねえな。」

穀潰しは別に害児の味方ではないが、目の前の男が妙に気に入らなかった  
ので、いじわるをした。

「困ったな……。ああそうか。すまない。忘れていたよ。」

騎士竜は、ポケットから紙切れを取り出し、それを穀潰しの目の前に差し出した。

それを見て穀潰しは、怒りのあまり震えだした。

「なんのつもりだこれは？」

「君たちのような人種はこういうものが好きなんだろう？  
ほら、遠慮せず受け取りたまえ。」



「その汚いものをしまえ！」

「え？」

「早くしまえといってるんだよ！てめえ何様のつもりだ！」

騎士竜は心底すまなそうな顔になり、金を引っ込めた。

「すまない。悪気はなかったんだ。まったく君という人物を見損な  
つて  
いた。」

「けっ。ともかくてめえに話すことなんざいつこもねえってことだ。  
分かったらさっさとあっち行きやがれ！

ほれ、散った散った。」

騎士竜はやれやれという顔をして、去っていったが振り返ってこう  
いった。

「気が変わったらまた教えてくれ。僕はしばらくここらを歩いてる  
だろうから  
。」

「ふんっ。」

穀潰しはその言葉を無視して、去ったが、どうも騎士竜が気に入ら  
なかった。

あの態度は無意識だろうが穀潰しからしたら反吐が出るものだった。

（害児のやつに肩入れするわけじゃねえが、それにしても、やつの話は悲惨だったな。よし、ここは俺が少しあいつを懲らしめて黙らせてやるか。  
。）

いわば気まぐれだった。騎士竜からしたらいい迷惑だろう。

穀潰しは、騎士竜を探し出しこういった。

「おい、気が変わったぜ。俺はお前をぶっ潰すことに決めた。」

「彼女の居場所を教えてくれるんじゃないのか。」

「てめえに教えるものなんか何一つねえよ。土下座したって教えてやるものか

。わざわざ人が嫌がっているのに、連れて行こうとするなんてふてえやろう

だぜ。そんなことは俺がゆるさねえ。」

「君に許可をもらう必要を感じないな。」

「うるせえ！人が下手に出ればつけあがりやがって、ぶっ潰してやる！」

こうして一方的な戦いが始まった。

一方害児は、もちろん騎士竜のことを恐れていた。

確かに軍隊はもういない。しかし騎士竜はそもそも軍隊と歩調を合

わせていた  
わけではなく、独自の判断で、やってきてるのだからあまり意味はない。

しかし、日の国は騎士竜がいないとほぼ成り立たないので、今頃各国に攻めれて  
とんでもないことになっていることは明らかだ。

騎士竜は強制的に召還されるかもしれない。

害児はそこに一縷の望みをかけていた。

そわそわしている害児のところで、超スピードで走ってきた物体がある。

物体かと思いきやそれはぼこぼこの顔になった穀潰しだった。

そしてその背には騎士竜が乗っていた。

害児はそれを見て激怒した。

「足止めするどころか。つれてきてしまうとは！なんという役立たずなのです

か！あなたは！」

穀潰しはそれを聞いてへなへなと崩れた。

「俺だってがんばったんだぜ・・・。」

騎士竜は穀潰しから降りて、害児と対峙した。

それを見て害児から話しかけた。

「ずいぶん久しぶりですね。騎士竜。しかしこんなところに一人でのこのこと

いまさらやってきてどうしようというのです？

もうあなたの仲間の兵士たちは国に帰っていきましたよ。」

「兵士・・・それは飾りだよ。ただ単に軍用を整えれば優雅に見えるから

連れてきただけさ。

あんな連中いなくなつて、僕一人いれば十分なんだよ。ルル隊長はよく分かっていると思うけどね。」

「騎士竜。その名前は二度と呼ぶな。」

「今は害児とやらでしたか？まあどっちでもいい。とにかく僕と一緒に

国に帰ってもらうよ。」

「そんなことをする理由がない。」

「やれやれ！冷たい人だ！別に帰ってくれたつていいでしょうに。」

「私は今の生活が気に入っている。軍に帰るつもりはない。」

「別に軍じゃなくていいですよ。ただ、貴方がこんなところに引っ込んで

というのは少し無責任だと僕は思いますね。」

「貴様がどう思おうがそれは貴様の勝手だろう。私を巻き込むな。」

「どうしても、帰っていただけないのですか？」

「回りくどいのが貴様の欠点だな。どうせ力づくなんだろう。」

「ええ・・・。申し訳ないですが僕にはどうしてもあなたに帰っていただかない

といけないのです。」

「こちら本気で行く。」

「どうぞ。」

害児は、緊張した面持ちで、抜刀し、車椅子を降りた。

「2分で片をつけてやる。」

「お手並み拝見だな。」

害児は、幻術を駆使して五つ身くらいに別れ、騎士竜に迫った。

その様子を見て、騎士竜は呆れた。

騎士竜の手がちらりと光ると、害児の足元が爆発し、害児の義足は粉々になり

、害児はかろうじて、体制を整えて地面に転がった。

「かつて魔人とすら呼ばれたものが、こんな有様とはな。無様だな。害児さんとやら。」

その様子を見て黒服たちが、害児に寄ってきた。

「首領！お怪我は！」

その黒服たちを害児は一喝した。

「取り乱すな！見苦しい！」

「は・・・ははっ！」

黒服たちは、そういつつ害児を車椅子に乗せた。

「私は手加減をされたのです。騎士竜、見てのとおり、今の私はただの廃人で、魔人ではない。  
これでお分かりいただけましたか？」

「なんということ・・・最早見ていられないな。国に帰ってもらって

自分に対する認識を改めてもらわないと。」

黒服たちは、近づいてくる騎士竜を警戒し、害児の前に立ちふさがった。

騎士竜が、地面をぼんと踏むと、黒服たちしたから水がすさまじい勢いで

湧き出てきて黒服たちを、天空へ吹き飛ばしてしまった。

彼は剛力とパソコンの計算による分析と力の精密さによる拳法を使

う。

先ほどの害見の足元が爆発したのは、彼が小石を飛ばした結果だ。

水が突然地面から湧き出たのは、パソコンで水脈等を計算し、剛力と、その精密

さで、正確な力を地面に伝導させ、水を地面へと導いたということだ。

そんな騎士竜の前に、今まで静観していた善い人が、のっそりと立ちふさがった。

騎士竜は、持っていたパソコンで善い人のデーターを取った。

「何だこの子供は、妙だな。凄い重病だ。死んでも不思議でもないのに、

というより死んでるはずなんだが、平然とした顔でたっている。」

騎士竜はデーターに当てはまらない善い人の様子を見て唖然とした。

「善い人は悪人を決して許さない。それを悪人に思い知らせるためには、

ぼこつて改心させる必要があるのは仕方のないことだ。」

「なにを言ってるんだい。早くおうちに帰って寝たほうがいい。」

騎士竜は、きつと狂っているのだろうと思ったが、親切にもそうアドバイスをした。

害児はそのやり取りを見てニヤニヤしている。

（それ、善い人さん早くやれ！騎士竜のやつをぶっ飛ばせ。）

と心の中で念じた。害児はこれで勝ったと思った。

「そうやって善い人を演じてたまそつとしても、真の善人には、通用しない

ということはまだ分らないのか。

もう我慢ならん！ぼこぼこにしてやる！」

善い人は、その体に似合わぬ大剣を取り出した。

騎士竜はいったいどこからそんなものを取り出したのか。何であるものを

もてるのか。

計算からすると非常な重量があるのは確かだったのにそれを持って平然

としている。

平然としていると見えた瞬間には、善い人は騎士竜を間合いに捕らえていた。

「斬る！無連斬！」

残像が残るほど早く斬る、善い人は危険な相手には、容赦のない斬撃も

繰り出す。



善い人も騎士竜が危険ということは本能的に十分分かっていたので、本気

の対応をしたというわけだ。

騎士竜は、斬られながらも、風圧などを発生させ被害を最小限にとどめながら

、一生の不覚！と心の中で悔やんだ。

やがて、善い人の剣が折れてしまったので、騎士竜は手のひらを善い人のほうに向けて押し出した。

そこからすさまじい突風と電気摩擦が起こり、善い人を吹き飛ばし、騎士竜はあわてて距離をとった。

体はもうぼろぼろであった。

（剣が折れなかったら、死んでいたかもしれない。）

騎士竜は生まれて初めて、恐怖という感情を知った。

「恐ろしい力だ。世の中不思議なこともある。」

計算で割り出せないものがあるというのを騎士竜は初めて経験した。

善い人は弓を構え、速射する。その弓の弦はすぐに切れ新しい弓に変える。

それを常人の目に見えない速度でたやすくやってのけている。

騎士竜は、指をぱちんと鳴らすと、そこを基点に善い人のほうに向かい、炎を生じた。

炎は矢を巻き込むが、中には炎を突っ切り騎士竜にせまる矢もある。そういう矢は、騎士竜の目の前に現れた岩にさえぎられた。

善い人は炎をかき消し、槍を取り出して岩へと突っ込む。

「貫く！トルネードチャージ！」

回転しながら岩を難なく突き破った善い人のやりだが、その穂先を騎士竜に触られ、粉々にされる。

と同時に、騎士竜はかまいたちを発生させたが、善い人はそれを見切る。

後一步で間合いをつめれるところを、騎士竜のしたから激流が湧き出て、

騎士竜は中へとんだ。地面ががんと盛り上がり、空中へ浮かんだ、騎士竜の足場を作る。

（かつてのルル隊長ほどでないが、彼女もやる。あの動きを捉えるためにはどうしたらいいのか・・・。）

力が拮抗していると見た害児は、ここで善い人に対し大声を上げた。

「善い人さん！騎士竜のパソコンを狙うのです！あれがなければやつはた

だの人です！」

しかし、善い人はその声を無視して、岩を駆け上り、騎士竜に迫っていく。

「ああ・・・これじゃいつかやられてしまう。穀潰しさん！いつまで寝てるんですか！そろそろおきなさい！」

穀潰しは、とつくの昔に復活していたが、不貞寝をしていた。

「ちっ。なんか用か？」

むくりと起き上がり害児のほうをにらむ。

「善い人さんを助けて、二人で騎士竜を倒すのです！さあはやくおゆきなさい

。」

「勝手なことをいうな。俺を散々役立たず扱いしやがって。」

「事実そうじゃないですか。そういわれたくないのなら、少しは活躍しなさればいいだけのことでないですか。」

「いやだね。お前の言うことはきかねえよ。」

「何てことだ！」

害児は両手を上げてお手上げのポーズをとった。

穀潰しは小気味よさにそのありさまを、眺めた。

「だがまあ・・・手を貸してやらないこともねえぜ。何しろ俺はあいつに

コテンパンにされたからな。」

そこへ、害児の部下がやってきて、害児に新しい義足を装着させた。

「おおさすが穀潰しさん。私の見込んだとおりの義侠心あふれる人物だ。」

「ぺっ。」

穀潰しは心底いやそうな顔だ。

「私と二人で善い人さんのサポートです。足場が安定しませんが、なんとか  
しましょう。」

「お前たちと一緒に戦うなんて反吐が出るが、まあこの際いいぜ。それにしても俺は同情するぜ。俺たち三人を相手にしないといけな  
いあいつ  
にな。」

穀潰しはもう勝った気にいる。それは仕方ないが害児はそれでも、

勝機は

7割と見ていた。

（まずサイコカッターで様子を見る。やつの動きは鈍い。あてれるはずだ。）

穀潰しは、騎士竜にサイコカッターを放つが、騎士竜が片手を振るうだけで、

すさまじい突風が起こり、穀潰しがいたところの地面を削った。

穀潰しは騎士竜の注意をひきつけた後、連続で衝撃波を撃ちだす。

騎士竜は、空気を振動させそれを防御しているが、その間に善い人が間合いをつめた。

「突き刺さるけり！」

斜め上からのけりを、善い人が繰り出そうとするが、騎士竜がいた岩の柱が崩れ、それを合図に他の岩の柱も崩れる、その岩雪崩が、善い人たちに襲う。

落ちてきた騎士竜に向かい、害児は刀を繰り出す。

「腕をもらっ。」

騎士竜の後ろからも上からも害児が迫り、刀を振り落とす。

「よくやった・・・いいたいが、害児さん。どうやらあなたは腕が落ちすぎたようだ。」

崩れ落ちたのは害児のほうだった。どうやら電撃をもろに浴びたらしい。

「どけ！害児！潰れろ！ランダムスファイア！」

穀潰しが無数の爆裂性のある丸い衝撃派を、騎士竜に向かって撃ちだす。

「君の技はまるで子供遊びだよ。」

騎士竜は腕を振るうと、それらの衝撃波はすべて消えてしまった。

それにはさすがの穀潰しも、あぜんとするしかなかった。

「サイキック技術など、歴史の浅い技術に僕の技が破れるわけがないだろう」

「？」

その言葉が言い終わらないや否や、背後から善い人が蹴りを繰り返してきた。

騎士竜はその蹴りを、指一本で止める。

（これでしばらくは彼女は動けまい。）

騎士竜のこの行動により、善い人は全身の骨がばらばらに碎けて動

けなく  
なるはずだった。

だがここでも騎士竜の予想外のことが起こり、善い人がそのまま攻撃してきたのだ。

「なに？馬鹿な！」

しかしさすがに二回目なので、騎士竜は善い人を突風で吹き飛ばすことで  
攻撃を回避することに成功した。

（今のところ僕が勝っているが、あの白服の女性だけには気をつけなければ  
。）

「もういいだろう？君たちは僕には勝てないよ。そこに転がっている害児と  
やらを連れて行く。文句はないね？」

穀潰しは虚勢を張った。

「びびってるんじゃないぞ。尻尾を巻いて逃げるのか？」

「なにを言ってるんだ。君は。」

その問答をしている最中にまたまた善い人が背後から騎士竜に襲いかかってきた。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

「しつこい！」

騎士竜は地面をあらかじめ地面をつかんでおり、その地面は山ほどの大  
きさになっており、それを善い人に向かってぶつけた。

善い人は山の下敷きになった。

「ああ善い人！てめえ・・・。」

「なんだい？君もこうなりたいのかい？」

「穀潰しさん、大丈夫です。善い人さんは無事です。」

穀潰しはどうやら害児が直前で助けたらしい善い人を見て安心した。

「おい、善い人。俺に考えがある。俺がお前の体に念力を送って練習こむ、

そうするとお前は、今以上に威力のある技を出せる。

それでやつを攻撃すれば倒せるはずだ。」

「なるほどね。穀潰しにしては頭いいじゃないか。こういう場合漫画だと、

善人が真の力を発揮して敵を倒すものだからね。」

害児は穀潰しに耳打ちした。



「穀潰しさん、それは危険ではないのですか？ 善い人さんはどうも分かってないみたいですが。」

「うるせえ！ もうこなったらあいつをぶっ潰さないと俺の気がすまねえんだ  
よ！ 役立たずなてめえは黙ってみてる！」

「な、なに・・・くっ・・・。」

プライドの高い害児は、穀潰しに一撃を加え自分の力を思い知らせやろう  
と考えたが、思いとどまった。

何より今は、騎士竜を撃退してもらうほうがいい。それがたとえどんな形でも  
だ。

「ふ、ふん。分かりましたよ。やってごらんなさい。」

やっこの思いでそういつて、後ろに下がった。

「じゃあ行くぜ！ 善い人！ ひゃっはー！」

善い人の体から黒いオーラが湧き出てくる。

（なるほど。そういう手してくるか。あの状態では確かに、生半可な手段では  
攻撃を防げなくなるな。）

騎士竜は、地面をつかみ天まで届くかというような山を善い人たちに向かって放った。

天は覆われ、ヒノキ村は曇りになっていたことだろう、まるで隕石が落つこち

てきてるようなもので、これを何とかしないと村にまで被害が出る。

「ああ！部下ども！早く私を守らんかあ！」

いわれるまでもなく黒服たちは害児を囲み防御の構えだ。

善い人は、山に向かい、天を突くかのような蹴りを繰り出した。

「貫け！突き抜けるけり！」

まがまがしいオーラをまとった善い人のけりにより、山の勢いが失速され

砂のようになっていく。

その山を貫き、善い人のけりはついに騎士竜を捕らえた。

ゴン！

しかし威力が十分出てないらしく、騎士竜はよろめいただけだ。

それでも騎士竜は十分驚いていたが。

（世界は広い。こういう人間もいたのか。）

繰り広げられる死闘のさなか、その場に似つかわしくない間抜けなことが  
ひびいた。

「我輩の名前はガストラゲタ、ガ流であるぞ！ガ流とはガス天下無  
双流！  
すなわちガ流である！」

「ん？何だあの馬鹿は。」

ガスであつた。

息も絶え絶えの善い人を見つめていた騎士竜であつたが、思わぬ馬  
鹿の出現  
にそちらのほうを注目した。

もちろん善い人との距離をとることはさすがに今回は忘れなかった。

騎士竜はパソコンで調べて大体のガスの人物を割り出した。

「ああ……。害児の後継者のガストラゲタか。いまさら君が何のよ  
うだ？」

「我輩はお前を倒しに来た男だ。」

「君が僕を？ああ……。しっているよ。そういつて君は話を長引かせ  
て、僕を

毒で倒そうというのだろう？  
まったく唾棄すべき卑怯な戦術だよ。僕はそういう戦い方が大嫌い  
なんだ。

君はそんなことをして恥ずかしいと思わないのか？」

「勝てばいいのだ。」

「毒を流しているが、そんな毒の流れなど僕には手をとるように分かるよ。」

ほらこうやってずれば何の問題もな・・・。」

ヒューン。騎士竜はガスがあらかじめほっておいた穴に落ちたようだ。

ガスはその穴にすかさず如雨露で水を流した。

ただの水ではない。電子機器をだめにしてしまう水だ。

「うわ！パソコンが・・・。」

「どうだ！我輩の実力を思い知ったか！」

「助けてくれー！パソコンがないと僕は無害だー！」

そこへ善い人を抱えた害児がやってきた。

「へへっ。害児さん。我輩のこの戦果はどうかね？よく覚えておいてほしい

ものである。我輩があなたのためにどれだけ骨を折ったかを。」

害児は、善い人を放り投げ、ガスをバシッとたたいた。

いきなりたたかれたガスは、一瞬放心したが、我に返り、

「なにをするか！我輩がガストラゲタと知ってのことか！」

とほえた。

「ゴミ虫めが、まるですべて自分の手柄のような我が物顔、虫唾が走る。

善い人さんと穀潰しさんが死力を尽くして戦ってくれたからこそこの結果ができたのです。

あなたは最後ちよろつと出てきただけで何もやってないではないか。そんなことで大きな顔をしないでいただきたい。」

ガスは、害児の正気を疑った。

どう見ても、この功績はガス一人のものであって、役立たずな穀潰しや善い人のものではない。

えこひいきもここまでいくと我慢ならなかった。

「この功績はどう考えても我輩一人ものだ。でくの坊の害児は論外として

役立たずの善い人、穀潰しのような輩のものではないではないか！」と痛罵した。

害児はそれを聞いて顔をゆがませ、

「黙れ！」

とだけ一括した。そのガスの周りをわらわらと黒服が取り囲んだ。

「お前たちからも何とか言ってやれ。そのでくの坊の石頭に！」

黒服たちは口々にガスに向かって言葉を放った。

「首領はでくの坊ではない！でくの坊という言葉はお前にこそふさわしいだろう！」

「お前は私たちの功績を一つも認めず罪ばかりを責めた。それがいざ自分がそういう立場になるや否や態度を豹変させるのは卑怯者がすることだ！」

「毒ガスや落とし穴は卑怯であろう。首領は言うまでもなく、善い人様や

穀潰し様は立派に戦ったのだ！  
神聖な戦いを汚すな！ゴミ虫！」

ガスは顔を真っ赤にして怒った。

「な、なんだとー。貴様らー！我輩の恩を忘れおつて！この忘恩の徒め！」

「私たちは、嫌味や罰は受け取ったが恩を受け取った覚えはない！」  
そういうと黒服たちは、ガスの腕を取り両脇を固めた。

「なにをする！離せ！離さんか！」

そしてガスは黒服たちによってどこかへ連れて行かれた。

穀潰しは、その騒ぎが終わったので、害児に話しかけた。

「善い人は大丈夫なのか？騎士竜のやろうはどうする？」

「善い人さんは・・・分かりませんね。私にはなんとも。」

害児は暗い表情になった。

「・・・俺には死んでいるように見えるがな。」

そういわれ害児ははっとなった。実は害児も考えたくはなかったが、同じことを考えていたのだ。

何か穴の中からたすけてくれーという声がしているが、それを気にしている者はいなかった。

「やはり体内練りこみの無理がたたったのでしょうか・・・。」

「いや別に俺は自分の擁護するわけじゃないが、そういうことはないと思

うぜ。善い人くらいの強さを持っているなら、あの程度の体の負担はなんでもないことのはずだ。」

「・・・とにかくこんなところに放っておくわけにもいかないでしょ

う。」

「そうだな……。ん？空が曇ってきやがった。」

確かに、二人は空を見上げると、瞬く間に空が黒く覆われている。

「大変だ。とにかく私の家に行きましょう。善い人さんを運ばないと。」

「じゃあ俺は行くぜ。」

「一緒に来ませんか？食事を出しますよ。」

「最近ろくな穀潰してないからな。特別に邪魔してやるぜ。まあ・・俺も

善い人のことは気になるしな。」

しかし、凄い勢いで曇ったなと穀潰しはつぶやき、害児が善い人に近寄ろうと

すると、凄い土砂降りの雨が降り、轟音を立てて、雷が善い人へ向かって

無数に降ってきた。

「ぐ・・。何だいったい？何が起こった？」

害児は、雷が降る瞬間、後ろに大きく距離をとったのでなんともなかった。

穀潰しは雷の余波をかなりうけたが、すぐに復活した。



前を見上げてみると善い人が立っていたので、内心ほっとして穀潰しは善い人

の背中に向かってはなしかけた。

「おい。無事だったのか。今のは死んだふりか？」

「善いことをしなきゃ。」

「熱心なことだな。だが今日はもういいんじゃないか？雨も降ってるしな。」

「ひゃっははは。」

「善いことを・・・。」

突然善い人は走り出しすぐに見えなくなった。

「おいおい・・・。なんだありゃ？頭のおかしいやつを考えることはよく

わからねえな。」

いつの間にかそばにいた害児が、穀潰しに話しかけた。

「見てください。空が晴れてます。まるで善い人さんに雷を降らせるために曇ったような空でしたね。」

「言われてみればそうだな・・・。」

「まああの様子なら善い人さんはもう大丈夫でしょう。」

「・・・。」

穀潰しは善い人が向かったほうに歩き出した。

「穀潰しさん、食事はいいのですか？」

「後でたんまりもらうぜ。」

「そうですか。ではがんばってください。私は私でこの後やることがあるので・・・」

「ああ。」

穀潰しは、じゃあなといいつつ後ろも見ずに、手を振った。

「さてと・・・とりあえず難は去った・・・か。穀潰しさんが何か勘付いた

みたいですが・・・まあどうでもいいことか。

とにかく私は今を守れた。それでよしをしましょうか。」

害兎がその場を去ろうとすると、穴から声が聞こえてきた。

「たすけてくれー。」

「この男も、こうなった以上使い道が出てきたか・・・」

## 第二十三幕 二人の狂人

「おお見る。これはすごい。」

ここはサイキック研究所の一つ、今日もテンマは何か面白いことがないかと

遠視に余念がなかった。

彼女がマークしていた人物の一人に、騎士竜というものがいた。

彼はテンマと戦ったこともある。といっても腕試し程度だが。

戦いは互角といったところで、テンマはこの時、満足したようだった。

テンマは騎士竜と善い人の戦いを見ていた。

「すごいな！こいつはすごいな！」

テンマの横にいた人物。この女性は白衣を着ていた。何故だか知らないが

おおはしゃぎであつた。

テンマに話しかけられたのはこの人で、テンマと一緒にモニターを見ている。

「見る！うんと見る！」

白衣の女性はテンマの頭をつかむと、モニターに突きつけた。

「よく見えておる。」

「もっと見ろというのだ！馬鹿者が！」

白衣の女性は、興奮して、テンマの頭をモニターにがんがん、叩き付けている。

そのうちにモニターは壊れてしまった。

「畜生！この私を愚弄しやがって！」

白衣の女性はモニターをたたきつけた。

モニターはうんともすんともいわなくなってしまった。

白衣の女性はテンマに向かって、進言した。

「分かりますか！この私の気持ちがい！」

「たわけ。呼べばよいのだ。」

「と申しますと？」

テンマはその言葉を見殺して、アキラにテレパシーを送った。

すぐ来るようにと。

「お、お呼びでございましたようか。テンマ様。」

アキラは、しばらくして、姿を現した。またどんな無理難題を言われるかと  
びくびくしている。

「善い人を呼べ。なかなか素質がありそうだ。何ならネームもちに  
してもよい  
。」

「はっ？おっしやる意味が・・・。」

テンマはアキラが愚痴を言い訳し始めようとするのを見越して、一  
括した。

「早く行け！」

「ははっ！失礼しました！」

アキラは、冷や汗をかきつつ、風のように去っていったが、いった  
い彼は  
何にそんなにおびえているのだろうか。

とにかくとりのこされたテンマと白衣の女性は会話を再会した。

「端的に言えば、彼女・・善い人は私のサイキック理論に当てはま  
らない

新しいタイプのサイキッカーだと思う。」

「そうか。」

「ええそうですとも。つまりこれで一気に研究が進む可能性ありう

ると

いうことです。」

「更なる高みへと上れるということだな？」

「御意。だから返す返すも残念ということなのです。後一步というところで

貴方様がモニターをだめにしてしまわれるから。」

とんだ言いがかりだが、テンマはその言葉を聴いても笑っているだけだった。

「はっはっは。まあよい。今に分かるわ。」

「といたしますと?。」

「もう下がれ!。」

「ははっ!。」

白衣の女性は腑に落ちない顔だったが、下がれといわれれば下がるしかない。

どうやらテンマとアキラのやり取りはまったく頭に入っていないらしいかった。

さて、アキラのほうは、顔が青ざめていた。

とんだ無理難題を押し付けられたものだった。

「ちっ……。俺ばかりなんでこんな目に……。」

だがぼやいてばかりもいられない。テンマの横暴は今に始まったことではない。

黙々と任務を実行するだけだ。

そう気持ちを切り替え、とりあえず善い人と仲がいい穀潰しをあたって

みることにした。

「ということなんだが、協力してもらえないだろうか？」

「虫がいいんじゃないか？俺に何のメリットがある？大体俺はテンマに恨みが

あるんだぜ。何でやつの得になるようなことしなきゃならねえんだ。」

「

「この俺がこう頭を下げているのだ。聞いてくれてもいいのではないか？」

「おい……。ふざけてるのか。お前のどこが頭を下げているんだ？」

アキラは直立不動で、穀潰しを呼びつけ、立ち話をしているのだった。

「残念だ。穀潰し。俺としてはお前が友情にこたえてくれることを期待

してたのだが、こうなったら催眠で操るしかないな。不本意だが。」

そういつてアキラは穀潰しをちらりと見た。穀潰しの顔に緊張が走る。

「てめえ……。そりゃ暴力だぜ。」

「ああだから不本意だといってるではないか。」

「はんっ！当てが外れたな！そもそも善い人は俺の言うことなんかきかねえ

よ。あいつは俺の最大の敵だからな！」

「本当か？お前程度の実力ならネームもちの俺にとって、お前がなにを考えているかくらい簡単に探れるのだが。」

「ああそうかい。なら何でも勝手にするがいい。」

「ちっ。役たたずめ。どうやら本当なようだな。確かにお前たちは敵対

してるが、信頼関係があるように思ってたんだがな。」

「ところでお前は相変わらずテンマの犬かよ。情けねえな。おい。」

「どうした急に？」

「そのまんまの意味だぜ？」

「そんなに思い知らせてほしいのか？」

「どうだかな。だがそうだな。てめえを倒せばテンマの吠えずらが



見れる  
かもしれねえな。」

「正気か？1秒で片がつくぞ。」

「潰れる！さい……。」「ガクッ。」

「馬鹿が。この距離で俺に勝てるわけないだろう。なに考えてるんだ。」

「……。ん？」

アキラは背後に気配を感じたので、振り返ってみると何者かが、自己構築をしているところだった。

それは、仕立て屋、セリルだった。

「こんにちは。アキラ。私の店の常連さんを拉致しようとしてるみたいね。」

「何故ばれた？まさか。」

アキラは気絶している穀潰しのほづをちらりと見た。

「ああそれはない。私がそんな無能に頼るわけないでしょ。」

「……。」「

「何故黙ってるの？」「

「察してくれ。俺も好きでこんなことをしてるわけじゃないんだ。お前だって分かってくれるだろう？ テンマ様の友達なら。」

「・・・私は本当はフラワーちゃんと一緒に外の世界にでたかったんだけどね。」

でも、私の話なんて聞いてくれないから。」

「なら俺のことだって分かってくれるだろう？ 頼む。俺はやつに追い詰

められるんだ。」

「そんなこと言ったらフラワーちゃんに丸聞こえなんじゃないの？」

「大丈夫だ。任務にさえ失敗しなかったら、あの方はそれ以外のことは

たいてい見逃してくださる。」

「へえ。まあいいよ。善い人ちゃんが同意するならね。」

「そ、それは。」

「そこを承諾できないというのなら・・・。」

セリルから力を感じ、アキラはあわてた。

「い、いや。承諾する。しかし貴方も説得に加わってくれるのではありませんか？」

「私も、久しぶりにフラワーちゃんに会いたくなってきたな。」

「え？ああ・・・分かった。ついてきてもいい。しかし説得を・・・」

「じゃあ早速善い人ちゃんのところに行こうか。そこに伸びてる人も連れて行ってね。」

「あ、ああ・・・。ちっ！穀潰し！さっさとおきろ！」げしっ！

アキラは穀潰しを思い切り蹴飛ばした。

穀潰しは正気に戻り、アキラに食って掛かった。

「てめえ！なにをしゃがる！」

穀潰しの右ストレートがアキラに当たり、激昂したアキラと穀潰しの殴り

あいになった。

そこへ、セリルのさめた発言がわって入った。

「ねえ、早く行きたいんだけど？」

そのときアキラは、穀潰しにマウントをとってぼこぼこにしてたが、セリルの声を聞き、あわてて穀潰しからのいて、穀潰しが立ちあがるのを助けた。

「あ、ああ。そうだったな。悪かった。」

「お前はセリル！なんでこんなところに？」

「うるさい！お前は黙って俺たちについてくればいいんだ！」

「まあそついうことね。じゃあいきましょうか。」

「いつかぶつ潰してやる・・・。」

一行はぞろぞろと善い人のところへ向かった。

「つまり、白服様いや善い人様を私の主が招待したいといっております・・・。」

「

アキラは汗汗しながら、善い人を必死に説得していた。

タンクが、水を持ってきたので、それを一気飲みするアキラ。

穀潰しは仏頂面で座り込み、水を腹いせにがぶがぶ飲んでいた。

善い人は気のない様子でアキラの話を聞いてたが、何が気に入らなかった

のか、鬼のような形相で立ち上がった。

「外道め！許さん！」

「はっ？私めが何か悪いことでも？」

善い人はアキラに目もくれず、穀潰しにけりを入れる。

「てめえ！なんだってんだ！」

仰向けになつた穀潰しが状態を起こし善い人をにらむ。

「この水泥棒目が！善人の目をごまかせるとでも思つたのか！」

「水くらい飲ませろ！そのくらい善人の務めじゃないのか！」

それを聞いて、善い人の顔が緩んだ。

「穀潰しもたまには善いことを言つね。そのとおりかもしれない。」

善い人は席に戻った。

「ちつ。ここにはきちがいしかいねえぜ。やってられん！」

穀潰しが逃げようとするところを、セリルに腕をつかまれる。

「な、なんだよ。」

「。。。。」

セリルはじーっと穀潰しを見つめると、穀潰しは諦めたようにまた水を  
がっぱのみし始めた。

「ふう。。まったく人騒がせな。それですね。善い人様。招待  
の件  
なのですが。。。」

「善い人は善いことをするために忙しいんだよ。他をあたってくれ

ないかな。」

アキラは、善い人がどう見ても忙しそうに見えなかった。

善い人はただ漫画を描いてるだけだ。しかもへたくそだった。

「ただへたくそな漫画をかいてるだけではないか！」

ついにアキラは本音を言ってしまった。その言葉に善い人はぴくぴくしだした。

「つまりこの善人たる善い人を馬鹿にしたいと？」

「そうさ！だが馬鹿にしたいんじゃない。馬鹿なのさ。お前は。それくらい！」

催眠！」

アキラはのりのりで善い人に催眠をかけたが、気絶したのは善い人ではなく

善い人にぶちのめされたアキラだった。

それを見て穀潰しは心底呆れた。

「おいおい……。あいつには学習能力がないのか。」

それはそうだ。少し前に穀潰しと一緒にアキラは善い人と戦ったことが  
ある。

そのときアキラは善い人に催眠を試みたが効かなかった。確かにあの時

アキラは錯乱していたが、その時のことを学習してないアキラの頭を穀潰しはどうかしてるんじゃないかと疑った。

ただアキラは、あの時遠隔催眠を行っていたから、近接なら効くかとも思った

のかもしれない。

それにしても、遠距離であれば効果ないのだから例え近接でも、効果がでる

のに時間がかかりかかるといことは分かりそうなものだ。

この時善い人を説得する意外な伏兵が現れた。

いや意外でもなんでもないかもしれないが、それはセリルだった。

## 第二十四幕 四人の善人

「善い人ちゃん、よく考えてみてよ。」

「なにかな？仕立て屋さん。」

「このアキラという人は悪人、その主にということは悪人のボスということ

になるんじゃない？」

「わたしは今、そう思ったところだよ。仕立て屋さんは頭がいい。さすが善人だね。」

穀潰しはそれを聞くと仁王立ちして大笑いした。

「ひゃっはっはっは！はっはっは！はあっ！何がそう思ったところだよ。」

だ！どこまで笑わせてくれれば気が済むんだ。お前は。」

「さあ、行こうか。仕立て屋さん。この善い人がいる限り、悪人は栄えない

ということを思い知らせてやらないといけない。」

「え？穀潰しは……。あっ！善い人ちゃん待って！」

善い人が、外にでてしまったので、セリルはあわてて後を追った。

「あの・・・善い人ちゃんいつちゃったけど。いいの？」



跡に残されたタンクが、親切にも放置されて惨めな思いをしている  
穀潰し

に話しかけた。

「ふ・・。」

「ふ？」

「ふざけんな！」

「ひい！」

タンクに八つ当たりをしても意味がない。とりあえずさっきのお返しに

気絶しているアキラに一撃を加えることにした。

「このぼんくら！ぶっ潰れろ！」ドカツ。

蹴っ飛ばして宙に浮かした後、衝撃波のラッシュをかけた。

「ひゃっはっはー！汚物は消毒だー！サイコエア！」

「あわわ・・。」

「ひゃ・・はあー！サイコスファイア！」

大きな玉のような衝撃波をアキラの体にぶち込み、善い人たちのほうに

吹き飛ばした。

「すつきりしたぜ！追いついて善い人！俺は何かと役に立つ男だぜ！」  
穀潰しはでかい声を出しつつ、善い人たちの向かったほうに走り出した。

善い人たちと合流した穀潰しは、疑問に感じていたことを口に出した。

「おい、そっぴや徒歩で行くのか？」

「穀潰しは、レポート使えないでしょ。善い人ちゃんも。」

「なら、お前たちが送ってやればいいじゃないか。」

その言葉にアキラが答えた。

「おれとしてもそうしたいのはやまやまなんだが、善い人は俺のこ  
とを悪人  
と思ってるようだから無理だな。」

「じゃあセリルがやればいいじゃねえか。」

「あら、歩いていくほうが風情があるわよ。」

「そんなものかね。」

それにしてもそうそうたるメンバーだ。

最もセリルの実力は未知数だが、関係者の話によれば相当な使い手らしい。

穀潰しがほいほいついていつてる理由がいまいち分からないが、もしかしたら

テンマのいる研究所を潰そうと考えているのかもしれない。

しかし、善い人たちの徒歩のスピードは速く、研究所は案外近い場所にあつた。

研究所の存在を認めた善い人は一同に立ち止まり、自分の話を聞くように命じた。

何が始まることやらと一同は顔を見合わせた。

「貴方たちはまったくこの善い人と一緒に善いことができるということの上  
ない幸運に恵まれた。

このことが達成されれば、貴方たちもわたしのような善人に一歩近づける

というものだよ。」

そして、さあわたしに続け！魔王城を攻め落とせを号令した。

それを聞いてアキラは真っ青になり、善い人の腕をつかんで動きを止めた。

「ちょっと待ってくれ。白服。何か勘違いしているようだが。」

「なにかな。君はもう悪人じゃないんだ。善いことに努めないといけない。」

それともまさか君はわたしの顔に泥に塗る気なのかな。」

善い人の無表情な顔で見つめられアキラはゾーッとなった。

「い、いやそんなことはない。俺も善人の一員として精一杯戦う。」

「ならいいんだよ。わたしたちは世界を救わなければならないんだ。そのところをよくわかってほしいものだね。」

穀潰しはボソツと漫画の見すぎだぜとぼやいたが、彼としては願ってもない

展開なのでちゃちゃを入れるのはやめにしておいた。

アキラはもうやけくそになった。

「あなたも大変ね……。同情するよ。」

セリルにポンツと肩をたたかれ泣きそうな顔になるアキラ。

どうやら、こちらの動きを察知されたらしく、研究所からぞろぞろとサイ

キッカーたちがでてきた。

（これは遊んでおられるな……。）

（フラワーちゃんは相変わらずね。でもこれならあなたも安心じゃ

ない？)

(それは答えれないな。うかつに考えたら思念を読まれてしまう。)

セリルとアキラはテレパシーで会話した。

穀潰しには、ノイズが聞こえるな程度しか感じなかった。

「まあネームもちでも最高クラスの戦闘力がある俺にとってはあんなやつら

人形だな。」

「本気でやる気になったの？」

「ああまあな。それに俺も白服になめられっぱなしなのは気に入らん。

おいっ！白服よく見とけ！これが俺の能力だ！」

ざああああーっという妙な音が発生したかと思うと、でてきたサイキッカー

たちの大半が倒れていた。

「なんだ。ネームもちも混じってるのか。よしっ！」

「おお・・・見なよ。みんな、善い人の威光に屈している。みんなきつと改心

したんだね。」

「おい・・・。」

「こいつは馬鹿だから、超能力とはよくわからねえんだよ。張り切り損だつたな。」

数人のサイキッカーがまだこちらを観察しつつ、立っている。

「アキラ、あいつらやってこねえぜ。」

「そりやそうだ。テンマ様が見たいのは、俺の催眠じゃなくて白服の能力なんだからな。」

「じゃあお前なんであんなことを？」

「さあな。それより白服。今度こそお前に行ってもらうぞ。あいつらを倒して来い。」

「よし、今度はセリルさんの实力を見よう。いけー善人の部下その1！」

「私か。まあいいよ。」

「よくない。セリルちょっと待て。」

「仕方ないでしょ。リーダーの命令なんだから。あなたも善人なんだからリーダーには従わなきゃ。」

「遊びじゃないんだぞ・・・。」

「じゃあそういうことだから。大丈夫、すぐに終わる。あそこにいる連中

あなたに比べればたいしたことないでしょ。」

セリルはそういつて飛んだ。背中から羽が生えてきたのだ。

いや正確には、服がその形状に変化した。

これがセリルが編み出したスタイル、サイコドレス。

服に念力を練りこむことで、様々な形状へ変化させることができる。

また服に念力と練りこませることで、対サイキックに対する防御力はすさまじいものとなる。

アキラがセリルに対して下手なのは、その防御性能にアキラの得意な催眠の相性が悪いからだ。

ちなみにネームもちといっても、別に戦闘力だけで決まるわけじゃない。

あくまでも超能力が特化しているものがネームもちになれるのであるって、

戦闘力が特化しているものになるわけじゃないからだ。

それはネームによって戦闘力が大体決まってしまう、ネームアキラは代々

催眠の使い手なので戦闘に関しては上位のネームなのだ。

しかしそうであっても、基本的な攻撃方法、衝撃波、メトリー、肉体強化、  
肉体再生、テレポート、体術などの基本的な戦闘能力は、ナンバーズとは  
比べ物にならないくらい高い。

とりあえず、セリルはぐるぐる回転し、全身がミサイルのようになり、  
残ったサイキッカーたちをすべて迎撃した後、善い人のところに帰ってきた。

セリルのスタイルは、彼女の独創なので、彼らはよくその性能を知らなかった。

彼ら自慢のサイキックが効かなくて狼狽しているところを、なんなくやつつけたのであった。

善い人は部下たちの活躍に気をよくした。

意気揚々と研究所の中に入っていった。

しかし入った瞬間、善い人の周りの人間が消えてしまった。

いや周りの人間が消えたのではなく、消えたのは善い人本人だった。

そして、取り残された三人の目の前に現れたのは、テンマ・トキトその人だった。

「テンマ・・・」



「ゼロか。それにセリルだな。」

「あの・・・俺もいるんですが。」

「おいテンマ。分かってるな。」

「ああ分かっているぞ。はっはー！そらどうした？いつでもいいぞ？  
こちらはなあー！はっはっは！」

「て、てめえ！笑うんじゃねえ！ランダムスファイア！」

ドカーン。直撃したがもちろんこの程度で倒れる相手ではない。

テンマは、アームにスイッチを入れ戦闘モードだ。どうやらいつも  
乗ってる

円盤は使わないらしい。

テンマのしたから、テンマに向かい針状の服が襲い掛かる。

セリルが飛ばした服だ。こんな使い方もできるのだ。

服の容量自体は関係ない。やろつと思えば、この施設を覆えるくら  
いの

布になってしまう。

というよりむしろもうここは、セリルの巣といってもよかった。

「テンマ様！」

「楽しいなあ！ゼロ！セリル！アキラも楽しめ！」

「てめえの遊びのせいで何人犠牲になったと思ってるんだ！」

「フラワーちゃん。たまには私に付き合ってもらうよ。」

セリルの考えだと、このままテンマを捕獲して、どこかへ行こうという魂胆らしい。

最早、あらゆる場所に服が伸びており、四方八方からフラワーを捕らえようと服が襲い掛かってくる。

「ヒート・フラワー！」

変換された熱が、ごおごおを音を上げ当たりを燃やす。

もう自分の研究所だとかそういう話ではなくなっている。

「アキラ！催眠を使い！あいつの動きを止めるんだ！」

「ふざけるな！何で俺がそんなことを！」

「なんだあ？やってみよ！」

「くつ。仕方ない。」

テンマのいうことはそれがどついつ類の命令であろうと、絶対服従だ。

テンマはアキラの催眠を受ける、テンマの許容量ならアキラの催眠はさほど効果がないが、動きは鈍るしやがてはかかるだろう。

「いい仕事したぜ！あいつに攻撃させずに即効で終わらせるぞ！セリルは

攻撃の手を緩めるなよ！」

「これで終わりだ！潰れるサイココメント！」

「お、おお・・・。」

テンマは感心したような声を出し、コメントに押しつぶされていた。

しかし、同時に、穀潰しら三人は氷付けにされていた。

そして、潰されたかに見えたテンマは、どうやらテレポートをして難を逃れたらしい。

衝撃波系は手軽だが、大技ともなるとテレポートの熟練者には簡単に避けられてしまうのが欠点ともいえる。

何度もいうが、こういうのはもともと施設に対してだとかの奇襲用の暗殺向けの技なのだ。

一方で善い人は、10名入るであろうネームもちに囲まれていた。

そこへテンマも現れた。

「さて、善い人だな。なるほど強いらしいな。」

10人のネームもちはよくわからなそうな顔をしている。

なぜなら身体的にも、能力的にもとても強そうに思えないからだ。

「あなたが悪人の親玉だね。」

「私が悪人・・・ふ・・・ふはははは。なるほど悪人。そうかもしれぬな。」

「この善い人を笑うとはもう我慢ならん！ばこって改心させてやる！」

善い人は一瞬で、テンマの目の前に移動する。

驚愕する10人のネームもちたち。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

すかつ！しかし善い人の剣は何もない空間を斬るだけに終わった。

なぜか善い人は、元いた位置に戻っていたのであった。

善い人が再度アタックを仕掛ける。

「くつ貴様。無礼だぞ！」

サイキッカーの一人は善い人に金縛りをかけるが、効果はない。

「なんだと？俺の超能力が効かない！？」

「貫け！トルネードチャージ！」

またもや、テンマに向かって、攻撃を仕掛けるが、その攻撃も空を切る。

ここにきて善い人も認識を改めた。

「どうやら君が最後のボス、魔王のようだね。」

「善い人。実は私は貴様に興味があるのだ。お前はネームもちにしたから、今後私に協力するがいい。」

「誰が悪人なんか協力するものか！」

善い人は侮るなとばかり義憤を發した。

他のネームもちも不満げであつた。

それを見たテンマは一計を考えた。

「データーがあればよいのだ。どうだ。誰か善い人と戦おうと思うものはいないか？」

「このわたしくめが。」

そういつて進み出たのは、ピエロのような格好をしたやたらマッチョな

ネームもちだった。

## 第二十五幕 神意の雷（前書き）

そういえば、ゲームのほうはかなり進んだようです。

穀潰しも実装されて、ランダムスフィアもできました。

結構形になってきたので、よければ遊んでみてください。

## 第二十五幕 神意の雷

「俺は道化師、テテリン・テテラン。あらゆるネームの中で最も強力で

その強さは、テンマ・トキトも凌駕するくらいだ！」

「つまり悪いやつということか！」

「この俺の強さを知りたいか？なら教えてやろう。俺の能力はテレポートだ

。ただのテレポートではないぞ。

俺はテレポートの正確さ、距離、速度を極限まで高めている。

アキラの催眠など非ではないということだ。

今らその力の一端を見せてやろう。」

テテリンは、シュンという音を立てて、テレポートを開始した。

「どうだ？今俺が何回テレポートをしたか分かるか？・・・分かるまい。

100回だ。つまりお前は今俺に100回殺されていたということだ。」

「何だと！この善い人を100回も殺すとは！なんという極悪非道！」

「ようやく俺の強さが身にしみてきたようだな。だが安心しろ。俺は慈悲深い

男で通っている。

10秒時間をやるからその間に、己の罪深さを反省することだな。」



「面白い。この善人を倒そうというなら、かかってこい！」

「10・・・9・・・8、7、6、5おおっともう5秒しかないぞ！どうした？泣きべそ

か？お前の命は後5秒だぞ？4、3、2、1ああつ！もう1秒だ。そらどうした？後1秒だぞ？1秒でお前は終わりだああ！」

「うるさいな・・・。」

「残念。0だ。ゲームオーバーしねい！」

テテリンは、常人よりはるかに速い反射速度を持っている。

加えてほぼ0に等しいテレポートの時間により、まるで分身しているかのような

錯覚を相手に起こされる。

しねいといった瞬間には、もうあらかじめ善い人の背後にいるような具合だ。

しかしまた、善い人もうるさいなといった瞬間回し蹴りをしていたのだ。

まるでそこにテテリンが出現するのが分かっていたかのように・・・。

「ほげっ！」

テテリンは蹴飛ばされ、何が起ったかもわからず、地面に激突し、跳ね返

つてきたところを、また善い人に蹴飛ばされ、壁を貫通して、どこかへと  
飛んでいった。

その一瞬の攻防が終わった後、ネームもちたちは何が起こったかようやく把握し、啞然とした。

テンマの隣にいる白衣の女性は解説した。

「皆さん驚くほどのことではありません。あれは高位の予知能力者に違いありません。」

なるほど……。確かに予知能力者ならテレポーターにも勝てる。

というより、テテリンに対して勝つためには、予知能力を用いるほかない。

というのは、彼のレポート発動速度は、メトリー速度を超えるし、メトリー  
できたとしても、テレポートの発動速度が、視覚から脳への伝達速度に匹敵  
するかそれ以上に早いため、とても対処できる話ではない。

だから確かに予知・・・と考える以外ないのだが。

がそんな気配彼らにはちっとも感じなかったのだ。

ということは、よほど能力の消し方や、遮断能力が高いということ

になる。

それにしてもネームを持っている自分たちがまったく介入できないくらいの

遮断能力？うぬぼれてるわけではないが、それはありえない。

ネームもちは、思い思いに考えを張り巡らされていたが、その考えをやめざるを得なかった。

なぜなら、その思考は強制的にとめられてしまったからだ。

善い人の攻撃によって！

「吹き飛ば！突貫脚！」

ネームもちたちは、善い人の蹴りに張り付き、どんどん団子のように連なって

いく、どういう原理か知らないが、善い人は空中に浮いたまま、方向転換

し、ネームもちたちをすべて重ねて、けりを炸裂させている。

やがて10人すべて重なって、善い人の突貫蹴によって、施設の天井を

ぶち破りネームもちたちは天へと飛んでいった。

「おおすごい！」

白衣の女性は感嘆した。

「見ましたか？今のを？」

もちろんしゃべってるときに善い人が攻撃してくるのは定番のパターンなの

だが、善い人の攻撃はことごとく、攻撃した瞬間、遠くの位置に戻される

の繰り返しだ。

これには理由がある。テンマが自分の周りの空間をゆがめて、別の空間を

つなげたため、攻撃がすべて通らないということだ。

「見た。しかしあれはどうやら超能力ではないな。」

「え？そんな馬鹿な！あれほどの力、超能力以外ならなんだっていうんだ！

寝ぼけたことをいうな！」

「私でも、彼女は思考は読めない。しかし何か運命のようなものを感じる。」

運命、そういずれ自分を倒すものとの対峙、自分がまったく知覚できない力。

テンマはそのビジョンを正確に捉えていた。

（少しは楽しめそうになってきたな。）

「トキト！ぐぐだぐだいわず、さっさとあいつを捕まえろ！」

「楽しみはとっておくものだ。」

「なんだと？」

そのとき、善い人が開けた天井の穴から、雷が落ちてきて善い人とながった。

それも一瞬ではないずっとつながっている。

「テンマ様あれはいつたい？」

さすがの白衣の女性も呆然としている。こんな自然現象見たことがない。

「自然現象ではない。神意というやつだ。」

「神意・・・は・・・ははっなにをおっしゃるのやら！」

「面白くなってきたなあ！さあこい！」

善い人は目をつぶっていたがやがてカツと見開いた。

「悪人の親玉め！この善人たる善い人の目をごまかせるとでも思ったか！

裁く！神善脚！」

ごおおんと空気を切り裂く、炸裂音とともに、まさしく光となつて善い人

は蹴りは、テンマ・トキトを貫いた。

「お・・・お・・・」

そのままテンマは消滅した。

「悪は滅んだ！」

「ひいひい・・・。」

「む・・・まだ悪人がいたのか！善い人は悪を許さない！」

「ひい！お助け！私は操られていただけなんです！」

「そうかそうか。私もそんな気がしたよ。なんていうと思ったか！  
そんな

ことに騙される善い人ではない！」

白衣の女性は、こんな危機的状況でもよほど頭が回った。

「いや善い人様の善行はすばらしい！よくぞ巨悪たるテンマをやっ  
つけて

くれました！

私は善い人になるように改心します！」

「本当かな？」

「本当ですとも！」

「たわけめ。善人の力はこのようなものか？」

「え？」

白衣の女性の後ろにテンマが立っていた。

「どうして？」

「さすが魔王だね。復活すると思ったよ。」

善い人は改めてテンマと対峙した。善い人としても完全に自分より上の相手に出会ったの初めてだ。

お互いがお互いに興味を持った。

「善いことをしてどうしようというのだあ？」

「それが善い人の天命だからだよ。私の善行をみんなが待ってる。あなたも善い人にならない？」

「善や悪など私は考えたことがないなあ！ただ強く力の本質に迫ること

、それ以外のことなどどうでもよい。」

「なにをいうか！善いことがどうでも善いというのか！」

「私にとっては興味がなくていいことだ。私が興味あるのは、善い人の力だよ。」

その一言は善い人を激怒させるのに十分すぎる一言だった。

「善い人を馬鹿にするものはゆるさーん！」

善い人の回し蹴りは、空間ごと消し去り、テンマも巻き込みまたもやテンマは消滅した。

消滅しつつテンマは感じた。

善い人の力は、確かにすごいが、自分には到底及ばないと。

善い人の概念は、肉体という器から離れられていない。

器や時間という概念から解放されたテンマの意識では相手にならない。

善い人がテンマを倒そうと思えば、あらゆる次元のレベルの攻撃をしないと  
ならないが、テンマはただ善い人の肉体を破壊すればいいだけだった。

「いくら強いといっても、一般人では話にならないか。  
ここはやはりゼロを……。」

「む！まだいたか！突き刺さる蹴り！」

しかし善い人の蹴りは地面を蹴っていた。

「あれ？おかしいな。私は確か変なところで善いことをしていたはずだけど。」

善い人はいつの間にか自分の家の近くまで移動していた。



家の中を見てみると、穀潰しとアキラとセリルがコタツに入って雑談していた。

みかんが山のように積んである。

善い人は自分もコタツに入り、みかんを一つ頬張った。

「てめえ！それは俺が裏の木からとってきたみかんだ！返せ！」

「穀潰し、家を貸してもらってるんだからいいじゃない。」

「ま、まあそうかもしれねえが。」

「さすがセリルさんは善人だね。」

「今回は散々だった。何で俺がテンマ様に凍らせられる羽目に・・・」

「

実は彼らはあの後、穀潰しとセリルは自力で氷から脱出したのだが、アキラ

が凍ったままだったので弱っていたのだった。

そしてまごまごしていたらいつの間にか、善い人の家の中にいたということだ。

それについて議論したが、レポート、催眠、いろいろな話が出たが結局結論はでなかった。

「まあなんだっていいぜ。テンマのやつはいつか俺がぶっ飛ばしてやるからな！」

威勢だけはいい穀潰し。

「あまり喧嘩してほしくないのだけど。」

「ナンバーズ以下がテンマ様に勝てるわけないだろ。馬鹿が。」

「何だと潰されてえのか？」

「できるのか？おまえごときに。」

「ふざけるなよ。こっちは三人だぜ？」

「いやなんで私まで数に入ってるの？善い人ちゃんも。」

「おい善い人。ひゃっはー！こいつは悪人だぜ！」

「よくいった。穀潰し！悪は成敗しないといけない！吹き飛ばさ・アップ！」

ドカーンという爆音とともに、穀潰しは吹き飛んだ。

「お、おれじゃねえー！」

「これでようやく平和になった。」

「あーあ．．。ふう。じゃあ私は帰るね。」

がちゃん。セリルは家からでていった。

「．．．。」

「．．．。」

アキラは一人取り残された。善い人はアキラを無視して漫画をかき始めている。

「なんだこれは．．。俺も帰ろう。」

アキラはレポートをし、家の中には善い人だけになった。

善い人は今日の戦いを、懸命に漫画にかいていた。

## 第二十六幕 善い人復活

突然駆け出した善い人を追った穀潰し、その追いかけっことは三日三晩続いた。

善い人が、とまったのは、寂れた病院の前だった。

「おい、善い人。ここになんかあるのか？」

「……。」

「おい！無視するな！おいつて！」

善い人はどんどん先に行くので穀潰しはあわてて後を追いかけた。

善い人は、階段を上がりやがて病室の一つにたどり着いた。

「しんきくせえところだな。俺には一生縁がなさそうだぜ。」

「……私はこの場所を知っている。」

「へえ、てめえでも怪我をすることがあったのか。」

「いや、崩壊前の話だよ。」

「ん？善い人おまえ……。」

穀潰しはどうもおかしいと思った。善い人と普通に会話が成り立っている。

善い人の頭は普段もつとぶつとんでいるから、崩壊前なんていう難しい単語  
でてくるわけがなかった。

善い人は近くのテーブルの上においてあった手帳を手に取り、ぱらぱらと  
眺めている。

「なんだそれは？ちよつと俺にも見せてみる。」

穀潰しは、善い人から手帳をひったくった。

「なにになに……。……。」。

穀潰しがそれを読んでもみるとこんな内容だった。

4月14日。

私は不治の病にかかってしまった。この体はどうやっても治らない  
ということ  
は分かっている。

でも死ねない。死ぬ勇気が出ない。

両親にこれ以上お金を出させるのは忍びない。

ああ誰か私に勇気を。いつそ世界が崩壊してしまえば善いのに……。

「こいつはまさか……。」。

「私の日記帳だよ。」

「どういつことだ？」

がくん。善い人が突然ベットに倒れこむ。

「おい！」

「穀潰し。聞いてほしい。」

「てめえ……。死ぬのか？」

「私は、元々死んでいたんだよ。何でそれが今まで生きていたのか。なんとなくそれは分かってるけど。」

善い人は倒れたが、その目はまだ弱弱しくない。

「てめえが生きてる理由なんかどうでもいい話だぜ。」

「私は、不治の病だった。医師にも家族にも見放された。」

そしてあの日、世界崩壊の日のことだ。

両親はもちろん私は見捨てて逃げ出した。医師もそうだ。

他の患者？それはみんな連れ出されたよ。私だけが取り残された。

でも世界は崩壊した。その一点だけは私は感謝した。

いや狂喜したんだ。同時に絶望もした。

どうせベツトにいても死ぬ。私は狂ったように床をはいつくばって、  
みな  
後を追った。

みなは私を見て驚いたが、何かひそひそを相談をし、車に乗ってどこかに  
いつてしまった。

核の光が迫ってくる。私は諦め死ぬことにした。

そこから先の記憶はなかった。でもたぶんあの時私に雷が降ってきたんだ。

そして・・・。

「善いことをしなきゃ・・・。みんなが私を待っている。」

そして、善い人が誕生した。善い人になった私は、それ以前の記憶がすべて  
なくなっていたんだ。

穀潰しはその話をおとなく聞いた後、善い人にこう尋ねた。

「俺は本当の名前なんか忘れちゃったが、お前はあるんだろう？  
なんていうんだ？」

穀潰しは名前を忘れたわけではない。うつすらと思い出されるのは、  
施設  
の世界だけだった。

母もなし、父もなし、ただ定められたレールの上に乗り、名前すらなかった  
穀潰しだった。

「私は・・・私の名前は・・・。」

ガタン。いい終える前に善い人は息絶えた。

「善い人。どうやら死んだな？」

善い人の返事はない。

「本当に死んじまったみたいだな。だがお前は死なないだろうよ。  
俺には分かる。」

病院に雷が落ち、建物が崩れ、その雷が善い人に直撃する。

だがそれでも善い人は生き返らなかった。

「これ以上ここにいるても仕方ねえか・・・。じゃあな。善い人。  
次ぎあったときは、決着をつけてやるぜ。」

そういつて、穀潰しは去っていった。善い人の体に定期的に雷が落ちて  
いる。

その気配を背後に感じたが、穀潰しは振り返ることがなかった。

2週間後。



「今日も我輩の商売は順調なのだ。今回は飛竜の谷にいつて、寶石をとって

きて、馬鹿儲けである。

そつと決まったら早速善い人君を．．．。」

それまで上機嫌だったガスの顔が思案顔になった。

「ああそつといえは善い人君は．．．。そうだな。堅実な商売をしよう。」

ガスがプレオをふかしていると、害児がガスの家に買い物に来た。

「やあ、ガスさん。」

「よくきた。害児さん。今日は何か入用で？」

そついいつつ、車からおり、カウンターに戻った。

「いえ．．ちよつとした雑談をと思ひましてね。」

「雑談であるか。」

「ええ。最近張り合いがない。そう思ひませんか？」

「張り合い？我輩の商売は順調であるが。」

「善い人さんがいないとどうも張り合いがないと、そう思ひましてね。」

ガスさんはそうは思ひませんか？」

「害児さん。死んだ人のことを言っても仕方ないことなのだ。」

「分かつてはいるのですが・・・。」

「・・・我輩は商売があるのでこれで失礼させていただく。」

「はい。」

ガスが車に乗ってどこかに去った後、害児はとぼとぼと帰路についた。

害児はあまり活発な活動をせず、自分は自室に閉じこもり、ほとんど部下たちに任せた。

住民は害児の妙な暴走がないので安心しきっており、名君だと害児をたたえあった。

穀潰しも、今は害児の家にいる。

穀潰しがごろごろしているところに害児がやってきて話しかけた。

話題はもちろん善い人のことであつた。

「穀潰しさん。どうやら善い人さんに落ちてくる雷が常時になったみたいです。」

「ずっと落ちてるってことか。それでよく体が消滅しねえな。」

「ええ。しかしそれでもよみがえる気配がありません。あの辺一帯は、

最早私の部下でも近づくことができなくなりつつあります。」

「死んでも迷惑な野郎だぜ。」

「そしてあなたはごろごろしてるだけですか？」

「何かてめえに迷惑かけたかよ？」

「いえ別に・・・。」

「なら黙ってろ。」

「天意というものをどう思いますか？穀潰しさん。」

「ん？あてめえの故郷。大陸の思想か。この新大陸にも同じような考え

方があるが、俺にとつちやどうでもいいことだぜ。」

「私はあなたも善い人さんも天意によって選ばれたものだと思っています。

だから善い人さんがこのまま終わるわけないのです。」

「あつそ。」

「穀潰しさん・・・。」

「もう放っておいてくれねえか。俺は忙しいんだよ。」

「分かりました。」

害児はすくすく引き下がり、自室へ閉じこもった。

穀潰しは考えた。確かにこのまま寝てるだけでは芸がない。

善い人は復活したらさらに強くなっているだろう。ならば自分も強くなるべきだ。

穀潰しは、つぶやいた。

「俺はもっと強くなるぜ。テンマ・トキト。さあでてきやがれ！」

その言葉を放って間もなく、穀潰しの体は消えていった。

ここはある施設、穀潰しの要請を受けて彼の実質的な師であるテンマが用意した場所だ。

穀潰しは妙なカプセルにいられるということで、テンマに抗議をしていた。

「てめえ、なめやがって、俺はもっと実践的なことをしてえんだ。たとえば、てめえをぶっ潰すとかよ。なんでいつも俺をカプセルにいれようとしやがる？」

「何が不満だ？手っ取り早く強くなれるんだぞ？」

「ただいてえだけなんだよ。それに脳をいじられるのは気分がよくねえぜ。」

「強くなるために何でもやる。当然ではないのか？」

「限度がある。俺は鍛えたいのであって、改造手術みたいな真似はしたくねえ！」

なら帰れとはテンマはいわなかった。テンマにしても、穀潰しには大層期待している。

将来自分の好敵手になるだろう相手を鍛えるのは、十分メリットがあることだった。

なので、最早問答は無用、穀潰しを無理やりカプセルにいれてしまった。

「どうだあ？強くなる感覚がするだろう！はっはっはっは！強くなれ！ゼロオー！」

穀潰しはカプセルの中で悶絶しながらテンマをにらみつける。

テンマはその視線をまったく気にせず、編み物をしていた。

そのうちテンマはどこかへ出かけ、三日後帰ってきてカプセルから穀潰しを

出したところ、穀潰しにいきなり殴られて、頭を抱えた。

「たわけ！」

一喝したが、痛そうに頭を抱えている。

テンマならそれくらい避けれそうなものだが、わざとあたったのだろうか。

「ふざけるな！俺はいやだっていったじゃねえか。てめえ！潰れろ！ワイド  
カッター！」

以前より早く正確な練りこみだ。

テンマはそのカッターに、自分の周りを回転するような衝撃波を出して

かき消した。

「以前より、技の正確さはあがっているな。しかしバリエーションが  
少ない。  
もっと増やせ。」

「な、なに？」

攻撃があっさり防がれ最早萎えたところ、思いがけられず褒められたので

穀潰しは多少元気になった。

「例えば今私がやったようなものだ。小技かもしれないが、お前は

強くなり

たいのдарうつ？ゼロ。」

「そ、そうだ！」

テンマは別にそんな小技使ってほしいと思わなかったが、穀潰しの都合を考

えて、アドバイスをしたということだ。

「私を倒すなら、絶対的な力の量を上げるべきだ。」

「いや、お前の前に倒す相手がいるんでな。悪いな。」

「そうか。」

テンマは、つまらなそうに去っていかうとしたので、穀潰しはとめた。

「おい！どこにいく？」

「生を謳歌しろ。ゼロ。闘争に身を委ね、ただ高みのみを目指すのだ。」

そういつてテンマは消えていった。

「簡単に言ってくれるぜ・・・。」

穀潰しはテンマのように単純な人間ではない。

そう簡単にいけば、こんなに苦勞はしないのだ。

それから二週間後、善い人現るの報を受けて害児は舞い上がった。

「やはり、善い人さんが死ぬわけではないと思っていました。」

車椅子からジェットが噴射し、空を飛びながら善い人発見地点に向かう害児

、黒服も後に続く。

害児はガスにも連絡を入れたが、ガスは仕事があるということ。

穀潰しは、わざわざ探すまでもないという話。

現地に着いたとき害児はとんでもないものを見てしまった。

「善い人、善い人、私は善い人。」

「あ・ああ・・あああ！」

害児はうめいた。

黒服たちも、

「な、なんで・・？」

と、驚いていた。

「あいつは・・・にせものだあああ！」

偽善い人だった。その正体は、義賊のアツチラ。



害児は激しく舌打ちし、黒服のほうに顔を向けた。

「やれ！」

その怒号とともに、アッチラに襲い掛かる黒服たち、不意をつかれたアッチラ

だが、スピードではぴかーの実力を誇る。

なんなくそれをよけ、嘲笑した。

「善い人にそんなものがきくか！」

「お前は善い人ではない。」

「え？」

振り向くと後ろに害児がいた。害児は掌底をアッチラに叩き込んだ。

アッチラの体はピンポン球がはねたように、地面に跳ね上がり、そのまま動かなくなった。

その様子を見て黒服は恐る恐る聞いた。

「お殺しになったのですか？」

「……。」

害児はそれに答えず、その場を去った。

しばらくした後、白服に白帽子、正真正銘の善い人がアッチラの元へやってきた。

アッチラは死んでなかった。ただ声も出せずうめきまわっていただけだ。

「た、助けてくれ・・・。」

善い人が手をかざすと、その手が光り、電撃が生じた。

アッチラは、しびれて飛び上がった。

今度こそ死んだと思ったが、体が動くようになっていた。

「へへっ。あんがと。それにしても見たか！この義賊アッチラは、恐れず

魔王、暴君、悪逆の主、害児に立ち向かっていた。

アッチラこそまことの勇者だと、みんな褒め称えるであろう！」

ひとしきり演説した後、アッチラは改めていった。

「善人協会は、俺だけではない。第二、第三の善い人を生み出している。

いまや善い人の名前は、一部では救世主という扱い、利用しない手はない。

さあどうする？」

「みんなが善い人になるなら善いことじゃないか。」

「その偽善い人が、善いことと称して、妙なことをしていたら、悪いうわさは

全て善い人が受けることになるぞ。」

「なに？善い人の名を汚すことは許さん！」

「善人協会としては、善い人が死んでこれ幸いといったところだ。おつと待てよ。俺はあんたと争う気はないぜ。

俺は親切で情報を教えてやったんだ。つまり俺は善い人。」

「まだ善い人の名をかたるか！」

「いや待て待て。これは冗談・・・。」

「食らえ！蹴鞠落とし！」

善い人は、アツチラを蹴り上げ空中に上げた後、かかとおとしを繰り出し

地面に埋めた。

「悪は滅んだ！この善い人がいる限り、悪人は許さない！善い人は何度でも

復活する！見ておれ。この善い人の目が黒いうちは好きなことはさせないよ！」

善い人は大演説を、埋まったアツチラにした後、どこかへ駆けていった。

「さすがは俺のライバル。こうとなっちゃんもう善い人なんかやって

られるか！

俺は義賊に戻るぜ。さあ悪逆の主害児から今日も金を巻き上げるぜ  
！」

アッチラも意気揚々どこかへと駆けていった。

## 第二十七幕 馬鹿騒ぎな復活祭

「やあ、善い人さん！復活おめでとう！」

「おめでとう！おめでとう！」

今日は善い人の家で、みなが善い人の復活を祝っていた。

みなとは、害児、黒服、タンク、穀潰し、ドラゴン、アツチラ、アキラ

、セリル、騎士竜等善い人にゆかりのあるものだからだ。

狭い善い人の家は、粉々になっており、広々としていた。

庭にシートを敷き、テーブルといすを用意して、がやがやと騒ぎ立てていた。

「今日は善い日だ、上等なワインをあけよう。」

害児は、ワインをあけ、上機嫌でそれを飲み干す。

中央のテーブルには豪勢な料理がならんでおり、善い人には特上級の水が進呈された。

宴が始まって間もなく、穀潰しは疑問を善い人にぶつけてみた。

「おい、善い人、よく生き返ったな。お前は生き返ると思っていたぜ。」

「当然だよ。善い人は決して死なない。」

「そういえば、お前名前思い出したんだよな。これからも今までどおり

の馬鹿をやらかすのか？」

「馬鹿とは何だ。殴りたいのか。」

「だって馬鹿じゃねえか。頭がおかしいとしか思えないぜ。」

「善い人を馬鹿にする悪党は思い知らせてやらないといけない。」

善い人はいきり立って席を立った。

そこをタンクがやってきてまあまあとため、穀潰しは害児に呼ばれ、

善い人のそばを去った。

「穀潰しさん、どうやらあなたは善い人さんの名前を知ってしまったようですね。」

「あ、ああ……。何か不都合でもあるのか？」

「ええ、そのとおり。非常に不都合です。何しろ善い人さんは自分の名前を

知ると絶命しますからね。」

「ああそれが原因である時にやがったのか。」

「だから、善い人さんの名前を教えてはいけません。彼女はきっとまた名前を忘れてますよ。」

あなただって、また善い人さんを殺して得をするわけではないでしょう？」

「まあ・確かにそうだが。しかしいいのか？」

「いいとは？」

「いや、そんなのでいいのか。お前がなにをたくらんでるのか知らないが。」

これじゃ善い人のやつは道化だぜ。」

「ほう・・・。」

害児は目を細めて、穀潰しを見つめた後、穀潰しにコップを渡し、ワインをついだ。

「穀潰しさん。あなたにもそういう情のわきどころがあったのですね。」

これは意外です。」

「なにいつてやがる。少なくとも手前よりは非情じゃねえよ。」

そういつて穀潰しはぐっとワインを飲んで、コップを放り投げた。

「で、どうなんだ？ずっとこのままでいいのか？」

「それは私が決めることはありません。天が決めることですよ。」

「てめえの言葉なんか信じれるか。なにたくらんでやがる。」

「別になにも・・・い、いや本当のことです。」

穀潰しににらまれたので、あわてて害児は態度を変えた。

「じゃあなにを知っている？」

「あなたと同じ程度のことですよ。今の時点では私もあなたもどうしようも

ないはず。この話はここで終えましょう。

今は宴を楽しむべきです。」

そういつて害児が逃げようとするのを、穀潰しは車椅子をつかんでとめる。

「待てよ。話は終わってねえぜ。」

「分からないお人だ。私は話したくないといっているのです。」

「てめえをばこぼこしてぶっ潰してから聞いてやったっていいんだぜ。」

「あなたは時々面白いことを言いますね。」

害児の目のおくがきらりと光った。

先ほどからちらちらを様子を伺っていたアキラが、見るに見かねて



とめにか  
かった。

「やめとけ、穀潰し。そいつは化け物だ。」

「アキラ、てめえのお得意の催眠をこいつにぶちかませ。」

「馬鹿いうな。」

害児はアキラの出現で一気に不機嫌になった。

「何だ貴様は。私たちの話に割って入らないでもらおうか。」

「いやしかし・・・。」

アキラがすごすごと退散するそぶりを見せると、何か向こうからこ  
ちら

に向かってくるものが見えた。

「なんだあれは？」

その物体は、こちらにいきなり突っ込み、テーブルを蹴散らしてい  
った。

それはガスのプレオであった。

仁王像のような表情のガスがその中からでてきて、ずかずかと奥に  
進み、

中央にある料理のテーブルから、料理をふんだくって食べ、酒を瓶  
ごと

痛飲し、空になった酒瓶をテーブルにたたきつけ、辺りを睥睨した。

あまりの出来事に、みなは呆け、場が一気にさめていった。

なぜこんなことになってしまったのか。別にガスはこの復活祭に呼ばれてないわけではない。

話は少し前にさかのぼり、ガスの店での話となる。

ガスは、害児から招待状をうけとった。善い人が復活したので、祭りに参加するようにとのことだ。

「また、害児の勘違い馬鹿騒ぎであるか。我輩は忙しいのだ。つきあつておれん。」

そういつて、ガスは招待状をゴミ箱に捨てた。

しかし、案外善い人は本当に復活したと知り、ガスは不快感を覚えた。

「復活したならなぜ善い人がじきじきに我輩のところに挨拶にこないのか。散々世話をしてやったのに、あの恩知らずの善い人めが。」

そういつて、ガスは怒り心頭に達しプレオに乗り、今に至ったというわけだ。

ガスは辺りを睥睨し、善い人を発見すると、ずかずかと接近して、善い人が飲んでいた水がはいったコップを取り上げると、放り投げてしまった。

善い人は無言で、他のコップに水を注いだが、それもガスにとりあげられてしまった。

「私は水が飲みたいのだから邪魔をしないでほしいな。」

「善い人君は、我輩に数々の恩があるではないか。それなのにどうして

復活したなら我輩に真つ先に挨拶に来なかったのか。

こういうことでは、善い人君との付き合いを考え直さないといけない！」

害児が横から口を出した。

「しかし、ガスさん。あなたにも招待状を送ったではありませんか。

」

「招待状？そんなものまた害児の勘違い馬鹿騒ぎに決まっておると誰だっ

て思っているのか。

我輩は、極悪非道の害児に店を取られて、ここまで必死に稼いできたのだ。

そんな忙しい中、そんな馬鹿に付き合う暇なんかあるわけはないではないか。」

「ずいぶんなことをいいますね。ガスさん。何ならまた店を取り上げてもいいですよ。」

「あいや恐れ入ったことである。都合が悪くなるとすぐ暴力。まるでゴリラやチンパンジーの類。我輩は人間であるから、こんな獣臭い

とんちき馬鹿騒ぎなどこちらからごめんである。人間の我輩はここで失礼させていただく！」

そういつて、ガスは酒樽や酒瓶、そして料理などを車にせっせとつめる作業を始めた。

その様子にアッチラが指を刺し怒った。

「あの野郎！俺たちの食料を全部奪うつもりだぜ！とんでもねえ泥棒やろうだ！」

他の参加者もちろん怒り、口々にガスを罵った。

「我輩の商売に使ってやるのだから、ありがたいと思え！」

そういつて、ガスは料理をすべてかつさらいかえっていつてしまった。

場がすっかりしらせ、みなは興ざめ顔になり、とぼとぼとまばらに帰っていった。

みんなは主催者の害児に遠慮して、何もガスに危害を加えなかったが、

害児も、ガスの所業を見て何もしなかった。

「首領、なぜあの馬鹿に言いたい放題いわせておいたのですか？」

黒服は害児に真意を聞いた。

害児はそれに答えた。

「あの程度の輩の振る舞いにいちいち目くじらを立てても仕方ないでしょう。」

私たちは王者なのです。どっしりと構えていればいいのです。」

「なるほど、さすが首領。」

黒服が害児を慕うこと数倍した。

しかしそうはいったものの、内心では害児は腸が煮えくり返っていた。

（おのれ・・・ガスめ・・・目に物見せてくれる！）

今は、善い人や穀潰しもいた手前、表立って行動できなかったが、必ずガスを思い知らせると固く誓った。

善い人は特にガスの振る舞いに何も感じず、穀潰しは、あの後すぐガスを

追って、分け前のおこぼれを頂戴した。

## 第二十八幕 善人激励

そして、数日後、最早害児もガスなどどうでもよくなっていた。

それよりもあることが気になり、そのことを善い人に確かめた。

「善い人さん。どうやら各地に偽善い人が出沒しているようです。これを放っておいていいのでしょうか？善い人の沽券にかかわるのでは？」

「害児さん。そのことはよく考えてみたけど、善い人が増えるのは善いことだよ。」

「それはそうかもしれませんが。しかし善いことと称して、とんでもない悪事を働いているやもしれません。

ここは、善い人さんじきじきに視察に行き、彼らをねぎらってやるのはどうでしょうか？」

善い人はその意見に満足した。

「さすが害児さんだね。私もちょうど今そう思ったところなんだよ。」

「ではそうするのですか？」

「他の善い人たちをねぎらうのも、善い人に違いない。早速行こう。善は急げだよ。」

「では私もお供しましょう。」

害児は、裏からトラックを出しそれに善い人を乗せた。

なぜか騎士竜まで車に乗り込んでくる。その後すぐにトラックは出発した。

「害児さん、この悪人もつれていくの？」

害児はトラックを片手で運転しつつ、片手で頼杖をつきながら話した。

「ええ、そうでないと場所が分かりませんから。」

「そんなの勘で何とかなるよ。」

どうやら善い人は、騎士竜がトラックに乗っていることに反対のようだ。

騎士竜はパソコンをカタカタさせており、善い人のほうを見ずに応対した。

「君が僕を嫌うのも最もだが、俗に言う僕は心を入れ替えたというやつな

んだ。大目に見てくれ。」

「怪しいな。害児さん、こうやって仲間の振りをして後で裏切る典

型的な

悪人だよ。この人は。」

「善い人さん、気持ちはよく分かりますが、こいつはなかなか役に立つ男です」

。「ここは善人の寛大な心を見せるところですよ。」

「仕方ないな。そこまでいうなら善人のお供に加えてあげよう。

心配しなくても善いよ。今は悪人の君でもこの善い人のありがたい言葉

を聞いていけば立派な善人になれるからね。」

騎士竜はそれを聞いて苦笑いした。

「そう願いたいものだな。」

「何だその態度は！馬鹿にしているのか！」

こちらも見ることせず、せせら笑う騎士竜の態度は善い人が激怒するの

に十分すぎる態度だった。

騎士竜は善い人に殴られ、吹き飛ぶ。ただし軽くなので、車の外までは

飛ばなかったようだ。

善い人にしては常でない手心だった。害児の顔を立てているのだろ

う。  
「まあまあ善い人さん。こいつも反省してます。」



騎士竜はふらふらになって、意識を取り戻した後つぶやいた。

「なんて馬鹿力だ。」

その言葉が善い人の耳に届き、善い人はまた怒った。

「なんてやつだ！まったく反省していない！」

「反省してるよ。」

騎士竜はもう勘弁してくれという表情で害児を見て、害児はそれを見てうなづいた。

害児が考え込む素振りをし始め、善い人がますますエキサイトする。

（だめだ害児は……。あてにならない。）

騎士竜は、何かこの展開を挽回できる手はないかと探していたが、前方に何か騒ぎがあるのを発見した。

「待て、あれをしてみる。何か騒ぎがあるようだ。」

そいつって騎士竜は率先してトラックを降りた。

「善い人さん、どうやら彼女が例の善人の一人ですね。なにやらもめるようです。」

そういつて害児はトラックを止め、善い人と害児もトラックを降りる。

善人は、悪人相手に激闘を演じていた。

「どうだー！善人の力見たかー！」

善人の拳を受けた悪党はすっころび、悲鳴を上げた。

「ひえー、お助けー！さすが善人様だー！」

それを見た害児と騎士竜は顔をしかめた。

「やらせにしか見えないな。」

「確かに……。善い人さんはどう思います？あれ？」

「善い人ならすでに善人に加勢してるな。ほれみろ。今悪人が吹き飛んだ。」

桜の悪人は天空へと吹き飛び、善人、善い人Aとしておくが、善い人Aは驚いた表情で善い人を見ていた。

「あ、あなたはなにをしてくれたのですか！」

「この私には及ばないけど、君もなかなか善い人だね。ほめてあげるよ。」

「はあ？頭おかしいんですか？」

「私は善い人だよ。あなたの仲間だ。」

「は、はあ・・・。」

そこへ害児が騎士竜が歩いてやってきて善い人に事情を説明した。

「善い人さん、あれはさくらです。つまり演技ってことですよ。

あの悪人はこの善い人Aさんの仲間なんです。  
たぶん・・・善人協会の人間でしょうね。」

「あの悪人も善い人だったのか・・・。」

ここにきて善い人Aも彼ら一行が何か尋常ではない連中だと気づいた。

「あなた方はいったい？」

「私たちは善い人さんの名をかたる不届きものを懲らしめにきた、正義の使者です。」

「な、なんですって？」

「そうぼこぼこ善い人さんが増えてしまつと私としても困るのです。だからまずあなたをぼこぼこにして見せしめにし、他の連中への脅しにしようとおもつのです。」

「ひ、ひい！」

善い人Aは腰を抜かした。

「害児さん、この人は善い人だよ。いじめてはいけない。」

「善い人さん、確かにこの人は善い人かもしれませんが。しかし彼女の善い人指数は善い人さんを10とすると1程度に過ぎません。だからこのように叱咤激励して、もっと善い人になるようにしてるのですよ。」

「そうだったのか。さすが害児さんは善い人だ。」

その様子を見て騎士竜は害児に耳打ちした。

（なかなか口が回りますな。）

（ふふ・・あなたは私の手前のゆつくりと見物してるがいい。このようなものをあしらうなど私にとっては造作もないこと。）

（無骨なあなたがたいした変化だ。それにしても善い人は頭が悪いな。）

露骨に馬鹿にされている善い人だが、同志を得て大得意になり、先輩として

後輩に説教をしていた。

善い人の善い人Aに対する無意味な説教は1時間続き、善い人Aはやっとのことで解放された。

善い人Aは、すたこらさつさと逃げていった。

「む・・やつが逃げていくぞ。いいのか？」

騎士竜が心配そうに害児にたずねた。

「すでに手は打ってある。」

善い人Aがしばらく逃げていると、黒い影がその姿をさらっていくのが見えた。

騎士竜はなかなかの手際に感心した。害児はなかなか人を使うのがうまいんだ

なと意外な感じがした。

「うまくやったな。」

「当然です。さあ善い人さん。次へいきましょう。善は急げですよ。」

「

「ん？さっきの善い人が消えたみたいだよ。助けに行かないと。」

「大丈夫です！真の善人ならこの程度の試練乗り越えられるはずですよ！」

「ずいぶんと都合の善い屁理屈だな。」

「なにを言ってるのですか騎士竜。ほら二人ともさつさと車に乗ってくだ

さい。」

トラックの中で、騎士竜は次の善人の説明をした。パソコンの中にデータがあってそれを教えてるのだ。

「次の善人は、町中に花を植えているそうだ。」

騎士竜は善い人に花いっぱい画像を見せた。その画像にしゃがんでいる

少女がいる。向こうを向いており顔は見えない。

「なるほどそれは善いことだね。」

「それはどうでしょうね。そういう人こそ裏でどぎたない悪さをしているものですよ。」

「なにを言ってるんだ。害児さん。それではこの善い人が悪さをしているとでも？」

善い人のわけの分からない言いがかりに害児は鼻白んだ。

「無意味に暴れまわって、罪のない人間をぶっ飛ばすのは悪いことなんじゃないのか？」

騎士竜はなにげなしにそういった。

「なに？今なんと言った？」

善い人がぶちぎれる前に、害児が氣勢をそぐために大声で発言した。

「なにを言ってるんだ騎士竜！善い人さんの深い考えはお前のような馬鹿には

到底分らないだ！恥を知れ！」

「・・・分かった分かった。馬鹿馬鹿しい。とにかく今度の善人は  
ちや

んとした善人だと思うぞ。（どっかの馬鹿と違ってね。）」

害児はいい加減にしろという顔で騎士竜に耳打ちした。

（おい！どういふつもりなんだ！これ以上善い人さんにあてつける  
のはや  
めろ！）

（なにを言ってるんだ。僕は事実を言ったまでだよ。）

（それが困るんだ。分かってくれ、頼むから。お前たちみたいな無  
能の

尻拭いをする私の身にもなってくれ。無能らしくわきまえてくれ。）

（ずいぶんな言い様だな。）

しかし騎士竜は、仕方ないという感じで善い人に話しかけた。

「善い人さん、悪かったよ。あなたはすばらしい世界一の善人だ。  
罪のない人を平気でぶっ飛ばす、とてつもなく偉大な善人だよ。」

「分かってくれればいいんだよ。あなたも努力してわたしのような偉大な

善人になることだね。」

「ああせいぜい努力させてもらおうよ。僕がどれだけ努力しても、理不尽に

暴力を振るう自称善人様にはなれないと思うが、偉大な善い人様を目指して

努力させてもらおうか。」

そのときいきなり車が止まったので、騎士竜は怪訝な顔になった。

「きしりゅううううう！」

ドガッ！騎士竜は害児にぶん殴られ、車の外にでてしまった。

「害児さん、せっかく善人になりかけている騎士竜を殴ってしまったては

だめだよ。」

騎士竜は再び車に上がりこんできて害児に耳打ちした。

（御覧なさい。僕の計算どおりだよ。あいつはお馬鹿だからほめて  
いるように

いえばいくらでも馬鹿にできる。）

（あまり心臓に悪いことをしてくれるな。）

「いや善い人様はまったく寛大、ところであそこにいる花を植えている女性



が今度の善人だ。激励するんだろう？」

「そっだ！騎士竜も善い人たる自覚が出てきて感心感心。」

「お褒めに預かり光栄・・・。」

## 第二十九幕 花と善人

害児は車を女性の前に止める。この女性を仮に善い人Bとしておく。

善い人ら一行は、善い人Bに近づき、激励した。

「やあやってるね。さすが善い人だ。」

「どなたですか？あなた方は。」

「私？私は善い人だよ。あなたも善い人でしょ？」

「確かに私は善い人です。こんな風に町に花を植えているのですから。」

辺り一面中花だらけだった。花の都とでもいってもいいかもしれな  
い。

「善人協会の人間ですね？」

害児が善い人Bにそう質問した。

「そうです。あなたたちも？」

「残念ながら違います。ここにいる善い人さんは、あなたと違う本物の善い人です。私としてはあなた方が善い人を自称していることに、困っています。」

「何故あなたが困るのですか？よしまな考えがあたりだからでは？」

思わぬ善い人Bの鋭い発言に害児はたじろいたが、形勢を建て直し威圧した。

「利いた風な口を利くなよ。貴様のようなゴミ虫一匹駆除するのは私に

とっては簡単なことだ。」

「……。」

「……。」

二人は押し黙ってしまった。善い人は話が終わったと勘違いし、次の行動に移った。

「さあ、みなで花で植えよう！せっかくだからこの私がじきじきに善いことに参加してあげるよ！」

善い人は善い人Bのかごから球根を奪い花を植え始めた。

その様子を見て善い人Bが口を開いた。

「私は花を植えないといけません。あなたに構ってる暇などないのです。」

「後悔するなよ。この私にそんな口を聞いたことを。」

「ふん・・・」

善い人Bはそそくさとその場を去っていった。

害児を馬鹿にされて腹が立ったどこかに隠れていた黒服が善い人Bをさらお

うとしたが、善い人に蹴飛ばされて、吹き飛んでいた。

騎士竜は害児に言った。

「害児さんとやら、あの善い人は全うに善いことをしているし、報  
つておいても

問題ないのではないか。」

害児は不機嫌そうに騎士竜を一瞥した。

「お前はまったく何も分かってない。もうしゃべるな。無能め。」

その言葉にさすがの騎士竜もむっとした。

「僕にやつ当たるのはやめてもらおうか。」

「貴様などに八つ当たりする価値すらない。いいですか。あの人が  
善い人がどうかなどどうでもいい話なのです。そんなこと最初から  
分かりきった話でしょう。善い人の名を使っていることが問題なん  
ですよ。」

そんなことくらい騎士竜だって分かってる。騎士竜がいたいことは  
別のことだった。

「ならこんなちまちなことしてないで、善人協会自体を潰してしまった

ほうが早いのではないか？」

「別に・・そのことを大きくするつもりはありませんでしたし、少しお灸をすえればよいと考えてましたが、あっちがああいう態度にでるなら

私としても考えなおさないとはいけませんね。」

「ああそれがいい。こんなことするのは労力の無駄だし、ストレスがたまるだけだ。

本拠地の場所は、さすがにデーターにないのだが、たださっきの花植えは

善人協会四天王の一人ということらしいな。」

「ほうそうですか。確かアツチラとかいうゴミ虫がそうでしたね。」

「花植えのマリーというらしい。」

「つまりあいつを捕まえて、はかせればいいわけですね。」

「それはそうなんだが、民間組織とはいえ善人協会は規模もでかいし、幹部

クラスとなれば、忠誠心も厚いという話だ。それにはつきりいつてあれは

本物の善人だし、善い人も近くにいる。どうするんだ？」

「馬鹿で無能なあなたは黙って私にデーターだけよこせばいいので

す。

後は私が全てうまくやりますからね。」

「相変わらずなごあいさつだな。」

害児はつかつかとマリーに近寄った。

マリーは露骨にいやな顔をした。

「何か御用ですか？」

「善人協会の本拠地に案内してもらおうか。」

害児はのっけから高圧的にいった。

「入会なさるのですか？あなたに勤まるとは思えませんが。」

マリーも負けていない。伊達に善人協会四天王ではないということらしい。

「こいつ・・・人が下手にでていれば言いたい放題罵詈雑言、私にも限度というものがある。」

害児は、拳銃を抜いたマリーに突きつけた。

マリーは微動だにせず、軽蔑した薄ら笑いを浮かべて、花植えの作業を

再開した。

「きさまあー！」

害児は思わず発砲し、弾丸はマリーの体を貫いた。がしかしマリーの体は

花びらとなって散ってしまった。

害児の周りに花びらが吹き荒れている。

（安い幻術だ。しかもしびれ薬だな。陳腐な手段を使う。）

突風が起こり、花びらは吹き飛ばされる。晴れた視界には、騎士竜とレイピアをついてきたマリーの姿があった。

マリーのレイピアは騎士竜にの指よってさえぎられている。

マリーはレイピアを引き、くると回転させパチツと音を立てて腰に

収納させた。

「私こそは、善人四天王が一人、花植えのマリーと申します。いきなり発砲するとは何という非常識無慈悲極まりない行為、あなたのような

極悪人がいては、この世の中ちつともよくならないのです。」

「・・・威勢よく出てきたのはいいが、貴様の幻術など見戯に等しい。こんな程度の技でこの害児にどう対抗するつもりだ？」

「愚かな人です。あなたは善人協会を敵に回しました。そして私も今は

引かせてもらいますよ。」

「私が貴様を逃がすとしても？」

「あはは・・・愚かな人。こんな答弁は無意味なんです。私はもうここには  
いませんから、それではまたごきげんよう。」

そういつて、スカートの端をちよいと挙げる例のお嬢様挨拶をする  
と、花びら  
となり散っていった。

マリーは害見たちから遠く離れた、花畑にふわふわ浮いていた。  
完全に逃げおおせたと思っているようだ。

「まったくこの私の花植えを邪魔するなんて無粋な人もいます。  
まあもう二度と顔を見ることはないでしょうけど。」

「あながちそうでもないな。」

「え？」

マリーが驚いて後ろを振り返ると、そこには誰もいなかった。

しかし、後頭部に衝撃を感じ、気づいたときには地面に激突して  
いた。

「ふぎゃん！」

「まあ・・・」ミ虫にしてはよく頑張ったほうだが。」



害児は車椅子をマリーが倒れてる場所に引き寄せ、拳銃を突きつけた。

「こんな程度だ。しょせんはな。何故だか分かるか？」

「あまり無礼なことをすると許しませんよ！」

マリーはまだまだ元気たっぷりだが、害児はその言葉を無視して言葉が続けた。

「分からないか。私が王者だからだ。ゴミ虫がいくら頑張ったところで、

王者たるこの私を出し抜けるわけないということだ。」

「王者ですって？あなたはおばかさんなのですか？」

「おい、がいじさーん。」

遠くから善い人が歩いてきた。騎士竜も一緒だ。

「ちっ、うるさいのがきた。」

「どうやらあなたを出し抜ける人が来たようですね。」

「調子に乗るなよ。何度も言うが、貴様など私がその気になればどつとでもできるのだ。」

「はいはい、それはようございますね。」

「最後にもう一度だけ聞く、協会の本拠地はどこだ？」

「それをいえば私を逃がしてくれると約束するならば教えましょう。」

害児はその言葉を聴いてにやりと笑った。

「ほうそうですか。いやあなたはなかなか骨があって見込みのある人物です。」

「今私は機嫌がいい。本来ならそんな約束は無効ですが、特別に約束してあげましょう。」

「もちろん害児が約束などするわけない。そもそも王者とゴミ虫の間に約束もなにもあるわけがないではないか。」

「この花の道、実は善人協会の本拠地より続いているのです。」

「え？そうなのですか。それはすごい。花が途中で枯れたりしないのですか？」

害児は素直に感心した。

「私は花植えだけではなく、その後の管理まで完璧なのですよ。」

「不思議なこともある。どうやらあなたはアッチラとは違うようですね。」

「あの人は、協会員よりピエロにでもなったほうがいいと思つてます。」

「それは違うない。さて……。もうあなたには用はないわけだが。」

「約束はどうしましたか？」

「約束？あまりふざけないことです。約束というのは対等の立場のものが  
行つもの、あなたと私は対等ですか？」

「そうですね。案外あなたもつまらない人間なのですね。」

「辞世の句はそれでいいのですか？殺しはしません。私は殺しはやめましたからね。しかしあなたの体術を奪うくらいのことはできます。」

それを聞いてマリーは笑い出した。

「あははは、まあおかしい。」

それを見て害児もにやりとした。

「そうですね。私もおかしいですよ。あなたは恐怖のあまり気が狂つて  
しまったようだ。」

「そういうことはありません。貴方ほどの達人がなぜ車椅子生活なのかと  
思ひましてね。」

「・・・なにがしたい？」

「いえ別に。」

「分かった。望みどおりにしてあげましょう。」

害児が刀を抜こうとしたが、その手を止められた。

どうやら騎士竜が追いついて、害児の手をつかんだらしい。

「おや？騎士竜。気配が読めませんでした。」

「そんなことより害児さんとやら、なにをやってるんだ。こんなことを

したら貴方の強力なパートナーが愛想を尽かしてしまうぞ。  
僕に感謝してもらいたいくらいだ。」

善い人はその間、マリーを起こし、もつと球根がないかせがんだ。

「なるほど・・・。確かにそうですね。早計だったかもしれません。」

害児はどかと車椅子に腰掛けた。

「善い人さんに免じてここは許してあげましょう。ただし二度目は  
ありません

からね。今度わたしの前に顔を出したら、わかってますね。」

「ふんつ。」

マリーはどうでもいいという風に善い人と一緒に花植えを再開してしまった。

「どうやらあの人は本当にしにたいようだ。」

害児は怒りのあまりぷるぷるしている。

「やめておけ。善い人が一緒では無理だ。」

「騎士竜ならなんともなるだろう？」

「それはなるかもしれないが、100%ではない。善い人にばれてしまうかもしれない。」

「肝心なときに役立たずめ。」

「僕たちがこれ以上ここにいても仕方ないんじゃないのか。疲れるだけだ。」

もう帰ろう。善い人はおいていけばいい。」

「この害児に逃げろというのか。」

「じゃあ花植えをしたいのか？害児さんとやらは。」

確かに、騎士竜は先ほど善い人からもらった大量の球根が手元にあった。

「・・・確かにこんな馬鹿なことをしてるのは無益なことだ。」

害児は足元にあつた球根を一つ取り上げて、マリーの頭に向かって投げた。

球根はマリーの頭に見事に当たり、マリーは地面に顔をめり込ませた。

「では帰りましょうか。」

害児はその様子を見て満足したようだ。

「まあ・・・あの程度ですんでラッキーだったのだろうな。あのお嬢さんは。」

騎士竜も帰ろうとしてトラックに乗ろうとしたが、善い人が回りこんでできた。

「善い人も一緒に帰るのか？」

「君は本当に反省が足りないね。せつかく私が善人になれるチャンスあげたのに、こうなったら私がじきじきにばこらないといけない。」

「分かったよ。球根を植えればいいんだな？そんなくらいなんともないことだ。」

善い人が何かする前に、騎士竜はあわてて、準備をした。

まず、片足で地面を軽く踏む。地面はちょうど球根一個分が入れるくらい

の穴が複数できる。

騎士竜が持っている球根をかごと投げると、かごは回転しながら、  
ちようど

いい具合に一つづつ飛び出し、地面の穴に入っていく。

ブーメランのように戻ってきたかごをキャッツした後、また軽く地面を踏み、

球根が入ってた穴がに地面がかぶされる、その後別の場所から出てきた水

がそれらの土の上に降り注ぐ。

「どうかな？」

「なかなかやるね。」

「横着ですけどね。」

いつの間にか復活したマリーが善い人の横に並んでいた。

「結果が全てだ。そうだろう？」

「いいえ違います。花一つ一つに感謝の念を持って育てていくのです。」

「そうかな。ならもう少しサービスをしてあげよう。」

騎士竜はパソコンで1秒ほど計算した後、しゃごみこみ、地面を複数箇所

指でとんとんしていた。

「？」

マリーは不思議そうにその様子を眺めている。

「終わったよ。後ろを見てみるといい。」

善い人とマリーが後ろを見ると、植えたばかりの球根から花が咲いていた。

二人の後ろは辺り一面中花だらけだった。

「これは・・・。」

あつけにとられたマリーが振り返ると、騎士竜はすでにトラックに入った

後だった。トラックはマリーと善い人が見送る中、去っていった。

「なかなか手ごわい人もいますね。あの騎士竜という人。」

「あの人は悪人だよ。いつか私たちを裏切ろうとしている。でも心配しないで

大丈夫だよ。私が責任を持って善人にするからね。」

（あの技のきれ、私程度でも分かります。彼が敵に回ったらアツチ  
ラヤ

私、いや善人協会など一瞬で崩壊するでしょうね。  
できれば敵に回したくないところですが。）



第三十幕 花の道、善人協会本部へ（前書き）

しばらく所用で休んでおりました。ゲームのほうは十分進んだよう  
です。

今までにないシステムなので面白いと思います。気が向いたら是非・  
。

### 第三十幕 花の道、善人協会本部へ

「ところで善い人さん。」

マリーは、花を植える作業に戻った善い人の背中から声をかけた。善い人は振り返りもせずそれに応じる。

「なにかな？」

「あなたは、まだ組織の本部にいったことがないでしょう？善人協会の先輩としてあなたを本部に案内してあげますよ。」

「わたしはいいことをしないといけない。」

そういつて黙々と花を植え続けている。

「そうですね。でも本部に行くことも善いことなんです。いろいろな善人と交流できますから。」

そういつて善い人の腕をつかんで立ち上がらせた。

「さあ、いきましよう。」

かなり強引にぐいぐいと引っ張る。マリーはこの際に善い人を完全に自分たちの仲間にしよ  
うともくろんでいるのであった。

善い人は嫌がったが、善人の言うことでは仕方ない。傍若無人の善い人でも、善人の言うことなら従った。

とはいえあくまで彼女の基準の善人だが、マリーはどうやらその基準を満たしたようだ。

（サイキック組織のテンマや、騎士竜さんのなどのつわものを相手にしないといけない場合、  
今いる戦力ではきつい。その点善い人さんが仲間になれば、私たちの組織も少しは  
ましになるはずでしょう。）

このようにマリーは陽気に考えていたが、妙案に見えるその案は実は、体の内部に爆弾を抱えるような危ういものだとはこのときのマリーはまだ想像すらしていなかった。

善い人たちが歩く道には、より取り見取りの花模様であった。

「世界を花でいっぱいにしたらきっとみんな善人になると、私は信じているのです。」

「今度悪人をぶっ飛ばして改心させたら、花を植えさせるようになるよ。」

「そうしましょう。会員たちも手伝ってくれます。」

マリーはたくみに、善い人を仲間に仕立て上げようと誘導している。

「あの害児とかっていう人に話したことです、ただ花を追うだけでは本部にはつけないのです。花の色合いに法則性があって、それを追っていかないとけません。」

「本部についたら、私がより善人になる方法を伝授してあげないといけない。」

「それは善いことです。それに本部は花に覆われていて、一定の法則と薬品の効果により

幻術が働いています。会員でなければ破る方法は分かりません。」

善い人はそんな説明はどうでもいいと思っているようだ。

やがて二人は本部らしき場所に着いたが、マリーのいう花というのはどこにもなく、かわりに地面がえぐれていた。

少し離れた場所に、大量の花が植えられているのを発見した。

どうやら、なにものかの襲撃にあったようだ。幻術の効果も解かれている。

「どうやら悪人に襲われているようだね。」

「そのようです。早く行きましょう。」

そう入っても別に走るわけでもなく、歩いて建物に向かった。

善人組織の本部は、ぱつと見ると幼稚園を大きくしたような感じの建物だった。

善い人たちは、穴の開いた大きな白い門をくぐり、虹の橋を渡って建物の中に入った。

そこではアツチラが待ち構えていた。

「遅かったな。あまりにも遅いんで待ちくたびれちまったぜ。まあにはともあれあんたが俺たちの軍門に下った負け犬ということが今決定したわけだ。」

「義賊のアツチラ……。戻っていたのですか。」

「戻っていたか？だと？俺を誰だと思ってる。正義の義賊、アツチラ様だぜ。お前たちのような間抜けの情報はすぐにつかめるんだ。」

「善い人が、俺たちの配下につくと聞いて、飛んで帰ってきたところだ。」

「では、花が荒らされていたのは、貴方の仕業なのですか？」

「いうまでもないことだ。あんなのがあっちゃ迷惑だからな。義賊の俺としてはどうしても避けて通られない行いだった。」

「貴方という人は……」

なにを思ったか善い人は、アツチラの前にずんずんと進んだ。

「な、何だ・・・？俺をばころうつてのか？また暴力か？そうなんだな？その手はくわねえぜ。  
そら！おいつけるものならおいかけてみる！」

善い人が蹴りを繰り出す反対方向にアッチラは逃げたが、なぜかその先にも善い人がおり、  
結局蹴られてしまった。

（なに？まさか俺より早い？）

アッチラがそんなこと思うのもつかの間、体がくるくると回転し、  
天井に突き刺さる。

「あ・・・これはまずい。善い人さん。まさか殺したのですか？」

マリーは仰天して尋ねた。

「悪は滅んだ。さあ先に行こうか。」

善い人はいつものことながら平然としている。ここにきて始めてマリーは善い人が尋常でない狂人だと疑い始めた。

マリーは青ざめて善い人にとりあえずこういつておいた。

「善い人さん、昔、善い人さんが所属していた支部の人たちもいますから、そちらの方に  
挨拶に行ってください。私はちょっと用事ができました。」

そういつて、マリーは、そこらにいる会員に早く救急車を呼びなさい

いなどと命令し、うなりながらアツチヲを天井から引き抜こうとしていた。

そんなマリーたちを尻目に、善い人は奥へと進んだ。

奥に進んでいると、なにやらもめているらしい、善い人が所属してた支部の指揮官と補佐官がいた。

「だから、あの地方には絶対支部が必要何だと何故分らないんだ！あそこは最前線の拠点だろうが！」

「ですから、上から予算が下りてこないのです。まことにもうしわけないことです。」

指揮官が、なにやら会員に怒鳴っている。指揮官の後ろで補佐官が腕を組みながらにらみつけていた。

「それをなんとかするのが、お前の仕事だろうが！」

指揮官はテーブルをドンとたたいた。相当頭にきてるようだ。どうやら以前潰れた支部の建て直しをお願いしているようだった。

あまりにも指揮官がヒートしてるので、補佐官がそれをいさめた。

「まあまあ、こんなやついじめても何の解決にもならないだろう。」

「俺たちの熱意を伝えているんだ。いじめているわけではない。そんなことよりお前も何かいってやれ。」

「あ、ああ……。そうだな。ん？おい、指揮官、あそこにいるのは善い人様ではないか？」

補佐官が善い人のほうを指差して、尋ねた。

「なに？善い人だと？あの裏切り者がのこのことこんなところに顔を出せるわけ……？  
げっ！」

善い人はつかつかと近づいてきて、指揮官の肩に手をぽんと置いた。

「久しぶりだね。よくもあの時は私を裏切ってくれたね。善人を裏切ることの罪は海よりも深く、山よりも大きいよ。」

につこりと笑っている。やばい殺されると思った指揮官は、善い人が次の行動に移る前に瞬速の土下座をした。

「申し訳ありませんでした！そんなつもりはなかったのです！」

指揮官にしてみれば、ひどい言いがかりであつたがここは土下座の一手しかない。

善い人は、蹴っ飛ばそうか珍しく迷っている様子だった。



よし後一押しだと思った指揮官が次のせりふを言う前に、補佐官が  
「またもや要らぬフオロ―」

あるいは補佐ともいう、をした。

「なにを言っているんだ！善い人様のせいで俺たちの基地がなくな  
ってしまったのだぞ！」

善い人様が上に話を通して支部を復活させてくれるのが、筋という  
ものではないか！」

「この善い人を馬鹿にしているのか？」

少し気をよくした善い人だったが、この補佐官の要らぬ発言に義憤  
を発しようとしている。

「この馬鹿野郎！」

指揮官の右ストレートで補佐官は吹き飛び、吹っ飛んだほうにかけ  
ていった指揮官は補佐官  
の頭をつかみ無理やり土下座させた。

「お前も謝れ！すみません！善い人様！この愚図がいらぬことを！  
こいつは間抜けの愚図野郎  
なんです！勘弁してください！」

補佐官はすつくと立ち上がった。

「いてえな！なにしゃがる！」

「いいから黙っていることを聞け！」

その剣幕に押され補佐官はすごすごと土下座をすることにした。

「あ、ああ……。分かったよ。（まあ何か考えがあるのだろう）」

形だけの土下座を始める補佐官、それにしてもこの二人はよく土下座をする。

「そこまで反省しているのなら、許してあげないでもない。私は善い人だからね。」

「ありがたき幸せ！」

善い人の機嫌はすっかり直った。

補佐官は指揮官に耳打ちした。

（おいつ、今なら善い人のやつに人働きさせられるんじゃないのか？俺たちの支部を再建

してもらうように進言してもらおう。司令官のやつはあれ以来俺たちに出会ってくれずに、

あのことをなかったことにしてるからな。）

（そうだな。確かにこれは一種の幸運だ。ここに賭けるしか突破口はない。なあに、善い人様

もかつての仲間だ。分かってくれるだろう。）

「善い人様、ところでさつき補佐官が言った件ですが、あの地方の善人組織の支部をまた

復活させてほしいのです。善い人様ならそれは可能です。どうか我々に慈悲を……。」

「それは善いことかな？」

二人はしめたと顔を見合わせて、同時に声を発した。

「もちろんでございます！」

「善い人様、そこにいる受付の係りに話を通すのです。上と話をさせてくれと。」

善い人も確かに、裏切ったとはいえかつての同志のこと、情が動いた。

いわれたとおりに、受付の人に上と話をさせてくれと話した。

「そう急にいわれましても……。そもそも貴方はいったいなにものなんですか？」

「善い人の言うことが聞けないとそういうのか？」

善い人の恐ろしい剣幕に受付は腰砕けになった。

「いえいえ、滅相ありません。」

善い人の後ろから指揮官たちが口を出した。

「いうことを聞いておいたほうが身のためだぞ。」

「そうだ、ぶっ飛ばされないうちにいうことを聞いておけ。」

「は、はい……。分かりました。」

受付はしぶしぶ電話をして、話を通した。指揮官たちはできるなら最初からしやがれと受付をにらみつけていた。

そこへマリーがやっていて、善い人に耳打ちした。

「善い人さん、どうやら侵入者がいるようです。気をつけてください。確かに花を荒らしたのは、アッチラでしたが、門を壊したのは別の人物のようです。」

善い人はさもあり何という表情でうなずいた。

「つまり、悪人がまだ他にいるってことだね。私の思ったとおりだ。」

マリーはへえそうなのかと感心した。まんざらただの馬鹿でもないらしい。

「こういう場合私なら、ここのボスを狙う。つまりその悪人もボスを狙っているのだと思う。」

「確かに。そうかもしれないです。」

「そうと決まったら善は急げだ！」

善い人は駆けて行った。

「あの人、司令官の居場所知ってるのか？」

指揮官がマリーに尋ねた。

「いやここは初めてです。」

「私が案内する前に行ってしまった。」

受付係はぼそりと言葉を発した。

「おい、補佐官、これはどう思う？」

「どう思っても何も追いかけるぞ。マリーはどうする？」

「私も行きましょう。善い人さんはいろいろと心配です。」

三人が善い人が走って行ったほうに向かってみると、なにやら穴が開いていた。

「さっきはなかった穴です。侵入者があけたとは考えにくいですね。つまり善い人さんです。」

「あの野郎……。また俺たちのアジとを壊す気だな。そうはいかんぞ。」

「よし、やつをとめるぞ。俺に続け！」

指揮官を筆頭に、彼ら一行はどんどん奥へと進んでいった。

### 第三十一幕 善人VS悪人

実のところ、侵入者とは穀潰しであった。穀潰しは善人組織にはなめられっぱなしである。

覚えているだろうか。以前ガスがアツチラに発信機をつけたことを穀潰しはそれをたどってここまでできたのであった。

以前けちよんけちよんにされた穀潰しは、例のごとく竜頭蛇尾の勢いで、司令官に文句をいったが、結局やり込められ、けんもほろろな対応をされた。

とぼとぼと帰ろうとするときに、走ってくる善い人であったというわけだ。

「よう、善い人。お前もここをぶっ潰しにきたのか？何なら手伝ってやってもいいぜ。」

「なにを言うか。お前が悪人だな！この私の目はごまかせないぞ！」

「はあ？おい言葉に気をつけろよ。俺は今機嫌が悪いんだぜ？どうしてもやるってのか？」

そのとき、役にたたなそうな一行が善い人にようやく追いついてきた。

「善い人さん！助太刀します！」

穀潰しはにやりと笑った。

「仲間を呼んだか。ではこちらでも呼ばせてもらうぜ。」

指をぱちんを鳴らすと、何もなかった空間から人影が浮かび上がる。

「強力な助っ人、アキラだ。まあさっきは役に立たなかったがな。」

アキラもにやりと笑う。役立たずといわれ若干引きつった笑いだったが、ここで抗議をして場の雰囲気壊すこともないと思ったのだ。

アキラは実は穀潰しに頼まれて、というより挑発されて一緒に司令官に戦いを挑みにきたのだった。さっきまで善戦していたが、穀潰しに呼ばれてこちらにやってきたというわけだ。

「そういうことだ。俺が出てきた以上お前たちももう終わりだ。」

そういつて、手を振りかざすと、善い人の後ろにいた三人が善い人の体を拘束した。

「裏切ったか！」

善い人が義憤を発する前に、アキラはその行動を制した。

「いやそれは違うな。俺の催眠で操ったのだ。つまり人質だ。俺が命令すればそいつらは死ぬことになる。・・・後は分かるな？」

アキラは得意顔だ。俺は悪党なんだぜ、恐れ入ったかといわんばかりだ。

何しろ善い人の前ではことごとくいい所がなかったアキラだ。善い人の目の前で催眠がかかったこともうれしそうだ。

善い人ももう終わりだな。と隣の穀潰しは感慨深げに状況を眺めていた。

が、油断しがちなアキラに一言アドバイスをした。

「おい、アキラ。やつにメトリーは効かないんだからな。ちゃんと動きに目を配っておけよ。」

気づいたらばこられているということになりかねないからな。」

「ふん。こんな雑魚にこの俺が目配るだど？馬鹿も休み休み言え。」

（まずいな……。これはやはり一戦の必要が……。）

「もう我慢ならん！」

穀潰しが物思いにふけると、すぐに善い人は行動を起こした。その声に驚いてアキラは、慌てて善い人のほうを振り返ったが、そこにもう善い人はいなかった。

「打ち砕く！蹴鞠落とし！」



腹部に連発蹴りをあて、蹴り上げて上空に吹き飛ばす。天井に当たったところを回し蹴りで、床にたたきつけた。場所が場所なので従来のわざを少し改良されている。

アキラはこうなる前に、催眠で操っている人間にコンタクトを取ったのだが、なぜか操れない。

穀潰しも不審に思っ、アキラを蹴っている善い人とすぐさま距離をとった後、辺りを観察してみると、吹き飛ばされている三人の人間が目に入った。

（野郎……。ひでえ。仲間ごと。）

「てめえ！やつらは仲間じゃないのか！なんだって攻撃したんだ！」

「善い人を邪魔をするものは許さない！」

「なんてやつだ。狂ってる。だがまあアキラではお前の相手は役不足とは思ってたぜ。」

「

「それは早計だな。俺はまだやられてないぞ。」

「なに？」

アキラがむくりと立ち上がった。

「なぜだ？攻撃はもろに入ってたはず。」

「ああ・・・。特殊素材でできた合金だったが、一度でだめになるとはな。あの狂人め。俺を殺す気か。」

アキラは、ばさりと上着と脱いだ。

「これで動きやすくなった。おい、白服。今のはわざとあたったんだ。決して実力では・・・。」

善い人の蹴りが空をきる。アキラが全部話すまで待っている善い人ではとうていなかった。

「くっ・・・！」

「アキラ！衝撃波だ！催眠は絶対使うなよ！」

「いわれなくても分かっている。」

アキラは、一瞬で数十のカッターを前方に繰り出し、一斉に放つ。技の精度ではむしろ穀潰しよりはるかに衝撃波は得意なのだ。

だがすぐに避けられ、アキラの目の前まで移動する善い人。慌てるアキラはテレポ―トが間に合わない。

（駄目だ・・・。メトリーできなきゃとことん雑魚だぜ。だがあんなやつでもやられるのは目覚めが悪い。）

穀潰しは、テレポート（高速移動）をし、善い人に練りこんだ拳を放つ！

「サイコグリップドン！」

穀潰し程度の体術では、何もなきに等しい、あっさりと回避され、なおかつアキラに一撃を加える善い人。

アキラは吹き飛び壁にたたきつけられ動かなくなる。

「う・う・う・。俺はもう駄目だ。穀潰し。・・後は頼んだ。」

「野郎！寝たふりしてんじゃねえ！」

まだ余力はあるのだろうか、心が折れてしまったのだろうか。

すかさず繰り出される善い人の蹴りを腕で受け止める。右腕が後方に吹き飛びバランスが崩れる。善い人は壁を利用しながら、サルのように飛び回り穀潰しの背後に回った。

そこに善い人の必殺の槍が繰り出された。

「決める！トルネードチャージ！」

「おおおおっ！サイコグラウンド！」

危険を察した善い人は、とっさに回避行動をとる。

穀潰しは自らはなった衝撃波に巻き込まれ、吹き飛んでいく。建物も半壊していく。

マリーたちはどうやら無事だ。すでにそこにはいない。遠巻きで見ていた会員たちに回収されたようだ。

穀潰しは、再生しつつ次の行動に移る。善い人はどんどん逃げていく。その動きを拘束したかった。

テンマに習った技の一つ、念力を電気に変換させる。

「サイコサンダー！」

雷が善い人を襲う、雷は善い人の十八番だが、それを今回は逆に使われた。

善い人に降り注いでいるあの雷には神意がある、悪意を持った物理攻撃だけが善い人に攻撃を通せる攻撃だ。

当然この雷も通る。善い人は恐るべき勘で雷を避ける。メトリーしとると思えない動きだ。

「だが動きは拘束されたぜ！これでとどめだ！」

穀潰しは、左手の人差し指を上から下へ縦に大きく振る。そうするとカッターが生まれ、

それが空間を裂いて善い人に向かっていく。

それを当然のごとく避ける善い人、どうやらしびれていなかったようだ。

しかし建物が崩れており、間合いをつめるのに時間がかかった。

善い人たちの周りは、阿鼻狂乱ひっちゃかめっちゃかな騒ぎだった。

何しろ人口密度が非常に高い場所である。善人組織は世界に認識される大きな組織で、

このような騒動になってしまつては最早一大事件であつた。

善い人が起こしたものであるとしては最大の事件といえる。この大騒ぎにひきつけられてまるで

ハイエナが死肉をかぎつけるがごとくやってきた勢力があつた。

害児とサイキック組織であつた。サイキック組織と善人組織は敵対しており、ついしがた

害児の組織とも善人組織は敵対した。

どちらもトップがやってきた。どちらのトップも善人組織のトップと違い率先して動く

タイプであつた。

特に害児が率先して動くのはいつものことである。そして招かれざる客の影も見え隠れしていた。第三の刺客である。

**第三十二幕 最大衝突（前書き）**

10月15日 後半部分修正

## 第三十二幕 最大衝突

害児は騎士竜と共に戦車に乗ってやってきており、その砲台で善人組織のアジトを攻撃しはじめた。

「今こそ王者の力を思い知らせてやるのです！」

害児の号令に従い、黒服が戦車を操作する。かなり大型の戦車で何人も乗れるタイプだ。

害児は善人組織のアジトが崩れていく様子を、望遠鏡でのぞきながらほくそ笑んだ。

黒服はそんな害児に声をかけた。

「中には穀潰し様と善い人様がおられるようですが・・・」

害児はそれに対して侮蔑の目を向けながら答えた。

「それがどうかしたのか？」

「い、いえ・・・別に。」

結局押し黙るしかなかった。何か考えがあるのだらうと黒服は一人で納得した。

「ふふふ・・・どうです？見なさい。騎士竜これがこの私の力です。」

砲撃により建物が一つまた一つと崩れていき、そこから頭を抱えた人びとが飛び出してこちらに向かってくる。

騎士竜は望遠鏡はなかったが肉眼でその様子を確認した。

「しかし、凄い人の数だな。あれだけの人数がこの場所にいたとはところでなんだってみんな頭を抱えて逃げてくるのだ？」

なるほど確かに騎士竜の言っており、会員たちは皆頭を抱えて逃げてきている。

「ふん。大方的外れたな方針で、頭を抱えて逃げれば、致命傷がないとも教わっているのでしょう。ゴミ虫どもの知恵など所詮その程度のもの。」

「なるほどな。ん？見る。こちらに向かって両手をつず高く挙げて向かってくるやつがいるぞ。」

「なんたることです！それ！なにをやってるか。黒服。あの馬鹿に向かつて空砲を撃ちまくって脅すのです！」

黒服は戸惑ったが結局命令に従うことにした。

「はっ……。はっ！」



ドンドン！空砲を連発すると、かわいそうなことに両手を挙げていた人物はうずくまってしまった。

「恐れ入ったか！これぞ王者の力だ！この私に逆らうからこういうことになる。」

そうしていきなり砲撃を受けた会員たちは大混乱をし、押し合いへきあいしながら雪崩を打っていた。

その中で指揮官が声をからして、皆を指揮しようとしていた。さすが指揮官である。

「みんな！落ち着くんだ！こういうときこそミッション130を思い出せ！」

そんな指揮官を無視するどころか、邪魔だといわれ突き飛ばされ指揮官はほうほうの体で避難した。

「だからやめておけといったのだ。ここじゃお前には何の権限もない。」

「馬鹿やろう！」

ぼこっ！補佐官は指揮官に殴られる。もう毎度のことなので補佐官はその理不尽な暴力にうんざりした。

「お前はまだそんなことをいつているのか！」

「分かったよ。お前の理想が高いのはよく分かった。けどな。そろそろ俺たちもここから

でないとやばいと思うぜ。いくら志が高くても死んだら終わりだ。そういうわけだから俺は先にいくからな。」

「俺の補佐をするのがお前の役目だろうが！」

指揮官が逃げようとする補佐官の襟をつかんで、二人は格闘をした。

そこへ、穀潰しとアキラがやってきた。

「おいなにやってるんだ？この施設にいるやつはみんな逃げたぜ。」

声をかけられ我に返った指揮官たちは穀潰しに対応する。

「そうだ！怪我をしていた。アツチラやマリーはどうした？」

「ああ・アツチラなら真っ先に逃げたし、マリーはアキラがテレポートさせたぜ。」

そこへアキラが言葉を付け加える。

「しかしお前たちは大丈夫なのか？だいぶ善い人にぼこられたはずだが。」

「なにをいつてるんだ！俺たち善人組織のリーダーたるものが組織の危機に怪我をしている

からといって寝ていられるか！」

穀潰しとアキラは顔を見合わせてやれやれといったポーズをした。

「ああそうかい。だがそろそろ逃げないとやばいんじゃないのか？  
それともお前たちは

この建物と一緒に殉死でもするか？おい、アキラ、俺たちはさっさとここを出ようぜ。

もうようはねえよ。」

「あ、ああ……。穀潰し。なにか感じないか？」

穀潰しとアキラはなにやらわめく指揮官たちを残し、崩れる建物の中を駆け出した。

「なにか？」

「どうやらテンマ様もここにきているようだ。そうすると少しまずいことになる。」

「なにがまずいんだ？」

「見る。もうテンマ様が遊べるような状況が残っていない。知つてのとおり善人組織と

サイキック組織は一応敵対関係で、おそらく今回テンマ様がじきじきにここにきたんだ

ろうが、この分だとこの騒ぎを起こしたやつに八つ当たりをされるだろう。」

「まあ……。どっちにしろ俺たちには関係のないことなんじゃないの

か。誰がこんなことしたかはしらねえが。」

とはいえこんなあほなことする人間は限られている。穀潰しにはその人物に心当たりがあつた。

「いや・ひよつとするとむかつくやつらが一網打尽にできるかもしれねえな。」

穀潰しはぼそつとつぶやく。

善人組織は、この世界では相当大きな組織だ。軍事力は皆無に等しいが、影響力は非常に高い。

この本部が壊れてもおそらくすぐにまた別の本部ができるだろう。だから壊すほうも安心して壊せるというものだ。

「ふふ・・。ゴミ虫どもが見苦しく慌てふためいておるわ・・。これだから王者の威光を示す聖戦はやめれません。」

騎士竜は呆れ帰った表情でその様子を見ており、つぶやいた。

「嫌な趣味だな。」

などといったと、いきなり戦車の下から凄い衝撃が走り、宙に浮く。

「うわ！戦車が宙に浮きましたよ！」

害児はそうめき自分ひとりだけ外に颯爽と脱出した。

「害児さんが黒幕だったのか！いくら害児さんといっても容赦しないよ！」

「げえ！善い人！」

どうやら善い人が害児の戦車を蹴飛ばしたようだ。

潰れた戦車から騎士竜以下黒服たちも這い出てくる。

騎士竜が善い人に向かって言い放った。

「僕たち二人相手になんとかなるとでも？」

「うるさい！正義はかつ！」

「ここはやむを得ません。どうやっても言い訳のつかぬ状況。善い人さんはやつらに騙されてからボコッたと後で言い訳することにししょう。」

では騎士竜、善い人さんを軽くひねることにしましょうか。」

騎士竜はうなずき、攻撃態勢に入るが、二人の脳に急激な頭痛が走り、空間が割れて、

テンマ・トキトが現れた。

なぜだか、というよりいつものことだがにやにやしている。

「いいぞお！私も加勢してやろう！」

テンマは右手のアームから冷気を出す。

騎士竜がそれを手のひらを回すだけで分解し、害児が刀を抜いて善い人に斬りかかる。

それをテンマがかばいアームでとめる。

害児の名刀もテンマのアームは切り裂けないようだ。いつでも無駄だとは思いつつ、隙を誘う

目的も含めて害児はテンマに話しかけた。

「テンマ・トキト、私との同盟はどうなったのですか？」

「ここはつまらなわけでもばかりだ！お前は少しは私を楽しませてくれそうだよ！」

そこに善い人が横から滑り込み、蹴り上げる。害児は間合いを取って車椅子に戻った。

善い人は、戦闘態勢を解きテンマに話しかける。

「生きていたのか。さては私にぼこられて改心したんだね。」

「たまには二人で戦うのも味があって面白い。」

テンマは振り返りもせずそう答えたが、善い人のほうをちらりと見てにやりと笑った。

害児は冷や汗を垂れ流した。

「騎士竜、勝算は？」

「ほぼ0%だな。逃げたほうがいい。最も逃げれるかどうか疑問だが。相手が一人ならよかったな。」

「仕方ありません。幻術を使います。」

「不完全な幻術では……。それに善い人には幻術は効かないだろうな。僕一人なら逃げるのはたやすいが……。」

「きましたよ！」

騎士竜はすでに地面を割って足場を悪くしていた。

さらに風を操り、テンマのテレポート時点に向かって竜巻を発生させた。

騎士竜も竜巻に巻き込まれ吹き飛ばすが、地面が盛り上がっていき騎士竜の足場になっていく。

テンマにはどこからともなく小さな円盤のようなものが飛んできて、テンマを乗せていく。

その円盤から害児を狙ったレーザー光線が噴射され、地面を照射させた。

善い人はそれを避けて害児に近づくが、害児はいつの間にかテンマ

の背後にいた。

（よしっ！まずは一人。）

テンマに向かって刀を振り落とすが、善い人の大剣が頭上で降ってきたため、とつさに回避をする。

（どうやらテンマには幻術が効いている！）

害児はアイコンタクトで騎士竜にそれを伝え、騎士竜はうなづく。

まずテンマから片付けようという算段だ。

騎士竜は、風を裂くような軽い攻撃ではテンマを止められないと判断し、空間を裂いて

質量のある重力波を繰り出す。

幻術にかかっているテンマには100%あたるはずの攻撃だが、レポートされ騎士竜の背後に出現した。

前方からは善い人が攻撃してくる。

その攻撃を騎士竜が防ぎ、善い人を吹き飛ばした後、後ろからアームで切りかかるが、逆に斬られていたのはテンマのほうだった。

その気配をかるうじて読み取り、背中を多少裂かれる程度に抑える。



（これが、魔人の幻術か。うまくサイキック能力に対応しているな。さすがにこの状況は面白い！）

とても面白そうには見えない状況で、なぶられていくテンマだったが、善い人がうまくカバーをして何とか持っていた。

騎士竜は勝率0%だといっていたが、なかなか善戦している。しかし害児の稼働時間がさほどないので、このまま防ぎきられたら興ざめな状態となるだろう。

さてどうしたものかとテンマは思案していた。

その様子を穀潰しが遠くから見ていた。

「潰したい馬鹿が都合よく集まってやがるぜ。終わりにしてやる。ひゃっはー！潰れる！サイコエンド！」

穀潰し最強の技だ。

「な、何してるんだ！穀潰し！皆殺しにするつもりか！」

アキラが慌ててテレポートしてきて怒鳴る。

「何いってやがる。これくらいで死ぬようなやつらじゃねえよ。」

確かにこれで限界がはかれる。はかってどうするという話もあるが、普段全力などだして

いない連中だから、試したくなつたのだろつ。

穀潰しはやる気のない人間だが、あのような熱い戦いの熱気に当てられてついつい自分も持つてる力の最大を試したくなつたのだ。

まず、巨大な門がサイコエンドを吸い込もうとして壊れ、善い人とテンマは押しつぶされた。

善い人の門が食い止める間に害児は騎士竜をつれて、遠くに逃げた。

それがなければ騎士竜も巻き添えを食らつただらう。

「善い人さん・・・」

害児は、その跡地を見ていた。そこにプレオがやってきた。ガスが窓から顔を出し呆然としている害児に話しかけた。

「やあ、害児さん。どうかしたのかな？」

「どうかしたですか？このさまを見てください！善い人さんが消えてしまったではありませんか！」

ガスは首をかしげた。

「善い人君が消えるとは我輩にはとても思えないことであるが・・・」

ガスのプレオには品物がたくさん乗っていた。善人組織のアジトから掠め取ったものだろう。

「貴方はこんな事態だというのに相変わらずの火事場泥棒ですか。」

「我輩は商人なのだ。」

「どうやら貴方と話すことは時間の無駄のようですね。」

「助かったのはどうやら僕たちだけのようだね。」

「ま、まあ善い人さんのことですからきつとまた復活するでしょうが、しかしあの突然の攻撃は  
いったい？ もしやまた穀潰しがいらぬことを・・・。」

眉間にしわを寄せている害兎の前に、のこのこと穀潰しとテンマが殺されてしょげている  
アキラがやってきた。

「貴様！ 貴様の仕業かぁー！ それっ！」

騎士竜は心得たといわんばかりにうなずき、地面をちゃんとけると、地面が盛り上がり

無数の岩が雪崩を打って、穀潰したちに襲い掛かってきた。

穀潰しはいきなりなにしゃがるといおうとしたが、どうやらその攻撃は自分を狙った  
ものではないらしい。

まさかと思い後ろを振り返ると、アキラの姿がなくなかわりに、多数の岩がそこにはあった。

「アキラ・・・なぜテレポートをしなかったんだ。」

返事はなかった。穀潰しは善い人やテンマが死んだとはとても思えなかった。

自分の攻撃にそんなに自信がないからだ。だがしかしアキラにとって見れば落ち込むのは当然であり、突然の攻撃にうまく超能力が使えなかったらしい。

「穀潰しさん、よくきてくれました。しかし・・・残念なお知らせをしなくてはなりません。」

穀潰しは怒りの形相で害児に詰め寄った。

その前を騎士竜がさえぎる。

「どけ。」

穀潰しは、高圧的に言い放った。

騎士竜は無言で攻撃しようがするが、害児の目配せで何かを察知しおとなしく身を引いた。

「運がよかったな！ひゃっははは！」

穀潰しは高笑いをし、騎士竜は苦い顔をしている。

「おつとこんな馬鹿に構ってる場合じゃねえ。おい害児。何でアキラを攻撃しやがった？」

「え、ええそのことです。穀潰しさん。よく聞いてくれました。」

害児はなぜかおどおどしている。何か悪いことをしたかな？という感じた。

「ああ、そうだな。じゃあ早く話せ。」

「はい、実はあの野郎は私たちをはめて一網打尽にしようとからむ悪党だったのです。」

「ん？・・・どういう意味だ？」

「巨大な衝撃波で私たちを倒そうとしていたのです。善い人さんの捨て身のおかげでどうか

助かりましたが、あのままでは下手すると私たちは死んでいたかもしれないのです。」

「あほか。てめえがあこの程度で死ぬようなやつかよ。」

「な、な、なにい？」

あほ扱いされて害児は多少頭にきたらしい。

騎士竜は任せろというアイコンタクトを害児にし、穀潰しを指差した。

「今分かったぞ。こいつがやったんだ。何もしてない顔してなんて

やつなんだ。君は。」

「ひゃっは！いまさら当たり前のことを言って威張るんじゃないよ！ほかの誰があんな大規模な攻撃ができるっていうんだ？」

「僕たちに謝ってもらおうじゃないか。さあ土下座だ。」

「穀潰しさん。正気ですか？善い人さんが死んでしまったのですよ。」

「てめえらも潰されないだけありがたかったと思え。」

「おい、害児さんとやら。もうこいつは殴らないと分からないみたいだぞ。」

騎士竜は害児に許可を求めた。

しかし、

「いや・・・。」

といて害児は考え込んだ。穀潰しはその様子を見て害児が参ったと思ひ得意になった。

「どうやら分かったみてえだな。いいか。一ついっておくぜ。俺とお前たちでは格が違うんだよ。分かったか！」

「・・・。」

騎士竜は害児を揺さぶったが、害児は黙ったままで、穀潰しを無視し、家に帰ろうとした。

「お、おい・・・。」

騎士竜は仕方がないので、後についていった。

「なんだありや？張り合いのないやつだぜ。」

穀潰しは、気分をリフレッシュしたところで、アキラを救出し、ヒーリングをかけてやった。

どこにいったのか、ガスがプレオで戻ってくる。

「ようやく話が終わったのか。長話だな。」

「お？ガス。後ろの荷物はなんだ？ずいぶん景気がいいじゃねえか！」

「ああ・・・。これは大きな取引があつてその際に得た儲けである。」

穀潰しはうれしそうだ。

「そうか！じゃあ今夜は宴会だな！」

「最近の間抜けな害児といい、あほな善人組織といい、まるで我輩を儲けさせるために存在しているようなものだ。」

「ちがいねえな。まったくやつらは間抜けでいい面の顔だぜ！」

「そついえば善い人さんは・・・。」

「やつなら問題ないだろう。ひゃっは！とりあえず帰ってお祝いな。」

「まったく善い人さんの無責任も困ったものだ。善い人さんがいないと我輩が大きな儲けができないではないか。」

ガスと穀潰しとアキラはプレオに乗り、家に帰っていった。

第一部 完



これまでの設定についてのまとめ（前書き）

長いです。

## これまでの設定についてのまとめ

これは近未来SFものです。細かい設定についてまとめてみたいと思います。

それによって作品の風景がより鮮明になると思います。面倒な人はこの章は飛ばしてください。

## 年表

219X年 第三次世界戦争勃発、核の応酬により東と西で戦い、西側が勝ったということ  
になっている。

それにより、地殻変動、放射線による人類の変化などが起こる。

220X年、地下シェルターに逃げた多くの西側の人たちと生き残った東側の人たちで、協力体制をとる。これ以降地球人という意識が芽生え戦争をするこ  
とがなくなる。

この機を境に人は核の放棄を決意し実行した。

229X年 初代テンマがサイキックに目覚め、アメリカのサイキック組織を公の存在にした  
後、人類を支配していた存在、「セカイ」の存在を公にする。

また、人類を保護していた存在「銀河連邦」という地球外勢力の存在も明らかにする。

そして、新しくサイキック組織を作り、これ以降人びとはサイキック能力を身につけ、

セカイと銀河連邦の陣営に分かれて再び戦乱の時代になる。

233X年 初代テンマの終焉に導く一滴の光により、とりあえず「銀河連邦」側の勝利となる。

これ以降、人びとは、精神的に豊かな暮らしをし始める。

239X年 東側のリーダーであった中国大陆の人びとは第一次核戦争で大半が死滅し、ほとんど荒野となり空き地になっていたが、そこで人びとは刺激を求めて地球オリンピックが開始される。（これは後に「セカイ」の策謀であったと判明する）

241X年 競技は瞬く間に加速化し、より洗練なものになっていき、最後には殺し合いにまで発展した。そこで当初オリンピックを始めた7つのグループが、かつて地球にあった概念である国という称号を使い争いを始める。

とはいえ競技の一環であることには違いなく、なんでもありの戦いではなかった。

249X年 魔人ルーファ・ルーファスの出現により大陸の覇権争いは日の国一強となった。

249X年 ネーム、フラワー、テンマ・トキトを中心とした「セ

カイ」により、人類闘争  
化計画を実施する。

銀河連邦側はそれを阻止すべく一計を設ける。テンマ・トキトの終焉に導く一滴の光により、宇宙にいる「セカイ」の上位エネルギー体、そしてそれに準じるものの大半が浄化される。ようするに悪意が消滅させられたのだ。

銀河連邦側にまんまとはめられた形になる。

これを一般では第二次核戦争と世界崩壊と呼ばれているが、実態はだいぶ違うもので、第一にこの時代に核はないことになっている。

「セカイ」は前回の戦いで滅びたかに見えたが、地球外に上位エネルギー体が多く存在しているため地球をめぐる銀河連邦と策謀を繰り返している。

249X 「セカイ」と「銀河連邦」による共同プロジェクト「世紀末善い人伝説」を始動する。

世紀末善い人伝説とは、一人の人間に宇宙の行く末を占ってもらったというものであった。

当初善い人にその役目を与えるわけではなく、その人物を両陣営で検討していたが、何らかの第三勢力の意思により、善い人がその任に強制的に選ばれてしまう。

ここに来て「セカイ」と「銀河連邦」は宇宙に自分の知りえぬ第三勢力の存在に気づく。

宇宙の動向を一人の人間に託し、「セカイ」と「銀河連邦」の三度目の大きな戦いが始まった。

#### 地殻変動による影響

中国大陆のすぐ下にアメリカ大陸がくつつく形になっている。地球の反面だけに地表があり縦長に大陸が全てつながっている。中国大陆の右には島があるが一般には認識されていない。

かつての日本であり、今では極東の島といわれ幻の地域と呼ばれている。

反対側は全て海ということになっているが、一つだけ小さな島があり、そこに「セカイ」と「銀河連邦」のメンバーが集まっている。

地球はどちらかというと「セカイ」の影響力がかなり多いので、「銀河連邦」のメンバーはお客様扱いされている。

#### 地域の説明

善い人らがいるヒノキ村は、アメリカ大陸のカナダ辺りにある。といっても地殻変動の

影響で相当地理は変化している。その上に北アメリカの残骸があり、

その上に中国大陸  
が割と多く残っている。ヨーロッパやアフリカ、インドあたりは海  
の藻屑になっている。

サイキック組織の本部、善人組織の本部はいずれもアメリカ大陸に  
ある。

ちなみに中国のことを大陸、下にあるアメリカのことを新大陸、日  
本のことを極東島国  
という名称で呼ばれている。

## 産業の状況

主に農業が主体であるが、現代人より超能力や武術その他もろもろ  
が発達しているため、  
機械にそれほど依存せずものが生産できる。

またその機械そのものを作る作業も効率的になっている。

特に働かなくても誰かが食べ物を与える。

紙幣はあまり流通していない。貨幣のみとなっている。その貨幣も  
一部の人間のみのもやり取り  
に限られる。

大多数の人間はお金というものを使っていない。

どうしてほしい技術や物というものがたくさんある刺激がほしい人  
間、いわば上流層の人間

だけが使っている。

ただしヒノキ村自治区は例外とする。

## 登場人物

善い人 性別女性 推定年齢16

余命いくばくもない不治の病に冒された少女だったが、ある日突然雷が降ってくることに  
よって、善い人と名乗るようになる。

本作品の主人公。白服に白い帽子をかぶっている。

体はほぼ死体であり、汗や老廃物をださない。ほとんど人形と同じ  
といってもいい。

寒がりで、いつも厚着をしている。コタツが好き。食事はほとんど  
とらないが別に食べれない  
わけではない。水を好む。

体が死体なため、体重が恐ろしく軽い、またサイキックによる脳へ  
の影響を受けない。

催眠、メトリーなど、心がないため思考を読むことができない。善  
い人の心は宇宙を直結  
してるため、その動きを予測することは、並みのサイキッカーでは  
不可能。

また、体術による幻術などによる作用もうけない。単純な物理攻撃のみ影響を受ける。

ある事件を境に、過去を知り名前を知ると、元の少女に戻ってしまうことが判明する。

攻撃方法としては、蹴りを主体とする体術、とはいっても彼女のそれは技ではなく、力に任せた攻撃であり、例えるなら獣の俊敏さと力である。

それも筋力ではなく、根性で力を出している。彼女の筋力はいつもずたばろで、骨も折れてるかもしれない。

それとどこに収納してるのか不明だが、大弓や大剣、大槍などダイナミックで威力のある武器を好んで使う。

弓以外はごつごつした量産のきく武具ばかりであり、精密な業物はほばない。

なぞの壁、門などが善い人を自動で守ることがある。「セカイ」ではそれを「神器」と呼んでいる。

また雷などが降ってきて、善い人が甦ることがある。再構築も可能であり、ずっと雷と繋がることで、能力の次元が飛躍的に上がる。これにより高次元に干渉できるようになる。



これを「セカイ」では「神化」（しんか）と呼んでいる。

目的は善いことをすることで、趣味は漫画を書くこと、現在は女性型戦車ロボットのタンクと同居しており、害児の保護を受けている。

日課は悪人をばこぼこにすること、彼女の悪人の定義はかなりあいまいで気分と思い込みによるところが大きい。

他には子供と遊ぶこと、ドラゴンの世話をするなどやることは結構ある。しかし家にいることも多い。

善い人になったあとは、そこらを回って善いことしていたが、やがて害児に保護され、

害児の国は悪人が多いのでそこにいつている。

穀潰し 性別 男性 推定年齢17

テンマの正統継承者で、初代テンマの転生者でもある。しかし初代テンマ以上の念力を底に秘めている。

世紀末善い人伝説プロジェクトの善い人の筆頭候補でもあった。

本作品のサブ主人公的位置にいる。青っぱい服と帽子をかぶっている。

生まれたときから、サイキック研究所におり、ナンバー6と呼ばれていた。

6番目に加入したという意味ではなく、6という数字にたまたま人がいなかったため、6になっただけだ。

念力を測るときに、メーターが動かなかったので、素質なしとされ、その日からナンバー0  
というあだ名をつけられ、それが定着する。それは実際は、初代テンマの念力の量で  
計算されていた機械のほうに問題があったのだった。

相当馬鹿にされたが、彼は超能力開発に興味がまったくなかった。

世界崩壊の影響はほぼ受けていない。

テンマの代が変わり、フラワーの時代になったとき、サイキック組織は激変する。

その影響はもろに受け、穀潰しも好まないトレーニングをテンマに直接強要され、そのおかげ  
で若干のサイキック能力を得た。

しかし穀潰しはそれを恨みに含み、組織を抜け出し、それ以降嫌がらせのため組織の研究所を  
潰し歩いている。

穀潰しというのは、何度か変化した名前だ。自分で勝手につけてい

る。この名前は自分が  
飯を食べるのが大好きだということに気づいて変えた現時点での名  
前だ。

ただ、あまり食べれない体質なのでそれを気にしている。

サイキッカーとしての実力的には、ナンバーズの上位レベルと同等  
だが、それは戦闘力として  
の話で、実際の能力は相当低い。

まず、メトリー、透視、予知、テレポートがほぼできない。テレポ  
ートに関してはまったくで  
きない。

彼がテレポートだと思ってるのは、単なる瞬ぱつ的な肉体強化によ  
る高速移動で、練りこみの  
一種。

彼はそういったサイキック能力に頼っていないため、五感が他のサ  
イキッカーに比べ異常に  
発達している。

ただし、体術は並。

そのため、メトリーできない善い人などとも対等に戦えるが、ナン  
バーズの上位にいる  
ネーム持ちと呼ばれる連中にはほぼ勝てない。勝ってる要素が一個  
もない。

ちなみに体術は拳を主体に使う。ナイフを好んで見せびらかすこと

があるが、使えるわけではない。

得意としているのは専ら練りこみと呼ばれる、念力の具現化で、衝撃波などを飛ばすのが得意。

彼は恋人のセリルと一緒に組織をでたのだが、ある事件でセリルと別れてしまい、その後世界崩壊で、飯が食えなくなっていた。

やがて、害児が自治区を作り、ガスがそこに店を構えたというのでそれを頼りにヒノキ村をめざし、廃墟街に住処を作って現在はそこにいつている。

害児 性別 女性 推定年齢20

本名はルーファ・ルーファスという日の国の名門ルーファス家の長女。

魔人ルーファと他国から恐れられた存在。しかし自軍内ではルルちゃんと呼ばれ親しまれていた。ただ本人はそうに呼ばれることを嫌がった。

害児というのは善い人がつけたあだ名で、その後自分でそのあだ名を正式な名前として世に広めた。

「セカイ」のメンバーでもあり世界崩壊とも関わりがある。「セカ

イ」のメンバーの中では  
下っ端。

世界崩壊の影響をもろに受けた人物。昔は体術を使うことに生きがいを感じたが、悪意の消滅の影響を受け、軍人を辞めることを決意した。

その際に父親に両足を斬られ、車椅子生活になる。

この車椅子は、ジェットが出て飛行できるようになっている。またバズーカーやダイナマイトなどが仕込んである。なので爆発することがある。

人間の足と同じくらい精密な義足をつけることもある。木の義足でも歩けるが、それをつける時は主に戦闘のときだ。

日の国を去った後、「セカイ」や軍事国家からの圧力を避けるため、ヒノキ村に自治区を作る。

ヒノキ村からしたらいい迷惑だが、その代わり、商業など盛んな唯一の地域に変貌を遂げる。

世界崩壊前はある程度発達していた商売であったが、崩壊後はまったくそれがなくなったのでそれを復活させたのであった。

刺激を求めた人たちは害児の地域に足を運び、瞬く間に巨大な一大地域となる。

これにより「セカイ」や軍事国家と単独に対抗できる地球で唯一の人物となる。

なので「セカイ」では地位は低くても発言権は高い。また「セカイ」の方針に従わないことも多々ある。

戦闘では、銃火器を使う。本気になると、日本刀「朝日」と高性能の義足をつけて体術で戦う。

魔人とまで恐れられた幻術と気術を扱う。

しかし、全盛期より威力はがた落ちしているが、それでも地球の中でトップクラスの強さを誇っている。

黒服というものがおりこれはかつての害児の部下で、害児の武力の崇拝者。

彼らになぜか首領と呼ばれておりご満悦だ。

ティーをたしなむのが趣味らしい。

彼女はヒノキ村の町長ではなく、財閥という認識を一般ではされている。

西洋風の城に住んでいるのだが、ああいう城には途中ででっぴりがあつてそこに部屋がある  
ということが多いだろう。お姫様などがよくそこにいるのだが、何

故か害児はそれでっぱりに  
さらに出っ張りを重ねて上へ上へと続け、非常に不安定なつくりに  
しており、その頂上  
の部屋だけを使っている。

害児の仕事はほとんど黒服がやってくれているが、暇さえあれば黒  
服に城を高くするように  
いつている。

崩れる場合もあるがそのときは崩れてない一番高い部屋を使用する  
ようだ。ちなみに  
部屋に入るときはジェットで入り、部屋から出るときもジェットで  
下に降りるようだ。

ガストラゲタ 性別男性 推定年齢18

元々幻の極東の島国いた天才剣士だったが、剣での勝負が早くから  
馬鹿らしくなり、強さの  
本質を求めて国から出る。

国から追っ手が来るがことごとく撃退してきた。しかし最早彼の使  
う技は剣術ではなく  
昔でいう兵法をいうものに変わっていた。

早くから忍術の研究をし、大陸や新大陸の各地をさ迷い歩いて武者  
修行をした。

その際に、サイキック研究所にも立ち寄り、穀潰しとも会った。彼

と一悶着あり、それ以降  
お互い認め合う仲になる。

ガストラゲタというのは偽名で、本名は別にある。

やがて彼は、重装備主義になり商人になった。

装備がちがちに固め、各地を歩いて大もつけし、その全てを研究に費やした。

世界崩壊後、商売が成り立たなくなり、しばらく家にこもって研究に没頭した。

やがて、害児が自治区を作ったという情報を手に入れ、意気揚々とヒノキ村自治区へと向かった。

当初何もなかったヒノキ村を商業地域にしたのは、ガスの貢献度によるところが大きい。

ガスは粉骨碎身して事に当たり、害児と連携して村の開発を進めた。

ガスは「セカイ」とも「銀河連邦」とも関わりがあり、一部の間では第三勢力のスパイとすら呼ばれている謎が多い人物だ。

力の本質の追求を目的としている。

情報網は、アツチラや害児以上であり、どんな強い相手でも、彼の布石と装備、対策次第で勝ててしまう稀代の戦略家でもある。



害児同様「セカイ」が警戒する数少ない人物。

普段は間抜けで馬鹿を演じているが、それは素も少しあるがほとんどが演技である。

プレオという車を愛しており、プレオを馬鹿にされると怒る。

戦闘方法は、ガスや火を使う。落とし穴や罠、なども好む。あらゆる武器防具に精通している。

薬草や薬品の知識も豊富。

害児以上にこの世界のキーマンである善い人、穀潰しのコントロールに成功している節がある。

果たして彼の本当の目的が何で何者なのかは誰にも分からない。

サブキャラたち（勢力ごとに）

ヒノキ村自治区

悪人

世界は農業主体の世界なので、どこにいても働かなくても誰かが食べ物してくれるようになっている。

しかし穀潰しのように、働きたくもなければ、施しもうけたくないという人間が世の中にはいるらしく、それらの人間が闘争と刺激を求めて、廃墟街にやってきた。人殺しなどは滅多にしない。よく善い人にぼこぼこにされている人たち。

## 巨大なハエ

善い人のペット、古代生物の一種。戦闘能力は非常に高いが余り戦闘に使用されない。

専ら善い人の遊び相手などだ。主に背中に乗せて空を飛んだりする。羽が取れて地面をもぐったりもできる。

戦闘能力としては、眼からビーム羽から超音波、真空波などを生み出せる。

## タンク

女性型ロボットで、善い人の同居人だが、いないことが多い。いない場合大体どこかに埋まっている。

一応戦闘口ボらしい。趣味は発掘で、変なものをよく発掘してくる。それを善い人の家に持ってくるが、善い人は迷惑している。それをガスが回収しガスは大儲けしている。

害児はそれが気に入らないらしい。

黒服たち

昔の害児の部下で日の国出身の武術家達、非常に有能であるが害児に対して妄信してる狂信者たち。

ヒノキ村村長

ヒノキ村の村長。

隣町の領主

今は趣味で山賊をしている。

リーダー格の男たち

悪人達の勢力の一つ。いつも何かたくらんでいる。

ドラゴン

古代生物の一種。本人曰く非常に強いのだらしいが、弱そうに見える。

子供によく好かれている。今は隣町だかなんかに住んでいる。町の住人によく邪魔扱いされて体の大きな自分を恨んでいる。

保育園の子供達

ヒノキ村の保育園、害児が保護してる。善い人が金を上げたり物をあげたりしているところ、よく遊びに行く。

医者

名医らしい。ガスの友人で穀潰しをいつも馬鹿にしている。

セリル

テンマの友人で、穀潰しの元恋人、昔ある事件をきっかけに穀潰しとは別れる。

高位のサイキッカーだが、テンマのフラワー同様、セリルも勝手に自分で名乗ってるあだ名。

なのでネームではない。サイキック組織が嫌になって抜け出した。

その後仕立て屋としてヒノキ村に住み着いてる。

戦闘方法は、サイココーティング、服に念力を練りこむことによって武器とすることができる。

セリルのオリジナル技。

大陸の軍事国家

害児の父親

幻術を使う。なんだか嫌味な人。よく負けるので負けるのが趣味だ  
と思わえる。

騎士竜

昔の害児の部下、その後日の国の武将になったが、ヒノキ村自治区  
に所属する。

PCを持つて高速計算をし、宇宙のあらゆる事象を計算し分析する  
ことができる。

元々強力を得る武術を習っていたが、途中から自分で流派を作った。  
名前は特にない。

現時点最強の武術家。実はPCがなくても問題ないが本人はそのこ  
とに気づいていない。

ポリシーで走ることをしない。乗り物にもあまり乗りたくないらし  
い。

実はその気になればものすごく早く走れるが、死ぬような羽目にな  
っても走ることはない。

戦闘方法としては、空気と地面をよく使う。

サイキッカー以上の万能性と攻撃性能があるが、防御性能が低い。

極東の島国

果魔斬り

ガスの師匠、果魔斬り流を使う。二刀流。

追っ手たち

ガスに対する追っ手、なかなかしつこいが全て返り討ちにしている。何故ガスを狙うかといえば  
ガスが果魔斬り流の奥義を知ってるため。しかしそんな奥義はガスに言わせるとゴミ同然でありもうすでに忘れている。

サイキック組織

テンマ・トキト（フラワー）

セカイの幹部、非常に強いエネルギー体。

サイキック組織のリーダーテンマを後継者。自分の父親を殺害しその称号を受け継いだ。

世界を闘争に導こうとしている。戦うのがすきらしい。

道具を使うのが得意。レンズというサイキック増幅器と武器アームと円盤の合計三つを所持してる。

道具がないと弱い。

能力はネーム持ちの中でも飛びぬけてトップだが、代表的な能力としては、

世界を照らす眼　全世界を透視し頭の中に瞬時に処理できる。

全てを聞く耳　全世界全ての物質の思念を瞬時に聞いて処理できる。

しかしセカイや銀河連合の上位のエネルギー体からするとこれら二つは誰でもできることらしい。

終焉に導く一滴の光　初代テンマが世界を創造した光を受け継いでいる。フラワーはこれを

破壊の力だと思ったが実際は違うものだった。

これは銀河連邦の地球に仕込んだ力の実ともいべきもの。

時を操る能力　別の時間に干渉できる。

次元を操る能力　別の次元に干渉できる。

テンマを倒すには、銀河連邦の上位エネルギー体くらいの次元にいないと不可能。

器を持つ人間としては、最強に近い力を持っている。

例えばその次元その時間で倒したとしても、他の次元他の時間の自分とコンタクトを常にとって

いるので、無数に近いテンマが存在しお互いにフォローしている。

アキラ

ネーム持ち 催眠が得意。サイキッカーのネーム持ちの中にも序列が存在するが、アキラは三番目程度の実力。得意の能力にも相性があるのだが、それよりも脳内の処理時間の早さで序列が決まる。

アキラの催眠は、広範囲高速催眠なので、1ナノ（0.0000000001秒）秒の間に1万人、1kmの範囲の人間あるいは生物を催眠状態にできる。

しかし離れれば離れるほど効力も弱まる。その気になれば世界中全て催眠状態にできる。

サイキッカーは超能力に対して防御能力があるので、催眠をかけるためには相当時間がかかるが、使っていればアキラならば100%かかる。

ただし、善い人や物質には効かない。それを操るのは催眠ではなく、テレキネシス。

## ナンバーズ

非常にたくさんいる。皆ネーム入りを目指してる。サイキッカーであることに誇りを持っている。

ナンバーの若い方が強いというわけではない。



テテリン・テテラン

ネーム持ち テレポートが得意。道化師の格好をしている。

アキラより脳の電気信号が早いので、よーいどんで勝負をすると、テテリンが勝つ。

トキトに次ぐ超能力者。

攻撃手段としては、1ナノに100回テレポートをすることができ  
る。

テレポートとは自分以外の何でもできる。例えば相手の心臓なども  
テレポートさせることができる。

アキラの能力より非常に残虐性が強い。

ちなみにテテリンもアキラもそれぞれの得意能力だけに関しては、  
トキトより上位の能力  
を保っている。

白衣の女性

昔フラワーを捨てた母親という説もある。少し気が狂ってるような  
研究者。

善人組織

前線支部の指揮官

ヒノキ村自治区の中にあるアジトで、ヒノキ村に最も近い場所にある支部の指揮官

補佐官

その指揮官を補佐する人らしい。

司令官

善人組織全体の司令官で、銀河連邦の思念と人格を共同している。心の中にもう一つ人格が存在しているような感じ。

銀河連邦は地球に対する影響力をほとんど行使できないので、銀河連邦側のエネルギー体は実質彼女一人くらいである。

義賊のアツチラ

あほの代名詞ともいう。いつもなぞのようにハイテンション。しかし仕事に対しては冷徹に行う。

戦闘では、仕込み刃、ナイフ投げ、毒などを扱う。スピードが非常に速い。持続力も高い。

世界のあらゆる情報をその足で集めてるが、ガスにはかなわないらしい。

しかも彼はよく酒場で調子に乗って情報を漏らしている。

花植えのマリー

善人組織四天王の紅一点。花を育てるのが趣味だが、その花に幻術作用を持たせ、会員が迷惑していることもある。

レイピアを武器として扱う。

会員達

はつきり言って一般市民。とはいえ訓練は受けている。サイキック組織のナンバーズ以上に人員が多い。この世界の人間は、暇つぶしでよく善人協会の会員になる。

その他

嫌味博士

穀潰しの妄想を思われている博士。嫌味が好きらしい。セカイの幹部。

GTR 4

穀潰しの家に同居している嫌味なロボット。嫌味をするのが生きがいらしい。

## 第三十四幕 大陸へ

穀潰しの衝撃波によって吹き飛ばされた善い人は、次元の狭間を彷徨って

いた。そこは真っ暗で何もない空間だったが、善い人は元々眼などほとんど

見えていないから関係なかった。

「うーん。なかなか悪人がいないな。」

善い人はなかなか善いことができないので、鬱憤晴らしをしたくて仕方がなかった。

どうやら遠くで明かりが見える。ああそこが悪のアジトだな。と善い人は直感した。

善い人の直感に間違いなど起こりえない。

「この善い人をよくも騙してくれたな！この悪人め！」

罵声を浴びせられた主はん？という表情で善い人のほうを向くが、その瞬間後方に大きく吹き飛ぶ。

「へべべ……。なんだあ？この間の続きをしたいのか？」

蹴飛ばした主はテンマだった。善い人が周りをよく見てみると、明

かりは  
天から差し込んできている。この場所だけではないほかのところにもだ。

だがしかし、人はどうやらテンマ一人で後は他にいないようだった。

「どうやらここには君一人みたいだね。つまり善い人に罰られる名誉ある

悪人は君一人だということだよ。」

「私とまた遊びたいのか。」

テンマは気乗りしなそうな顔だった。

「なにを！もう我慢ならん！私の善なる行為が遊びだというのか！」

善い人が飛び掛るが、例によって空間を移動される。空間自体に穴を開け

善い人がその穴に飛び込み、遠ざかるという仕組みだ。

遠くにいる善い人に対し、テンマはうつすらと背後から出現し語りかける。

「私はおしゃべりを楽しんでいる。」

善い人は改めて周りを見渡す。

「うそをつくんじゃない！」

しかしその攻撃は、テンマの体を通するが、どうやら虚像のよう

だ。

善い人はそれを見て、顔を茹蛸のように真っ赤にした。

「この私を愚弄するのか！」

「そうだな。貴様は。少し離れた場所でやってみるといいだろう。あの場所がいいだろうな。また会うこともあるだろう。私もあそこでは

楽しめている。」

テンマがそっくり終わると、善い人の周りの空間が眩い白い光に包まれる。

善い人は待てー！といいながらテンマの気配を追いかけるが、やがて光が

消えて、善い人が元にした世界へと移り変わる。

善い人はその変化に気づかずなおも待てーといいつつ、高速移動を

して、途中で人がおり邪魔であったので吹き飛ばすことにした。

「善い人の邪魔をするものは許さない！S・アッパー！」

驚いた邪魔な人は、葉の国の軍隊の兵士であった。ここは大陸、善い人

のいた新大陸ではない。

彼らは武術家だけあってすばやく反応して、善い人の拳の直撃はまぬがれた

が、よく分からない気合のようなものに吹き飛ばされ天へと飛んで

いった。

どうやら様子が変わったのは、そのようにいろいろなものを吹き飛ばして

しばらくたってからだ。それは人だけではなく戦車なども含める。

善い人の善いことセンサーが反応を示した。

善い人が遠くを見ると、地面に線引きがされており、居丈高な兵士と悔しそうな表情の兵士がおり、居丈高な兵士がやりで悔しそうな兵士をつついたりして威圧している。

これは！と善い人は思った。

「なにをしているか！この私が善い人と知ってのことか！」

そういつて善い人は居丈高な兵士の槍をむんずと奪い、槍を振り回して、

数十人いた居丈高な兵士たちを吹き飛ばす。彼らは声を発する間もなく

驚きの表情で飛んでいった。

その後やりをドンと地面につき、にかつと笑い悔しそだった兵士達に話しかけた。

「礼には及ばないよ。当然な事をしただけだからね。」

助けられた兵士達は怪訝な表情で、善い人を見てなにやらぶつぶつと相談

している。

それを見た善い人は、自分を馬鹿にしているに違いないと思う義憤を發し  
ようとした。

そのときパチパチパチという手拍子と共に、大柄な男が、のしのしと善い人のほうにやってきたので、善い人は話しかけた。

「やあ、貴方は善い人かな？」

善い人は悪人に違いないと思い試しに聞いてみた。大柄な男はいかにも

悪人ですという人相であつたが、ここぞとばかり強調した。

「いかにも私は善い人です。実は善い人様を迎えに来たのです。」

善い人はおや？と思った。計算に狂いが生じたのだ。

「実は善い人の振りをして善人を騙そうということが漫画ではよくあるね。」

善い人はどうあつても男を悪人に仕立て上げたいようだが、そのようない

ぼろを出すようなものでもなかった。

「いやはや私は純度100%の善人でございます。善い人様がやってきたと

いう知らせを受けて急いでやってきたのでございます。」

どう見ても悪人面だ。それにどこかで見た顔でもある。



「どこかで見た顔だね。」

「はい。私はルーファ・・・いや害児様の父親でございます。」

日の国の將軍であつた彼だ。

「確か悪人だつた人だ！許さん！」

「ひい！」

害児の父親はいきなり土下座をして、降参のポーズをとつた。  
さすがの善い人も仕方ないので、矛を収めた。

「今回だけ特別だよ。」

「ありがたき幸せ。」

害児の父親はすくつとたつて、襟を正した。周りにいる兵士達はその光景をぼかんとした表情で見守っている。

「さて自己紹介が遅れました。私は、ディアー・ルーファスと申します。」

「覚えにくい名前だね。」

「これは手厳しい。ルーファスとでも呼んでください。」

善い人は名前などどうでもいいという顔だ。

善い人の無関心をよそに將軍は話を進めた。

「わが日の国の状況は悲惨であり、最早破滅している状態です。それが先ほどの線引きで、我々はその線の外に出てはいけなないので。

我々日の国は他の国の暴挙を止める正義の軍隊なのです。

どうか善い人様に尽力をお願いしたい。いや善い人様にこの国をお任せ

したいのです。」

ちなみに彼らは線の外で話をしている。線の中にいた一人の兵士は血相を変えて、線から飛び出し、將軍に向かって話しかけた。

「しかし將軍それは・・・。」

將軍は一瞥、悪魔のような視線を向けることで兵士を黙らせ、すぐに表情をニコニコ顔に戻し、もみ手をして善い人の返答を待った。

「私は善いことをするだけだよ。」

「もちろん！でございます。やあ今日は宴会だ。善い人様の記念日です。

善い人様は善人でございます。」

「分かってくれば善いんだよ。」

善い人はほめられてまんざらではない気分であった。將軍はちよろい

ものだと思った。

「ではこちらでございます。」

兵士達は納得の行かぬ顔のものもいたが、先ほどの善い人の威力を見て

興奮冷めない感覚のものもいた。

魔人や戦神の再来だと感じたのだ。しかし彼らはそういう存在に踊らされる

自分達に若干飽いていたのも事実であった。

日の国の城はとても小さなものになっていた。

しかし今夜は特別な日だ。皆で大いに騒いだ。

こんな日でも戦争は待ってくれないものだ。將軍は兵士からなにやら報告

を受けるたびにしかめっ面になった。

食事に手をつけていない善い人を見て怪訝げな顔をしていた將軍であつた、

部下からの報告を聞いて大激怒した。

「やあ！諸君はわしの顔を潰すつもりなのか！善い人さまのために早く上等な水を用意しないか！」

そういつて水を持ってこさせると、善い人はちびちびとやり始めた。

どうも辛気臭い。將軍は善い人に心底困った表情を作りつつ

話しかけた。

「またもや、やられました。わが軍の部隊は次々と夜襲を受けているよう

です。何しろ向こうは六国連合なんぞ組みまして、善良たる我々をいじめておるのです。」

善い人は憤然として立ち上がった。

「善人をいじめるとはおのれゆるさん。」

その様子を見て將軍はホクホク顔になり、そばにいた部下に話しかける。

「善い人様がいれば、わが軍はまた霸権を得ることすら不可能ではない。」

「ははっ！」

とはいうものの、兵士達は疲れている。確かにこんな馬鹿騒ぎしている場合

でもない。將軍も前線に立つて指揮をとらねばならない。

「善い人様、私はちょっと失礼します。ゆっくりと楽しんでいってください。ところでお泊りはどうされますか？もし当てがないのならわが城

の上等な部屋を用意しますが・・・。」

「善い人に休息はない。早速善いことをしなければならぬ。」

「え？いやそれは願ったりかなったりですが、夜はいろいろと危険ですよ。」

善い人様には昼間存分に活躍してもらいたいのですが・・・」

「善い人に指図しようというのか？」

「いえいえ・・・滅相もない・・・」

將軍は善い人のどでかい態度が腹に据えかねたがここで暴れては何にもならない。おとなしくして善い人のよいようにしてもらうことにした。

（まあ今晚は様子を見よう。）

將軍はそう思い、あえて何も言わずに去っていった。

善い人はもうここには用がないといわんばかりの態度で、窓から飛び降り  
いずこかを目指した。

あちこちで戦闘が起こっている。善い人をそれをそのつど吹き飛ばしたが、  
いかんせん数が多い。拠点が必要だと感じ始めていた。

遠くで善い人を手招きする人物がいる。またまたテンマだ。

善い人はいい加減うんざりしたが、そちらのほうに歩いていった。

テンマの後ろに見慣れたものがある。それは善い人の家であった。

善い人はテンマを手で押しのけて家に入ってしまった。家の隅に穴があいて

おり、近くにハエが待機している。

「ハエ！生きていたのか！」

横にのけられたテンマも、家の中に入ってきた。どうやら何か説明をする

气らしい。

「家を持ってきた。時期に援軍もくるみたいだぞ。よかったなあ！」

善い人はその話を無視して穴を見つめている。

「その穴はハエが掘ってきたものらしい。その穴をたどっていけばヒノキ村

自治区にも帰れるということだ。

安心しろ。向こうにも同じ家がある。私が作っておいた。」

善い人は改めてテンマを見た。

「貴方は善い人だったんだね。」

「私はいろいろとやることがある。この世には楽しげなことがたくさん

だからなあ！善い人とは戦場でまた遊べるかもしれないな。」

そういつて家の外にしようと扉に手をかけたが、思い出したかのようにつけ

加えた。

「貴様のペットの鉄くずもここにきてるようだな。探してみるがい。」

タンクのことを言っているのだろう。たぶんどこかに埋まっていると思われ。

善い人は一先ず家で漫画などを書くことにした。しばらく書いてなかったのが多い。

### 第三十五幕 心強い援軍

テンマのいう援軍だが、善い人がこの大陸にいることをテンマは善い人の

仲間達に伝えていた。

今より少し前のことだ。

害児は善い人がいなくなり、やる気がなくなったがまあどうせそのうち

復活するだろうと多少樂觀的な気分であり、それまで休憩だと自分の中で

区切りをつけ、紅茶などを飲んで楽しんでいた。

「ふっふっふ……。朝の紅茶は格別です。」

今日も害児は朝一番の紅茶を楽しむべく、カップに紅茶を注ぎ、テラス

にでて、蟻のような人間の動くさまをにやつきながら眺めつつ、それを

飲もうとする。

ぐっと飲んだ。と思っただがどうもカップがない。

「この私にしてはとんだ不覚。」

怪我の後遺症で握力が低下していたのかもしれない。害児は相当昔無理をしてきたからこういうことも想定している。

落ちてないか辺りを見渡したが、どこにも落ちていない。



不意に背後から声が聞こえた。

「たわけ。善い人はここにはいないぞ。」

「なに？」

害児は血相を変えて、部屋に戻ると、優雅に紅茶を飲んでいるテンマの姿があつた。

「それは私の紅茶だ！返せ！」

「善い人は今、大陸にいる。善いことをするのにふさわしいだろうからな  
あ。」

「こいつ！さつさとよこさんか！」

害児はテンマからカップを取り上げ、憎憎しげにそれを洗って、紅茶を

注ぎ、用心しながらそれをぐつと飲むと、満足げな顔をした。

「どうです？恐れ入ったでしょう。貴方の策略もここまでだ。」

「いいことを教えてやろう。善い人の家の中に穴がある。そこを通れば  
まっすぐ大陸にいけるだろう。」

「この私をはめるつもりですか？騎士竜さえいれば貴方など何も怖くは

ない。」

害児の取り乱しようを見てテンマは悲しげな気分になった。

（ルーファも昔は私に匹敵するほどの実力者であったが、今は見る影もないな。一度壊れたおもちゃは元には戻らぬか・・・）

「ルーファよ。人は闘争によって美しくなるのだ。そうは思わないか？

・・・私も大陸では遊ばせてもらっている。気があるなら貴様も来るがいい。」

「・・・。」

テンマは去り、害児はテンマにどう思われたかよく分かった。昔はライバルであつた関係だ。

「私もそう思つたこともありましたが。しかし・・・。」

今は違う。どう違うのかは本人にも分かつていないが。

最早以前とは違う。二人の力関係もそうだ。一方は戦うことをやめ一方はますます戦いを求めた。

だが、考えることは害児はあまり好きではない。

「とにかく善い人さんをサポートしなくては……。しかし大陸か。これは一工夫する必要があります。」

少したつて、渋い顔の穀潰しとガスが害児の城にやってきた。

穀潰しはガスに説得され相当いやいやながらやってきたようだ。

いわゆる害児の一工夫とはこれのことであつた。

「やあ、二人とも、よくきてくれました。実は私の調べによりますと、

善い人さんは生きているらしいです。」

そこで言葉を区切り、害児は二人の反応を見た。

穀潰しとガスは顔を見合わせ、なにいつてるんだこいつはという表情で

害児のほうを見た。

害児はしてやつたりと思いつつ次の言葉を放った。

「驚いたでしょう？ いや私も驚きました。しかし以前にもこのようなこと

はあつたのです。私は悲観してませんでした。実に入念に善い人さんの  
搜索が続けていたのです。あなた方は思いもよらぬことだったでしょう

が、そこでついに善い人さんの姿をこの地ではない別の地で発見した

という次第です。」

穀潰しがおもむろに口を開いた。害児は気分をよくし聞き耳を立てた。

「おいおい、寝ぼけてるのか？そんなこととづくに俺達は知ってるぜ。

ガスは独自の情報でとづくに調べがついていたし、俺も三日前にテンマ

のあほから聞いたぜ。

ん・・ああっそうか。お前あれじゃねえか。もしかしてお前もテンマに

聞いただけなんじゃねえか。絶対そうだろ？ひゃっははは！」

害児は怒りのあまり顔が真っ赤になり叫んだ。

「おのれ！テンマのやつ！何で私に真っ先に知らせにこなかったのだ！」

穀潰しとガスはその様子にあきれ返って、小声で話し始めた。

「なんか凶星だったみてえだな。悪いことしちゃったかな。」

「害児の実力など所詮そんなものでだろう。穀潰しが気にするまでもない  
ことであるな。」

ガスがそういった瞬間、ボコツという音がして、ガスが後方に吹き  
飛ん  
でいく。

穀潰しが害児のほうを見ると、すっきりした表情で、車椅子に座っていた。

「ひでえな・・・。」

「何がです？私はゴミ虫を退治しただけのこと。」

「じゃあ呼ばなきゃいいのによ・・・。」

ごもつとも話であった。ガスは引きつった笑みを浮かべながら元の位置に戻ってきた。

「あいや、害児さん。それで我輩らにいったいなんのようであるのか？」

「いうまでもなく、あなた達二人には善い人さんのサポートをしていただきたく、ここに呼んだわけです。」

二人は怪訝な顔をした。何でわざわざ人を使うのだろう。いつもは真っ先に自分がやってることなのに。

「お前が一人でやれよ。俺達を巻き込むな。」

「それがそうもいかないのです。私はあまりその地域に近づけないのです。」

「よ。」

「知ったことか。」

ガスが穀潰しをさえぎり発言した。害児はどうせろくなことをいわぬと

すでに予想がついていた。

「まあ我輩が力になつてもよいのでありますが・・・これも害児さんが我輩のお得意さんですからな。それをご配慮願いたいもので。」

害児はそつぽを向いて答えた。

「こと今回に関しては、ガスさんの力も必要です。何しろ善い人さんの武具

は実質貴方しか作れませんからね。」

「物分りがよくて我輩としても大助かりといったところですね。」

害児はぬぐぐこいつ・・・さっきのお返しだなと思わないでもなかったが、

今回だけは仕方ない。何もしないでおくしかなかった。

ガスは早速手を害児に向かって差し出した。

「なんだ？その手は？ふざけてるのか？」

「いやいや、まったく正気である。何しろ害児といえば約束を破ることで

有名な商人。ちゃんと形を見せていただけなければな。」

「貴様ごときゴミ虫ひとりひねりつぶすのは簡単だが？」

「みくびってもらっちゃこまりますな。今はこちらのほうが立場が上である。」

「ちっ。おいっ！」

害児は黒服に向かって合図をする。やれ！という意味ではない。ガスの手には高級な宝石が渡された。

「ほう・・・これはまた珍しい。」

何か実験に使えそうな宝石であった。ガスは神妙な顔でそれを調べている。

「おい！俺にはなんかねえのか！俺にもよこせ！」

穀潰しはそのガスの様子を見てうらやましがるのは当然であった。

「では善い人さんのサポートをしていただけるので？」

「何で俺がそんなことしなきゃならねんだ？いいからさっさと何かよこせ！」

相変わらず物事の道理が分かっていない穀潰しであった。

「仕方ない。おい、黒服。あの物乞いに食べ物でもやって黙らせろ。」

「

「ははっ！」

しかし穀潰しは物乞いとのおいさまに腹が立ってしまったようだ。

「ああそうかい。もういいよ。そういうこというんならよ。別に俺は好きでここにきたわけじゃねえのによ。そういうこというんならもういい

よ。善い人のサポート？てめえ一人でやれよ。何で俺がやらなきゃいけない

なんだよ。俺にもなんかくれよ。」

「だからあげるといつてるじゃないですか・・・。」

「うるせえな。ひゃっは！いいからよこせよ。全部よこせ。全部だぞ。

俺は物乞いじゃねえんだ。二度と俺のことを物乞いと呼ぶなよ。絶対だか  
らな！」

「はいはい・・・。」

全部よこせというのはどういう意味なのか分かりかねたが、とりあえず

食事はもう用意しておいたので、穀潰しとガスをそこに連れて行き、自分

は休もうとしたが、穀潰しにどこにいくんだ？まだ話は終わってねえぞ

といわれ、害児はしぶしぶ同席することになった。



「ひゃっはー！全部だ！全部もってこい！おい！害児、てめえ逃げるんじゃ

ねえぞ。この俺を馬鹿にしたことを後悔させてやる。」

穀潰しにとって害児を後悔させるというのが、このあほ騒ぎらしい。害児はたまらなくなり、そっと合図をした。

いつの間にか、穀潰しとガスの後ろの壁の穴があけられている。

穀潰しは調子に乗って気づいていないが、ガスは何か様子がおかしいと思い

穀潰しに注意を促した。

「穀潰し、どうもいぶかしいぞ。黒服たちが我輩たちの後ろの壁に穴を開けている。」

「あ？ああ……。どうでもいいぜ！ひゃっは！」

ガスは無言で席を立とうとした。巻き添えでごめんであった。

しかしやはりというかなんというか間に合わなかったようだ。

どこから現れたのか目の前に騎士竜がおり、ガスは彼にデコピンされはるか

かなたに吹き飛んだ。

「てめえ！ガス！にげんじゃねえ！」

穀潰しはわめいた。

「心配しなくても、すぐ君も彼と同じところに行かせてあげるよ。」

「てめえ！ふざけんな！この穀は全部俺のものだ！」

「黙れ！」

穀潰しもデコピンされはるかかなたに吹き飛んでいく。

「ちくしょう……。俺はもう善い人のサポートなんか絶対しないぞ。」

空中で飛びつつ穀潰しは叫んだ。隣にガスもいる。

「それより我輩はこの後のが気になる。穀潰しはいいだろうがさすがに」

我輩はこの高さから地面に衝突したらどうなるか分からない。」

「なにいつてやがる。重装備だから大丈夫だろ！」

「そうでもないと思うが……。」

もうこれは重装備だとかいう問題ではない。というよりあのデコピンで

このくらい吹き飛ぶのも驚異的なら、よく鎧が壊れなかったものだとも驚異的であった。体への衝撃もほとんどなく不思議であった。

ガスはなぜかクロールをし始めた。穀潰しはついに狂ったかと思った。

「ひゃっは！穀潰し！我輩は今空を泳いでいるぞ！」

「ガス、それは泳いでるんじゃないぞ。」

「夢のないやつであるな。」

「ああ・・・お前はもっと現実を考えたほうがいい。何しろこの高さじゃ

重装備なんか意味ねえぞ。もっと考える。」

先ほどとは打って変わって別の意見だ。結局穀潰しはどうでもいいらしい。

彼らはまず、高い木の枝に当たり、木の枝にいたるところで当たり徐々に失速していき、ようやく地面に到着した。

「空恐ろしい男だ。騎士竜というやつは。おそらくこれも計算だったに  
違いない。」

「ああ・・・さてついたぜ。ここが大陸か。軍事国家があるところだな。」

二人は大陸へ到着した。

## 第三十六幕 善人組織再始動

さてここは、善人組織の本部の跡地。物資をガスに掠め取られた彼らは、組織再建のため物資生産に励んでいた。

しかし、ガスに与えられた損害は予想以上に高く、組織の人員も日に日に減る一方であつた。

司令官は起死回生の一手を打つため、アッチラに情報収集をさせていた。

アッチラは、普段おちゃらけているが、仕事となると真面目になるので、直感をフルに働かせ、情報収集に励んでいた。

そんな事情があり、今司令官はアッチラから耳寄りな情報を聞いているところだ。

「善い人が大陸か。見え透いた手を使ってきたが、ならばこちらも手を打つまで。」

「何かいい考えがあるのか？俺としてはあんな間抜けどうでもいいが・・・。」

「分からないか。じきに分かること。アッチラはマリーを連れて、善い人の手伝いをしろ。」

アッチラは頭を抱えたが、じきにわめきだした。

「おいおい冗談じゃねえぜ！あんたがやればいいだろ！俺はあいつに会ったらどうせまたばこられるだけだ！」

「では任せたぞ。詳しいことは、テーブルの上にある紙に書いてある。読んだら燃やしておけ。」

そういつて、司令官は、席を立ち奥に引っ込んでいく。

「野郎……。ぜんぜん人の話ききやがらねえ！ぺっ！」

アッチラは、テーブルにおいてある手紙を読んだ後、爆発させた。

「ああそういうことか。さすが司令官だな。とはいえやっぱり俺が行くの

は嫌だ。マリーに任せてしまおう。」

アッチラは、ニヤニヤ笑いながら、司令官の部屋を出てマリーのところ

に向かった。

「そついうわけだ。頑張れよ！」

「私は花植えしないといけないのですが。それに善い人さんとはちよつと

。。。」

「ちよつとなんだよ。ふざけるなよ。俺だつて嫌だぜ。いいからお前いけ

よ。俺も後からいくからよ。俺ははっきり言つて遊んでるお前と違つて

忙しいんだ。みんなが俺を待つてゐるわけだからな。」

アツチラはみんなのことを考えないといけねえからなと小声でばやいて

再確認した後、満面の笑みになりもう一度いった。

「そうさ。みんなのことを考えねえといけねえからな。」

マリーが抗議の声を上げようとするときには最早アツチラの姿はなかった。

いつものことといえはいつものことだが。

仕方ないのでマリーは支度をしていると、なにやら大勢の会員達がマリー

の元にたずねてきた。

「話は聞いたぜ。俺達も一緒にいかせろ。善い人様の役に立てるなら光栄だ。」

物資がなくてやめていく会員達が多い中、残つていった選りすぐりの善人達であつた。

その中には、指揮官と補佐官も混じっていた。

「そうだ。俺達は特に善い人様との関わりは深い。まあ・・・ろくなめに

あわされてはないが。」

マリーは大勢のやる気十分な会員達を手で制した。

「ちょっと待ってください。何故その話を知ってるのですか？極秘プロジ

エクトのはずなのに。」

「アッチラが自慢げにかたっていたぜ。名誉ある役割を受けた英雄だっ  
たってな。」

「そうですか・・・。」

マリーはいつのもことがっかりした。マリーも実際逃げようとも考えていた

が、こうまで騒ぎが多くなったら最早選択の余地はない。

その日、組織再興の英雄として、アッチラとマリーその他会員達は、居残り

組みに褒め称えられ、なけなしの物資でパーティをした。

そして一行は出発した。

「じゃあそいうわけだ。確かに善い人のことも重要なことだが、

俺には  
使命があるんだ。使命がな。義賊としてはここはつらいことなんだ  
が。」

アッチラはそういいわけしつつ、ドンドン後ずさりしてマリーらか  
ら遠ざ  
かって、

「あばよ！また会おうぜ！」

そういつて、駆けていった。

「はぁ……。」「

仕方ない。そう思いマリー気乗りしないが大陸に向かうことにした。  
会員達はいつも自分らが使っていたトラックがなくなったので、新  
しく  
支給されたトラックに何人かのり、それを先発組みとして、残りは  
徒歩で  
移動することになった。

「いいのか？俺達なんかそんな名誉の先発を譲ってもらって？」

指揮官と補佐官は意外な顔でマリーに尋ねた。

「いいです。私は後からゆつくりと行きますから。」

「そうか……。悪いな。」



指揮官がすまなそうな顔をし、補佐官が横から口出しをした。

「俺達が全部手柄を取ってしまったって、あんたの出る幕はなくなってるかもしれないぜ？」

「それはそれは、喜ばしいことです。．．そうなってくれるとどんなに

いいことか。」

「ん？何かいったか？」

「おいもついいだろう。補佐官。早く善い人様に会いたい。」

「それもそうだな。まったく善い人様が生きてるとは。世の中になにがあるか  
分からない。」

「そういうことだ。マリー。悪いな。せつかくの任務を．．。」

「本当に気にしないでいいですよ。」

「そうか。さすが四天王と呼ばれることだけある。じゃあ後からゆつくり

きてくれ。なあに、補佐官の言うように、俺達が全て片をつけてしまっ

さ。

指揮官は手を振り、トラックは出発する。

マリーはその姿を見送りぼそりとつぶやく。

「あの人たちでは何もできないでしょうけど・・・。」

何もできないとマリーに、いわれた彼らだったが、実に何もできなかったのだった。

どのくらい何もできなかったかというところ、大陸についたとたん、捕らえられて、牢屋にいられたのだった。

「うーむこれは計算が違ったな。まさか俺達がこんなに弱いとは。」  
「だから俺は言ったんだ。無謀だったな。」

指揮官と補佐官の無意味な会話が続く。

しかし、時には建設的な会話もするものだった。

「こうなったら仕方ないだろう。ここから脱出するぞ。」

「どうやってだ？」

「それを考えるのがお前の仕事だろう？お前は俺の補佐なんだからな。」

「そんなにすぐ考え付くわけないだろ。第一俺はお前の補佐であつて、考えるのはあくまでお前だろ。責任転嫁するなよ。」

「まあ待て。よく考えてみる。俺達のことを善い人様が見捨てるわけじゃないか。」

「そうするとなにか？お前は善い人様がいきなり唐突に現れて俺達を助けてくれると？まるで雷が俺達に突然当たるくらいのあるえない確立

だぜ。もっと考えろよ。」

補佐官は相当いらいらしてるらしく、そういったきりごろんと寝ころがり

それ以降は指揮官が何を言っても無視をした。

「ちつ。使命を放棄しやがって。善い人様のことだ。もうとつくにこつち

の動きは察知してるに違いないのだが・・・。」

指揮官は善い人をまるで全能の神のように扱っていたが、善い人が彼らを助ける義理もなければそんなこと知るわけもない。

いつまでも、本部跡地でぐずぐずしていたマリーを司令官が、叱責し、

マリーは無理やり、ジェット機に乗せられ強制的に大陸へと着陸した。

「私にも重大な使命があるというのに、どうして私だけがこんな目に・・・。」

しかしあらゆる武術の集う場所、興味がないといえば嘘になります。

「

ただし、マリーの幻術は、植物と薬品を主に使うもので、体術の使用だけで使えるものではない限定されたものだった。

花があまりないこの環境では、自前のレイピアくらいしか役に立たずさすがにレイピア一本で戦うのは無理がある。

「まず善い人さんを探しませんと。」

マリーは例の花植えスタイルで一步步進んでいく。これでは善い人に会うまで何年かかることか分からない。

こんなことをしている間に、このもう少し後に穀潰し達がこの大陸にやってくるのだが、そんなこと善人組織の人たちには知る由もなかった。

こうなればどちらが先に善い人に接触できるかが、勝負の鍵となる。

しかし奇跡は起きたのであった。戦いあう兵士達を尻目に、花を植える

マリーは背景の一種としか認識されてなかったが、彼女を人間と認識できるものが現れたのだ。

善い人であった。

マリーが相変わらず花植えに夢中になっていると、後ろから善い人とその軍勢が近づいてきて、一言。

「手伝うよ。マリーさん。」

「ああ誰かと思えば善い人さん。」

そういつて善い人に、種や球根が入ったかごを渡す。

いきなり、花を植える作業に入った二人に困惑気味の日の国の兵士たちであつた。

他の国の兵士達もいきなり、敵の恐怖の象徴が妙な行動をし始めたので  
何事かと手を休めた。

どこかの国の兵士が青い旗を掲げた。

停戦の合図だ。日の国としてもこの状態では戦えないし、他の国にしても

暴君、善い人の行動が気になる。

次々に青い旗を掲げ、善い人達を囲み何事かと見守った。

善い人達が、花を植えようとするスペースだけは、善い人たちが移動するた

びに兵士達も移動することで確保していた。

日の国の兵士が恐る恐る善い人に尋ねた。

「善い人將軍。なにをされているのですか？」

善い人は憤慨した。

「君達はいったいなにをしてるんだ！まるでくのぼつのように！早く善いことをしないか！」

兵士達ははあ？という表情をしている。

とりあえず馬鹿ということだけは分かったようだ。付き合ってもらえないということで、日の国の兵士達は配置に着き、赤い旗を掲げた。開戦の合図だ。

それを見て、他の国の兵士達もそろそろと自分の陣地に帰っていく。

その行為は善い人を激怒させるのに十分すぎる行為だった。

「この善い人を侮辱するとは、もう我慢ならん！」

善い人は近くにいた兵士を、捕まえて地面に埋め込んだ。

「な、なんだ？何が起こった？」

兵士達はうろたえた。いきなり善い人が鬼の形相で、兵士たちを手当たり

しだい地面に埋め込んだのだ。

日の国の兵士達はそれを見て喜んだ。

「さすが將軍様だ。古今無双の武人だ。」

その喜んでいる日の国の兵士達もドンドン埋められていく。

どの国の兵士も真っ青になった。

「共闘だ！暴君、善い人を狙え！」

ラッパや太鼓の音、シンバルの音などがいっせいに戦場に響き渡り、砲弾が善い人めがけて集中する。

「いかん！善い人將軍を援護しろ！」

日の国の兵士達は善い人の爆弾のような行動に離れている。この程度の

善い人の奇行で善い人を見捨てたりしなかった。

各国の兵士達は攻撃と同時に埋まった兵士達の救出に乗り出している。

日の国の武術家たちは、砲弾の雨の中善い人についていこうとするが、

とてもおいつけない。

そうしているうちに善い人はどんどん他の国の兵士達を地面に埋めていく。

この日の戦いは結局いつもの善い人無双で終わった。

善い人は戦いが終わった後、マリーに話しかけた。

「マリーさん、花がぐちゃぐちゃになってしまったね。」

半分くらい善い人のせいだが、それについてはマリーは何も言わなかった。

そのように話している間にも、隣に埋まっている兵士達を救出しようとする

している兵士達がいる。

彼らは恨ましそうな顔で善い人達を見ていたが、善い人が何かの拍子に

こちらのほうを見たりすると慌てて目をそらした。

「善い人さん。この大陸では戦争が当たり前です。これではとても善いこと

はできないでしょう。やりましょう。善い人さん。この大陸を変えるの

です。私達ならばそれは可能です。」

善い人は感動して答えた。

「さすがマリーさんだね。私もそう思ってたところだよ。早速善いことを

しよう。」

善い人とマリーは野望に燃えた。

この数日後穀潰したちが到着することになるが、こんな事態になっている

とは夢にも思わないことだったろう。





### 第三十七幕 穀潰し 死闘

「おいっ。どけっ！俺達は善い人のやつをサポートしに来た害児の使い

だといってるだろうが。」

「我輩たちのいうことを聞いておいたほうが身のためだぞ！」

穀潰しとガスは、二人で門番を威圧し脅している。しかし門番はそんな二人を馬鹿にしたような顔で見っていた。

「害児とはルーファ様のことだな。あの方は裏切り者だ。それが今さら何のようなんだ。」

ガスは穀潰しに耳打ちした。

（こりゃあ駄目だ。どうやら頭が固いらしい。穀潰し、ここは我輩に任せろ。やつにいくらか恵んでやれば、我輩たちの言うことをすぐに聞けるだろうよ。）

それを聞いて穀潰しは嫌な顔をした。

（ガス、こっちは二人いるんだぜ？こんなやつフルボッコにしちまえばいいんじゃないか？見てみる。むかつく面してやがるぜ！）

ガスは改めて門番の顔を見てみたが、そこまでむかつく顔でもなか

った。

（普通の顔に見えるが。）

今まで黙って聞いていた門番が口を開いた。

「おい。二人いてもとても俺には勝てないと思うぜ。そっちの馬鹿  
っばい

やつはサイキッカーだろう？ネームは何だ？」

それを聞いて穀潰しは馬鹿にしたような口調で言った。

「ネームだと？ひゃっは！そんなもんはねえよ！」

「ネームもないのか？じゃあなんだ、ナンバーズか。」

「あほか。俺はナンバーズなんかじゃねえ。」

「話にならん。出直して来い。」

ガスは機転を利かし、小さな袋を門番に差し出した。

「ほほう。鎧のほうは、物の道理がよく分かってるらしいな。」

門番はうれしそうな顔をして、袋を受け取ろうとしたが、その袋は穀潰しの超能力によってはじけてしまう。

それを見て、門番は穀潰しに向かってにやりと笑った。

「そうか……。まあ俺は構わんがな。自分がどれだけ世間知らずか

わかる  
だろうぜ！」

穀潰しはガスに耳打ちした。

（ガス、二手に分かれるぞ！）

（ああ、穀潰しは右からだ。我輩は左から行く。ぬかるなよ。）

「なんだ？こそこそを相談か？」

「いまだ！」

穀潰しは、右にテレポートをし、連続衝撃波を叩き込み、ガスは左から相手に回りこみ、火炎放射器で炎を吹きかけた。

「ばればれだ。」

いつの間にか門番はガスの横に回りこみ、回し蹴りをガスに食らわせ、

ガスは大きく吹き飛ぶ。

「ガ、ガスー！てめえよくもガスを！」

「なんだ。その程度か。」

穀潰しが叫んでいる間、門番はすぐ目前まで移動する。穀潰しには一瞬で移動したように見えたが、そういう武術なのだろう。

門番の回し蹴りにより、穀潰しは吹き飛ぶが、その体は笑いながら消えて

いく。穀潰しの分身だ。本体は別の場所から攻撃してくる。

「はずれか。」

「こっちだぜ！サイコグリップドン！」

しかし穀潰しの攻撃は空を切る。

（ちつ。また外れやがった。野郎、実体を消してるらしいな。）

「まあサイキッカーにしてはよく頑張ったほうだな。」

門番は、穀潰しの腹に、連続掌打をくらわせる。

「ぐふっ……。」

穀潰しは腹を抱えてつんのめりになり、その顔を門番は蹴り飛ばす。

穀潰しは顔面が跳ね上り一瞬中に浮き、その体にもう一度蹴りを食らわせ、

仲良くガスが転がっている場所に吹き飛ばされる。

「おお、穀潰しもきたのか。」

「ガ、ガス……。てめえ真面目にやりやがれ。」

そんな会話をしている間に、門番はすぐ間合いをつめて、穀潰しを

サッカー

ボールのように蹴飛ばした後、言葉を発した。

「なかなか丈夫みたいだな。鎧のほうは死んだ振りか。分相応な振る舞い

だが、ならば最初から向かってこないことだな。」

「へへっ。まったく左様でございますな。」

ガスは下卑た笑いを浮かべつつ答えたが、それが門番の気に障ったのか

やはり穀潰し同様サッカーボールとなり、やはり仲良く穀潰しと同じ場所に吹き飛ばされた。

「へぶう。。。」

「ガ、ガス！ちっ！まともに攻撃できやしねえ！」

その後二人は、サッカーボールのように転がり、日の国の外まで追いついてしまった。

「これに懲りて二度とこの国にはこないことだな。」

穀潰しとガスはぐうの音も出なかった。門番は薄ら笑いを浮かべて去っていった。

穀潰しは、その後ろを恐る恐る見送り、ようやくまともにガスと会話がで

きるとほつとした。

「ガス！てめえ前衛やれ！」

穀潰しは開口一番そういった。若干八つ当たり気味だ。

「何で我輩がそんなことを……。そんなことしないで素直に、いくらか

包ませて渡せばいいのではないか？この国では比較的金がよくつかわれ

るようであるし。」

「お前にはプライドっていうものがないのか？」

「商人としてのプライドはあるが……。」

「ガス……。てめえよう、ちょっとけちなんじゃねえか？親友のこの俺がこれほど頼んでも駄目なのか？なあそうなんだな？」

すごいざったかった。ガスはしぶしぶこう答えた。

「分かった。しかしこれは貸しであるからな？」

「分かればいいんだ。ひゃっは！じゃあ行くぜ！」

穀潰したちは意気揚々と、門番のところまで戻った。

「ん？ぴんぴんしてるじゃないか。どうやら体だけは丈夫みたいだな。」

「てめえのこの後の末路を思い浮かべると俺は笑いがこみ上げてくるぜ！」

ひゃっはっはっは。よいいけ！ガス！」

ガスは突進しつつ自分の体に火をつける。

「ガス・フェニックス！」

手足をばたばたさせて、あちちとわめくガスを、門番は真正面から蹴り飛ばし、その先にいた穀潰しは向かってくるガスに慌てたが、どうする

こともできず、一緒に吹き飛ばされる。

門番は吹き飛ば彼らと平行移動しつつ、彼らの勢いが失速したときを見計らいまた蹴りを加える。

（ちっ、仕方ねえ。これだけはやりたくなかったが。）

「行くぞガス！サイコグランドだ！」

「ひ、ひいゝ！やめてくれゝ！」

ガスは頭を抱えた。門番は少し不安な表情をしたが、雑魚の攻撃などたいしたことはないだろうと高をくくった。

「潰れる！サイコグランド！」

門番は攻撃を見て余裕でかわしたつもりだが、驚くことに、その攻撃は

どこまでも範囲が広がり、やがて追いつかれ、攻撃に巻き込まれる。



しかしこれほど広範囲の攻撃なら、穀潰したちもただではすまない。  
門番は意識が飛びそうになりながらも、穀潰したちのほうを見た。

確かにガスは、上空へ浮かび意識を失っているようだが、なんと穀潰しは

衝撃波の中で、高々と笑っている。

（そうか。やつは自分の攻撃は効かないのか？妙だな。本当にサイキッカーなのか？）

「よくもやってくれたな！ひゃっは！潰れる！ランダムスフィア！」

追い討ちに、爆裂する球状の衝撃波を複数門番に打ち出す。

最早門番は立っているのもやっとだった。

それを見て穀潰しは、笑いながらこういった。

「ひゃっははは。どうやら体だけは丈夫みてえだな！」

「ちっ。。。」

そのとき、門が蔽かに開き、穀潰しの目に懐かしい白服が写った。

「ん？誰かと思えば穀潰しじゃないか。」

「おお、善い人じゃねえか。俺達は害兇にいわれてお前をサポート

しに

きたんだ。それをこの愚図な門番野郎が邪魔しやがって。」

「い、善い人様……。」

そこにはぼろぼろになった門番がいた。

「害児……。ああそんな人もいたね。害児さんか。思い出したよ。ところで穀潰し。君は善良な善人をいたぶってどういっつもりなのかな？」

「はあ？相変わらず馬鹿だぜ！こいつは善良じゃねえ！」

善い人はそれを聞いてせつかくの懐かしい再開だったのに、怒りモードになっちゃった。

「なんだと！？そんなにぼこぼこにされたいのか！」

「てめえにそれができるならな。言っておくが俺はかつての俺じゃねえぜ。」

「そうか……。よく分かったよ。悪は滅さなければならぬね。」

「ちょっと待った。」

「ん？」

ガスがびっこを引きながら、善い人に近づく。

「ああガスさんもきてたのか。」

「なんだ？ガス。後にしてくれ。」

「いや、穀潰し。我輩達はあくまで善い人君をサポートしてきたのであつて、争いに来たわけではない。」

「そんなこと知るか！ひゃっは！」

「我輩は穀潰しに一つ貸しがあるはずだ。それに我輩は善い人君に渡すものがある。」

いつの間に用意したのか知らないが、ガスの近くになぜかプレオがあり、

ガスはそこからこそごと荷物を取り出し、それを善い人に渡した。

「善い人君が好きな大型の弓と、鉄で固めた大剣をいくつかいれてある。」

善い人はそれを見て喜んだ。

「さすがガスさん。私が認める善人だよ。これはいいものをもらった。」

ガスは満面の笑みで両手を差し出していたが、善い人は門の中にひっこ

んでしまった。

ぼこぼこになった門番も、善い人に続き中に入り、門を頑丈に閉めた。

後に残ったのは、阿呆なガスと穀潰しだ。温厚なガスもこれには閉口した。

呆氣にとられた穀潰しもやがて正気を取り戻し、門をがんがんに叩き開けるーとわめいた。

ガスはすぐに冷静になり、穀潰しに

「穀潰し。もう我輩たちの用はすんだ。さっさと帰ろつ。」

といった。しかし穀潰しはもちろん収まらない。

「こうなったらもう俺の知ったこっちゃねえ。この砦を破壊してやる！」

「よ、よせ！穀潰し！」

穀潰しは、大規模な練りこみをはじめ、それを解き放つ。

「潰れる！サイココメット！」

巨大な隕石の塊のような衝撃波の塊が、穀潰しの頭上から展開し、砦に激突する。

見る見るうちに砦が壊れていく。

「ひゃっはっはっは……！ざまあみろ！」

だがこんなことをしてただで済むはずはなく、砦の中からわらわらと人

がやってきて、穀潰しを拘束した。

びつこを引きながらプレオに乗って逃げようとしていたガスもなぜか捕まっていた。

「何で我輩まで！我輩は関係ない！我輩は客であるぞ〜！」

重たいわめくガスを連行した兵士は、舌打ちしつつ、ガスの頭をぽかりと数度殴る。

ガスはそのうちなにもいわなくなった。

二人は、牢屋にぶち込まれ、反省していると言い渡された。

### 第三十八幕 クーデター前夜

さて善い人が、新しい日の国の指導者になったわけで、元々將軍は今が副將軍だ。

とはいえこれは彼自身が望んだことであつた。

彼の目論見が外れのは、善い人が狂人であつたという点だつた。

というより、元將軍は、善い人が戦闘狂だと思つたのだが、善い人は別に戦闘狂ではない。

そう見えても不思議ではないが、彼女は彼女なりの戦う理屈があつた。

ニヤニヤするのが癖の將軍だが、善人組織の會員達が乗り込んできて以来そうニヤニヤできない状況であつた。

最早、副將軍というのも名だけのものではあつた。

正直、何度亡命を企てたか分からない。

そのたびに善い人に連れ戻されるのであつた。

「いいか。お前の善人レベルは1だ。大先輩たる俺の言うことに従えよ。」

善人組織の指揮官ごときにこんなことを言われる有様で、副將軍は、あまりの屈辱に、目から血がでそうになった。

見るに見かねて、補佐官がフォローをする。

「いいすぎだ。指揮官。この男はこの国で、地位の高い人間だったんだ

ぞ。敬意を払って扱うべきだろうが。」

指揮官はそれを聞いて、鼻で笑い、副將軍を一瞥した。

「こんなやつにか？はつきりいつて、こいつは才能ないな。善人の素質というものがまるでないぜ。」

副將軍は、なにを言われてもひたすら感情を殺して、黙殺を決め込んでいた。

「見るこのふてくされた態度を。善人の大先輩たるこの俺に失礼だろうが。」

副將軍はそこで始めて口を開いた。

「なにやらゴミ虫がわめいているようだが、鬱陶しくてかなわんな。殺虫剤でもまいてほしいところよの。」

指揮官は、それを聞いてぴくぴくをこめかみを痙攣させた。

「ほほーう。そうか。よくぞいった。おいっ！補佐官！こいつを教育してやれ！」

補佐官は、おう！と答え、副將軍の腕をむんずをつかんだ。

「さあ立て！立つんだ！言う事を聞かないなら、善い人様がやって

くる  
ぞ！」

それを聞いて、副將軍はしゅしゅと立ち上がる。

また地面に花を植える何の意味もない無味乾燥な作業をさせようという

魂胆なのだろう。

彼にとっては拷問に等しい。

最早、日の国は日の出の勢いであり、瞬く間にその勢力を拡大した。

そして、彼ら軍事国家とは異なる思想の持ち主で、軍事国家は一致団結

してこれに対抗している。

さしもの善い人も、これにはなかなか対応しきれず苦戦している  
というのが今の状況だ。

そんな折に、かねてからの約束でもあったため、アツチラがやってきた。

彼はこう見えてなかなか知名度が高い。

彼は高速移動をし、日の国の城の門前までやってきたが、門番の威圧により、立ち止まった。

「よお。」



「誰だお前は。ここが善い人様の居城と知ってのことか？」

「ああ……。ご苦労さんだな。だがな。俺は義賊のアッチラだぜ。善人組織の四天王のなあ！」

「お前が義賊のアッチラか。分かった。なら通して問題ないな。」

門番が門を開ける前に、アッチラはすでに城の中にいた。

門番はその気配を察しつぶやく。

「義賊のアッチラか。あのレベルの体術を習得してるとはな。噂に聞いたよりやるようだ。」

アッチラは、なかなか、勢いがついてきているなど、あちこちを見学し

同胞を励ました。

その後、善い人とマリーのところに赴いた。

意気揚々とお出ましになったアッチラであったが、今頃なにをにきたのかと皆が思うのは当然過ぎるほど当然であった。

マリーはアッチラを見かけると早速嫌味を言った。

「ずいぶん遅いお出ましですね。アッチラ。貴方はよほど忙しいのですね。」

アッチラはそれを嫌味とも気づかず、もろ手を挙げて主張した。

「おおよ！何せ俺はみんなが待つてるわけだからな。  
おい！ところで善い人！お前は二流善人にしてはよくやったほうだな！

後は俺に任せて、お前は本業の殴り屋に戻れ！」

あまりの罵詈雑言にマリーはあきれ果てた。

善い人ももちろん怒っているだろう。

そう思いマリーは善い人のほうを見たが、  
善い人はなにやら考えて込んでいる様子だった。

「マリーさん。二流善人ってなんだろう。」

マリーは啞然としたが、親切に教えてあげた。

「それは、善人としてまだ未熟って意味ですよ。」

「この善い人が未熟である？」

「わ、わたしではなく、アッチラがそうだったのです。」

このままだと危ない。そう感じたマリーは、急遽ここから逃げ出す方針を立てた。

「善い人さん。私は皆の指導をしにいきます。アッチラのことはお任せします。」

そういつてそそくさと、部屋を出て行つた。

アツチラが背後から、恐れ入ったかと声をかけたが、マリーは無視をした。

「見る！お前の頼みのマリーも逃げ出したぞ！

お前は一人ぼっちの孤独だな！ここは俺の王国だ！

お前は出て行け！」

「善人対決なら以前私が勝つたはずだよ。」

善い人は、何の表情の変化も見せず、冷静にいった。

「あほめ！それは過去の話。義賊たるこのアツチラ様は常に進化をとげている。お前のような馬鹿と一緒にするな！」

アツチラは自殺志願者らしい。一緒にするな！といった瞬間あごがはね

あがり、地面に浮かんだと思った瞬間、床にめり込んでいた。

その後、わらわらと兵士達がやってきて、アツチラを回収し、アツ

チラは

牢屋に入れられた。

アツチラは、牢屋に入るなり、ガスを発見し、嘲笑した。

「おや？お前は何時ぞやの商人ではないか。

どうした？こんなところに金塊はないぞ？また金庫番でもしてるのか？」

ガスはむすつとした顔で黙りこくっていた。

「どうした？声もでないか。

その後どうなったか、英雄アッチラ様が知らないとも思ってるのか？

魔王害児に尻尾を振りすぎて尻尾が千切れてしまったようだな。」

怒りのあまり激昂して立ち上がったのは、ガスではなく穀潰しだった。

「てめえ！俺達二人に勝てると思ったのか！」

それを聞いて慌てたのはガスだ。

「やめろ。穀潰し。こんな馬鹿相手にするな。

ここで暴れてなんになるのだ。」

「だ、だけだよ。お前のこと馬鹿にしてやがるぜ。」

「そうさ！やめておけよ。帽子君。お前が出る幕じゃないぜ。」

穀潰しは、お気に入りの帽子を馬鹿にされて、怒り狂い、帽子をつかんで地面に投げつけた。

その後懷からナイフを出して、威嚇した。

「あまりうるさいと、このナイフの餌食にしちまうぜ！」

アッチラは面白いと思った。自分もナイフ使いだ。

実力を見てみたいと思うのは当然の心理だった。

「やってみる！」

「ひゃっは！くらえ！サイコスファイア！」

てつきりナイフでくるかと思ったアッチラは、慌ててその攻撃を避ける。

その後無防備な穀潰しの首を狙ってナイフを繰り出したが、空中で静止する。

「また、商人の小細工か。」

空中に見えない糸が張り巡らされていた。

いつの間にこんなことをしたのだろう。たいした早業であった。

その糸にナイフがからめとられたというわけだ。

ナイフは、アッチラの手から離れて空中を舞い、ガスの手に収まる。

「義賊君。このナイフはあまりいいものではないな。

我輩の作ったナイフをお勧めするよ。」

アッチラは何を言うか、この小憎づらい商人めがと思った。

「しゃらくさいやつめ！」

当然穀潰しが両手を挙げて静止した。

「おい！やめようぜ！

いらいらする気持ちは分かるが仲間同士で争っても仕方ない。

それより、面白いことがあるんだ。クーデターを起こすってのはどうだ？

俺も善い人なんかになめられっぱなしでは、立つ瀬がないからな。」

アツチラは、いつまでも小さいことにこだわる人間ではないので、すぐに了承した。

「そりやおもしれえな！あいつらに吠えずらをかかせてやれ！」

二人はガスのほうを見た。もちろんガスも参加するだろうと思った。

が・・・そんなわけあるわけがなかった。

「我輩はそんな馬鹿なことはごめんなのだ。」

「な、なにー！」

「俺達が馬鹿だというのか！」

ガスはやれやれという風に首を振りながら答えた。

「我輩はもう仕事を果たしたし・・・正直善い人のことなんぞ知ったことではない。

ここらで帰らないと商売に差し支えもある。」

「この馬鹿やろう！」

アツチラはガスが隠し持っていた棍棒をかすめとり、

ガスの頭をその棍棒でぶつたいた。

その後ガスに向かって棍棒を投げ捨てた後、言い放った。

「ここから出れたら世話はないだろう！

そのためにクーデターするんじゃないか！そうだろう！穀潰し！」

穀潰しは、だからって殴ることないぜと思いつつうなずいた。

「あ、ああ……。まあそうだよな。」

「だからって殴ることはない！」

ガスは大声でわめいた。

「我輩は客であるぞ！」

穀潰しはすぐにフォローに入った。

「いいんだ！ガス。もういいんだ！分かった。分かったから。」

今度はアッチラが啞然とする番であつた。

いったいいきなりなにをわめきだしたのか、

しかしアッチラはそう物事を深く考えない性格だ。

「そうだ！俺達は客として招待されたのに、この扱いはひどい！だからクーデターだ。そうだろう？」

この英雄たる我々にふさわしい偉業ではないか！」

ただ、ガスはそんなことしなくても、  
自分ひとりならいつでも脱出できる自信があった。

善い人など口先三寸でどうにでもなるし、第一に以前もつと絶望的な  
状況のときにすでに脱出している。

いくらでもやりようがあった。

こんな馬鹿騒ぎに付き合う余裕はガスにあるわけもない。

しかしここまできたら仕方はない、ガスにも友人付き合いというものがある。

世の中なかなか自分の思うようにままならぬもの。

ガスも付き合う覚悟を決めた。



### 第三十九幕 行動開始

「そうなる具体的なには、善い人さんにどう対処するかであるが・・  
」

ガスはそう口火を切った。

穀潰しやアッチラに、物事を考える頭があるとは思えない。

「俺なら、20秒は抑えられるが、最終的に勝つことは無理だろうな。」

穀潰しはどうだ？」

「ひゃっは！俺は手前らみたいな雑魚とは違っぜ！」

ガスはまたどうせいつもの茶番だろうと思った。

アッチラは割合真剣に戦力を検討している。

「なら、善い人は穀潰しに任せるとして、  
他の雑魚は俺とガスで制圧すればいいだろう。」

「そうであるな。その後我輩と義賊君が穀潰しに合流して、共闘すればいい  
」

ガスはその前に逃げるつもりだ。善い人と戦うメリットが彼にあるわけ  
はない。アッチラにしてもすぐやられるだろうから、結局穀潰しV  
S 善い人

といういつもの構図になるだろう。

穀潰しは少し考えた後言った。

「潮時かも知れねえな。」

「？」

二人はその言葉を聞いて首をかしげる。

「ああ・・・。善い人と戦うってことだ。

やつともそろそろ決着をつけないといけねえと思ってな。  
いい機会だろう。あいつも不死身に近いみたいだが・・・。」

ガスは穀潰しが善い人に勝てるわけないとは思ったが、念のために  
フォロー

しておいた。

「穀潰し。本気でいつてるのか？何のメリットもないように思える  
が。」

「商人風情にはないだろうぜ！これは俺の意地の問題だ！」

ガスはああそうですかい、勝手にやっておくんなせえと思い、ぷい  
っと

横を向いた。

アツチラは黙っていられなかった。こんな阿呆でも彼は善人組織の  
四天王の一人なのだ。

「善い人は、俺達善人組織にとって、重要な人材だ。むざむざ殺させるわけにはいかないぞ。」

「ひゃっははは。じゃあお前は善い人の味方をすればいいじゃないか。」

アツチラは大振りな身振りを交えつつガスに話しかけた。

「やつはクレイジーだ！」

ガスはわずらわしそうにいった。

「どうせうまくいかないだろう。好きにやらせておけばいいのだ。」

「そうだろうぜ。善い人を倒すなんて大それた野望は、この英雄アツチラ

にこそふさわしい。」

そういつてアツチラは穀潰しに向かって挑戦的な視線を放った。

「お前が？ひゃっはっは。笑わせてくれるぜ！」

アツチラがにやりとして、仕込み刃を仕込んだ蹴りを放つのと、ガスが

何事か察して退避すると同時に穀潰しも動いた。

「潰れちまえ！ランダムスファイア！」

破裂する性質を持った球状のいくつもの衝撃波が穀潰しから放たれる。

アッチラはその攻撃を全てかわし、穀潰しに再び対峙したときには、すでに穀潰しの姿はなかった。

見張りの兵士達もどこかいつてしまったようだ。

「あの馬鹿やろう！俺達の計画は見張りの兵士達に丸聞こえだったぜ！」

アッチラは、わめきちらす。

「義賊君。悪いがここから先は君の馬鹿のりにはつきあえないのだよ。」

足手まといになるようなら我輩はひとりで行くが？」

その言葉を聞きアッチラは顔を真っ赤にして激昂した。

「このうすのろ！さっさと歩け！」

アッチラはガスから奪った棍棒で、ガスの後ろからがつんをくらわし、

転ぶガスを尻目に、英雄アッチラ様のお通りだーと奇声を上げて、地上への階段を上っていった。

## 第四十幕 本気の戦い

穀潰しは一足早くクーデター実行に移っている。

彼は善い人の部屋に向かっている最中だ。

何事かを思案している。

（善い人は不死身に近いが、それでも俺の攻撃は効く。）

そこがテンマとの違いで、今の穀潰しではテンマにダメージを与えることはできない。

「善い人のやつには悪いが、俺はいずれテンマを倒す男だ。あいつにはその稽古台になってもらう。」

とはいえ今のままでは倒すことはできない。

そこで穀潰しは一計を思いついた。

完全版のキリコロを使えばいい。以前に一度だけそれを使ったことがある。

ただそのときの感覚を穀潰しは再現することができなかった。

（困っているようだな。ゼロ。）

穀潰しの頭に声が響く。

（テンマか。）

穀潰しはそれに答えた。いわゆるテレパシーというものだ。

（なにやら面白いことをするようだな。私が手を貸そう。）

穀潰しはほくそ笑んだ。この馬鹿野郎は、

どうやら穀潰しの標的になっていることに気づかず

あまつさえ手を貸すつもりらしい。

（ああいいぜ。ただ一つ言っておくが、これは貸しだからな。）

（私も近場にいるぞ。そのために善い人を呼んだのだ。

闘争を私に与えろ。）

穀潰しの頭の中の声はそこで途切れ、その代わり、穀潰しは非常に澄んだ

感覚になり、頭の中がクリアーになっていくのを感じた。

「よし。後は善い人を倒すだけだな。」

穀潰しはとにかく、善い人を倒すことだけに専念すればいい。

そのほかのことは、アッチラとガスがフォローするはずだ。

現に、今、善い人のいた部屋に向かう途中

一人たりとも兵士とすれ違っていない。

「この部屋だったな。」

扉を開ける穀潰し。

「穀潰しか。」

善い人は、穀潰しから見て、部屋の一番奥にいる。

椅子に座っており、善い人の後ろに無数の武器がある。  
どうやら穀潰しがくるのは分かっていたようだ。

予感していたのだろう。善い人は無言で椅子からおり、大剣を構える。

善い人にしては珍しく、正攻法だ。

普段は穀潰しが扉を開けた瞬間に勝負をつけているところだ。

穀潰しの尋常ではない雰囲気を感じ取っているのだろう。

「善い人。お前とはなかなか浅からぬ付き合いだった。  
俺としては残念なことだが、お前は所詮、俺の稽古台だ。」

そういつて、手に集中していた練りこみを形にする。

「これが、キリコロだ。完全版のな。」

穀潰しの手から、黒い刃が出ている。

穀潰しはその黒い刃を数度、空中で振ると、次元が歪む。

それを見て善い人は口を開いた。

「分かった。なら私も本気でやるよ。」

そういつた瞬間、善い人の体に雷が降り注ぐ。

その雷は途絶えることなく善い人に注ぎ、  
しかも天上を貫通しているようだ。

善い人がその言葉を言い終わるころには、穀潰しは間合いをつめていた。

とはいえ、まだまだ黒い刃の届く間合いではない。

しかし穀潰しはそんなものお構いなしに、黒い刃を振るった。

グオオオオンと妙な音があたりに響き、斬ったところ周辺にほぼ部屋全体の  
空間がゆがむ。

善い人がいた辺りも歪むが、善い人はすでにそこにはいない。

（目で追えない？勘で避けるしかねえ！）

穀潰しは勘で右に飛んだが、右から何らかの攻撃を受け、左に飛ぶ、  
左に飛んだら今度は左から何らかの攻撃を受け、右に飛ぶ。

それを繰り返され、穀潰しはぼこぼこのへとへとになり、いっぱい  
いっぱい  
になって叫んだ。

「ひいひい！やめてくれー！いじめないでくれー！俺が何したってい



うんだ！」

それでも善い人の攻撃はやまず、さらに続けて穀潰しが叫ぶ。

「こんなことになったのもテンマのせいだ！テンマの馬鹿ヤロー！  
今度あつたらぶつ潰してやる！」

それを聞いて、善い人は動きを止める。実は、善い人がこの大陸に  
来てから、ほとんどの国を

善い人化できたのだが、善い人のやり方に従わない国があるのだ。

それが花の国で、その王が、テンマ・トキトであり、さすがの善  
い人も苦戦を強いられている。

そこで今の穀潰しの言葉を聞き、穀潰しと手を組もうと思った。

「ところで穀潰し。」

「な、なんだ。」

穀潰しはへえへえいいながら、地面にへたり、恐る恐る善い人に尋  
ねた。

「どうやら私の方針に従わない、悪人の国が一つあるんだよ。」

「そ、それはひでえ国だぜ！ひゃっは！やつつける！」

「穀潰しも手伝ってくれないかな。」

「あ、ああ？なにいつてやがる。当たり前じゃねえか。俺達親友だ

る。

だがな善い人、調子に乗るんじゃないぞ。

俺は、てめえの手伝いをしてやるのであって、てめえの部下になるわけじゃねえからな。

いいか。これは一つ貸しだぞ。」

そういった後、穀潰しは何事かを考え、激怒した。

「考えてみたら、おい善い人。クーデターを考えているけしからない裏切り者がいやがるぜ。」

あいつらに、善人の正義の鉄槌をくらわせないとイケないな！」

「なんだって？もう我慢ならん。この善人を馬鹿にする連中がまだいるのか。思い知らせないといけない！」

「おうともよ。ひゃっははは。・・よし。いくぞ！善い人！」

## 第四十一幕 害児参戦

ここまで事態を静観していた害児であったが、さすがにここまでいくと、温厚な害児でも我慢の限度があった。

「聞いたか。騎士竜。」

害児は、怒りで手をプルプルさせながら、紅茶を飲みつつ傍らの騎士竜に聞いた。

「どうやら、僕達の故郷は完全に善い人にとられてしまったようだな。」

「ここまで露骨に無視されると、さすがの私でも限界というものだ。あの善い人め。今まで泳がせてやったが、ここらで一つ立場というものをわきまえさせてやらないといかん。」

「僕も協力しよう。」

「当然だ。善い人は、次に花の国を攻めるなどと図に乗っているが、それを逆手に取る。私達は、花の国の王、天崎と手を組み、油断している善い人の国に大打ち込みをかける。」

「すぐに出発できる。」

「よし、出発させろ。」

騎士竜は、優雅に一礼し、害児の部屋を退室した後、城の周りを徘徊し始める。

壁などを懇々と叩いて、入念に確かめた後、黒服たちに城に隣町まで行くほどのロープをつけさせ、準備を整えた。

騎士竜は、指でちゃんと城を押すと、城は凄い音を立てて、吹き飛んでいき、騎士竜は、ロープをキャッチした後、城の内部へ入り直した。

害児は、下のホールに移動していた。害児は騎士竜に労いの言葉をかける。

「来たか。ご苦労。」

「相手は、穀潰し、ガスなどもいるが、これらはどうする?」

「やつらなんぞ物の数ではあるまい。最早ここに及んだ以上、そのようなゴミ虫どうでもよい。」

「しかし、やつらはこちら側の人間だぞ。向こう側に寝返っているかも  
しれないが。」

「象の群れの中で、アリがなにをしようが関係あるか?

やつらがどうしようが、知ったことではない。」

「見つけたら攻撃していいんだな？」

「勝手にしろ。」

城は、正確に善い人の居城めがけて進んでいる。

こちらの居城を相手の居城にぶつけ、一気に制圧する。

害児・騎士竜コンビの伝統的な奇襲戦法だ。

いらいらしながら、貧乏ゆすりをしつつ、ワインをなめながら、到着を待つ害児。

そこへ黒服が注進をしにきた。

「大変です！前方に巨大なハエが接近！城を攻撃しております！」

「追い払え。」

「ははっ！しかし私共だけではどうにも・・・。」

「どいつもこいつも無能ばかり、ここは私が動くしかないか・・・。」

「ぎよ、ぎよい・・・。」

恐縮する黒服。

害児は城がドンドン崩壊する中、物思いにふけり現場に向かった。

やはりというか、善い人の飼っているハエだ。

「やはりあなたでしたか。ミルキーちゃん。何故私達を攻撃するのです？」

「おやめなさい。」

「びぎー！」

ハエは憤怒の表情で、害児に真空波を飛ばす。穀潰しなんかのサイコカタ

ーとは比べ物にならないほど、切れ味がすごく、すさまじい速度だ。

害児はひょいと身をかわしたが、真空波は、害児の長髪を少し切り、あまつさえその頬にまで傷をつけた。

真空波はその後、城の一角を両断し、切断された城の瓦礫は、下界へと

落ちていく。

害児は、頬の切り傷を指で触り、その血を見て、一気に頭が冷静になっていった。

（本気が……。今の私では荷が重いが。）

「あれ？おねえちゃんじゃない？あれれ？何で私こんなところにいるの  
だろう？」

「ん？確かタンクとかいった善い人さんの家にいたロボットか。」

どうやら、タンクは気づかない間に、ハエの背中に乗っていたようだ。

害児は、ハエの攻撃の猛攻をかわしつつ、タンクを見て何事か考えていた。

「こんなときに騎士竜はなにをやっている？さつさとこないか！無能！」

「これはとんだご挨拶だな。さつきからここにいるだろう。」

声はすぐ側で聞こえた。騎士竜は、害児を狙うレーザー、真空波などを脂汗

をにじませながら、相殺していた。

「悪いが、とんだ化け物だ。単純な攻撃能力だけなら僕より上だよ。」

騎士竜は珍しく顔に余裕がない。

騎士竜は何しろ城の被害も抑えないといけないし、黒服たちも応戦するが、

ドンドン消耗していく様を見て、焦りも生じている。

「君達は下がれ！こんなところで消耗する必要はない！」

「いや！騎士竜様！そんなわけには！」

そこに害児が命令を下す。

「ここは私達だけでいい。城の修理を頼む。」

「は・・ははっ！」

黒服たちは、一瞬で城の中に入り、遠巻きに害児たちを見守り始めた。

騎士竜は、攻撃を打ち消し、相手と似たような、様々な攻撃を繰り出すが、それら全てをハエに避けられ、新たな攻撃を加えられる。

害児は、スナイパーライフルを持ちながら、車椅子のブーストと、義足を駆使し、ハエと空中戦を交えながら、攻撃を加えていた。

騎士竜は、防御と攻撃同時にできないが、ハエは避けると同時に攻撃をして

おり、一動作だ。

場所が空中ということもあって、騎士竜は相当苦戦をしていた。

害児の援護がなければ、とっくに押し負けていただろう。

おまけにハエは、なぜか騎士竜の弱点を分かっているようで、執拗に



パソコンを狙ってくる。

最早後ろの城もぼろぼろだ。

「ちっ！恐ろしく頭のいいやつだ。ルル先輩！  
このままじゃもう持ちませんよ！」

ここまで苦戦したのは、彼らがまだ昔日の国の兵士であったころ、  
一緒に

戦ったとき以来だ。

騎士竜はそのときの癖が出てしまい、とっさに本名で害児の名前を  
呼んでし

まう。

害児は、しばらく沈黙し目をつぶっていたが、やがていった。

「騎士竜。人を狙え！」

「人？そつか！」

ハエの上にちらほら見えている妙な物体が、人であったのかと騎士  
竜は  
気づいた。

そこから、二人は上に乗っているタンクを主に狙い、戦いを均等のレベルまで持っていく。

騎士竜は、害児にアイコンタクトを送る。勝負をかけるつもりだ。

騎士竜に飛んでくる真空波を、害児が巧妙な剣術で切り裂き、一瞬騎士竜の盾になる。

盾となった騎士竜は、その一瞬で風を操り、竜巻を起こして、ハエの動きを制限する。

その風の流れをうまくつかみ、害児が車椅子から竜巻に移り、刀で、ハエに近接戦を挑む。

ハエはそれを嫌がるが、害児はうまく竜巻を使い、片手にバズーカ、片手に刀を振り回し、近接戦をこなす。

刀を交わした先に、バズーカーをうち動きを制限し、打った反動で身をひねりながら、バズーカーを放り投げて、それを足場にし、ハエに向かって、刃を突き立てて突進する。

ハエは真空波を放ち、害児の動きを制限するが、害児はそれにお構いなく突っ込んでいく。

ずたばろになるが、致命傷はかわしているようだ。害児は迷うこと

もなく、  
驚くタンクに向かって刀を振る。が、当然のようにハエにかわされたので、  
隠し持っていた、ダイナマイトを引火させる。

さすがのハエもこれには、ダメージを受ける。タンクも一応口ボツトなので  
これで即死することはない。

一方害児は、騎士竜の竜巻とうまく同化し、被害を最小限に食い止めている

。

ハエが距離を離そうとした先に、騎士竜が待ち構えていた。

騎士竜もまた、自ら作り出した竜巻にのり、ハエと空中戦をする心積もり  
だったのだ。

彼にしては常でない勇気で、捨て身の一撃であった。

「終わりだ!」

気合と共に、手を前に突き出し、密度のある重い空気の塊を、タンクに向か

って放つ!

「あーひどい! いたい!」

わめきながら吹き飛ぶタンク。それを追うハエを今度は害児がさえる。

（奥義・雪景色）

実像と虚像、それと刀に振動を伝えさせ、周りの空気の流れと連動し、まるで、空から降ってくる雪が辺りを包むかのような、幻想的な攻撃を繰り出す害児。

幻術、体術、自然条件全てを合わせた、害児の必殺の一撃だったが、それを難なくかわすハエ。しかしすでに勝負はついていた。

タンクは、すでに相当後方に飛ばされており、今から追うならば時間は相当稼げる。

なにしろ騎士竜の本気の、一撃だ。空中で方向転換したり、雲に隠れさせた

り、見えにくい位置取りで飛んでいくように計算されている。

城から取り残され、落ちていく二人だが、騎士竜が指をぱちんと鳴らすと、

二人の下から、空気の塊が飛んできて、二人の体を吹き飛ばし、城に叩きつけられた。

「くっ・・・」

そこで害児が倒れる。どうやら相当怪我をしたようだ。

そんな害児に騎士竜は申し訳なさそうに声をかける。

「とんだ伏兵だったな。つくまでには治療が完成するが・・・しかし。」

「しかしなんだ？」

「この城は、善い人の居城まで持たないよ。もうほとんど裸の城だからね。」

「それを何とかするのが貴様の役目だろう？」

「どっちにしろ、この城では善い人の居城に、ダメージを与えないな・・・。」

確かに攻撃力の修正は可能だが、害児さんの体を直すほうが先だろう。

ものと違って人体は繊細だからね。

例えばいくら僕でも、貴方の足を直すことはできないよ。」

害児は、多少考えたがすぐに決断をした。

体が痛いのが我慢ならなくなってきたのだ。

「・・・まあいいでしょう。」

どうやら善い人さんはよくよく運があるらしい。

その運もこの王者たる害児に栄光の礎になるのだから、まったく光栄なことでしょう。」

負け惜しみを言いつつ、何とか威厳だけは保ち、治療に勤しむことにした  
害児。

そのころの、善い人の国はクーデター真っ最中であつたのだが。

## 第四十二幕 穀潰しの逆襲

「私は、マリーさんからよく学んだんだよ。善い事をするには大勢でやるといっことをね。」

だから、穀潰しみたいな悪人も善人にするように努力しないといけない。

それが私の役目なんだよ。」

「へえ！そいつはすごいな！ひゃっは！」

穀潰しは、馬鹿な善い人め。まんまと洗脳されていると思った。

結局こいつはただ利用されるだけの人形みたいなものだ。

穀潰しは、ニヤニヤしながら善い人のご高説を聞いている。

「なんだ、その顔は。この善い人を馬鹿にしているのか？」

さすがの善い人も穀潰しがまじめに聞いていないと分かったようだ。

「はあ？おい、善い人。てめえ俺の前歩けよ。善人なんだからよ。率先してくれなきゃ困るぜ！」

ドゴン！

得意顔の穀潰しの画面がへこむ。善い人に蹴られたのであった。

「てめえ！なにしゃがる！」

穀潰しは意気込む。

「この外道め。善人が温情をかけていれば、すぐにつけあがる。そんなにぼこぼこにされたいのか！」

「ちつ、まあいい。今のうちに調子に乗ってるよ。」

今に俺の真の偉大さが分かるだろうぜ。

善い人、あっちのほう騒がしい。きつと連中が大暴れにしてるに  
違いない。」

「分かったよ。馬鹿な穀潰しなんかより、そっちのほうだ大事だね。」

（てめえにいわれたくねえよ。）

善い人と穀潰しはそれぞれの思いを心に浮かべつつ、騒ぎの中心地  
に向かうと、悠然と立っているガスと、アツチラがいた。

周りには、何人もの武道家達が転がっている。

アツチラは善い人を見つけると親しげに声をかけてきた。

「いよう！殴り屋！遅かったな！」

それにつられ、ガスも善い人に気づき嘆く。

「とうとう善い人さんがきてしまったのか。  
やはり穀潰しは口だけなのだ。」

「君達か。悪人というのは。」



善い人は二人の顔など覚えていないかのような口ぶりですらあった。

「悪人が善人を出し抜けるわけがないと、まだ分からないのか？」

ガスは意外そうに善い人に声をかけた。

「善い人さん、いつは問答無用に殴りかかってくるのに、今回はずいぶん

と増長であるな？」

「なんだと？この善人が暴力を振るうとも思っているのか！」

アッチラまでも怪訝そうな顔をしだした。

「おいみんな！馬鹿だとは思っていたがこいつは本当に馬鹿だぜ！」

そういつて両手を万歳させた。

これは善い人でなくても怒るだろう。当然善い人を激怒させるのに十分

すぎる行為であった。

アッチラは善い人を怒らせる天才である。

「もう我慢ならん！」

案の定善い人は激怒し、アッチラに向かって真直線に突進する。

アッチラは、うまくガスの後ろに隠れ、驚くガスが、

逃げようとしているところを、善い人に蹴られ、床に転がる。

アツチラに善い人が襲い掛かる直前、覚醒キリコロを携えた穀潰しが、  
善い人に切りかかる。

「ひゃっはー！潰れちまえー！」

だが、うまくいくはずもなく、穀潰しはカウンター気味に顎を跳ね上げられ

るだけの結果になった。

うまくやり過ごしたアツチラはすでに、遠くに行ってしまったているが、

穀潰しはその背後に向かって大喝した。

「おい！なにしてる！早くこの馬鹿をぶっ潰せ！」

そうわめいたところに、さらにけりの追撃を受け、またもや吹き飛ばぶ。

残るはガスだけあったので、穀潰しは必死にガスに話しかけた。

「てめえ！ガス！いい加減にしろ！死んだ振りするな！」

そついわれて素直に起き上がるガスではない。

穀潰しのその台詞を聞いてむしろますます死んだ振りを決め込むことに

したらしい。

穀潰しは続いてくる善い人の攻撃を、かわしつつ、新しい対善い人用の技を浴びせる。

「潰れる！サイコシャワー！」

両手から、小さな粒子のような衝撃波を放つ。

ショットガンといえば分かりやすいだろう。善い人と戦う場合近距離戦

が多いので、初めて実用的な技を開発したわけだ。

善い人は、体を回転させながら、受け流すが、多少被弾したらしい。

穀潰しが善い人に攻撃を直接当てるのは初めてだろう。

善い人は、衝撃に、よろめいたが、すぐさま反撃に移る

が、最早キレがない。

「どうした？善い人？さっさと雷を使ったらどうだ？」

穀潰しには軽口を叩く余裕すらあった。

善い人は無言で反撃を続ける。

穀潰しはここにきて、非常にどうでもいい気分になり考え直した。

（善い人が言っていた花の国は、テンマがいる国だったな。

天崎とかいったが、やつの偽名だ。

なぜか他の連中は別人だと思ってるみてえだが、妙な催眠術は俺にはきかねえぜ。」

穀潰しは、テンマに力を借りた結果、善い人に負けたのだ。

これはテンマの巧妙な策略だろう。

（あの野郎にこけにされたままじゃ、俺の面子がたたねえぜ！  
この場合善い人を利用して、テンマをぶっ潰さなきゃならねえ。）

穀潰しは方針を決め、善い人に話しかけた。

「おい、善い人。善人同士で争っている場合じゃねえ。  
花の国に攻め込んでテンマをぶっ潰そうぜ！」

「この善人が騙されるとでも思っただのか！」

「なにをいつてやがる！俺は善人だぜ！ひゃっは！  
早くしないと間に合わなくなるぞ！」

「穀潰し。私は善い人だからね。  
今回は多めに見てあげるけど次はないよ。」

「へいへい。」

馬鹿な善い人だ。俺が善人のわけがねえ。と思っただが口には出さない。

善い人は善い人で、穀潰しが善人だなどと思ってないようだ。

「君は悪人だからね。善い人になるために特訓を受けてもらっよ。大丈夫。君ならやり遂げれるはずだ。」

にこりと笑う善い人に穀潰しは嫌な思い出が甦った。

似たようなパターンで、過去穀潰しはテンマに、地獄のような目に合わされたのだった。

いつの間にかガスが起きており、穀潰しの腕をつかむ。

「女々しいぞ。穀潰し。さあさっさといくのだ。」

「てめえガス！裏切ったな！」

「やっぱりガスさんは善人だったんだね。そうだと思ったよ。」

穀潰しは、ガスと兵士達に連れられ暗い闇へと消えていった。

## 第四十三話外伝 ガスの商売 1

「そろそろ、昼間くらいか。」

ガスは暗い穴倉の中にいた。なにやらぐつぐつと煮えたぎった試験管などが並んでいる。

「誰かかったようだな。ここもそろそろ潮時か。」

ガスはそういつて荷物をまとめ始める。

「いや・・・夜を待つか。」

考え直し、いつでも穴倉から出れる用意だけをし、洞窟の壁に立つたまま、

背を預け、目をつぶる。

どうやら眠るらしい。

彼は追われている。何故追われているのか。

彼は幻といわれている島国出身であり、その貴族であった。

いわゆる武士というやつである。彼は夢の中で過去を追憶していた。

「なぜ、剣のみで戦わない？薬品や火薬に頼った勝利がなんになるというのだ？」

師にそう問われる。

「勝てばいいのだ。我輩の流派は、ガ流である。ガ流とは、ガス天下無双流のことなのだ。」

ガスはそう返答した。ここは道場の中、周りに血相を変えた門下生がガスの周りを囲んでいる。

ガスは以前から不満だった。

強くなると証して単なる剣技を磨いているだけの状況が我慢ならなかったのだ。

そのような形だけのお遊戯では、ガスの強さへの探究心は満たされなかった。

ガスは騒ぎ立てる門下生をまるで無視をしている。

師はみなを制して、自ら木刀を持った。

「お主は破門だ。しかしながら我が流派は門外不出。ここでその腕を折らねばなるまい。」

しかしガスの腕は、一流だ。手放すのは惜しいと師は考えた。

だから、手痛くお灸を据えた上、反省させようという心積もりであった。

「カマキリ流は、無抵抗の相手をぼこぼこにするような、恥知らずな流派であつたか。」

我輩はそのような流派に習って残念なことであつた!」

ガスは挑発するような声で師の様子を伺う。

「わしに勝てると思うなら、やってみるがいい。」

その師の声で、ガスにも木刀が渡された。

（剣を持つのはこれで最後かもしれないな。）

ガスはそう考えた。腕には自信がある。門出の記念にここで師を負かす

のもよいのではないか。とそうかんがえた。

二人は礼をし、激しい攻防が始まる。

彼らの流派二刀流だ。

やがてガスが押され始め、門下生達はホツとした空気をもし出す。

（何か仕掛けてくるな。）

ガスの師はそう考えた。

唐突であった。ガスの師は突然床にばたりと倒れ、ガスはその頭を  
面倒

くさそうに、軽く小突く。

「一本であつたか？」

たちまち辺りに怒号が満ちた。

「貴様！」



「ふざけるな！」

「生きて返すな！あの卑怯者を！」

ガスは彼らの技が兎戯に見えた。

ガスはライターを燃やし、ほおり投げる。

それだけの動作で道場は爆発を起こし、爆発に紛れガスは道場から逃れる。

「我輩の野望をかなえるためにはあの島は小さすぎた。」

ガスは胸は野望がいっぱいであった。

所詮、小鳥に鳳の気持ちは分からないであろう。

ガスは高笑いをし、慌てふためく道場の連中を眺めながら、船で出国した。

薄ら笑い、目が覚める。

自分が夢で大笑いしていたのを思い出し、そこでもまったくすりこびと笑った。

「まったく、我輩以外の人間はまるで我輩のために存在してるようなものだ。」

非常に不遜な考えであった。彼は門外不出の剣術を習ったため、

今でも刺客に襲われているのだ。

ガスが、洞窟の壁を押すと、はしごが下りてくる、荷物を全て運び、上にあるプレオに積み込む、プレオにはステルスの布がかぶさっている。

ステルスの布を取り払い、プレオに乗って次の町を目指す。

ここは日の国、つい最近まで、ルーファという魔人が、のさばっていた国だ。

最近はまだで、噂を聞かないが、戦死でもしたのだろうか。

さしものガスも、ルーファの情報を得るのは骨が折れた。

そんなおり、ガスが酒を飲んでいると、ガスの横にどかりと座る人物がいた。

「おいっ！マスター！俺にも酒をくれ！支払いは隣にいるうだつのあがらねえ鎧男に支払わせろ！」

穀潰しであつた。

「珍しいことなのだ。セリルはどうした？」

「ああ・・・まあなんでもねえよ。」

「喧嘩でもしたか。」

「まあそんなところだ。」

「そうか。しかしセリルを一人に残しておいたら狙われやしないか？」

穀潰しもガスと似たような事情があり、組織から追われている。

穀潰しがというよりは、穀潰しと一緒にいるセリルが問題なのだが。

「狙われるかもしれないが・・・。」

「ふむ。」

それから少し沈黙が続き、思い出したかのように穀潰しがガスに話しかけた。

「ところで、頼まれていた新大陸のことだが。」

「ああ・・・。そうであるな。どうせたいしたことはないだろう？」

「いや、行方不明だった、ルーファと似たような人物、おそらく本人だろうが、そいつが何か大きなことをしようとしているみたいだぜ。」

ルーファという単語で、周りの客が何人か反応を示す。

二人はそれらを見殺し話を続ける。

「一風吹きそうである・・・。」

そういつて、しばらくもくもくと酒を飲むガスと穀潰し。

「ああそうだ。俺は名前を変えることにした。今後穀潰しと読んでくれ。」

「ああ・・・穀潰し。一風きそうであるが、ルーファごときのやつばらでは、高が知れているであろうな。我輩が一風吹かせる。これはチャンスだ。」

ガスはこの国での活動に限界を感じていた。

確かに彼はそれなりの地位を簡単に手に入れたが、これ以上の地位を手に入れるためには、新しい国の王の右腕くらいにならないければならない。

ルーファなどガスからすれば赤子のようなものであったが、何とかお膳立てして、ほどほどのものにしようと考えた。

「おい、あんたら。今の話は本当か？」

周りにいた客が、ガスたちに話しかける。

「本当かどうか知りたいなら、現場に行ってみるといい。どうだ。新しい国と優秀な王の下で一花咲かせるというの？」

「うーむ・・・とにかくルーファ様のことは気になる。」

客たちは、何事が相談しあい、真偽を確かめるべく、店を出て行く。

「ここには、鬭争しかない。我輩の国と基本的にはおんなじなのだ。」

かといって新大陸には平穏しかない。

それは我輩にとって退屈なことなのだ。

秩序しかないのだ。この世界は。

自由も闘争もある。新しい創造性を持った無秩序な国。

我輩はそういう国を作る。

その旗印としてルーファはまあ合格点である。」

穀潰しはそれを聞いてにやりと笑った。

「面白そうだな。俺も一口乗るぜ。実際俺も今の世界にはうんざりしてた

ところだ。」

「穀潰しは宣伝を頼む。

秩序に従えないアウトローたちには伝があるだろう。

我輩は、早速現地に出向く。

そうであるな……。商売、それを発展させる国にしよう。

今の時代忘れ去れていることであるが、そこに刺激とロマンがある。

」

そういつて、ガスは立ち上がった。

「我輩はガ流である！」

ガスと穀潰しが外に出てみると、店の周りに日の国の兵士達が囲んでいた。

「こいつらか。妄言を吐いて、わが国の士気を落とそうとしている  
間者

というのは。」

將軍がニヤニヤ笑いながら、ガスと穀潰しを眺める。

「いったい、貴殿らはどういう料簡で、わが国の妨害をしようというのだ？」

將軍はガスたちにそう尋ねた。

ガスはここぞとばかり、大演説を始める。

「ただ戦うだけとはなんともつまらないことである。戦うなら、より強さ、より力にあこがれるのは当然ではないか。その力とは技術だけではあるまい。そこにこの大陸の閉鎖性があるのだ。……。」

將軍は、ガスのでかい声に顔をしかめつつ、後ろにいる兵士達に号令した。

「それ！あいつらを思い知らせてやれ！」

おう！とばかりに兵士は、ガスたちに襲い掛かる。

「なにをするか！我輩が話している途中であるぞ！うわっ！やめてくれー！」

「

ガスがたこ殴りにされるのを見て、穀潰しは非難の声を上げる。

「ああガス！てめえらなにしゃがる！」

そういう穀潰しにも、火の粉がかかり、ぼこぼこにされていく。

「オ、オレは関係ねえー！ひいー！たすけてくれー！」

そこでガスはせっかくためた、財産を没収され、ほうほうの態で国を追い出された。

後に害児に財産を没収されたこともあったが、そのときは強かに、財産の大部分を隠していたのだ。

いわゆる隠し財産だが、このときはそんな知恵もなく、本当に全財産を没収されてしまったのだった。

「お、おのれ・・・！」

ガスは苦痛に満ちた顔で、去っていく兵士達をにらんだ。

「見てろ、ガス。あいつら思い知らせてやるぜ！」

その後日の国に、サイキッカーのテロリストが現れたらしいが、騎士竜の遠隔攻撃により、撃退されたという。

ガスは、一人取り残されて、とぼとぼとした足取りで、ルーファの国を目指した。

まるで乞食のような格好であった。

ルーファはここでは害児と名乗っているらしい。  
ガスにとって名前などどうでもよかった。

## 第四十四幕 英雄会談

善い人と、ガスは、善い人の部屋まで戻った。

ガスは、善い人の机にあった漫画をどかすと、地図を持ってきて広げた。

持っていた扇子を開け閉めしながら、頭をぼんぼんと叩いた後、善い人に話しかけた。

「さて、善い人君。ここで一つ問題がある。」

「なにかな？ガスさん。」

「害児が裏切った。裏切り者は始末しなければいけない。」

善い人は、考えた。害児とはいったい誰だったろうと。

いぶかしげな顔をしている善い人の様子を見て、ガスはフォローを入れた。

「ああ・・・害児というやつは、昔善い人君を世話していたやつであつたのだが、とうとう本性を見せ、善い人君を裏切った逆賊だ。」

「そうか・・・。確かに善い人の振りをしている人が実は悪人だったというのは漫画ではよくあることだね。」

「逆賊を征伐しなければならぬ。」



そういつて、ガスは地図の一点を扇で指し示す。

「逆賊は空中より我がほうに、奇襲をかける予定であったが、我が軍の防衛機能により、空中要塞は墜落し、今は徒歩で前進しているらしい。」

逆賊の親玉、害児が、負傷したらしくその動きはゆっくりしたものだ。

ふざけたものである。

ここは我輩らの国であるのに、まるで自分の国であるか様な振る舞い、  
言語道断なのだ。」

善い人は、ほとんど言葉を聞いておらず、ガスから音がしなくなっ  
た。

と思い自分の意見を言った。

「私は、花の国を改心させないといけない。」

それを聞いてガスは苦虫を潰したような顔になる。

「事の重大さが分かっていないようだな。善い人君は。」

害児とその腰ぎんちゃくの騎士竜は、頭は悪いがなかなかの手練。  
甘く見るとえらい目にあう・・・。」

そのとき、善い人の机の上にあった花瓶に刺さっていた花の花びら  
が散り、

部屋一面に花びらが散らばった後、人型に収縮しマリーが現れる。

「なら私が行って確かめましょう。なに大丈夫ですよ。  
あの害児さんという方は相当なお馬鹿さんなようです。」

ガスは、ちらりとマリーのほうを見た後、善い人の顔色を伺った。

「その人が悪人なら改心させないといけない。」

「ふふ……。では行ってきます。」

マリーの体は再び、花びらとなって散る。

すっかりマリーがいなくなった後、ガスは善い人に向かって再び口を開く。

「実際のところ、花植えのマリーが行ったところで、逆賊にはかなわないだろう。」

泣きつ面で帰ってくるのが落ちである。」

「善人は悪人には屈しないよ。」

「善い人君もいつてあげたらどうか？」

「私は善いことに忙しい。」

何もしていないように見える。

「そうであるか……。そういえば我輩も何かとやることがあった。」

そういつて、善い人の部屋から退出した後、ガスは城の物資を、ブレオに積み込み、兵士達からいぶかしげな目で見られつつも、自分の店まで運び込む作業に精を出した。

「いい汗を書くことであるな。」

しかし何か不思議なことがおきた。プレオに積んだ積荷がどんどんへって  
いつているのだ。

「妙だ。」

ガスは嫌な予感がした。

ガスでなくても誰でも妙と思うし嫌な予感がするだろう。

「相変わらず泥棒ですか。貴方は商売と泥棒を一緒にしているのではないですか？」

唐突に話しかけてきたのは、まだ遠くにいるはずの害児であった。

ガスはゆっくりを周りを見渡した、ここは城外であったので、視界はきく。

どうやら害児の他、誰もいないようだ。

念のためレーダーも見したが、やはり害児以外誰もいないらしい。

（ということは例の男もいないということか・・・）

ガスはとっさに心でそう計算した。

「心外であるな。害児さん。これは我輩の正統な請求であって、泥棒行為などと一緒にしてもらっては困る。」

害児にとっては、どうでもいいことであつた。本題は一つだ。

「・・・善い人さんのところに案内してください。」

「何故我輩が？勝手に行けばよからう。」

あまりのいいように、いつものように怒ることさえ忘れ、害児は質問した。

「ずいぶんと気が大きいようで。ガスさんにしては珍しい勇氣ですね。」

「それはそうであろう。我輩は善い人君の信頼を得て、軍師となつたし、

いまさら逆賊害児などになにを恐れることがあるだろうか。

害児さん周りを見てみる。貴方に味方など一人もいないのであるぞ？」

害児はそういわれ、周りを見た。確かに味方はいない。

「ではどうあつても案内していただけないと？何か勘違いしてませんか。ガスさん。

貴方は私に依頼されて善い人さんのサポートをしているのですよ。」

「なるほど・・・。確かにそれもそうであつたな。」

ガスは遠い昔を思い出すような顔をした。

ガスは姿勢を正し一礼した。

「失礼した。害児さん。善い人さんはこちらにいる。ついてきてくれ。」

ガスは、害児を連れ、善い人の部屋まで先導した。

害児はガスと世間話をする。

「そういえば、穀潰しさんはどうしました？」

「穀潰しはダメだ。」

「ダメといますと？」

「物の役に立たないということであるよ。」

「やつはどうも世渡りが下手であるからな。」

「当然でしょう。穀潰しさんはすぐへこへこする貴方と違って誇り高く選ばれた人物なのです。」

ガスは害児の頭の具合を疑ったが、今に始まったことではない。

「へえ、左様でござったか。ああ、ここだな。善い人君。客を連れてきた。」

「入らせていただくぞ。」

「そういつて部屋に入っていく。」

「善い人君。こちらがさつき話題に上がった逆賊の害児だ。」

「ガスさん。逆賊とはなんのことです？」

善い人は眉毛をぴくんと跳ね上げ、不機嫌そうな顔で二人に近づきつつ

話す。

「ああ貴方が悪人の親玉の害児とかいう人か。確かに悪そう顔をしているね。」

善い人は威圧しつつ近づくが、害児は負けじと応戦する。

「なんとということか！私が今まで貴方にした数々の恩義を全て忘れたということなのですか？  
貴方のために私がどれほど尽くしたことが！」

その必死な有様を見て、善い人は最初の考えを変えた。

「どうやら貴方は善い人のようだ。」

「当たり前でしょう。」

確かに私も最初は今回の貴方の行いには腹が立ちました。その思い上がり正そうとも思いましたが、貴方と私と仲だ。そう邪険にすることもないと思い、単独でここまで来たのです。」

「そうだったんだね。」

「さっそくですが、私の国を返していただきたい。いいですか。今まで私は貴方の無理難題をいくつもかなえてきました。」

貴方も私のいうことを、  
たった一つくらいは聞いてくれてもいいのではないですか？」

「私は善いことができればそれでいいよ。」

「ではこの国を私に譲るということですか？」

「いや、私は花の国を改心させないといけない。  
それが善人の使命だからね。」

そこで害児はしばらく考える。

ガスは二人の会話を特に気にする風でもなく、  
何事かつぶやきながら、算盤をはじいている。

「では、花の国が改心すればいいのですね？」

「それは私が直接、善人魂を叩き込まないといけない。」

「なるほど。それは確かに。いいでしょう。私に策があります。」

## 第四十五幕 日の国復活

善い人は、まるで害児の話を聞いてないかのように、机の上にある、何か手のひらに収まるくらいのサイズの、丸い鉄のボールのようなものを

無心に転がしている。

「害児さん。何か善い考えがあるの？」

「そうです。策というのは、善い人さんが花の国に乗り込み、私が留守を守る。こうすることで、善い人は後顧の憂いをなくして、決戦に挑めるということです。」

安心してください。この城は私が絶対守りぬきます」

「それは善いことだね。じゃあすぐやろう。」

「待ってください。さすがに善い人さん一人ではまずい。穀潰しさんを護衛としてつけてあげましょう。」

それにしてもあの人はこの大事なときにいったいなにをしてるのでしょうか。

肝心なときにいつもいないのです。」

「ああ穀潰しか。」

善い人が、手をぼんぼんと叩くと、ニコニコ顔の秘書がやってくる。

「最下級の善人をここにつれてきてくれないかな。」

「分かった。」



ニコニコ顔の秘書は何かおかしいのか、始終ニコニコしながら対応し、  
去っていく。

害児はそのニコニコ顔に内心むかつ腹が立っており、善い人に詰め寄った。

「なんです？あの馬鹿は。私はああいう幸せそうな馬鹿を見ると、  
見せしめに思い知らせたくなってくるのですよ。」

同感だろうという表情を善い人に向ける。

善い人は、相変わらず感心なさに鉄のボールを手で転がしていた。

「なかなかの善人だよ。私には及ばないけどね。」

害児は驚いた顔をした。

「ええ！そうでしょうとも！しかしどうです？この私は？」

「どういうこと？」

「この私は大善人でしょう？あの人と比べてどちらが善人なのですか？」

挑むように善い人をにらみつけながら言い放つ害児。

「この善い人から比べたら、みんな似たようなものだよ。  
私より善い人なんていないんだからね。」

害児が、またもや反論しようとしたとき、扉が開き、入ってきた人間の顔を見て、害児は部屋の隅まで逃げ出した。

善い人は、もちろんそういう害児の異様な行動もスルーしている。

「ほらつれてきたよ。」

陽気な秘書と共に陰気な顔の二人の男が姿を現す。

「さてはて、善い人様。私にいったい何の用があるのでしょうか。ところで、あのすみに縮こまっているのは我が娘では？」

「この人はつれてこなくていいよ。」

「分かったよ。」

「いやあの……。善い人様少しお待ちを。」

將軍は、部屋の隅を凝視しつつ退出していく。

穀潰しが面倒くさそうに口を開く。

「それで？この俺に何か用でもあるのか？王様気取りの善い人様よお？」

「穀潰しか。君は相変わらず悪人だね。」

「けっ！俺はこの程度じゃ屈しねえぜ！誰が善人なんてなるかよ！」

害児がホフク前進しながら、善い人達に捕まり、善い人の後ろに姿を隠しながら、穀潰しに命令する。

「いいですか。穀潰しさん。貴方にもチャンスをおげます。善い人さんと一緒に花の国を攻めるのです。」

「何花の国？」

穀潰しはしばらく何事考え、やがて口を開く。

「ああいいぜ。いつてやろうじゃねえか。」

「さすが穀潰しさんです。貴方は者の通りがよくわかってらっしゃる。」

「さっさといくぞ。善い人。」

善い人はうなずき、壁をけりでぶち壊して、外へ出た後ダッシュをし、

たちまち消えていった。

穀潰しもその後に続き、しばらく進んだ後、ランダムスフィアを城に放ち鬱憤晴らしをした。

城には害児だけが残った。

「さて・・・と。これで邪魔なやつはいなくなっただか。」

害児はにんまりと笑った。

あのにやけた顔を秘書をどうしてくれようかと考えているようだ。

「どうするつもりなのだ？害児さん。」

「ああガスさん。貴方いたんですか。」

「まあ害児さんのことだ。なんとなく分からなくもないが。」

「何が分からなくもないのです？

下民無勢が、大層な口を聞かないでいただきたい。」

「・・・害児さん。ところであの男は一緒ではないのか？」

「あの男？騎士竜のことですか？

・・・へえ。貴方のような恥知らずな人間でも怖いものがあるとはね。」

恥知らずとはいいいもいたりだ。さすがのガスも我慢の限度があった。

「害児さん。我輩にも限度というものがありますぞ。」

「ふっ。冗談です。仲良くしましょう。」

なあに私だつてこの国を一人占めにしようなんて思つてませんよ。

元々私はこの国を出た身。

ただ・・・やはり故郷がなくなるというのはさびしいものがありましたね。

ただそれだけの話なのですよ。」

「そう・・・。」

ガスはいいよども、改めて台詞を言いなおす。

「そう願いたいものであるな。」

「おや？通り雨ですかね？」

害児は、立ち上がり、善い人が開けていった穴から外の様子を見る。いつの間にか曇り空になっている。たちまち雨が降り、雷鳴が降り注ぐ。

「妙な天気ですね。まるで・・・。」

「・・・。」

「そうそう騎士竜ならもう到着してるでしょう。やつら、久々に故郷に帰ってきましたからね。いろいろあるってことですよ。」

それで急遽私だけが先にこの城にやってきたということです。」

そういつて、

部屋の外に出て行こうとする害児の背中に向かってガスは声をかける。

「害児さん。善い人君たちを放っておいでよいのであるか？」

その声に立ち止まり、振り向くこともなく害児はこたえる。

「はて？そういう貴方はどうするのです？」

まあ今後のことについて話し合いましょう。貴方もきてください。」

とりあえずは、ガスは黙って害児についていくことにした。

下に降りてみると、見慣れた顔の黒服たちと騎士竜が整列して、害児を待っていた。

「さすが首領です！まんまと善い人様から国を奪い返しましたな！」  
どうやら妙な情報が出回っているらしい。とはいえ事実ではあったが。

「ええ。あなた達はこの狂った現状を収集してください。  
ただし「あの男」については、慎重に事を進めておくように・・・。」

「ははっ！」

「騎士竜！お前は私と一緒に来い！」

騎士竜は、明らかに不満げな顔で害児についていった。

害児とガスと騎士竜は、小さな部屋に入り密談をする。

開口一番に騎士竜は怒りの言葉を発した。

「何故この僕が、卑しい人物と同席しないとならないのか？」

ガスはその言葉を聴いてニヤニヤしている。

「そついうな。私だって我慢しているのだ。  
なあに用が済めば放り投げてしまえばいいだけのこと。」

「まったくそのとおりであるな。」

ガスがすかさず相槌を打ち、その言葉に騎士竜はそっぽを向く。

「第一、聞けば汚い裏切りで国を奪い返したそうじゃないか。見苦しい。」

こんなやつと付き合っていては、貴方の品位まで下がってしまう。もちろん僕もだ。そうだろう？」

「まあまあ。今しばらくはこのゴミ虫の助けも必要ということです。」

「どうも騎士竜なる人間は、子供で困ることである。」

我々は商人であるのだから、もっと大人になってもらわなくてはな。」

ふふんと鼻先で笑いながら、ガスは答える。

その言葉に我慢ならぬといった風情で騎士竜は椅子を蹴りつつ席を立つ。

そして、ガスを指差しながら、怒声を発する。

「ふざけるな！いつこの僕が商人になった？言ってみろ！」

ガスはやれやれといった感じで相手にしない。

「何だその態度は！」

「おい、騎士竜。いい加減にしる。」

害児が騎士竜をたしなめ、騎士竜は少し冷静になったが、考えは変わらなかった。

「分かったよ。確かに僕は貴方に国に帰ってきてほしいと思っていた。

だが、こんな品位の下がるやり方はごめんだね。

僕はここで失礼させていただくよ。」

騎士竜は部屋から出て行く。

「まずいな・・・。」

残された害児は思案顔だ。ガスは仕方ないのでフォローの言葉をかける。

「追いかけないのであるか？」

「はつきりいつて、純粋な戦闘能力ではやつのが私より上だ。」

追いかけないのか聞いたのに、どうして戦うことが前提なのだろうか。

害児のトンチンカンな思考は、王者の貫禄であり、常人の理解できるところではない。



## 第四十六幕 無能な王者

はつきりいつて取り残された善人たちは哀れだ。

これからどうなるのだろうと、しきりに顔を見合わせているが、どうにかなるものでもない。善い人がいなくなってしまえば、彼らなど塵芥に等しいのだから。

これぞまさに、盛者必衰の理というもの。

利口なマリィやアツチラはこの現状を見て、早々とんずらしたが、間の抜けている多くの一般善人たちは、とんずらするという考えすら、

思いつかないらしい。

おろおろしているところに、騎士竜がやってきた。

「みんな！安心しろ！この国はまだ善い人様のものだ！」

しかし善人たちの反応は冷めたものだった。

「誰だ？あいつは？どの階級の人間だ？」

誰なのだろうとさっぱりわからないが、そんな反応とは対極に、元日の国の兵士達はどよめいた。

「騎士竜だ！やつはやる気だぞ！」

「騎士竜こそ我等が王だ！最強の武術者だ！」

ついに騎士竜がやる気になったということで、  
日の国の兵士達は、いつになく興奮した。

「そういえば、ルーファ様も戻ってきたと聞くが・・・？」

「まさか前面衝突か？どちらにつけばいいんだ？」

「かつてのルーファ様なら間違いはなかったが、今となっては騎士竜  
だろう。大体ルーファ様は裏切り者でもある・・・。」

「しかし、善い人がどうにかとかいってるが。」

「問題ない。そんな馬鹿のことなどすぐに忘れる。」

どうやら、元日の国の兵士達は、大半が騎士竜につくことにしたよ  
うだ。

善人たちもその様子を見て、騎士竜についていくことになった。

騎士竜の気炎が上がる一方で、無為無策の無能な王者、害児様は、  
その忠実な部下、黒服にまで裏切り物が出る始末であり、  
日に日に、勢力が小さくなっていった。

「なかなか、芳しくないことであるな。」

ガスは、刀を打ちながら害児に話しかける。

「ええ。どうやら万策尽きたようです。  
ところで貴方は裏切らないのですか？」

「ああ・・・我輩としては、もう十分儲けさせてもらったし、この国のことなど、興味ないからな。」

「その刀は、この国の鉄で作っているのですか？」

「いや、鎗の国からとってきたものなのだ。」

「なるほど・・・。」

「そんなことよりこれからどうするのか？」

「どうするとは？」

あまりの馬鹿っぷりに、ガスは顔そむけた。

「いや・・・なんでもない。」

「なんです？殴られる前にしゃべったほうが身の為ですよ。」

ガスは害児の理不尽な言葉にためいきをつき、再び口を開く。

「・・・正直このままでは、この国を追い出されてしまつのが落ちではないのか？」

「何故害児さんは、何もせずじっとしているのか我輩には疑問であるが。」

「確かに貴方の言うことにも一理あります。」

「何故もつと早く言わなかったのです？こうしてはいられない。」

「害児が突然慌しく外出しようとしているので、ガスはたずねた。」

「何か策でも？」

「この国の王者は私です。騎士竜に国を返してもらおうのです。」

「へえ……。さようでござったか。なら好きにしたらよいことである。」

「待てよ。考えてみれば先方から出向くのが道理ですね。」

この私が自ら出向くということでは、王者の権威が軽くなっています。

分かりました。使いを出しましょう。」

使いを出して、三日たったが、何も反応がない。

騎士竜はそんなところではなかったが、害兎など最早どうでもいい存在

でもあった。

なぜか分からないが、騎士竜派の人間達が、善い人のことをしきりに、

馬鹿にし、馬鹿人などといい始めたからだ。

騎士竜はその状況を収集するのに必死だった。

とはいえ、内心では騎士竜も善い人は馬鹿だと思ってはいたのだが。

そして、騎士竜は、しきりに、王つまり將軍への就任を側近に進められる

ようになっていた。

阿呆なことに、善人たちも、善い人のことを馬鹿人と呼び、騎士竜に媚を売るしまつで、面の皮が厚いとはこのことだった。

騎士竜は、それについて善人たちをとがめたことがあった。

「善い人様は君達の仲間じゃないのか。僕はそうやってすぐに裏切る人間は信用できないが、どうだ？」

「いや、俺たちは散々馬鹿人にぼくられているから、あんなやつは仲間ではない。」

やつの力が強かったから仕方なく今まで従っていただけだ。」

「なら君達は善い人様がここに帰ってきてても僕の味方をするのか？」

「当然だ。俺たちの運命はすでに貴方にたくしてあるのだ。」

「ならもう何もいわないよ。でも僕が將軍職につくとしたら、それは正式に善い人から受け継いだときだけだ。」

最初騎士竜にはそもそもそんな野心はなかったはずだが、周りの連中が

あまりに騒ぐので、引っ込みがつかなくなってきたのだ。

ちなみに、害児の父親、元將軍は、牢屋に幽閉されている。

善人たちは、兵士達に訓練を受けており、元々努力家ぞろいの善人たちは、

めきめきと強くなっているのであった。

勢力も日に日に大きくなっていつている。

害児はますます孤立無援だ。周りの部下も2、3人になってしまっていた。

最早、害児？ああそんな人もいたかという状態で、誰からも相手にされなかった。

使いを出しても、一向に返事が返ってこないが、害児はもうそんなこと

忘れたような顔をしている。

ガスは、その様子にあきれ返ったが、ある意味大物だと思った。

しかし、いつまでもこんなところにいても仕方がない。

ガスは、害児に文句を言った。

「害児さん！いつまでもこんなところでがんばっても無駄である！貴方にはまだそんなことが分からないのか！」

「なにをいきなりいきり立っているのです？」

「いきりたりたくもなるものだ。何しろこちらの勢力は、我輩らを入れても

、もう5人ではないか。それに比べて騎士竜の勢力はもう磐石なのだから、まったく意味がないではないか。」

「ほほう。なるほど。確かに貴方は何も分かっていないようだ。」

「どうやら何か手があるようではあるが、さてお手並み拝見したいものであるな。」

「まあ見てなさい。いきますよ。みなさん。これから演説に向かいます！」

「ははっ・・・。」

「演説？今頃演説？何か手があるのだと思いたいが、いかんせん害児の頭では・・・。」

「なにをしてるのです？ガスさん。早くきなさい。」

害児とガス、そして三人の黒服たちは、町へ繰り出した。

もう害児たちを見ても誰もなんとも思わない。

ただ通り過ぎていくのみであった。

ガスはのっけから不安を感じた。それは黒服たちも同じだったろう。

「さあ！この私のすばらしい演説を聴きなさい！

この国はこの私害児こそが収めるにふさわしいのです！

これぞ王者の力！この私に勝てるものなどありません！」

何だあの馬鹿は？といわんばかりの表情で人びとは通り過ぎていく。

指を指されたり、ひそひそ話をされたりしている。

ガスはその様子を見ていたたまれなくなった。

「もういい！もういいんだ！害児さん！」

「何がもういいのです？これからよくなるどころだといつのに。」

「この状況を見て何も感じないのか？」

「どういう意味です？ガスさんあまり調子に乗らないでいただきたい。」

「はあ？こりゃもうだめだ。」

「ダメとは何事です。」

すわ喧嘩となるとところで、黒服たちもそれを眺めているばかりであったが、

そんな彼らに話しかける一人の男がいた。

「害児さんとガスさんですね？」

「なんです？あなたは？」

「主が呼んでおります。」

「この私を呼び出そうとは、なかなかの人物と見ました。さあガスさん。ばやばやせずしっかりついてくるのですよ。」



「は、はあ・・・。」

害児たちが、男に連れられて町外れまで歩いていくと、曲がりくねった

妙な塔に出くわす。

「はて？どこかでみたような・・・。」

害児はしきりに首をかしげている。

「こちらです。」

塔は、高く天まで届くと思われた。

「はたしていつになったらつくのやら・・・。」

車椅子で、階段を上るのも大変だが、それよりも大変なのは、重装備の

ガスだ。

ふうふういいながら、へこへこ足を運んでいる。

害児は、ガスを励ました。

「さあ、あと少しですよ。頑張りましょう。」

「そんな根拠はどこにもないではないか！」

ガスは切れ気味であった。どうして自分がこんなことしなければならぬ

のだというやるせない感情があつたのだ。

「ならここらで休みましょう。もうすぐ夜になります。」

男は、とりなし顔で害児の判断を仰いだ。

その言葉を聞き、ガスがわめきだし、その場で座り込んでしまった。

「ああ！まったくそうしてもらいものであるな！我輩はもう疲れた  
！」

「いや……。ここは一気にいきましょう。これぞ王者の行進。」

「いい加減にしてくれ！害児さん！

たった5人で王者も何もあつたものではない！

貴方はもう終わっているのだ！いい加減気づいてくれ！」

「王者に終わりなどありません。さあいきますよ。」

わめきちらし、あくまで休憩しようとするガスを、黒服たちが蹴飛ばし、

しぶしぶまた、なぞの階段のぼりの行を再開した。

## 第四十七幕 害児逃亡

しばらくたって、またガスがぶーぶーいいはじめる。

「しかし害児さん。

何故我輩が落ちぶれた

貴方に付き合わなくてはならないのか。

はつきりした返事を聞きたいものであるが・・・？」

「それは明確でしょう。つまり貴方は私と契約をして、さらに、宝石までもらった以上、商人として当然のことではありませんか。ぐずぐずいわず黙ってついてくればいいのです。」

「いや、一つ言わせてもらえば、それは善い人さんのフォローをする、

という契約であつて、こんな馬鹿げた階段を上ることではない。

確かに、あなた達はよかろう。

しかし我輩を見よ。

このような重装備で階段を上るのは拷問に等しいではないか。」

一同まじまじとガスを見る。

小手に脛当て、鎧にヘルメット、確かにガスは重そうだが、あまり疲れているように見えない。

というよりは、ガスが鉄製のフルフェイスつけており、表情がよく分からないという点があつた。

害児は、くすつと笑って肩をくすめただけで何も言わなかった。

ガスは怒って抗議しようとするところ、黒服が横から口を出した。

「ぐちぐちうるさいやつだ！首領！こいつやつちまいませんか？」

「まあいいでしょう。ゴミ虫はゴミ虫なりの言い分があるものですから。」

そんなことより上るとしましょう。

どうもこの塔は怪しい。

明らかに何かある気配がするのです。」

そうこういう間に、塔も後わずかで屋上へとつくようだ。

屋上へつくと、あたり一面青い空が広がっている。

害児は黒服に話しかけた。

「寒いですね。」

「御意。」

御意ですまないのがガスである。

「とうとう屋上まで来た！どう責任をとるつもりなのか！」

ガスはあまりのことに激怒し、男に詰め寄った。

「よくごらんなさい。まだ階段があるでしょう？」

なるほどよく見えると、うつすらとだが、透明の階段のあとが見える。

「この上まだ登るのであるか？しかも見る！

このままだと、踏み外したら真つ逆さまに落ちてしまつてはいないか！」

「ガスさん、いい加減になさい。

そんなことは口に出さずとも明白なことではありませんか。あまりぐだぐだしつこいと、また財産を没収しますよ。」

「ふん！今の貴様にそんな権力があるものか！」

「なに？」

すわ喧嘩！と思いきや、男が仲裁に入る。

「もうすぐです。上のほうに扉が見えるはずです。」

「見えん！」

ガスは激昂して、男の胸倉をつかむ。

害児は目線を流し、黒服に合図をすると、黒服はガスは男から引き離す。

「なにをするか！我輩をガストラゲタと知つてのことか！  
離せ！はなさんかあ！」

害児は、男に頭を下げた。

「見苦しいところをお見せしました。」

「いえいえ、まあここから先は貴方一人で結構です。」

結構とはご挨拶な話であって、

それならガスはなんのためにつれてこられたのか、分からない。

彼が激昂するのも無理からぬ話で、結局いやみだけなのだ。

ともかく男を害児は、天空に張り付いてる扉を開け中に入っていく。

中では優雅な貴婦人が、ティーを飲んでいた。

つまりこの人が、害児の母親である、ルシア・ルーファスであった。

ちなみにこの人、目が見えない。

害児の足が將軍によつてきられたときに、夫への当てつけのために、自分の目を潰したのであった。

それ以降姿をくらましている。

「おや？こんなところにおられたのですか。今まで探していたのですよ。」

害児はそういつて、車椅子をおり、用意されたいいた洋椅子に腰掛ける。

害児は、机を指でとんと叩きながら尋ねる。

「さて、それで、この私に何かようでもあるのですか？母上。」

「どうやら、ついてきた黒服は二名ばかりなようで。」

「ああ・そんなことわけではないことです。」

つまり、忠臣精鋭が残った。ただそれだけのことはありませんか。  
「

「忠臣？精鋭？おほほほ、面白いことをおっしゃいますのね。」

害児は、とたんいらしだす。

「何が言いたいのです？」

「貴方の元々望んだことは何であつたでしょうか？」

権力の座につくことですか？違うでしょう。

貴方は、平穏な暮らしを求めた。そうではないですか？」

「そうでもあるといえなくもないですが、それがどうかしたのですか？」

「もう貴方は、この大陸から手を引くべきですわね。」

新大陸にお帰りなさい。

そして、今度こそ全うな生活をされるとよいですわ。」

「話はそれだけですか？なら私はもう帰らせていただきます。」

害児は席を立ち、車椅子に乗り移ると、もう用はないとばかりに、

足早に部屋をでていった。

「ふん。この私、害児の器も測れないとは、母上も老いた。」

害児は、一人で塔から飛び降りていったが、それを目ざとくガスが発見し、黒服たちにわめき散らした。

「それ見ろ！あいつは裏切りやがった！お前達がとんなせいだ！まんまと出し抜かれたワイ！今に見てオレ！」

「なんだと！ふざけるな！この商人め！」

「俺たちを愚弄するか！」

黒服たちが例によってガスをばこうとした瞬間崩れ落ちる。

「馬鹿めが、この阿呆め、ひゃっは！」

我輩が今までわざとやられていたことすらに気づかないとは、器の小さな小物でなのだな。

それにしても害児めが。この我輩とて限度というものがある。」

ガスはあまりにもないがしろにされ、怒り心頭に達した模様だ。

ガスは逃げていく害児を徹底的に追い詰めることを決意したのであった。



## 第四十八幕外伝 ガスの商売2

空間がゆがみ、黒い影が現れる。

ここは害児の部屋だ。

「首領。面会したいといってるものがおりますが・・・。」

「そうですか。どういった用件で？」

「なにやらこの町で商売がしたいのだと。」

「ほう！商売！」

害児は鋭くそういい、部屋の中をしばし歩いた後、控えている黒服に向かっていった。

「いいでしょう。応接間につれてきなさい。」

面会したい人間とはもちろんガスだった。

害児の城は、入ってすぐが、すでに応接間になっている。

とはいえ、距離は遠い、城のちょうど真ん中に応接間があり、前後左右にたつぷりと空間が開いている。

広々とした空間の中にぽつんと、テーブルとソファーがおいてあるのだ。

今回はテーブルとソファーだけで、  
この家具も毎日違うものが置かれている。

通称、謁見の間ともいう。

ガスは、武装と解くのが礼儀だろうと思い、鎧などを脱ぎかけたが、  
黒服に止められ、遠慮がちにソファーに腰を下ろした。

ガスは、ヒノキ村自治区について、  
すぐに鎧などを必要なものを調達した。

その辺の才能は、さすがといえる。

最も、この自治区自体がそういったものが、そこらへんに転がっている  
からともいえなくもないが。

この町、ヒノキ村自治区は、世界中から悪党が集まっている。

そういった関係で、そういう物品が転がっていることは  
決して珍しくないのだった。

30分くらいたち、害児はやってきた。

別に害児としてはすぐにきてもよかったのだが、  
それだとまるで自分が小物のようだと感じたので、  
わざとそれだけ待たせたのであった。

ガスは害児を見ると、すぐに立ち上がり挨拶をした。

「あなたが、害児さんですか。」

我輩はこの町で商売をしたくやってきました。」

「ふふ、これは妙なことをおっしゃいますね。」

何故この町の村長ではなく私のところへ来たのです？」

ガスは思った。遠くからは見たことはあったが、存外若く美しいと。

噂に聞く魔人というイメージから、

もっとおぞましいイメージがあつたが、物腰も柔らかい。

ついついガスは、そういう害児の雰囲気気に気を許した。

「それは、この自治区で一旗あげようと思う人間にとつては、

害児さんこそが一番の実力者であるということは、周知の事実です。ですから我輩は、貴方様に許可を取りにきたということです。」

「へええ？ふーむ・・・。」

害児はピクリと頬を動かした後、押し黙った。

ガスは困った。

「あの・・・。どうかされたのです？」

「いや・・・。まあいいでしょう。」

害児はそういつてパンパンと手を叩くと、黒服が、いろいろな書類とアタッシュケースを持ってくる。

黒服はテーブルの上に書類を置いてく。

「さて、貴方にはこの場所で店を開いていただきたい。すでに店のほうは用意してあります。

それとこれが店の権利書で・・・。

こちらが運用資金です。」

「ここでは、紙幣が流通しているのですか？」

「え？ええ・・・。まあ・・・ね。」

「？」

「申し訳ありませんが、私はこれでも忙しいのです。

ここで失礼させていただきます。」

そついつて、害兎は車椅子をきこきこさせつつ、姿を消していった。

ガスは、その後黒服に差し出された書類にサインし、城を出た。

「やけに親切であつたが・・・？噂に聞くルーファと同一人物ではない？

これは少し情報を集める必要がありそうだな。」

それか車椅子生活になってから、性格が変わったのかもしれない。今となつては魔人も、武力などなきに等しいのだろう。

どういった経緯でそうなったのかガスも詳しいことは知らなかったが。

ガスが指定された場所に向かってみると、店は今まさにできている

最中  
だった。

「用意してあるといっていたが、まだ作業中か。  
存外害児さんも、仕事が大雑把である。」

とはいえ、すぐに完成した。ガスとしても文句のない部類だ。

「場所は少し問題があるが、物はよしとしよう。」

ガスからすると、こういう町中で商売するのは、  
あまり好ましくなかった。

ガスがいう商売とは、強さの探求であり、日常の小道具を提供  
することではないのだ。

それから数日後、商売は順調に進み、ガスは穀潰しと宴会をしてい  
た。

「ふん。なるほどな。害児さんめおとなしい顔をして、  
えげつない真似をするものだ。」

「ああ？何だガス。害児さんがどうかしたのか？」

「いや・・・なに。見てみる。穀潰し。この紙幣を。  
こんな紙幣みたことあるか？」

「ねえが、それがどうした？  
そんなことより、お前の命令で悪党共と酒を飲んでいるんだが、  
もう金がないんだ。くれよ。」

「いやそれはやるが、  
そもそも我輩は酒を飲めといったわけではないので  
はあるが・・・。」

「おいおい、冗談よしてくれよ！ひゃっは！お前は商人だろう？  
約束は守れよな。」

「あ、ああ・・・。ところでさっきの話の続きなんだが、  
これはどうも害児さんの城で刷ったお金のような  
なるほどおとなしそうな顔をして、あこぎな方だ。  
これでは、我輩がいくら儲けようが、害児さんの匙しだい  
こんな紙、ゴミになるではないか。  
なにがGマネーだ。馬鹿にしている。」

「ガス。それはちょっと違うんじゃないか？  
お前は一回の商人で、向こうは、王様だぜ？」

「王様・・・。王様か。」

「そうだろうよ。俺にとっちゃ害児様といたいくらいだぜ！」

「穀潰しはこの生活が気に入ったようだな。」

「俺は元々こっちの出身だしな。お前はどunnanだ？」

「我輩も気に入っているよ。なに、害児さんが我輩のイメージと違  
って、

まるで箱入り娘のような方だったからな。  
ちよつと意外であつただけである。」

そういつてガスは酒をぐつと飲んだ。

「ひゃっはー。宴会だぜ！」

しかしガスは、何か釈然としない部分が残った。

それから数ヶ月たち、ガスの名声は高まった。

正直で誠実な商売が実を結び、その卓越した頭脳で、町はドンドン発展

していったのだ。

その噂を聞きつけ、刺激ある生活を求めた優秀な人間が、どしどしと自治区にやってきた。

害児にとっても喜ばしい事態のはずだが、この害児という人物、実はとんでもなく、厄介な人物であったのだ。

災いは突然やってきた。

ガスがあれよこれよとあたふたしている間に、

店の物品からもちろんお金も全てが根こそぎ奪われしまったのだ。

「おのれ！なにをするか！この店是我輩の店であるぞ！」

ガスは当然反抗したが、一蹴される。

「このゴミ虫が。我々は害児様じきじきの申し付けで動いてるのだ。」

「え？害児さんが我輩を？そんな馬鹿な！何かの間違いだ！」

「そう思うなら、城に來い。申し開きはそこで聞こう。」

「おのれ．．。」

ガスは憤懣やるせなかったが、ここで怒っていても仕方がない。

ブレオに乗って城に向かうことにした。

「ぶおんぶおん！」

しかしいくら口で、ぶおんぶおん言っても、車は動かない。

どうしたことだろうと思って、ガスが調べてみると、タイヤはパンクしており、エンジンはなくなっていた。

「お、おのれ！おのれ！おのれ！」

ガスは、刀を抜き、側にあった岩を、その刀で叩きまくって八つ当たりした。

哀れなことに、ガスが気に入っていた一番の名刀はそれでだめになった。

刀を地面に叩きつけ、ガスは咆哮した。

「我輩をガストラゲタと知ってのことくあ！」



とはいえ、身包みはがされなかっただけましというものであったろう。

ガスは、重装備をがしゃがしゃならせつつ、害児の城の門をぶち破って、

中に進入した。

「害児さんはおるか！ガストラゲタ！参上仕った！」

ほえたが、害児はおらず、小憎らしい黒服が、害児様は今お昼寝中です

。などとたわけたことをはいた。

「貴様では話にならん！害児さんを出せ！」

「ダメだダメだ！出直して来い！」

黒服は突進するガスを制止していた。

「ぐわあ！」

黒服はガスの勢いを止められず、吹き飛ばされる。

すわ！とばかりに、どこからかでてきた、複数の影に取り押さえられ、

床に叩きつけられるガス。

「おのれ！」

とガスは吠えたがどうにもできない。

いつの間に現れたのか、

微笑を浮かべた害児が応接間のソファ―に座っていた。

「害児さん！これはいったいどうしたことであるのか！  
害児さんは我輩を裏切ったのか！」

「ガスさん。私がどうのこうの言ってもよいのですが、  
その前に頭を冷やされてはいかが？  
そうでないと私かなにをいったところで、  
貴方の耳には入らないでしょう。」

ガスはそれを聞いて、それもそうだと思った。

「分かった。もう我輩は大丈夫だ。」

「いいでしょう。問題はありません。ふふっ・・・。  
どうやらガスさんは私に話があるようです。  
他の方は下がってよろしい。」

「ははっ！」

黒服が引いていく。

ガスは、害児を見直した。黒服たちは主を心配することもなく、  
存外素直に引いていく、  
客観的に見て自分のような乱暴な侵入者  
を前に堂々とした態度で座っている。

ガスはもしかしたら自分とはんでもない間違いをしているのではないか？

と思えてきた。

ガスは照れ笑いをしつつ害児を伺った。

「いや、実にお恥ずかしいことでして、害児さん。

これは何かの間違いであつたのだ。」

「ふふ。何が間違いなのでしょう？」

「いやいや、実はそちらの手違いで、我輩の店が取り潰されてしまった。

あつ……。もしかしたらあいつらは害児さんの名をかたつて不届き者の

強盗かもしれません。

これは、貴方様の名前に傷がつく由々しき事態ですぞ！」

害児は無言で、ソファにおいてあつた鞆から書類と虫眼鏡を取り出し、

テーブルに置いた。

「ガスさん。どうぞ。これを使って、  
ここの箇所を読んでみて御覧なさい。」

「は、はあ？」

ガスは呆気にとられたが、気を取り直し、害児から受け取った虫眼鏡で書類の箇所を読む。

どうやらこの書類は、前に害児と交わした契約書だと気づく。

虫眼鏡を通して読んでみると、今まで見えなかった文字が浮き出てきた。

俗に言う隠し文字というやつである。

「なになに・・・」

ガストラゲタの店の財産の所有権は全て、害児カンパニーが所有する。

その物品の移動は、いかなる場合において適用される・・・」

ガスは、顔を真っ青にした後、真っ赤になりどなった。

「ふざけておられるのか！」

「ガスさん。あなたはとも勘違いなさってるようですね。」

「なにをいうか！勘違いしてるのはそっちのほうである！」

ガスは激昂して立ち上がった。

害児は意外そうな顔をする。

「おや？もしかや暴力を振るわれるのですか？」

「あ・・・いや・・・」

ガスは害児の悲しそうな顔を見て、自分のしようとしたことを恥じ、

急に意気消沈し、がつくりと肩を落として、ソファーに腰を下ろした。

しかし、はじめに暴力を振るったのは害児のほうであつたのだが、ガスの頭にそのことはすっかり吹き飛んでしまった。

それを見た害児はまたニヤニヤと微笑を浮かべる。

「あのですね。私としても心苦しい対応でしたのですけど。」

「はい。」

「よいですか。商売というものは、

ただ物売って儲ければよいというものではありません。

あなたはそれでよいかもしれませんね。

でもね。私達は、軍事国家に狙われているのです。

わずかな乱れが付け込まれる元になります。」

「な、なるほど……。しかしこれはだまし討ちではないか。」

「貴方は商人でしょう？それにだまし討ちではありません。」

「あ、あんなものひどいではないか！無効である！」

「貴方がそういったところで、なにができます？  
もう一度私に暴力でも振るわれますか？」

「ぐ……。しかしそれはあんまりである。

害児さんには情というものがないのか！」

「情があるかですか・・・？ふふふ・・・」

「なにがおかしい！」

「本当に貴方商人なのですか？くくく・・・なんとまあおかしいことです。」

ふう・・・まあ貴方は所詮そんなものでしょう。

頭の悪い貴方に一つ、物を教えましょうか。

騙されるほうが悪いのです。どうです？よい勉強になったでしょう。

「

「！」

「そら！お帰りだ！この目障りなゴミ虫をこの城から追い出せ。」

黒服にむんずを、両脇を固められるガス。

「貴方に会うことも最早ないでしょう。」

貴方は実によくやってくれました。その点だけはほめておきます。」

「害児さん、その言葉忘れるな。」

「？」

「騙されるほうが悪いという言葉である！」

害児はくすりと笑い、指を鳴らした。

その後、害児が消えたのを見て、ガスは、黒服を腹いせにしたたたか殴り

逃亡した。

その後、ヒノキ村でガスの姿を見たものはいない。

## 第四十九幕 新たな善人

花の国は、善い人が想像していたものと違い、人影一つなかった。

その有様を見て、穀潰しは善い人を馬鹿にする。

「どういうことだ？お前があれだけびびっていて、あまつさえ、この俺に助けを請うほどにしては、拍子抜けの静かさだな。」

「しっ！黙って！今この瞬間にも、悪人が私達を狙っているという事実を忘れてはならないよ。」

「あつそう。で、その悪人とやらはどこにいるんだ？」

善い人はしかしその言葉を無視して、ずんずん先に進む。

「ちっ、都合悪いことは全部無視かよ。」

そういいながらも、仕方なしに穀潰しは善い人の後に続く。

なぜか、豪雨と雷に見舞われたが、二人はあまり気にする様子はない。

二人が、花の国の領内をどんどん進んでいくと、地面の上に、絨毯をしいてその上に、座っている何者かが見える。

穀潰しはテンションをあげて善い人に話しかけた。

「ひゃっはー！善い人さんよお！ようやく悪人のお出ましだぜ！



俺たちや悪人だ！気に入らないやつをぶん殴ってぶっ潰すぜ！」

善い人はすでに、絨毯の上の人物に蹴りをくらわせていた。

「S・ショット！」

要するに蹴り上げた。絨毯の上の人物はるか上空に吹き飛ぶ。

と思いきや、元の位置に戻る。

穀潰しは、例の幻術だなと思った。

善い人は、驚きもせず、再び蹴り上げ、その人物は元の位置に戻るを繰り返している。

穀潰しは、ため息をつきながら、善い人らに近づく。

「おい、テンマ。穀はねえのか。」

そついいながら、穀潰しは絨毯の上に座り込む。

絨毯の上で今もなお蹴られている人物は、テンマ・トキトだった。

天崎というのは偽名だったというわけだ。

「ゼロもきたのか。まあ楽しめ。」

「相変わらずの馬鹿野郎だな。てめえはよ。

俺たちやお前をぶっ潰しにきたんだぜ？

いくらお前でも、俺たち二人相手にはかなわないだろう？

違うか？」

テンマは善い人に蹴られながら答える。

「知っているか、たわけ。どうやら害児は悪人どもを集めて、ヒノキ村自治区で暴れてるらしいぞ。」

「害児？そんな小者が今のこの状況と関係があるのか？」

それを聞いて聞き捨てならなかったのが善い人だ。

いきり立って、テンマに反論した。

「害児さんは善い人だ！そんなことをするわけではない！」

「だが事実だよ。」

テンマはそういい、周りの情景が変わっていく。

周りの情景が変わったのではなく、彼らがテンマのテレポートで移動させられたのだ。

一瞬のうちにヒノキ村自治区に移動する。

「いけすかねえ。サイキックか！」

穀潰しが吠えた。

「おのれ！害児！許さん！」

善い人は、悪人達を談笑してる害児を見つけると、問答無用で蹴りかかる

。

慌てた害児は、たくさんの悪人に守られつつ、みんな逃げろーといいつつにげていく。

あまりにも情けない変わり果てた害児の姿に、善い人はがつくりと肩を落としたが、しかし善人の使命は、何よりも重いものだと思い返し、

再度害児に追撃をしかけようとしたところ、テンマに服を引っ張られ、思いとどまった。

「なにかな？」

善い人はテンマに尋ねる。

「今後は私が善人になってやろう。」

「なに？」

ふざけたことを！と善い人は激昂した。

そのせりふは善い人を激怒させるのに十分すぎるせりふだったのだ。

「もう我慢ならん！」

傍観していた穀潰しだったが、善い人とテンマの間に割って入った。

日ごろ馬鹿にされている害児を追い込む絶好の機会と判断したから

だ。

「待てよ。善い人さん。あの様子だともう害児はダメだろう。気持ちをよく分かるがよ。」

だが害児が抜けた穴は正直でかいだろう？

ここは、なくなった戦力を補うためにも、新たな善人は必要だ。」

「穀潰し程度が、善人を語る資格があると思ったのか？」

「いつてくれるぜ。だがな。俺だつててめえの国の下っ端だつただぜ。」

いわば俺も善人というわけだ。」

「なるほど・・確かに。」

「分かつてくれればいいんだ。ということだ。テンマ。よく俺に感謝しておくんだな。」

「たわけ！」

とテンマに一喝される穀潰し、毎度の事ながら穀潰しは嫌になったが、

仕方ないと諦めた。

「おい、善い人。今度から害児を見かけても放っておけよ。それがやつのためだぜ・・。」

驕れるものは久しからずというが、盛者必衰の理というものだ。

穀潰しは、どういう経緯で害児がああなったのか知らないが、

多少は同情した。

とはいえ所詮他人事だ。基本的にはどうでもいい事。

穀潰しとしては、

そんなことより今まで害児に潰されてきた自分の面子のほうに気になるのだった。

テンマとしては、闘争普及が何よりも使命であり、害児を闘争に呼び戻すことは必須項目といえた。

お互いの利害は一致したので、それから先はスムーズだった。

しかし、善い人はテンマに気を許さず、緊張した日々が続く。

それはともかく、害児があれからどうなったのであったか・・・。

## 第五十幕 害児の帰還

害児のことも気になるが、  
害児からも善い人からも取り残される結果になった  
騎士竜ら一行はどうなったのだろうか。

大陸の9割を所持し、善人組織をも巻き込んで、  
膨らんでいった日の国であったが、その日の国の中でも、  
善い人派と害児派に分かれたのだった。

しかし善い人派とは、要するに騎士竜派であったので、人気はあった。

逆に、故郷を見捨てて、長い間姿を隠し、  
あまつさえ、

大陸と敵対した、ヒノキ村自治区などを作った害児は、  
あまり歓迎されなかった。

黒服たちも、最初は害児についてきたが、  
久々の故郷に帰ると、居心地もよく、  
さらに騎士竜の強さに感化され、あっさりと害児を見捨てた。

害児が気に入らなくなったというよりは、  
騎士竜の強さに魅せられたのだろう。

彼らが、害児に従っていたのも、害児が強いからだ。

その害児より騎士竜のほうが強いなら、彼らが騎士竜につくのは、  
当然の成り行きといえた。

黒服としても、害児としても、お互いによりそのことに關して、  
氣にすることはなかつた。

さて、何日たつても善い人も害児も歸つてこなくなつて、  
ことここに及んで、

ようやく騎士竜はいつぱい食わされたと氣づき始めた。

實際はいつぱい食わされたわけではないのだが、  
彼の立場からすると、

いつぱい食わされた以外なものでもなかつたらう。

騎士竜は、さつそく害児を連れ戻す算段を企てた。

「これというのも、

けしからん悪人アクビトが害児をたぶらかしたからだ。

君達に与える使命は、悪人を排除し、害児をここに連れ戻すこと  
だ。」

元善人組織の指揮官と補佐官、その他数名の人間は、

「ははっ！」

と氣合を入れて挨拶した後、隊を組んで行進しつつ、悪人討伐、  
害児捕縛に向かつた。

「まったく僕としたことが飛んだ誤算だつた！  
考えてみればあの商人のふざけた笑いが怪しかった。  
裏で絵を描いていたのはどうせあの商人だろう。  
今頃僕のことを侮辱し高笑いしてるに違いない。」

そこへ、にやけ面の元副將軍がやってくる。

「まあよいではないか。

善い人様のおかげで、我が国は大陸の9割方を手中に収めたのだからな。

これは大陸の歴史に残る偉業だ。」

「とはいえ、ずっとこのままでもまずいでしょう。

また花の国と日の国を除いた五国を復活させないと  
パワーバランスが崩れてしまいます。」

「どうも貴様は勝利に酔いしれるという感覚を知らんらしいな。  
もう害児など放っておけ。力はもっと有意義に使うべきと思わんのか？」

「そうはいかない。

それはそうと、害児が戻ったら、

貴方様はまた牢屋にもどっていただきますよ。」

「分かっておるさ。戻ったらな。」

そういつて元副將軍はニヤニヤ笑う。

騎士竜は気分が悪くなり、言い放った。

「何だその態度は！ふざけてるのか！」

「おつと怖いな。さすが戦神といわれた男だよ。」

「もういい！おい誰か！こいつを牢屋にぶちこんでおけ！」



そう言い放って、いらいらしながら騎士竜は、政務に戻った。

日の国はざっとこんなふうで、害児はどうかというと、  
母親の助言に従ったのかはよく分からないが、自分の領地たる  
ヒノキ村自治区に帰っていた。

害児が自分の城の跡地に戻ってみると、  
なぜか悪人達が群れを成してだべっていた。

なぜかというより、城の跡地には様々な物資があったので、  
それを悪人達が利用して遊んでいたのだろう。

害児は苦虫を潰したような顔で彼らのほうに近づいていった。

数名の悪人が害児に気づき、蟹股でのそのそと近づいてきた。

「よう、害児。どうした？しけた面してるな。」

「おうおう！いつもの取り巻き共がいないな！」

「憎憎しい善い人のやつもないぜ！ひゃっは！  
ところで俺たちに何か用か？」

声を発した三人は、少しの間を置いて三人仲良く虚空へと飛んでい  
った。

それを見て、青ざめたのが他の悪人達だ。

「うわー！逃げろー！」

大声を上げて、蜘蛛の子を散らすようにして逃げていった。

害児が、跡地の真ん中のぽつんと一人で立ち、辺りを眺めてみると、ゴミだらけだ。

そこへようやく追いついたガスがやってきた。

「重装備のおかげで、大変だった。こりゃひどい散らかりようなんだ。」

害児も啞然としている。

「まあなんというか。害児さん。これからである。気を落とすのはよくない。」

我輩とてこんな目に合わされたのは、何度もあるのだ。」

「ふむ・・・。」

「どうかしたのであるか？害児さん。」

害児は何事か考えていたが、いきなり立ち上がり、手を振った。

ガスは害児が手を振った方向を眺めたが、何も無い。

「どうやら、害児さんはもう頭がだめになったようである・・・。」

ぼそっとつぶやいたガスだったが、害児がなにをしたのかやがて分かった。

さつき逃げていった悪人達が必死の形相でこちらに近づいてきている。

「ああ・・・幻術か。」

ガスはぼやいた。彼らは幻術にかかり、再び害児の前に姿を表した。

「うわ！何でまた害児がいるんだ！逃げろ！」

「まで。」

害児はすぐに呼び止めた。悪人達の動きはみな止まった。

「ゴミを拾っていけ。後、城を用意しろ。」

「なんだって！城なんか作れるかよ！バカヤロー！」

口答えした悪人はもちろんかなたへと飛んでいった。

それを見た悪人はしぶしぶゴミを拾い、

害児のために城を作ることにした。

害児は、その様子を満足げに眺めガスに話しかけた。

「どうです？見てみなさい。まるでアリが働く様を見ているようだ。まさに壮観。これぞ王者の威光。」

「左様であるか・・・。」

悪人達はのろろと悪態をつきつつ、作業を進めている。

「この分だと相当時間がかかりそうだな．．．  
ところで彼らに報酬は要してあるんでしょうな？」

「そんなものあるはずがないでしょう？  
一商人無勢が場をわきまえず、知った風な口を利かないでもらいたい。」

「あつそう．．．。」

ガスは、得意顔の害児を尻目に、退いていった。

「この分では、この自治区もそう長くない．．．  
害児一人でなにができよう。」

我輩も見の振りどころを考えたほうがよさそうであるな．．．。」

ガスは、家に帰り計画を練ることにした。

## 第五十一幕 晴れた日 善人

善い人は、タンクが加工した岩の家に引越ししていた。

今回のことは、彼女なりに思うところがあつたらしい。

「やあ、タンクさん。今回はさすがの私もいい勉強になったよ。」

「よかったね。私なんて、空から落つちで、ちよつと壊れちゃったよ。」

タンクはニコニコしながらいつてるが、体が半壊している。

「タンクさんもまだまだこの善人には及ばないようだね。でも大丈夫だよ。いつかきつと私のようになれるから。」

善い人は偉そうに、タンクの肩をぽんぽんと叩くと、家の外にでるべく扉に手をかけた。

ドアを開けてみると、前方に、切り株に腰をかけているアキラの姿があつた。

善い人を見かけるとやあと声をかけよつてきた。

善い人は油断なく、構えて言い放つた。

「悪人が考えることは、この善い人にはお見通しだということが、何故分らない？」

「なにを言ってるんだ。俺はお前に善い情報を持ってきたというのに、  
そんな態度では、考え直さないといけなくなるぞ。」

「おのれ！この善人を小馬鹿にする態度！もうがまんならん！」

ドカツ！

慌てふためき、驚いて逃げようとするアキラの背中を、善い人のけりがめり込み、  
アキラはかなたへ飛んでいった。

「悪は去った！こんなことしてる場合じゃない。

私は善い事をしないとイケないんだ。」

善い人がかけていくと、善い人の後を追って並行して来る物体がある。

それはテンマの円盤で、円盤というのは、サイキック兵器であり、  
人一人分くらいがのれる、円盤のような物体だ。だから円盤と呼んでいる。

「善い人がいなかったおかげで、悪人達がのさばっているぞお。  
楽しいなあー。」

そういつて、テンマは遠くを指差して、善い人を追い越していった。

善い人は直感した。

「どうやら私を出し抜こうとしているようだけど、そうはいかないよ。」

善い人は、指を鳴らしてハエを呼び、飛び乗って、テンマに追いついた。

「あそこだ！あそこに悪はいるぞお！」

「まだ悪人がいたのか。」

善人ここにありということを思い知らせてやらないといけないな！」

善い人はハエから飛び降り、現場へと到着した。

その現場には、害児と悪人達がいた・・・。

害児は、悪人達に家を作らせた後、暇なので、

悪人達を訓練することにしたのだった。

悪人達は、たるを持って上下に振る運動をしており、その周りを害児は歩きながら、満足そうな顔つきで、眺めつつ、紅茶を楽しんだ。

ちなみにもう車椅子はダメになってしまったので、木製の義足をつけている。

「ああもつだめだ・・・。俺はもうこれ以上振れねえ。」

樽を放り投げぺたんと座り込んでしまった悪人がいた。

それを害児は凝視した後、後ろにいた悪人に話しかける。

「おい！」

それを察した悪人は「おう！」と答えると、座り込んだ悪人を無理やり立たせ、樽を持たせる。

「さあやれ！やるんだ！」

「ひいゝ！もう無理だあー。」

その様子を見て、他の悪人達は、あまりの所業、地獄絵図に、おびえ逃げ出した。

「う、う、うわー！」

パニックになり、次々を悪人は逃げていくが、気がつくとなぜかまた樽を持つて振っている。

「もうやめてくれー！」

怨嗟の声、悪人達の悲痛な叫びを聞きながら、害児は一人悦に入っていた。

ドサッ！

「そこまでだよ！」



そこへ善い人が登場するが、害児は内心動揺しつつもみなの手前、あえて騒がず冷静に対処した。

「む？善い人か。ちょうどいい。修行の成果を見せてやれ！」

悪人がそらきたとばかりに善い人に襲い掛かるが、それら全てが吹き飛ばされる。

これは大変だと初めて害児は気づき、自分ひとりのみが逃げに入っ

た。しかし、それを見逃すほど善い人は大甘ではない。

すぐさま害児においつき、その頭をしたたか殴った。

「うわー！やめてくれー！」

害児は、頭を抱えつつ、逃げ回っていく。その様子を残った悪人達が大笑いしていた。

「ひゃっははは！ざまーみる！」

害児の味方はいないのか。そんな時一人の勇者が現れた。

「おいおい。善い人さんよ。ちょっと調子に乗りすぎなんじゃねえのかい？」

穀潰しであった。穀潰しも悪人達に混ざり、つい先ほどまで、へいこらと樽を振っていたのだった。

「よくいいました！穀潰しさん！それいけ！善い人を追い出すのです！」

害児はとたん元気になるが、黙れといわんばかりに善い人に頭を叩かれる。

と同時に、穀潰しは善い人に向かって衝撃波を放つが、善い人はそれを避けた。

害児は、それを機にほうほうの体で逃げていった。

「穀潰し。悪に加担するということは、君も悪人というわけだね。」

「悪だと？相変わらずの馬鹿さ加減に反吐が出るぜ！ええっ？善い人さんよお

！悪ってのはな。てめえ自身を指すんだぜ！」

そこへ、テレポートですつとアキラがやってきた。

「俺にも我慢の限度がある。こちらが下手にでていれば、調子に乗りやがる。」

穀潰し。こいつは一度思い知らせんとどこまで冗長するか分かったものではない。」

「ああそうだな。潰れろ！ランダムスファイア！」

善い人は、もちろんその攻撃を読んでいた。最早慣れっこの攻撃であつたので、

スファイアの軌道を読み、その攻撃を全てかわして、穀潰しに接近す

る！

「潰れる！サイコシャワー！」

穀潰しの対迎撃衝撃波で、ショットガンのようなものだ。

それは確かに善い人に当たったと思ったが、善い人は直前で方向転換し、

アキラのほうへと突っ込んでいった。

アキラはなにをしていたかというところ、いきなり穀潰しが攻撃をぶっ放すとはまったく

考えてなかったらしく、ランダムスフィアの攻撃を受けて、体を震わせながら、

自分の体を回復させていた。

もちろんテレポートで、穀潰し達とは距離をとっていたが、いきなり善い人が

やってきたので、パニックになり、テレポートも使わず、後ろを向けて逃げ出そうとした。

善い人がそんなうかつさを見逃すはずもないので、後ろから蹴られ、アキラは

彼方へと飛んでいった。

「ア、アキラ！善い人てめえ！」

取って返す刀で、善い人は穀潰しめがけて、剣を抜き、突っ込んでいく。

「斬る！抜きかえし！」

「ぐっ！」

穀潰しは、片手を犠牲にしてそれを防御し、残った手で、後ろに逃げつつ、

サイコスフィアを放つ。善い人はそれを難なく避けて、さらに追いかけてくる。

（ちきしょう！もうだめだ！）

穀潰しは破れかぶれになって、突き刺さる拳を放つ。善い人は突き刺さる蹴りを放ち、それが相殺され、間が空いた。

（前より強くなってやがる……。それに比べて俺は……。）

善い人の成長に比べ、自分の成長の遅さを嘆いたが、そんなことしても始まらない。

とりあえず、今戦っても不利だと穀潰しは思った。

第一こういう広い場所は善い人に有利なばかりで、自分にはなんら有利にならない。

「潰れる！サイコグラウンド！」

地面から、筒状の衝撃波が放たれる。さしもの善い人もこの膨大な範囲の攻撃には攻められず、後退の一方となった。

周りでニヤニヤ観戦していた悪人達は、驚きの声を上げつつそれに巻き込まれていった。

「お、おー・・・。」

「うわー！」

悪人達がドンドン空から振ってくる。

善い人が、攻撃の態勢をとったときには、すでに穀潰しの姿はなかった。

善い人は、落ちていた穀潰しの腕を拾って、穀潰しが逃げたほうに向かって、投げると、家に帰っていった。

「今日も善い事をした。善い事をするというのはなんて素晴らしいんだ！」

空にはお日様が明々と輝いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1194k/>

---

世紀末善い人伝説

2011年8月31日09時29分発行